

LIBRARY OF CONGRESS



0 020 208 781 4







絶  
後

、  
、  
、  
、

、  
、  
、  
、

、  
、  
、  
、

、  
、  
、  
、



Sinclair, Upton

アプトン・クレア作

スパイ

堺利彦  
志津野又郎  
共譯

天祐社出版

PS3587

I850716

1923

copy 1

Asian

Japan

Case

LC Control Number



00 509422



# スパイ

アプトン・シンクレア作  
堺利彦、志津野又郎共譯





## はし が き

面白い小説。一種特別な面白い小説。如何なる社會小説も、如何なる探偵小説も到底及びもつかない面白い小説。それが即ち此の書である。

米國が歐洲戰爭に参加した際、及び其の後に於ける、米國の主戰的愛國熱と、それに對する勞働運動者、社會運動者の非戰的反抗と、其の兩者の間に激成された痛烈な衝突とが、一個のスパイを中心人物として此の書の中に描寫されてゐる。米國の政府とブルジョアとが、如何に陰險な、陋劣な、巧妙な、酷薄な、殘忍な術策を弄して、謂ゆる『赤』の陣營を掻き亂し、叩き潰したか、そして又、用意周到なる『赤』の仲間が、其の用意周到にも係はらず、如何にそれらのスパイの爲に賣られ、欺かれ、陥いれたか、事件の發展の一步毎に、讀む人の心を絶えずハラ／＼させ、ヒヤ／＼させる。

然し我が日本のような高級の文化國に在つては、そうした野蠻な事態のある筈が

なし、又將來に起りそうな筈もないのだから、我々は只だ一個の興味として、米國の國家と國民とを憐みつゝ、此の書の内容に對し高見の見物をする事が聞來る。日本國民は洵に幸福な國民である。

原書は『百プロセント』と題し、『一愛國者の話』と添書してある。『百プロセント』とは、熱狂した當時の愛國主義者を形容した言葉である。「一愛國者」とは、愛國主義の爲に極醜極陋なスパイの任務をつとめた主人公の事である。英國では『スパイ』といふ表題で發行されてゐる。著者は米國の有名なる社會主義小説家アプトン・シンクレヤ。

私は先ごろ此の書を読んで、『高見の見物』の幸福を痛感したので、其の愉快を廣く我が國の讀書界に頒ちたいと思ひ、友人志津野又郎氏と協力して之を反譯した。譯し方は自由譯で、多少は省略した所もある。只だ分りやすく読みやすい事だけは保證しておく。

一九二三年一月

堺 利 彦



# スパイ

Upton Sinclair 作

堺利彦  
志津野又郎 共譯

## (一)

人は折々、其の生涯の最も重大な事柄が、極めて些細な偶然によつて定まる事を振り返つて考へさせられる。そして彼自身すらも一つ間違へば生れて來なかつたのだと思ふと、ゾツとせず居られない。例へば、一人の青年が何のアテもなく、からつぽな心を懷いて、全く偶然に街路がいろを散歩してゐる。四つ角に來る。其處で彼が左に曲らずに右に曲つたのに何の理由もない。そうして彼は彼の心を騒がせた空色そらいろの眼の若い娘に出逢ふかも知れない。彼は其の娘に出逢つて、其の娘と結婚する。そ

して其の娘は若き母となる。けれども、若し其の青年が右に廻はる代りに左に廻はつたとする、そして空色の眼の娘に逢はなかつたとすると、今や此の二人を親とする或る人は何處にあるだらうか。又其人が國家社會に貢獻してゐると考へる才能や全力を盡して従事してゐる其の事業は、どうなつてゐるだらう？

それと同じような事がピーター・ガッチの身の上に起つた。唯だ一個の偶發事件が彼れの生涯の進路を一變して、此處に記す物語中の事件が、それからそれと引續いて惹き起される事となつた。

ピーターは或る日の午後、街路まちを歩いてゐた。すると、歩み寄つた一人の婦人が一枚のリーフレットを差出して、

「これをお読み下さい。」と云つた。

ピーターは腹が空き切つてゐた。そして世間の事が無性に癢にさわるのであつたから、

「金がありません。」

と、吐き出すように答へた。彼はそれを廣告のチラシ配りと考へたのであつた。婦人はそれを抑へるように、

「何もお賣りするものではありません、これは宣傳で御座います。」

「宗教ですか、私は教會から放り出されたばかりです。」

「イ、エ、宗教ではありません。別のものですから、マアお取りなすつて。」

彼女は白髪のお婦人で、何時までもくつ付いて離れぬ。そして此の弱々しい貧乏な若者をどう思つてか、ニコ／＼しながら、ひつこく説き勧める。

「まあ、何時か御用の無い時に、一度読んで御覽なさい。」

ピーターは唯だ此お婆さんから早く離れたいばかりに、そのリーフレットを受取つてポケットに突き込んだ。そしてサツサと歩いて行つたが、一二分後にはもうそれをスツかり忘れてゐた。

ピーターは考へつゝあつた、と云ふよりは寧ろピーターの胃袋が彼に代つて考へつゝあつた。何故なれば、人は一日何んにも喰はず飲まず、前の日にも僅かに珈琲



一杯とサンドキッチ一切れを口に入れた丈けである場合には、其の思考の中心は身體のつぺんから中央部に移されてゐるからである。ピーターはこれが活きながらの地獄であると考へた。彼がたつた一つの小つぽけなドーナットを盗み喰ひしたばかりで、彼れの氣樂な職業を失ひ、出世の機會を失はうとは、思ひも寄らぬ事であつた。彼の心身は立身出世を目的とする「努力」にのみ集中されてゐたのに、又彼は、金と安逸と快樂とを意味する「成功」の二字に釣られて有項天になつてゐたのにそれがこんな事にならうとは！。

絶えず人の出入りしてゐる臺所のドーナットの數を、スミサイスのかみさんが憶へてゐようと、誰が思ふものか。ピーターを現在の困窮に陥しいれたのは、全く只だ彼の不運であつた。あんな不運さへなければ、彼は今も尙ほ靴屋のかみさんの家庭で、パンと乾魚と薄い茶の晝食ランチを喰つてゐられる筈だつた。そして又アポツスル教會内の軋轢を煽り立てて、長老のガマリエル、ランクを追ひ出して、靴屋のスミサイスを其の後釜に据へ、ピーター・ガツチが其の片腕とならうとする陰謀に多忙

を極めてゐた筈である。

ピーターアの二十年の生涯を通じて、この様な事が常に起つた。やつと立身の段階子に弱い手を掛けたかと思ふと、何かしら善くない事——例へばドーナツトの盗み食ひのような事——が起つて來て、再び困窮のドン底に彼を突き落すのであつた。

ピーターアは革帶をウンと締め付けて歩いてゐた。その落ち付きの無い碧色の眼は絶へずアチコチと動いて、飯にあり付く場所を捜してゐた。職業は無いではなかつたが、いづれも骨の折れる仕事であつた。ピーターアは樂な仕事を望んでゐた。世の中には自分の筋肉によつて生活する人々と、自分の才氣によつて生活する人々との二種類があつて、ピーターアは後者に屬した。それで社會的に身を落すよりは、寧ろ數回の食事を見捨てたのであつた。

ピーターアは何等かの口が開けはせぬかと、行き逢う人々の顔をジツと見た。或る者はチラと見返したが、彼等は其處に見すばらしい、榮養不良の、一方の肩をチヨツと高くした、頬のこけた、齒並の悪い、薄い口髭を生やした小男を見たので、見

てはならぬものを見た人の様にして行つてしまつた。ピータアの麥稈帽子は處々麥稈が抜けてゐた。彼れの安洋服は屑屋も喜ばぬ程に古ぼけてゐた。彼の靴は踵がまがつてゐた。繁劇な都會では誰も彼も自分の成功の爲に他人を押のけて進みつゝある。誰が此の貧弱なるピータア・ガツヂに二度と目をくれよう。誰が彼れの内に隠れた不安の魂に注意しよう。誰が又、ピータアが不公明なる仕事に於て一種の天才であつた事を夢想しよう。

時は七月の午後二時頃で、強い日光はアメリカ市の路面に強く照り付けてゐた。そして街路には何時になく人が群集してゐた。ピータアは到る處に大小の國旗や彩旗の翻へるのを見た。遠方の軍樂の旋律をも一二度聞いた。彼は何事であらうと怪しんだ。彼は従來、新聞を讀んでゐなかつた。彼れの注意は悉くアポツスル教會内の内輪喧嘩に集中せられて、世間にどんな重大事件が起らうと、彼は全然無關心であつた。ピータアも臚げには、世界の彼方に六つの強大國民が必死の戦争を續けてゐる事を知らぬではなかつた。けれども、自分の國が其の歐洲戦争に仲間入りをせぬ



ばならぬ何等かの譯があらうとは知らなかつた。又、或る大資本家等が全國を通じて戦争熱を煽り、結局、参戦の己むなきに至らしめんとする運動を開始してゐる事も知らなかつた。

この運動はアメリカ市にやつて來た。街路は今愛國的感情の激發で沸き立つてゐるのだつた。商店の窓と云ふ窓には悉く、「起てよ、アメリカ！」と大書してあつた。道幅の廣い本通りには「アメリカよ、戦備を急げ！」の大旗が打ち建てられてあつた。本通りの終端の廣場に向つて軍隊が集合しつゝあつた。其處に集まる南北戦争から生残りの古強者、スペイン戦争の中老兵、青年義勇兵、港内碇泊艦船の陸戦隊、金の肩章と白色の烏毛に人目を引く馬上の將軍、馬車の内におさまり返つた市の諸名士、隊伍の間に交る軍樂隊、總てそれらの頭上に靡く數萬の國旗は、皆な「起てよアメリカ！」と人の心をそゝり立てる。ピーター・ガツチは空き切つた胃袋をかへて、突然大通りに於ける此の群集に出會した。それが爲にどんな事が自分の身に起つて來ようなどとは、固より思ひも染めぬ事であつた。



群集はピーターに唯だ一つの暗示を與へた。彼には少年時代の數年間、ペリクリ  
 ス・ブリアムと云ふ如何がはしい賣藥店の小僧に雇はれて、地方に痛み止め藥を賣  
 つて廻つた經驗があつた。彼等は自動車に乗つて、何でも人出のする處に出掛けて  
 行つて、群集の中心點とも云ふべき處に車を止める。そして先づ鐘を鳴して人々の  
 注意を引き、次に車上に突ツ立つて野師一流の雄辯を揮ひ、結局、少量の阿片を交  
 せた小瓶の藥を一弗に賣付けるのだが、其の時のピーターの仕事は、金と引換へに  
 藥を渡すことであつた。それで彼は今こゝに非常な群集を見て、それが何者である  
 かを熱心に見極めようとした。彼の即坐の思付きは、其處には恐らくインキの染抜  
 藥か、或は何かそれに類似したイカサマ商人があるに相違ない、すれば喰ふ丈けの  
 仕事には先づ有り付けるだらうと云ふにあつた。

ピーターは人だかりの中を押し分け、這ふ様にして二三町進んで行つたが、  
 小さな棒の先にくつつけたアメリカの國旗賣りと、「起てよ、アメリカ！」の愛國ボ  
 タン賣り以外に、商賣になりさうなものは見へなかつた。が、四ツ角に来てフト街

路の向側を見ると、一人の男が荷車の上に突立つて演説をしてゐた。彼は群集の間に無理に割り込んで、アツチに潜りコツチに潜り、ヤツとの事で群集の前側まで出たが、街路の中央は今や行列がやつて來ると云ふので人拂ひをされ、其の兩側は見渡す限りギツシリと人で埋つて居り、青い制服の巡査はハミ出して來る群集を一生懸命に制止してゐた。ピーターは稍躊躇したが終に思ひ切つて街路を横切つて駆け出した。其の瞬間に轟然たる大爆發が起つて、此の世界の終末が來た。

(二)

ピーターは稍正氣を恢復した時に、それが度々説教で聞かされた世界の終末であらうと思つた。併し大爆發の瞬間には、何を考へる餘裕もなかつた。たゞ、全世界が一時に鳴動した様な恐ろしい轟音、天上の電光を一緒に集めた様な、目の眩らむ白色の閃光、一吹きに彼を吹き飛ばして店先きの方に投げ付けた一陣の強風を感じた丈けであつた。ピーターは全く正氣を失つて人道上に折り重なつて横たはつたが段々に感覺を恢復して來ると、地上を覆ふ淡い灰色の煙りと、鼻の孔や咽喉を刺

す堪らなく忌やかな臭ひと、叫喚きふかんと苦悶くもんと悲鳴と騷擾とが其處にあつた。彼の胸の上には何だか乗つかつてゐる。彼は呼吸が塞るよう感じた。彼はそれを押除けようと激しく身悶へした。彼はその手に生温い、濡れた、ねとくするものを感じた。そして恐怖に打たれた彼は、それが裂け飛んだ人間の胴體むたいの片割れである事を悟つた。

ピーターは二日前まで、アポツスル教會の熱心な信者で祈禱會の度毎に、啓示錄けいじろくから引かれたゾツとする様な世界の終末説に傾聴けいちやうしたものであつた。それでピーターは、これが正さに其の終末であると思つた。彼は勿論、多くの罪を犯してゐるが、而かも神の前に身を投げ出して赦免ゆるしを乞ふ程の熱心もない。彼はどうかして助かる道はないかと、周圍に打ち倒れて居る幾つかの死體と、苦しみ悶へてゐる負傷者を見廻した。軒下には見物人が踏臺にした空箱が列を作つて轉がつてゐた。彼はソツと這出して見たが、別に何處がどうと云ふ事もない。それで彼は其の空箱の一ツの後方に廻つて、箱の中に潜り込んだ。彼は神様に見付からぬ様にと、そこに匿れたのであつた。



彼は血みどろになつてゐた。が、彼は其の血が自分のものか、又は他人のものか  
を知らなかつた。彼は恐怖に慄へて列びの悪い上下の齒はガチ／＼打合つてゐた。  
併し段々に氣が落付いて來ると、彼は固よりアポツスル教會の信條を眞面目に信仰  
してゐる者でなかつた事に心付いた。彼は負傷者の唸りと、群集の叫喚と怒號とに  
ジツと耳を澄ました。そして一體、何事が起つたのであらうかと推測を廻らした。  
先づ第一に、前に一度アメリカ市に大地震があつた。今度のもそれであらうかと考  
へた。次には本通りの真中に火山が爆發したのだらうかと考へた。イヤ、それは瓦  
斯の幹線だつたか知れぬとも疑つた。又、これで終しまひなのだらうか、未だあるのでは  
なからうかとも考へた。若し又、火山が發爆を續けるならば、彼は此空箱と一緒に  
ガツゲンハイム・デバートメント・ストアの壁を打抜いて飛んで行きはしまいかとも  
氣遣つた。

ピーターはジツと待つてゐた。そして死の苦痛に惱む人々の恐ろしい唸めき、助  
を呼ぶ斷末魔の叫びに耳を澄ました。其の間に彼は何か指圖をする人聲を聞いた。

ハハア巡査だ。して見ると、救護班もやつて来るに相違ない。おれも這出して手當てをして貰はねばならぬと思つたが、此處で、眞に突然、彼は其の空らつぽの胃袋を思ひ出した。そして二十年來、意地の悪い世間に苛め抜かれて愈々鋭くなつてゐる彼の狡猾は、今ま運命が彼の頭上に持來たした此の機會を閃光の如く覺知した。彼は負傷者、而かも重傷者の振りをせねばならぬ。彼は激動によつて神經に異常を來たした知覺喪失者を装はねばならぬ、さすれば、自分は病院に運ばれる。柔らかな寢臺と食物とが與へられる。事によると數週間、そこに置いて貰へるかも知れぬ。そして退院する時には、何がしかの金を呉れるかも知れぬ。彼は咄嗟の間にも、コナ狡猾な考へを廻らした。

彼は又、病院内で何等かの仕事——身體は樂で、機轉さへさかせればよい様な職業——があるかも知れぬと思つた。院長は恐らく醫員や看護婦が患者にどんな取扱ひをするかを探知する爲に、隠し目付、密偵と云ふ様な類の者を必要とするのであらうが、そんな仕事ならお手のものであるが、などと勝手な空想を描きもした。



突然空箱を引摺られたと思ふと、「おい！」と呼びかけられて、ピータアの空想は終りを告げた。

ピータアはウーンと唸つたが、見上げはしなかつた。箱は更らに引摺り出された。一つの顔は覗き込んで、

「お前はナンデこんな處に匿れてゐるのだ？」

ピータアは弱い聲で、

「ナ、ナ、ナンデ？」

「怪我をしたのか？」

「どうですか」とピータアは唸めく様に答へた。

箱はモ一度、力任せに引摺られて、中の人間は轉げ出た。ピータアが見上げると三四人の巡査が覆ひかぶさる様にしてゐた。彼はモ一度唸つた。巡査の一人は、  
「お前はどうして此處にはいつたのだ」

「這ひこんだんです」

「何の爲に？」

「に、逃げる爲に。……ア、アリヤー體何でしたらう！」

「爆彈よ！」

と巡查の一人は云つた。ピーターは一時神経の難破者である事を忘れる程に仰天して、

「ナニ爆彈？」と叫んだ。その瞬間に一巡查は彼を引立てた。そして

「立つて見い！」

と命令した。ピーターは云はれるまゝに立つて見た。彼は立てない筈であつたのを忘れたのであつた。彼は血と砂塵とを浴びて、見られたざまではなかつたが、それでも兩脚の完全なのを發見して、本當に救はれたように思つた。

巡查は型の如く住所、氏名、職業等の訊問に取りかゝつたが、ピーターが無職業であり、且つ餘りに長い間箱の中に匿れてゐた點で、巡查は疑ひの眼を光らせた。

其處に私服の一人がやつて來て、彼が何者で、何處から來て、此の群集の中で何を  
してゐたかを重ねて問ひ質した。ピータアは勿論、それらの質問のいづれに對して  
も満足な答へを興へ得なかつた。其の私服巡査はよく肥つた、骨組の逞ましい、少  
くもピータアよりは一尺以上丈の高い大男で、ピータアの頭蓋骨の中に匿された時  
い秘密を見透さうとする様に、上方から彼の兩眼をジツと見据へてゐたが、終に  
「此奴はモツと調らべて見るから、彼方あっちへ引張つて行け！」

二人の巡査は兩方からピータアの肩の下に腕を差入れて半分抱へる様にして、街  
路を横ぎつて、或る建物の内に彼を連れ込んだ。

(四)

巡査が扉を開けてはいつて行つたのは大きな倉庫であつた。内部には負傷者が床  
の上に寝かされて居り、それに手當をする醫者や看護婦などでゴタ／＼してゐた。  
ピータアは廊下を通つて、奥の方の一室に連れ込まれた。其處には既に數人の先客  
が、或は突立つて居り、或は腰を下ろしてゐたが、いづれも彼同様、元氣のないも

のばかりであつた。彼等は皆な巡査から怪しいとにらまれて、此處に監禁せられてゐるのであつた。

ピータアを連れ込んだ二巡査は、彼を壁にもたれさせて、ポケットの搜索に取りかゝつた。出て來たものは、汚れ腐つたハンケチが一枚、道傍みちばたから拾ひ上げた巻煙草の吸殻が二本、こわれたパイプが一個、まるで毀れてしまつて質屋にも持つて行けなくなつてゐる古いニツケル時計が一個。これがピータアの知る限りの全財産で彼は是以外に彼等の發見し得る何物もないと思つたが、最後にモ一つ出て來たものがあつた。それはピータアがポケットに突込んで置いたリーフレットである。それを引出した巡査は、一目見るや否や「占めた！」と叫んだ。彼はピータアをジツと見据へて、其の眼を他の巡査に移し、リーフレットを手渡した。

その瞬間に前の私服の肥大漢がはいつて來た。巡査は手柄顔に意氣込んで、「ガツフェーさん！、これを御覽なさい！」

と叫んだ。肥大漢は其の紙片を受取つてチラと見た。ピータアはうろたへた。急



に恐ろしくなつて慄へ上つた。肥大漢は突然氣が狂つたかと思はれるほど恐ろしい形相に變つて、ピーターアをグツと睨み付けた。彼の濃い眉毛の下の、大きく見開いた兩眼は、今にも飛び出して來さうに思はれた。突然彼（ガツフェー）は、  
「ヨシ！」貴様はモウ逃がさんぞ！」

と叫んだ。紙片を持つたガツフェーの手は慄へてゐたが、突然一方の手を突出してピーターアの襟首を引つ掴み、グツと力任せに締め付けて、

「爆彈を投げたのは貴様だらう！」  
と怒鳴りつけた。

「ど、どうして、バ、バ爆彈を私が……」

と、ピーターアは喘ぎ／＼云つたが、その聲はかすれてヤツト聞き取れるほどであつた。

「貴様が投げたに違ひない！」

噛み付く様に怒鳴つたガツフェーの顔は、ピーターアの顔の直ぐ前にヌツと出て來



た。彼の齒はピータアの鼻に噛み付きさうにキラ／＼光つた。

「貴様が投げたに相違ない。コラ、早く白狀せんか。相手は誰だ！」

「カ、神様！ 私は何んにも知りません。」

ピータアは泣く様に云つた。

「貴様はおれをだます積りだな。」

ガツフエーはカツとなつて手ひどくピータアを小突き廻はした。

「サア白狀しろ。爆彈を製造したのは誰だ。」

ピータアの聲は恐怖の叫びに高くなつた。

「私は爆彈なんか見た事ありません！ 私は何んにも知りません！」

「此方へ来い！」

突然彼は扉ドアの方に引摺られて、室外の廊下を奥へ奥へと突飛ばすようにして連れて行かれた。ピータアの連れ込まれたのは物置の様な一室で、ガツフエーは中に入ると、後の扉ドアをビシヤリと閉めた。

「サア、これから白状させて見せる！」

と、例のリーフレットを自分のポケットに突込むより早く、ピーターアの手、と云ふよりは寧ろ一本の指を引摺んで、グツと逆に引ん曲げた。

「ア、痛た、た、た！」

と思はず大聲に叫んだピーターアは、更にうめくような聲を出した。

「ア、ア、折れる、折れる！」

「折つてやるんだ。指ばかりぢやない、貴様の骨と云ふ骨は一本残らず折つてしまつてやるんだ。それで足りなければ、爪も剣がしてやるんだ。眼の玉も抉<sup>えぐ</sup>り出してやるんだ。サア云へ、誰が共犯だ。誰が爆弾を造つたのだ。」

ピーターアは死者狂ひで抗辯した。爆弾などは聞いた事もなければ、見た事もないと云ひ張つた。右に、左に、前に、後に、自分の身體を振ぢ曲げて、捻ぢられた指の痛さを逃れようと悶がいた。

「嘘を吐け！。おれは貴様が白ばくれてる事をチャンと知つてる、貴様はアノ仲間

の一人ぢやないか。」

「どの仲間です。私にはあなたのあつしやる事がチットも解りません。」

「白ばつくれるない。貴様は『赤』の仲間ぢやないか。」

「『赤』?、『赤』とは何です?」

「貴様がイクラ空呆そらごぼけても、貴様はあのチラシを街路で撒まいてゐたぢやないか。」

「私はチラシを讀んだ事はあります。一字も讀んだ事はありません。私はあれが何だか、ちつとも知りません。」とピーターは繰返した。

「貴様はまだそんな事を云つておれを欺だます積りなのか。」

「いえ、全く、あのチラシは知らない婦人が呉れたのです。アツ、痛い!どうぞ

……。決して嘘は云ひません。私はまだあのチラシを讀みやしません。」

「此奴こやつ、まだそんな嘘を云ふのか。」

ガツフエーは愈々猛り立つた。

「あれは貴様達の陰謀をチャンと知つてるのだ。そして貴様の口からそれを白状さ

せようとしてるんだ。」

今度はピータアの手首を掴んで後に捻ぢ上げた。ピータアは彼れのするまゝに身を捻ぢらせて、

「私は知りません、私は何んにも知りません。」

と悲鳴を擧げた。

「ソナにまでして、彼奴等きやつらを躲かほつて何になるのだ。彼奴等を逃がしてやつたつてあれ達が貴様を絞め殺してしまやア、貴様にどれ丈けの得が行くのだ。」

ピータアはもう大聲で泣き叫ぶばかりで、ガツフェーが何と云つても返事をしなかつた。そこでガツフェーは手を變へて、賺しにかゝつた。

「おい、愚圖々々してりや彼奴等は皆な市外に逃げ出してしまやぢやないか。サア早く云つちまへ！。あれ達が彼奴等を皆んな引つくゝつてしまや、おれはお前を助けてやる。あれ達はお前が眞直ぐに白状さへしてしまへば、お前をどうしようと云ふんぢやない。あれ達の引つくゝりたいのは巨頭連おほあたまれんなんだ」



併し、ピーターは矢張り「私は知りません」を繰返すばかりであつた。それでもかとガツフェーが更に、捻ぢ上げる度毎にピーターはヒー／＼云つて泣き叫んだが、それでも尙ほ、爆弾など全く知らぬ、何も白状する事は無いと云ひ張つた。實際、それより外に仕様がなかつた。

遂にガツフェーも何等得る處なき訊問に疲れたのか、又は「拷問」をするにはこゝは餘りに公開の場所で、誰が扉ドアの外で立聞きしまいものでもないと考へ付いたのか彼は捻ぢ上げてゐたピーターの手を放して、今度は彼の頭を一突き突いて仰向あふむきに突き仆し、彼のオド／＼した眼をグツと睨みつけて、

「おい、野郎、おれは今ま貴様にかゝつちやゐられないが、これから貴様を監獄に打ち込んで遅かれ速かれ白状させずにや置かないから、そう思つて居れ。それが一日で済むか一月かゝるか知らんが、どうせ貴様は此の俺に、此の爆弾事件の一切をしやべつてしまわねばならんだ。そうして此の戦争反對のチラシを印刷した者が誰かといふ事も、又その他の『赤』の連中の一切合切の秘密も、皆この俺に話してし



まわねばならんのだ。其處で、まア、ゆつくりと考へて置けたが、一つ斷つて置くのは、俺以外の者に向つて、一言でもしやべつたら承知しないぞ。若し貴様が外の者にしやべつたら、それこそ俺は貴様の喉元のどもとからその舌の根をひつこ抜いてやるから、そう思つて居れ。」

斯う云つてしまうと、彼はピータアが泣きしやくつてゐるのに頓着なく、その襟首を掴んで以前の廣い部屋に連れて歸つた。そして巡查の一人に彼を引渡して斯う云つた。

「此奴こやつを至急、監獄に送つて呉れ。そして暗室に打込んで、おれが行く迄は出すことはならんと、そう云つて置け。又、此奴は誰とも口をさかせちやならんから、若し聲を出す様だつたら、猿轡をはめておけ。」

巡查はガツフェーの命を奉じて、しやくり上げるピータアの兩腕を掴んで其の建物の外に連れ出した。

(五)

ピーターは囚人護送用の自働車に押し込まれた。彼と並んで一人の巡査が腰掛け  
た。警笛が鳴ると、自働車は物見高い群集の間を押分ける様にして走り出した。半  
時間の後に彼等は監獄に達した。其處では制規の手續さは一切省略されて、姓名も  
記帳されなければ、指紋も取られなかつた。ピーターの運命は上官の命令に依つて  
既に定つてゐたのであつた。彼は直ぐにエレベーターに乗せられて階下に降ろされ  
更に石の階段を下つて、最下層の地下室に連れて行かれた。其處には鐵の扉があつ  
て、その頂邊に近い處には幅一時、長さ六寸の小さな細長い窓が唯た一つ開けてあ  
つた。これが『洞穴』と呼ばれる、暗室である。鐵の扉は開けられた。ピーターはその  
眞暗な闇の中に押し込まれた。鐵の扉はガタンと閉められた。そして鐵の錠がガチ  
ヤリとあろされた。後は森として靜寂が續いた。ピーターは冷めたい石の床の上に  
グタリとへたばつた。

此處までの事件の展開は餘りに急速であつた。ピーター・ガッチは何を考へる時  
間も無かつたが、今は唯だ時間があるだけであつた。彼は最初からの出來事を辿つ

て、運命が彼を弄んだ戦慄すべき悪戯をまざ／＼と感知した。彼はゴロリと横たわつた。時は過ぎた。併し彼はそれを計る方法を持たなかつた。何時間過ぎたか、幾日経つたか、全く考へ様がなかつた。其處は石造の監房で、冷めたくシツトリとしてゐた。獄吏はこれを『冷却器』と呼んで、暴れ狂つてどうにも手の付けられぬ者の逆上を引下げる爲に使用するのであつた。これは獄吏に取つて面倒を省く一個の工夫で、どんなに猛り立つて手におへぬ者でも、此處へ投り込んで忘れてゐれば、後は一切彼自身の苦悶する心が始末をして呉れるのであつた。

ピータア・ガツヂの苦悶懊惱は、確かに、今迄に此の暗黒の洞穴に投り込まれた誰よりかも、痛ましく烈しかつた。彼はコンナ恐ろしい目に逢う理由が全く無く、又コンナ苦しい目に逢ふ程の値打のある男でもなかつたので、人一倍恐ろしかつたのであつた。人もあらうに、ピータア・ガツヂは、安樂なる一日と、腹一杯の食物と潜ぐり込む丈けの寢床とを得る爲に、容易に誰の云ふ事にも従ひ、どんな事でもする程の男であるのに、コンナ恐ろしい事件が彼の身の上で起るとは、何事であら

う！。運命は何故に此の残酷なる悪戯の犠牲に彼を撰んだのであらう！。彼等は唯だ白狀しろと彼を責めた。彼は知つてゐる事なら何でも云つてしまいたいのだが、全く知らない事をどうして白狀が出来ようか。

ピーターは考へれば考へる程、腹が立つた。如何にも殘虐非道の限りであつた。彼は起きあがつて闇の中を睨みつけた。彼は彼自身に語り、外部の世界に呼びかけた。彼の存在を忘却してゐる宇宙に向つて叫んだ。彼は暴れ狂つた。彼は聲を擧げて泣いた。彼は立ち上がつて、方六尺の監房の周圍を勢一杯せいいつぱいに蹴りつけた。彼はガツフエーから傷められなかつた一方の手を握り固めて、鐵の扉を打ち敲いた。更らに蹴りつけた。怒鳴つた。けれども、何の答へもなかつた。彼の知る限りでは、其處には聞いてゐる者もゐなかつた。

彼は斯うして疲れ果てると、何時でも只ぐたりと打倒れて、其まゝ悪夢に魔はるる眠りに落ちた。そうして彼は又、如何なる夢魔よりも一層恐ろしい現實に目覺めた。ア、恐ろしい男が今にも此處にやつて來さうで、又復た拷問にかけられさうで



怖ろしくて堪まらなかつた。ガツフエーと呼ばれた男の形相は、今迄に描き出された有らゆる悪鬼、有らゆる悪魔のどれよりも恐ろしかつた。

ピータアは此處に閉ぢ込められてから長い／＼時間の後に、初めて外部の物音を聞いた。そして鐵の扉が開かれた。ピータアは隅の方に縮こまつた。床の上に何か投げ棄てた様な音がしたと思ふと、扉は又ガタンと閉められて、世界は又元の靜寂にかへつた。ピータアは恐る／＼手探りに探つて見ると、一塊ひとかたまりのバンと、一杯の水が置いてあつた。

又、長い時間が過ぎた。ピータアの無力なる狂暴が繰り返された。そして一度バンと水とが運ばれた。彼はそれが一日二回であつたか、又はそれが新しい日であつたかを疑つた。又、何時までおれを此處に留めて置くのぞらうか、彼等はおれを狂人にする積りだらうかとも疑つた。彼はバンを運んで來る男に是等の疑ひを質したが、其の男は何の答へも與へなかつた。其の男は何時來ても、一言も口を利かないのであつた。

ピーターが一番閉口したのは、骨を透す様な寒さで、彼の齒は絶へずガチ／＼打ち合つてゐた。盛んに運動して見るが少しも暖かにならない。扉の開いた時に彼は毛布を貸して呉れと叫んだ。バンを運んで來る度毎に狂氣の如く歎願した。彼は病氣である、爆發の爲に傷害を受けてゐる、醫者を呼んで呉れ、死にさうであると云つたが、何の答へもなかつた。ピーターは其處に打つ倒れて、ガタ／＼慄へて、オイ／＼泣いて、身悶えをして、囁語うはごもを云つて、遂に正氣を失つた形であつた。そうして彼は、覺めてゐるのか、眠つてゐるのか、生きてゐるのか、死んでゐるのかをも知らなくなつた。彼の精神は錯亂しかけて來た。妖怪變化ようかいへんげが遠い／＼未知みちの世界に彼を伴つて行つて、恐怖と苛責の奈落の底に突落すのだと思はれて來た。

ピーターの病的妄想が呼び出した妖怪どもは、實に異種異形であつた。けれども、それよりも更に恐ろしいのは、現にアメリカ市の生命を支配し、ピーター・ガッチと呼ぶるる貧しき一人の小男の運命を決定しつゝある現實であつた。アメリカ市には其の諸種の産業を占有し、其の住民の生活を支配する市民の一團があつた。そし

て此の一團は市の商工、及ど政治上の權力に擁護されて、他の鬱然たる新興の勢力（即ち實業界の寡頭政治を倒して其の權勢を亡ぼさうと決心してゐる勞働の團結）に對峙しつゝあつた。是等の兩集團の死活の鬭争は、今や其の最高頂に達せんとしつゝあつた。彼等は恰も、どちらか死ぬまで鬭はねばならぬ二大力士の如く、又、一方は一抱へもある大木を根こぎにして振り上げ、他方は何百貫と云ふ巨岩を頭上高く差し上げ、互に敵手の頭蓋骨を微塵に打碎かうと狙つてゐる二大巨人の如くであつた。そして憐むべきピーターは、偶ま此の兩戰士の決戰場裡にフラ／＼と迷ひ來つた一匹の蟻であつた。彼等が力足を踏む度に地は震へた。砂塵は蹴上げられた、不幸なる蟻はあちらこちらに叩き付けられた、トンボ返りをした、土砂に埋められた。そして突然——微塵！——一巨人の足は彼が踏あへぎもがいてゐる地上に下ろされたのであつた！

(六)

ピーターは三日間か、或は一週間か——で確な事は彼は勿論知らず、又、彼に云

つて聞かせた者もない——『洞穴』の中に留置された後に、鐵の扉が再び開かれて初めて「此方へ」來いと云ふ人聲を聞いた。

ピーターは人聲に餓へてゐた。が、彼は今それを聞くと同時に一隅に縮こまつた。それはガツフェーの聲であつた。ピーターは出て行けばどうされるかを知つてゐた彼の齒は再びガチチと鳴り出した。彼は悲鳴を擧げて「私は何にも知りません！ 白狀する事は何にもありません！」

一本の手が彼の襟首を掴んだ。彼が目を開いた時には、彼はガツフェーの前に立たされて、廊下を歩いてゐた。ガツフェーは彼がオイ／＼泣くのを見て、只だ「黙つてろ！」と一度怒鳴りつけただけで、彼は何んにも云はないで彼を一室に引摺り込み、彼を椅子の上に投げ付け、自分は他の椅子を引寄せて、其の正面に腰を下ろした。

「オイ、顔を上げろ。俺は先づ以てお前の諒解を得て置かねばならぬ事がある。一體、お前はモ一度あの洞穴ホールに歸つて行きたいのか。」



ピーターは唸つた。「ど、ど、どう致しまして。」

「フム、それでは云つて聞かせるがね、おれはお前が白狀しない限り、死ぬ迄お前をアノ洞穴ボールの中に投り込んで置く積りなのだ。それから又、俺が知りたいたいと思つてる事柄を、お前が俺に話して聞かせる迄は、お前の兩腕は捻ぢ上げられ、お前の指の爪は剝がされ、お前の皮膚はマッチの火で焼かれるものと承知して貰はねばならぬ。又、此處には、お前がどんな目に逢はうと助けて呉れる者は一人もない。お前が俺の注文にビシッリはまがつて来らうと氣にかけて呉れる者は一人もない。お前が俺の注文にビシッリはまつて来る迄は、お前はいつまでも俺と一緒に斯うしてゐるのだ。」

ピーターは只オイ／＼と泣くばかりであつた。ガツフェーは更に語を續けて、  
「俺はモウ、お前の素性を知つてるのだ。お前が何處で生れて、何處で何をして来たかをスツカリ調べ上げてるのだ。だからお前が今さら隠くしたつて、駄目だ。俺は又、お前が今度の爆彈事件でどんな役廻りをしたかもチャンと知つてる。だからお前だけの事なら、此上手數をかけなくても絞首臺に送る事は出来るのだ。だが、

俺は未だお前の仲間の奴等について動かぬ證據を押へる事が出来ない。奴等は目頭めかたまで、ほんとの悪人は奴等なんだ。俺はどんな事をしてでも奴等をフン縛じはらねばならぬ。そこでお前に助かる道があると云ふ譯だが、それを有り難いとは思はないか。」

ピータアの泣聲が少し静まつて啜り泣きとなつた。「モウ泣くな！」と、ガツフェーは鋭どく「つ叱りつけて置いて、更にピータアのおびへた眼をジツと見据えた。

「オイ、判つただらう。お前には今助かる機會が鼻の先にぶら下がつてゐるのだ。それを捉むにや別に六ヶしい事はない。唯だお前が知つてる丈けの事を此處で喋べつて仕舞へばいゝのだ。そうすればお前は早速外に出される。此うえ苦しむ事はない尙ほ其上に俺達は今後お前の面倒を見てやるのだから、一切萬事心配には及ばないんだが、どうだい。」

ピータアは蛇に見込まれた蛙の様にジツと見上げてゐた。頭の中はコンナ渴望で攪き亂される様であつた。外に出される！苦痛を免れる！面倒を見て貰らへる！。あゝこれで、白狀するだけの事實が少しでも知つてるといゝんだがなア！

ア！ 何とかして、白状する丈けの事實を知る方法があるといふのだがなア！。

(七)

ガツフエーは、フト立ちあがつて、ピータアの手首をムヅと掴んだ。彼は又も其の手首——以前に捻ぢ上げられてまだツキ／＼と痛んでゐる其の手首——をグツと捻ぢ上げた。

「白状しないかッ。」

「出来る事なら私も白状したいのです！。神様！ どうすれば私に白状が出来ませうか。」

ピータアは又悲鳴を擧げた。ガツフエーは「嘘をつけ」と叱りつけた。

「俺はモウ何も彼も知つてるんだから、胡魔化したつて駄目だ。お前はジム・グーパーを知つてるんだらう。」

「チ、チツとも知りません！」

ピータアは噎り上げた。

「嘘だ！」

ガツフェーは力任せにピータアの手首をいよく捻ちり上げた。

「ハイ。ハイ。そうです。知つて居ります！」

ピータアは泣聲で叫んだ。

「さうだらう。無論お前は知つてる筈だ。ぢや、彼はどんな人相の男だ？」

「私は、私は知りません。大きな男です。」

「嘘だ！。中脊の男ぢやないか！」

「ハイ、そうです。中脊の男です。」

「色は黒いか？」

「そうです、色の黒い男です。」

「お前は音楽教師のグーバー夫人を知つてるか。」

「ハイ、知つて居ります。」

「お前は夫人の家に行つたのか。」



「ハイ。夫人の家に行きました。」

「其家は何處にある？」

「知りません。それは——」

「第四街にあつたか。」

「ハイ。第四街にありました。」

「そして彼はお前に爆弾入りの衣類箱スリトケースを運ばせたのだらう。」

「ハイ、ハイ。左様で御座います。」

「彼はお前に、其中に爆弾が入れていると云つて聞かせたか聞かせなかつたか。」

「それは——それは——分りません。」

「お前はそれを覺えないと云ふのか。」

「そ、そうです。覺えません。」

「覺えない事はあるまい。お前は確かに其の事を聞いたのぢやないか。エ、そうだらう。」

「ハ、ハイ。では聞きました。」

「ヨシ。そこでお前は陰謀いんぼうの全部を知つてるのか、知らないのか。」

「ハ、ハイ、知つて居ります。」

「ヨシ。では、お前は猶太人のイサクを知つてるか。」

「ハ、ハイ。知つて居ります。」

「お前が衣スートケース願箱を持つて乗つて行つた自働車の運轉手はイサクだつたのか。」

「ハ、ハイ。イサクでした。」

「お前はビツドルを知つてるか。彼のした事を知つてるか。」

「ハイ、知つて居ります。」

「お前は此の事に就いて、お前の知つてる事は残らず云つてしまふ積りなのか、云はない積りなのか。」

「ハイ、私は残らず云つてしまふ積りです。私は何事でもあなたが——」

「お前は何事でも知つてる丈は皆な云つてしまふと云ふのか。確かにそうか。」

「ハ、ハイ。」

「キツとそれに相違ないか。」

「ハイ、ハイ。」

「途中で變心しやしないか。もう確かに洞穴ホールには歸らないつもりか。」

「ハイ、ハイ。」

ガツフエーは突然、自分のポケットから折り疊んだ數枚の紙綴りを引出した。それはタイプライターで打つたものであつた。

「ピーター・ガツヂ。俺はお前の素性を調べたと云つたが、お前が此の事件に關係してる點は此の通りにスツカリ調べ上つてるんだ。それがどんなに完全に出來上つてるかは、お前が讀んで見りや判わかる事だが、恐らく只の一點だつてお前に間違を發見する事は出來ない。」

ガツフエーは皮肉に云つた積りだが、憐むべきピーターは恐怖に満たされて、ソナナ皮肉などの通ずる餘裕は全くなかつた。ガツフエーは語を續けた。

「これがお前の調書だ。眼は見えるか。」「ヂヤこれを讀んで見る。」

ピータアは慄へる手に紙綴りを受取つた。彼はそれを讀まうとしたが、其の手を膝の上に置かねばならぬ程ひどく慄へた。そして彼の眼がまだ明りに慣れてゐない事を發見した。

「わ、私は讀めません。」

ピータアは又泣き出した。

「ヂヤ、俺が讀んでやるから、よく聞いてる。」

ガツフエーは紙綴りを取返して、其の極めて巧妙に、事實らしく拵へてある記録を讀み上げた。それはジム・グーバーと名づけられる一人と其の妻と、其の他の三人とに關する一冊記録で、彼等がピータアを使つて爆彈製造の材料を買集めさせた事、ピータアが其處の某家の某室で、爆彈製造に助力した事、彼等が爆彈を衣類箱スードケースに填め込んで、それに時計仕掛を施した事、イサクと云ふ者が大通りの或る街角まで彼等と共に其衣類箱スードケースを自動車に乗せて行つた事、彼等が「參戰促進デー」の行列



の前面 其の爆弾入りの衣類箱を殘して立去つた事などを、巧妙に詳細に書き記してあつた。併しその筋は簡單で明白であつた。

ピーターはそれを聞き了つた時、これが此の恐ろしい苦難くげんから遁れ出でる爲に、彼の爲すべき總てある事を悟つて、躍り上るほど嬉しかつた。彼は今や、自分が知つてゐるだらうと想定された處のものを知つた。なぜガツフェーはもつと早く云つて聞かせなかつたやらう。そうすれば彼の指も折られず、腕もぬかれずに濟んだものを！と不思議でならなかつた。ガツフェーは、

「これがお前の自白だ。それに相違ないか。」

「ハ、ハイ、相違ありません。」

「お前は最後までそれを突張る事が出来るか。」

「ハ、ハイ。」

「確かに出来るか。大丈夫か。」

「ハ、ハイ。」

「お前はそれが全部眞實である事を誓ふか。」

「ハイ、誓ひます。」

「お前は誰が何と云つても變心しないか。」

「け、決して。」

「オール、ライト。」

「ガツフェー」の聲は重大なる取引を決了した商人の安心を示した。彼は漸く人間らしくなつた。

さて、ピータア。これからはお前は俺達の味方だ。俺達はお前の自白を重要な證據に仕様としてゐるのだ。其處で、お前にも判つてゐるだらうが、俺達はお前を證人として留めて置かなければならない。併しモウ囚人としてではないから勿論大切にしてやる。俺はお前を監獄の病院に入れてやる。そして充分な食事をさせて、遊ばせて置く。一週間かそこいらの間に大法官の調べがあるだらうが、其前にお前は誰とでも一言も口をさく事はならぬぞ。或はお前の口から何かしら引き出さうとする

者があるかも知れぬが、お前は俺以外に此の事件に就いて口を開いてはならんぞ。俺はお前の親方だ。おれはお前に何をどうすればよいかを教へてやる。そしてあらゆる點に就いてお前に氣を付けてやる。どうだ、俺の云つた事が解つたか。」

「ハ、ハイ。よく解りました。」

(八)

昔し昔し、或る黒人が生爪なまじめを剥がす事がなければ、どんなに樂らくだか知れぬから、自分の足の爪を抜いてしまふと云ふ話がある。これと同じ流義で、ピーターアはアメリカ市の監獄の病院内に幸福な時日を過した。彼には寢心地のよい寢臺があり、充分な食事があつたが、彼の爲すべき仕事は絶無であつた。彼の關節の疼痛は日一日減退した。體重は日々半ポンドづゝ増加した。彼の忙しい心は、其の身に纏はる四圍の事情を研究すると同時に、現在の安易な状態を永く持續し、更らに其上に眞に生甲斐のある様に多少の贅澤を附加へる方法の發見に休みなく働いた。

ピーターアは自分が此の病院内の問題の人物である事を發見した。彼は全市、否な

全國に一大衝動を與へたグーバー事件の「看板」證人であつた。彼が何を知り何を自白したかは重大なる秘密であつた。ピータアは堅く口を閉ぢて、さもく一大事件らしく見せかけ、そして自尊心の満足を享樂した。

併し、それと同時に、彼は此の事件に關する他人の談話に耳を傾けぬと云ふ理由はない。彼は將來に於ける一身の保安上、事件の真相を知り盡くさうと努めた。彼は入院患者の取締りたる老人ドーブマンの云つた事にも、其の助手の瑞典人シャン・クリスチアンの云つた事にも、その他、外部に友人を持つ人々が聞いて來た噂話にも、總て耳を傾けた。その一人は或る事を語り、他の者はそれと正反對の事を語つたが、ピータアはそれとこれとを綜合した上に、彼自身の狡智を働かせて、漸くにして其の真相を捉へ得た事に満足した。

ジム・グーバーは勞働運動者中の傑物であつた。彼は鐵道トラストの従業員の勞働組合を組織して、資本家の心膽を寒からしめた大罷業を起した。彼は又建築従業者をして數回の大ストライキを決行せしめた。そして彼は其際、建築中の二三のビ



ルディングにダイナマイトを使用したといふ噂もあつた。それは兎に角、市の資本家達は甚だしく彼を畏れて、今後絶対に彼等を惱まし得ざる處に彼を置かねばならぬと考へた。此際に無名の一狂漢が『參戰促進行列』の通路に一個の爆彈を投じた。市の巨頭連はこれが彼等の求めつゝあつた機會であると決定した。ピーターを預つたガツフェーは、鐵道トラストの秘密探偵部長で、巨頭連は此の事件に關する全權を彼に委任した。彼等は即時の行動を必要としたが、無力で而かも腐敗してゐる市の警察には、恐らく何等の期待をも持たなかつた。彼等は、グロバーを、其の妻及び他の三人と共に監獄に投じた。そして一方には市内の新聞紙を通じて、此の五人の死刑を當然と考へさせる様に、盛んに公衆に宣傳しつゝあつた。

事實は此の通りであつた。が、ピーターに取つては、ジム・グロバーは單なる一個の名前であつて、彼の食事の一品ほどの價值もなかつた。彼は始めてガツフェーの所爲を理解し得たが、そうしても尙ほ彼の唯一の怨恨は、ガツフェーが、腕をもぎ取る様な痛い目に逢はせずに、ナゼ初から此の話をして聞かせなかつたかといふ事

であつた。

ガツフエーは「喋べるな」と云つた。その通りにピーターはグーバー事件に就いては一語も口に出さなかつた。が、其の他の事に就いては勿論喋べつた。人は終日ミイラの様に黙つてゐる事は出来ない。而かも好んで自分の手柄話をするのがピーターの弱點であつた。彼はイカサマ賣薬店の親方ペリクリース・ブリアムと一緒に田舎廻りをして數千弗を儲けた事。其の間に二人は詐欺取財として二度監獄の飯を喰つた事。ジム・ジャムボーといふ殿堂内に奇々怪々の儀式が行はれた事。その殿堂の主人たる自稱豫言者カランドラが、金持の未亡人や妻女を惑はして多額の喜捨金を捲き上げた事。宗教上の神秘的儀式を行ふ事を口實として、少女を秘密室に引入れた事。それが爲に恐ろしい風説が傳はつて、終に警察の手入れとなつた事。豫言者は逸早く風を喰つて逃亡し、彼も亦身一つでヤット逃出した事などを、残らず人々に喋べつてしまつた。

ピーターは自分が今までに携はつた良からぬ事を皆な喋べつてしまつても、今は

官憲の保護の下にあるから大丈夫だと考へてゐた。然るに彼の病院生活が二ヶ月に及んだ頃、突然、監獄の事務室に召喚された。其處にはガツフェーが火の様に怒つて待受けて居て、ピータアの顔を見ると、イキナリ「此の馬鹿野郎！」と怒鳴りつけた。

ピータアの膝の力は抜けて、彼の齒はガチ／＼と打合つた。彼は叫んだ。

「ナ、ナ、何事ですか。」

俺は貴様に、あれ程喋べるなと云つたぢやないか。」

ガツフェーは又もやピータアの腕を捻ぢ上げさうな權幕であつた。

「私は誰にも喋べりはしません！。私はグーバー事件に就いては一言も喋べりやしません！。決して一言も。」

ピータアは急ぎ込んで抗議したが、ガツフェーはそれを遮つた。

「黙れ、馬鹿奴が！。貴様はグーバー事件に就いては喋べらなかつたらう。だが貴様は貴様の身の上を喋べつた。貴様はカランドラの手下になつて働らいた事を

喋べつたどらう。

「ハ、ハイ。」

「貴様は警察が彼と貴様の行動を搜索してる事を知らないのか。」

「ハ、ハイ。」

「貴様は偽物の特許薬を賣つて捕まつたと云つたのか。」

「ハ、ハイ。」

「あゝ全能の神！」

と、ガツフェーは叫んだ。

「それで貴様は證人になれる積りなのか？　どんな證人になる積りなのか？」

ピーターもヤケになつて聲高に答へた。

「ですが、私は、関係のある人には、誰にも話しはしません。私は唯だ——」

「馬鹿奴！　関係のあるか無いかが、どうして貴様に分るか。仕様のない奴だ。」

とガツフェーは頻りに怒鳴りつけて、あらん限りの悪罵を連發した。



「グーバ―一味の者は俺達に探偵を付けてるんだ。此の監獄内にも確かにそれがゐるんだ。何處をどうしたのか、それは判らんが、彼奴等は兎に角、貴様の素性と貴様の調書の内容とを探り知つてるんだ。貴様はもう役に立たん貴様のお喋べりが破壊の基となつたのだ！」

ピータアは泣いて辨疏し陳謝し惘願したが、總べて無効であつた。ガツフェーはもう此上は、ピータアが爆弾を投げた當人であり、尙ほ此の陰謀の首魁はグーバ―でなくてピータアであつた事を證據だて、それを告訴すより外はないと云つて、ピータアに再び洞穴ホールに還る事を命じた。

(十)

ピータアは又々眞暗な、冷めたい石牢内に慄へてゐた。彼はそれが幾日間であつたか知らない。彼は唯だ再びガツフェーに呼び出される迄に三度バンと水とを與へられた事を知つてるだけである。

ピータアは震へる兩手を組合はせて、椅子の上に小さくなつてゐた。それに對してトラストの探偵長(即ちガツフェー)は彼の新計畫を説明した。それによると、ピータアは事件の證人として永久に役に立たなくなつた。労働者側では防戦の爲に既に莫大の資金を集め得た。彼等は全市の一切の労働組合を彼等の味方に持つてゐる。たゞに市内だけではない、全國の總べての労働組合が彼等の背後に控へてゐる。彼等はスパイや内報者を使つて、起訴の内容から、それに對する證人證據物件、警察側で執らうとする捜査手段までも探知して、其の裏を搔かうとしてゐると云ふのである。ガツフェーはピータアがグーバーの味方になる事を恐れてるとは云はなかつたが、ピータアは彼の話振りで明かにそれを察知した。そして彼は終に幸運の階梯をしつかりと掴み得た喜びに胸をどきつかせた。

「其處で」と、ガツフェーは語をつづけた。

「あれに一つの考案があるのだ。彼奴等はお前が喋べつた事はスツかり知つてる。俺がそれを知つてお前を又、「洞穴」<sup>ホー</sup>にぶち込んだ事も知つてる。其處で俺は今、お

前を犠牲者にしようと思ふのだが、俺の云ふ意味が解るか？」

ピータアは首肯うなづいた。彼はよく言外の意味を解し得た。それは天才とも云ふべき。彼の特長であつた。

「お前は正直な証人であつた、判つたかい。俺はお前に虚偽を云はせようとしたが、お前はそれを云はなかつた。それで今お前が奴等の方に行くと、奴等は喜んでお前を味方に引き入れる。そこでお前は確かな味方と見せかけて、出来るだけ多くの秘密を探知する。そして俺の方では始終誰かをお前と密會させる手筈にして置くからお前は其人を通して、見付け出した事柄を俺に知らせるのだ。解わかつたか。」

「よく解りました。」

ピータアは元氣よく答へた。彼はこれでほんとに安心した。彼はヤット眞の職業にありついた！。彼はガツフェー自身の如く、一匹の「犬」となりつゝあつた。ガツフェーは更らに云つた。

「處で、俺の方で先づ第一に知りたいのは此の監獄内の秘密を漏らしてゐる者が誰で

あるかと云ふ事だ。俺達はどんなに秘密にしても、それが直ぐに奴等に筒抜けなんだから。俺は今匿くして置かねばならぬ證人を押へてるのだが、奴等に知れるのが恐しく此の監獄に入れておく事が出来ないんだ。で、俺は至急に其の通謀者が誰であるかを知りたいんだ。尙ほ其外に知りたい事は俺の方から次々にお前に通じる事とするが、兎に角お前は今から「赤」<sup>レッド</sup>の一味に加はつて、奴等がどんな考へを持つてるかを探り、奴等仲間の特別な隠語を覺へ込んで貰ひたいんだ。」

「やりませう、確に。」

と云つたピータアの口の邊りに得意の微笑がチラと浮んだ。おかしい事には、彼は曩に「赤」<sup>レッド</sup>の一人と疑はれ、爆弾事件の首謀者の一人として拘禁されたのだが、ガツフェーは何時の間にか其の云ひがりを棄て、しまつた。恐らく、もうそれを忘れてしまつたのだらう！。

ピータアに與へられた職業は、彼に取つては眞に容易な仕事であつた。それは何等の作爲<sup>さくみ</sup>をも要しなかつた。有りの儘の彼でよかつた。彼は彼自からを偶然の犠牲



とでも云はう。そしてジム・グーバーに對する虚偽の種に彼を使はうと企らんだ人々に對して、腹の底から憤慨してやらう。其の餘の事は自由に口に出て來るだらう。そうすると、彼は勞働者仲間から信認されるだらう。そうしてガツフェーは次ぎに彼の爲すべき仕事を命令して呉れるだらう。

「そう話が定まりやア、もう一遍、お前を此の監獄のどつかの監房に入れる事によよう。そして俺がお前を拷問にかけるように見せかける。お前は暴れて、泣き騒いで「自狀する事は少しもないそんな事は斷じて知らない、と頑張れ。そうして結局、俺達は拷問をやめてお前を監獄から放り出すのだ。其處で、お前は其の邊をうろくしてゐるのだ。すると屹度彼奴等がお前を見付けに來るからね。」

斯うして小喜劇が其の筋書通りに演ぜられた。そして其の翌日の午後遅く、ガツフェーは、ピータアの襟首を掴んだ監獄の門前まで引摺り出し、最後の別れにポンと一ツ腰の邊を蹴飛ばした。

ピータアは自由の身になつた！。何と云ふ奇異な感情だらう。彼は只だ無性に嬉

しくて、大聲でわめきたい程に思つたが、それをジツと抑へて、そろり／＼街路を一方に辿つた。やがて、ある煉瓦壁の笠石に身をもたせかけて、両手で頭を押へて啜り泣きをしながら、或事の起るのを待つてゐた。すると、果してそれが起つた。一時間ばかり経つた後に、軽く彼の肩に觸つたものがあつた。柔しい聲が「同志よ」と呼んだ。ピータアは顔を覆うた指の間を透して若い娘の着物の裾を見た。折りたゝんだ紙片が彼の手の間に差し入れられた。柔しい聲は「此處を訪ねていらつしやい」と囁いだ。娘は歩み去つた。ピータアの心は躍つた。ピータアは終に一個の「犬」になつた。

## (十一)

ピータアはロマンチックな彼の感情を満足させる爲に、日の暮れるのを待つた。彼は得意でもあり、小氣味悪くも感じた。彼はガツフェーに云つた通り「赤」などと云ふものは丸きり知らなかつたが、其の後彼はそれを人に尋ねて、「赤」が労働組合とストライキの同情者であり、富豪を倒して彼等の財産を分配せんとする者であ

り、其の分配の一番の近道はダイナマイトだと信ずる者であると知つてゐる。又、あらゆる「赤」<sup>レッド</sup>は爆彈を製造し、武器を隠くして持つて居り、恐らく秘密の毒藥さへ持つてゐる者と思つてゐるのである。そして今、ピータアは其の仲間<sup>なかま</sup>にはいつて行つて、その一人とならうと云ふのであるから、それは彼のよゝうな安慰と快樂とを何物よりも先きに望んでゐる者には、餘りに興味が強烈すぎる。頭の中で或る者は切りに逃亡を勧めるが、ガツフェーが約束した報酬と名譽とを考へると、又それに心を引かされる。それに好奇心も手傳つて、逃出す事は何時<sup>いつ</sup>でも出来る。兎に角ぶつ付かつて見た上の事と腹<sup>き</sup>を極めた。

彼は教へられた番地を尋ねて、淋しい場所に建つた一軒の小さな平家の前に立つた。そして呼鈴を鳴らした。若い娘が出て來た。ピータアは一目見て、それが彼に言葉をかけた娘である事を知つた。彼女は彼が名乗るのも待たずに、衝動的に叫んだ。

「オ、ガツヂさん！、あなたはほんとによく入らしつて下さいました！」

そして彼女はピータアが恰かも長い間の友達であつたかの様に彼の事を「同志！」と呼んだが、急に氣が付いたように、

「あなたも矢張り同志コムレイドでせうね。」

と聞き質した。ピータアは同志の意味を解しかねた。

「なんとおつしやるのですか。」

「アラ、あなたは社會主義者ぢやなかつたのですか。でも、よござんすわ、私達は直ぐにあなたを主義者にしてしまひますから。」

彼女は何のわだかまりもない様に、彼を室内に連れ込んで椅子を與へた。

「私は、彼等が、あなたをどんなヒドイ目に逢はせたかを知つてゐます。だが、あなたはとう／＼彼等に屈伏なさらなかつた。あなたは何んと云ふ素晴らしい方です。ほんとに素晴らしい。」

ピータアは何と答へてよいか判らなかつた。彼女の聲には愛と稱賛の調が充ち満ちてゐた。無情刻薄の世間と戦つて苦しむ抜いて來たピータアは、一度だつてコン



ナ柔しい、温かい情緒を味はつた事はなかつた。ピータアは若い娘がチャラついたり、ハシやいだりするのを見慣れてゐたが、此の娘には少しもチャラついた様子がない。彼女の音聲は柔しかつたけれども、若い娘の聲としては聊は生まじめ過ぎる様に思はれた。彼女のバツチリとした物思はしげな眼には、其の子こが今は危険を脱れ得たといふ母親の氣遣はしさが籠つて、じつとピータアを見守つてゐた。

彼女は次の室に向つて「姉さん、ガツヂさんが入らしやいましたよ」と呼んだ。すると、今一人、別の娘が其の室にはいつて來た。それは彼女より少し年上の、丈の高い、併し同じ様に瘠せた、顔色のよくない女であつた。二人の姉妹きょうだいで、サデー・トツド、ゼニー・トツドと云ふのが彼等の名であつた。そして姉は速記者として働いて妹を養つてゐるのであつた。一通りの挨拶が済むと、娘は非常に緊張した態度でピータアに入獄の顛末を質問したが、彼が一二分間話してゐる間に、姉は起つて行つて電話をかけた。彼の出獄後、直ちに彼と會見せねばならぬ人々や、通知されねばならぬ人々は可なり多數であつた。彼女は稍や暫らく電話にかゝつてゐたが、その

電話を受けた人々は、更らに他の人々に通知したのであらう、その後の一二時間内に訪問者は後から後からと詰めかけて來た。ピータアは繰り返へし、繰り返へし、その入獄談を語らねばならなかつた。

最初の訪問者は堅く引締つた口と、ピータアを悸きよつとさせた程の大きな聲の持主で仁王様のような大男であつた。ピータアは此の男が市内の大労働組合中での最急進派である、海員組合の首領だと紹介された時、如何にもそれらしい人物だと思つた。彼はどこから見ても「赤」<sup>レッド</sup>であつた。彼はピータアの想像にピッタリと合つた。獰猛な、如何にも危険人物らしい風貌の男であつた。彼はピータアの答へのハキ／＼せぬのに心付いて、

「彼奴等はスツかり君を威かしつけちやつたね。併し驚くことはねえ。おれなんざア四十五年間、威かされ通したが、未だに一度だつて驚いた氣振りだつて彼奴等に見せたこたアないや。」

と云つて、ピータアに元氣を付ける爲に、彼が逃亡海員で、フロリダの沼澤地を

獵犬に追はれて、とう／＼最後に捕まつて、樹の幹に縛りつけられて、正氣を失ふ迄なぐられた事を話して聞かせた。

次に、グーバー事件の擔當辯護士の一人と聞いてゐるダビット・アンドリエースがやつて來た。敏感な、注意深い顔つきをした、丈の高い、立派な男であつた。ピータアは、こんな立派な人がこんな無頼漢の仲間入りをして何をするのだらうと怪しんだ。そして彼は社會の下層にある不平不満の労働者を煽動する事によつて資産を作りつゝある、伶俐者りこうものの一人に相違ないと斷定した。其の次には、病身な、神經質らしい、少し跛を引く若い娘が來た。やがて其の娘はつと起つて來て、彼に握手を求めたが、その兩の頬には涙が流れてゐた。ピータアは近親の者でも亡くした人だらうかと思つたが、何と挨拶してよいか判らないので、チョツと當惑した。處が、それが彼自身の入獄談に動かされての涙であつたのには、彼もさすがに一方ならず驚かされた。

この娘はアダールと云つて、詩人であつた。そしてピータアには全く新らしい

型の人物であつた。彼はいろ／＼と考へた末に、此の娘は此の運動で馬鹿を見る者の一人——邪惡に包まれて少しもそれと知らぬ、無邪氣な、憐むべき多感多情の少女と思ひ定めた。此の娘と一緒にクエーカーの一青年が來た。それは青ざめた禁慾者らしい顔と、黒い長い頭髮とを持つてゐて、絶へず眼の上に落ちかゝる其の髪の毛を後ろに搔き上げてゐた。何處から見ても變り者で、ピータアは彼の言説から推して、彼は平和主義の爲に全世界のあらゆる政府を顛覆するも辭せざる者であると測定した。彼は又、マツコルミックに就いても同様の推定を下した。これは二ヶ月間の獄中生活を了つて出て來たばかりの、I・W・Wの首領の人で、歪ゆがんだ唇と落つきのない黒い眼を持つた、黙り込んだ若いアイルランド人である。そして碌に物も言はずにピータアを注視してゐるので、彼には何となく薄氣味悪るく思はれた。

## (十二)

訪問者は續いて來た。一人で來るのもあれば、連れ立つて來るのもあつた。男も、女も、老人も、青年も、熱狂者も、夢想家も、口を開けば何時でも火の様な熱語を



吐く煽動家も來た。ピータアはアメリカ市内の「赤」<sup>レッド</sup>の、最危険分子の全部の集りの中に身を置いてゐるのだと感づく、不安で堪らなくなつて來た。彼等は善良なる市民の畏怖する處の人々であつた。彼等は警察があらゆる種類の盜賊以上に目を付ける人物であつた。彼は今それを尤もと思つた。斯かる人々は文字通りどんな事でも爲し得るだらうと思つた。彼は落つきのない眼をその一人々々の顔に移して、此の群集の中のどの一人が爆彈を仕掛けて置いたのだらうと疑つた。そして今夜、此處でそれを自慢さうに彼に話して聞かせるのではあるまいかと、心待ちにした。

が、彼は又、一面に於てひどく不思議でならなかつた。彼等は正體の判らぬ兇徒であつた。彼等は彼を「同志」<sup>コムレイド</sup>と呼んだ。そして彼等は若いゼニが彼を面喰らしたと同じ愛情を以て彼に話しかけた。これは彼等が彼の信認を得ようとする一個の術策であらうか。又は彼等を見ず知らずの他人——而かも秘密の敵——である彼れピータア・ガツヂを、ほんとに愛したのであらうか。ピータアは彼等を欺くにひどく苦心したが、彼の苦心が馬鹿らしくなつて來た程、それほど彼等は瞞し易く思は

れて來た。彼は彼等を輕蔑した。彼は彼等の談話を聞いてゐる間に、幾度か「馬鹿な奴等だ！」と、口の中で繰返した。

ピーターは彼等の質問に答へて、幾度か詳しく彼れの入獄談を反覆した。勿論、彼は注意深く云ひ含められてゐるのだから、例の巧妙なる自白の一件だけは決して口に出さなかつた。而已ならず、彼は出来るだけ手短かに其の話を端折つた。而かも彼がどうしてアノ爆發の場所に居合はせたか、警察が彼を此の事件に結付ける爲どんなに無理な事をしたかを、秩序正しく話して聞かせた。併し辯護士のアンムリユースと、海員首領のジョン・ダーランドの、微より細に入る質問は、彼の豫期しなかつた處で、二人は彼に爲された一切の事柄と、何人によつて、どんな風に、何時、何處で、何故それが爲されたかを、根掘り葉掘り聞き質した。彼は此の兇惡な「赤」<sup>レッド</sup>の連中から取り圍まれて居ながらも、何しろ満場の人々の注意と驚嘆の中心となつてゐる事が愉快だつた。彼は舞臺に立つた役者の様な氣分になつて、ガツフェーがどんな風に彼の手を捻ぢ上げ、どんな風に石牢に閉ぢ込めたかを、身振り手眞似ま

で附け加へて、目に見る様に物語つた。彼の苦痛の記憶は今尙ほ疼痛を感ずる程に痛切であつた。で、彼の物語りには、どんな冷かな人の集りでも動かさずには置かぬだらうと思はるゝ眞實味があつた。

婦人は啜り泣き、男子は怒號した。代る／＼起つて戰慄すべき激語を放つた。彼等は口を極めて、單にアメリカ市の警察のみならず、法廷を罵り、新聞紙を罵り、教會を罵り、大學を罵り、ピータアの如き法律に柔順なる市民には尊敬すべく、神聖なるものと思はるゝ總べての文物の制度を罵つた。

ピータアの恐怖は遂に外面に現はれた。併し彼が恐怖を懷き不安を感ずるのは、彼の現在の境遇として何の不思議もない。辯護士のアンドリュースは警察側の干渉迫害を惧れて、暫く彼に身を匿す事を勧め、且つ隱家を與へようと申出でた。ピータアは恐らくグーバー辯護の最有力の證人であらうから、彼等が彼を大切に、何處までも面倒を見ようと云ふのである。が、ピータアは心の落着きを恢復して、それを謝絶した。彼は彼等と運命を共にしようと斷言した。

サデー・トッドは彼の男らしい態度に感激して、若しピータアが或る時期の間、彼等の姉妹の家に留まらうと思ふならば、彼等は喜んで彼の世話をしようと思つた。彼はその好意を受け容れた。斯うして此の集會は深夜に及んで漸く解散した。

## (十三)

アメリカ市の所謂大新聞は、警察官憲が證人を拷問に附した事件に就いて一行も費さなかつたが、同市内に發行された、週刊の社會黨新聞は、ピータアの記事と寫真とを以て其の第一頁の全部を埋めた。尙ほ其の外に、三つの勞働新聞が其の記事を載せた。グーバー辯護士後援會では、これに就いての印刷物を作つて、全國に亘つて幾千となく郵送した。その文章はクエーカーの青年ドナルド・ゴルドンの筆になつたもので、彼はその誤謬を正す爲に、校正刷りを持つて來てピータアに讀んで呉れと云つた。彼はそれを讀んで、彼がスツカリ英雄化されてゐるのにギョツとした。が、ピータアはこれ迄の經歷は少しも話さず、それを聞き知つてゐる後援會の誰かも外交的に沈黙を守つてゐるのがおかしかつた。そして又彼は、此の文章の中に



彼が貧しい労働者として現はれてゐるのを見て、巴むを得ないと云つた風で、にや／＼と笑つた。

ピータアの物語はそれからそれへと傳へられて行つた。あらゆる種類の面會者がトツド姉妹の家に訪ねて來た。そうしてピータアは、是等の訪問者の姓名、職業、彼等の過激運動に對する關係其他、出来るだけ多くの事を探り知らうとする本職に取つかゝつた。ガツフェーは發覺を恐れて、ノートを作つてはならぬ注意したが、ピータアは何も頭の中だけでは記憶しきれなかつた。で、自分の室に引込んで小さな紙片に丹念なノートを作つた。そしてそれをビク／＼もので彼の上衣の内裏に縫ひ込んだ。

併し此ノートの作成を外にしては、彼の探偵は極めて容易な仕事であつた。是等の人々は誰も彼も皆な自分等の爲になる事を語るに熱心で、時には却つてピータアをハラ／＼させる程。それ程開け放しで恐い事知らずであつた。彼等は其の思想を、常に相互の間に、又は彼に向つて、公言したばかりではない。

彼等は公開の演壇に於ても、彼等の新聞、雜誌に於ても、パンフレットや、リーフレットに於ても、公然とそれを發表しつゝあつた。ピータアは彼等の「運動」がそれほど廣がつて居り、それほど勢力を持つてゐようとは、決して思つてゐなかつた。彼の豫期した掘出し物は、一個の陰謀事件か又は一二個の爆彈であつたが、實はそれどころでなく、彼は何處まで廣がつてゐるか、廣さも、深さも判らぬ、噴火山を掘り出しつゝあつたのだ。

それは兎に角、ピータアは彼の爲し得るベストを盡した。彼はあらゆる階級に屬する四五十人の姓名住所から、職業、性行、思想、其他に亘つて詳細に知る事を得た。其の多くは社會のドン底にある男女の勞働者、猶太の裁縫師、ロシヤ人イタリヤ人の煙草職工、アメリカ生れの機械職工、印刷職工杯であつたが、その中には眞新しい大型の自動車をもつげなトッド姉妹の住宅に乗付けて、二三時間も運轉手を戸外に待たせて置く、仕立下ろしの流行服を着飾つた貴婦人達もあつた。そして其一人はピータアの金に困つてゐるのを察して、二十弗の紙幣を一枚彼の手に握ら

せて呉れた。ピータアはギョツとして、面喰ひもしたが、同時に又「運動」と云ふものは甘い商賣であるとも思つた。

斯かる間に彼はトツド姉妹と愉快に暮らす事を心がけた。姉のサデーは毎朝八時前に、彼が未だ寝てゐる中に仕事に出掛けた。が、妹のゼニーは家に残つてゐて、朝食の調理から、訪問客出迎へ其他彼の爲に主婦の役目を勤めて呉れた。彼女は不治の患者であつた。で、脊髄に或る治療法を施して貰ふ爲に、一週二回、醫者通ひをする外は、家にゐてジツトしてゐる筈であつた。が、ピータアは彼女のジツトしてゐるのを見た事はなかつた。彼女は印刷物の帶封を書くか、同志宛てた通信を書くか、それでなければ宣傳用の小冊子を賣りに出かけるか、集會に寄附金を集めに行くかして、絶へず活動してゐた。若し又、そうして働いてゐない時には、極まつて誰かと——多くはピータアと——議論を闘はして、彼女の考へる様に彼にも考へさせようと努めてゐるのであつた。

(十四)

彼女は大の非戰論者であつた。戦争は歐洲の勞働階級の蜂起によつて終熄せしめねばならぬと云ふのが、彼女の大體の考へであつて、彼女は若し此處でアメリカ市の勞働階級が一齊に起ち上つてその實例を示すならば、歐洲諸國の革命は非常な勢ひを以て促進されると考へてゐた。そして彼女は憚る處なく、その計畫を口にした。彼女は髮に赤いリボンを結び、胸に赤い徽章を附け、主義者の集會には必らず出かけて行き街上では赤表紙のパンフレットを賣つた。それで彼が、彼女に就いて知る處を運輸トラストの秘密探偵部長ガフエーに報告するのは、勿論彼の義務であつたらうが、ピータアはさすがにそれを悲み、それを恥ぢた。彼女は實に愛らしい少女であつた。彼女が若し斯うまでヒステリカルでなかつたならば、若い者は彼女と語るのを愉快に思つたに相違ない。彼は彼女のタイプライターを打つてゐるのをジツト見詰めたりした。後女が健康を恢復して普通の若い娘のする様に、モ少し顔容かほかたちに意を用ゐたならば、彼女は決して美しくない女ではなかつたのである。

併し、彼女の心は不斷に緊張し切つてゐた。そしてピータアをも同じ状態に引き



入 ようと努めた。彼女はピーターアを労働運動の戦士たらしめねば置かぬと堅く決心してゐた。そして彼女は、彼を教育しさへすれば、彼は必ずそれに成り得るものと信じてゐた。彼女は社會主義の出版物を彼に與へて、どうしてもそれを讀まねばならぬ様に仕向けた。ピーターア自身もそれに關する知識を得る事が、彼の職業の一部であると考へた。彼は「赤」<sup>レッド</sup>となつて、彼等の特殊の用語を學ばねばならなかつたのであるが、「社會主義のA・B・C」「資本とプロレタリア」其他、<sup>モ</sup>初學者の讀物と呼ぶるゝどの本を讀んで見ても、今まで曾つて聞いた事のない長い術語ばかり出て來て恐ろしく骨が折れて堪らなかつた。が、最初は社會主義者も無政府主義者も一緒にくたにしてゐた彼も、しまひには、單に社會主義者と無政府主義者との間に區別がある事ばかりでなく、「ステート・ソーシャリスト」「コムニニスト・アナキスト」「コムニニスト・サンデカリスト」「サンデカリスト・アナキスト」「ソーシャリスト・サンデカリスト」「レフオーミスト・ソーシャリスト」「ギルド・ソーシャリスト」などの間にも、それ／＼區別がある事を學び知つた。單稅論者、自由主義者、進歩主義者

などが、言ふ迄もなく別のものである事を知つた。是等のあらゆる主義者などと會つて、其の説を聞くと、彼等は銘々に特異の點を述べ立て、それがほんとうの眞理であると主張した。ピータアは何處まで行つても盡きない彼等の分派の爲に、極度に惱まされて、ガツフェー等のように、彼等を總括して一口に「赤<sup>レッド</sup>」と呼ぶ事の如何に簡單明瞭であるかを思つた。

彼女は何處にも出掛けずに終日ピータアと一緒に語り會ふ事もあつた。彼は彼女を深く知るに従つて、彼女が愈々美しく見へて來た。彼女は亦た彼が技巧を弄するに従つて、愈々彼を好む様になつた。ピータアは如何にも同情心に富んでゐるやうに、急に熱心な主義者になつた様に見せかけた。彼はゼニの見るやうに、あらゆる物事を見た。彼は彼女の語る戦慄すべき物語りに戦慄した。彼はアメリカ市の勞働階級の中に革命を起して、歐洲戦争を終熄せしめようとする彼女を、進んで援くる意氣込を示した。彼は又、彼自身の身の上話を語つて、其のむごたらしき生涯、窮乏と屈從の二十年に對する彼女の同情を喚び起した。彼女はそれを聞いて泣いた

彼は堪らなくそれが嬉しかった。

(十五)

ピータアは一週間後に、ガツフェー配下の一人と密會する手筈になつてゐた。そこで彼は、家の中に閉ぢ籠つてゐる倦怠に堪へられぬといふ事、少し外に出て新鮮な空氣を呼吸せねばならぬといふ事を、娘達に話した。

サデーの陰氣な顔から血の氣が一時に消へ失せた。

「ガツチさん、迂濶な事をなすつてはイケません！。あなたは此家に見張りが付いてゐるのを御存知ないですか。彼等はあなた一人で屋外に出るのを附け狙つてゐます。そして捕つたが最期、あなたの生命は無くなるのですよ。」

「私はそんなに重要な人物ぢやありません。」

ピータアはサデーの危懼をてんで受けなかつた。彼女は言葉を盡して、彼がグーバー事件の重要人物である事を主張した。彼は少々うるさくもあつたが、自分がそんなに重く見られてゐるのが嬉しくもあつた。彼女の舌端には愈々熱が加はつて

彼女の聲には愈々力が籠つて來た。

「オ、あなたは未だ御自分がグーバー辯護の證人として、どんなに重要であるかを御存知ないのですが、此の事件は全世界の幾百萬の人々の運命に關する重大事件ですよ。ガッチさん、此の事件は労働者と資本家との力較べの試験ですよ。彼等は勝手に労働階級の首領を殺すことを許さるゝのですか。イ、エ、決してそんな事はありません。私達は此處に一大運動のある事を、彼等に示さねばなりません。労働者の全世界的覺醒が此處にあり、賃銀奴隸の解放を目的とする鬭争が此處にある事を彼等に示さねばなりません！」

ピーターはこれ以上を聞くに堪へなかつた。彼は突然彼女の雄辯を遮つて云つた。「そうです、そうです。私は新鮮な空気を吸はずに、肺病になつて死ねばとて、此際、一步も外に踏み出さぬのが私の義務です。」

彼の顔色は恰も犠牲者を以て自から任ずるものゝ如くであつた。二人の姉妹は感激して彼を打守つた。そして安心の吐息をつきながした。



が、ピーターは固より出掛けるのを断念した譯ではない。何とか妙案はないものかと考へた末、少々金の貸しになつてゐる男があつて、その男に是非一度逢はねばならぬ。で、夜になつてから、誰にも見付からぬ様に裏口かちコツソリ出掛ける、そして人ごみの處や、明るい大通りは決して通らぬと云ふ事にして、とう／＼サデーを納得させた。

ピーターは其の晩、あたりの暗くなるのを待つて、裏の垣根を乗り越へ、隣の養鶏場の庭をソツと通り抜けて、表通りへ出た。彼は可なり長い時間、群集の間を彼方にくゞり、此方に抜け愈々彼の後をつけてゐる者のない事を確かめた上で、密會所へと急いだ。それはアメリカン・ハウスと云ふ、餘り世間に名の聞へてゐないホテルであつた。彼は豫ねて言ひ聞かされてゐた通りに、誰とも口をさかずに、直ぐに、エレベーターで四階に上つて、四百二十七號室の扉ドテを三度軽く叩いた。扉は内から開いた、彼はすべり込む様に内に入つて、其處で鼠の様な顔をしてゐるゼリー・マクギヴネーに會つた。

マクギヴネーは「何を掴んで来た？」と聞いた。ピーターは大急ぎで上衣の縫目をほどいて、例のノートを取出した。マクギヴネーはジロリと一目それを見たばかりで斯う云つた。

「オイ、戯談ぢやない、こんなものが何になるんだ？」

彼は甚だしく不機嫌であつた。ピーターもムツとした。

「だつて、これが皆な赤レッドですぜ！」

「それは俺も知つてる。だが、それが何になるんだ。俺達は如何な晩でも彼奴等の會合の席上で、滔々と辯じ立てゝるのを聞く事が出来るし、又、彼奴等のいろんな團體の名簿も疾づくに手に入れてゐる。だが、それが今度のグーバー事件に何の役に立つんだ？」

「ですが、彼奴等は此の事件でもつて盛んに煽動をしています。彼奴等は私の事を大袈裟に書き立てた物を印刷してゐます。」

「さうだ、それも俺達は知つてる。お前は立派な地獄物語を奴等に聞かせて、大受

けなんだから、さぞ得意だらう。だが、それが俺達に何の役に立つんだ。」

ピータアはうろたへて叫んだ。

「ぢや、何を知りたいと云ふんです？」

「俺達は奴等の秘密の計畫を知りたいんだ。俺達は奴等が此方の證人を法廷で窮地に陥れようとして、どんな事をしてゐるかを知りたいんだ。俺達は先づ第一に、誰が俺達を賣りつゝあるか、誰が監獄内のスパイであるか知らねばならぬのだ。お前はそれに就いて何か見當がついてるのか。」

「イ、イ、エ、誰もそんな事はチツとも話しません。」

「こりや驚いた。お前はそんな事を奴等がアケスケに喋べると思つてるのか。」

マクギヅネーは今一度ピータアのノートを引くり返へして見て、忌々しさうに床の上に投げ棄てた。彼は更らにピータアに向つて、いろ／＼な質問を連發した。ピータアの狼狽は絶望に變じた。彼はマクギヅネーの知らんと欲する一事にも探知し得なかつたのであつた。彼の「嗅ぎ出し」の一週間は全然空費されたのであつた！。

探偵の言葉は暴くなつた。

「お前の馬鹿は判つてゐるが、それでも俺達はお前に出来得る限りの事をさせねばならぬだから、今俺達の云ふ事をシツカリと頭の中に詰め込んで置いて、唯だそれだけを一直線に探つて呉れ。俺達は是等の「赤」<sup>レッド</sup>がどんな人間であつて、どんな事を云つてゐるかはチャンと知つてる。だが、それだけぢや奴等を監獄に打ち込む事は出来ぬ。だから、俺達がお前に探つて貰はねばならぬのは、第一には奴等が使つてゐる密偵の名前だ。それから、次には此の事件に對する奴等の方の證人が誰であつて奴等が法廷でどんな事を申立てようとしてゐるかと言ふ事なんだ。いゝか、判つたか。」

「だつて、そんな事がどうすりや私に探り出せます！」

ピータアは聊か捨鉢の氣味で斯う叫んだ。

「そりや自分の智慧を働かせるのよ。だが、折角だから今迄の骨折賃を一つやらう。それは先づ女を引つ懸けるんだね。」



「女を？」

ピーターは驚異の眼を見開いた。

「そうだ、それが一番確かな方法で、俺達の何時でも使ふ手なんだ。人間にはガツア  
エーさんのよく云ふ言葉で、第一が酒に酔つた場合か、第二は戀に落ちた場合——」  
マクギヅネーは態と言葉を切つた。ピーターはその思はせ振りがもどかしかつた。  
「で、其の第三は？」

と尋ねた。其の答は斯うであつた。

「第三は酔拂つた上に戀に落ちたる場合！」

ピーターはスツカリ感心してしまつて黙り込んだ。

「何にかい、アノ仲間に物になりさうな娘はゐないのかい。」

「エ、あるにはありさうですが——」

ピーターは如何にも極り悪るさうに答へた。

「ウム、おや打突つて見るんだな。赤は皆な自由戀愛なんだから譯はないよ。」  
レッド  
フリー、ラヴ

「自由戀愛！ そりやどう云ふ事なんです？ ロハで色が出来るんですか？」

ピータアの聞き方が餘りおかしいので相手は、

「お前はまだそれを知らんのか。」

と云つて、ハツハと笑つた。ピータアはその顔をジツトと見詰めてゐた。彼の知る限りの女は、皆な彼等の戀愛の代價として金を受取るものであつた。或者は直接にそれを受取り、他の者は自働車の遠乗、花束、菓子、活動寫眞の入場券などの形式でそれを受取つた。それに自由戀愛とは何事であらう、いづれの形式に於ても戀愛に對して金錢を要求せぬ婦人があり得るだらうかと彼は怪しんだ。探偵はそれが事實である事を確言した。彼等はそれを誇とし、それを正當と考へてゐると云つて聞かせた。ピータアが、今迄に赤レットに就いて聞かされた事の中で、最も衝動的のものであつた。

ピータアは生れて始めての新しい考へに、胸をドキつかせながら、マクギヴネーとの密會所を立去つた。彼は誰が何と云つても此の新しい仕事を斷念するものでは

ない。彼に取つて是以上の仕事はなかつた。

ピーターが家に歸り着いたのは、餘ほど遅くなつてからであつたが、二人の娘は寢床にも入らずに彼を待つてゐた。そして二人ともヤット安心したと云ふ様子を明かに示したが、殊にゼニーが姉のサデーよりも尙一層心配してゐた事が、その顔色に見えてゐた。彼女の呼吸は彼が其の室にはいつた爲に急はしくなつた。彼は心から嬉しくて彼女に引付けられる様に思つたが、態とサデーに向つて、誰にも後を跟けられなかつた事を話して先づ安心を與へ、其の後で途々考へて來た通りに、次の様な空事を話した。彼は或る男に雇はれて本挽の手間取りに行つた。そして十日間ほど非常な苦しみで仕事をしたのだが、その男は何の彼のと云つて賃銀を拂つて呉れない。そして自分を見ると逃げる様にしてゐた。所が今夜は折よ、自宅にゐる處を捉まへて、嚴重に談判した末、ヤット五弗だけ受取つて來た。そして跡の處は少しづつ濟し崩しと云ふ事にして來たと云ふのであつた。彼は斯うして巧みに今後マクギヴネーと密會する爲の伏線を張つたのであつた。

ピーターは其の夜、殆んど眠らずに新らしい仕事について、即ち女を手に入れる事に就いて考へ通した。彼は勿論、若きゼニーと戀に陥ちつゝある事を自覺してゐたが、彼の第一に求むるものは秘密の消息であつた。誰が最も多くそれに通じてゐだらう？。辯護士アンドリュースの秘書ネビンス嬢は、疑ひもなく他の何人よりも多くの秘密を興かり知つてゐるのだが、これは餘りに老嬢で眼鏡を掛け、而かも男のような靴を穿いてゐるのだから、逆も問題にならない。スタンデイシュ嬢ならば美人で、派手者で、マクギヴネー等にアツと云はせてやるのだが、如何に自惚れて見ても、これは對手が問題にして呉れさうもない。ヤシコキツチ嬢はI・W・Wに屬するほんとの赤レッドの一人ではあるが、鋭どい黒い眼を持つた、如何にもさかぬ氣らしい猶太人で、薄氣味が悪るくもあり、マクコルミックと關係がありさうにも思はれた。斯う考へて見ると、確かにものになりさうなのは矢張りゼニー一人だけであつた。彼は固より若いゼニーが多くの秘密を知つてゐやうとは思はなかつたが、彼女は確かに彼の爲に或る秘密を聞き出して呉れるものと信じた。



ピーターは直ちに新しい仕事に取りかゝつた。翌朝の新聞は例によつて、フランスから來た、血の河と屍の山の戦争記事を以て満たされてゐた。センチメンタルなゼニーは、ピーターの朝飯の給仕をしながら、眼に涙を一杯堪へて、それについて語つた。ピーターも相槌を打つて、それが人道上許すべからざる罪惡である事即時に絶滅されねばならぬ事を語つた。彼と彼女とは今や全然一致した。彼は社會主義者であつた。彼は彼女を「コムレード」と呼んだ。彼は彼女によつて主義者に化せられたと告白した。彼女の眼は歡喜を以てかゞやいた。

彼等は長椅子に並んで腰かけて新聞を見てゐた。家内には外に誰もゐなかつた。ピーターは突然顔を上げて、ひどく切り出し悪くさうに云つた。

「それはさうと、ゼニーさん——。」

彼女は只「ハイ」と答へて、その涼しい眼で何氣なく彼を見上げた。

「ゼニーさん、私は——私は——何と云つたら好いか判らないが、私はどうしても戀に陥ちさうでならないのです。」

ゼニーは急に両手を引込ませた。ピータアの耳には彼女の呼吸の急はしくなつたのが聞へた。彼女は叫んだ。

「アラ、ガツヂさん！」

ピータアはどきまぎして、「私は——私は——」と吃つた。そして、

「だが、あなたはどうか氣にかけずにゐて下さいね。」

と云つた。彼女は更に叫ぶように云つて。

「私達はソツナ事をしてはなりません！」

「何故です、それは？ エ、ゼニーさん。」ピータアはそう云つて置いて、更らに

「私には迎もそれを抑へる事が出来ません！」

と附加へた。

「ガツヂさん、私達は斯うして幸福な時を持つてゐました！。そして私は只、あなたと二人、主義の爲に一緒に働いてゐるものと考へてゐました！」

「それはそうですが、これが何も妨げになると云ふ譯ではなし——」

「イ、エ、いけません、いけません。それは不幸の基です!」

「では——。」ピータアの聲は震へて來た。

「では、あなたは私の事は何んとも思つて下さるのですか。エ、ゼニールさん!」  
彼女は躊躇した。そして、

「知りませんよ、私はそんな事を——。」

ピータアの心は躍つた。彼は衝動を感じた。彼は身をすり寄せてソツと彼女の手を握つた。そして、

「あなたも少しは私の事を思つて下さるのですか。」

と、耳元で囁いた。彼女は只、

「ガツチさん!」

と答へた。ピータアは、

「ピータールと呼んで下さい。ね、好いでせう。」

と云つた。彼女は

「ピーター！」

と呼んだ。が、其の聲はチヨツと咽喉に引かゝつた様で、其の眼は下を向いてゐた。ピーターは嘆願する様に、

「私が愛するに足らぬ者である事は自分でも知つてゐます。私は貧乏で、無名で、顔もコンナにまづいし——。」

彼女は叫んだ。

「そうぢやありません！。違ひます、違ひます！。私は何んでそんな事を考へるものですか。あなたは同志コムレイドですもの。」

彼は勿論、彼女が斯う云ふ事を知つてゐた。彼は愈々愁然として云つた。

「私を愛して呉れる者は一人も無い。貧乏で、何物をも興へる事の出来ない男は、誰からも何とも思つて貰へない——。」

「ぢや、私は云ひますが、私の思つてゐるのは、そんな事ぢやないのです！。どうかそんな風に考へないで下さい！、あなたはヒーローです。あなたは此の運動の犠牲



者です。あなたは將來この運動の指導者の一人となる方です。」

「私もそうなりたいと望んでゐます。だが、それがどうしたと云ふのです？。ゼニ  
Iさん。あなたはなぜ何故私を思つて呉れないんです？。」

彼女は彼を見上げた。二人の眼はハタと會つた。彼女はあろ／＼聲で答へた。

「私は病氣なのですよ、ピーターさん。私は何の役にも立ちません。私の結婚は罪  
悪です。」

ピーターは結婚の一語にギョツとして、冷水を頭から浴びせられた様にハツと我  
に歸つた。が、心中の狼狽を外部に現はすには、彼は餘りに伶俐であつた。

「私達は今直ぐに結婚しなくても善いのです。あなたが私を思つてゐてさへ下され  
ば、私は何時迄でも待ちます。そしてあなたの良くなつた時に——。」

彼女は傷ましげに頭を振つて、

「何時になつても私のほんとはよくなる時はありますまい。それに私達にはお金も  
ありませんし。」

噫、金！ 金！。何處でも金だ！。一個の夢想に外ならなかつた。彼は女を口説く男の極まり文句通りに、自分には職業を得る事が出来ると云つたが、彼女は、

「でも、私達二人で生活するだけのお金は獲られません。」

と云つて、突然立ち上つた。

「ピータアさん、私達二人はお互に戀に落ちない様にしませう。私達はお互に不幸な身の上にならずに、一緒に主義の爲に働きませうね。どうぞ私にそうすると約束して下さい！。御願ひですから。」

ピータアはその通りに約束したが、無論それを守る考へはなかつた。

彼は探偵である上に男でもあつた。彼はどちらから云つても、ゼニを手に入れずには置かれなかつた。彼はあらゆる機會にあらゆるタクチックと技巧とを弄した。彼は彼の愛が未來永劫變りのない事を誓つた。彼は職業を得て彼女を養ふ事を誓つた。彼は又、時には懊惱苦悶、全く沈み切つて、彼女なくしては逆も活きて行かないと云ふ風をも装ふた。彼は彼女の同情心に訴へた。彼女の無邪氣なるに乗じた。

彼女の涙脆く感傷的なるに付け入つた。そして二週間の後に、とう／＼彼女を手に入れて了つた。

ゼニーは戀に落ちた上に、戀に酔はされた。彼女はガツフエーの定めた二つの條件を充たした。そして彼女は眞實を語つた！。

ゼニーはピータアの膝に抱かれて、彼女の父母がまだ死なずに工場で働いてゐた頃の、幸福だつた子供時代の事を話してゐる間に、我れ知らずイベツツと云ふ若い男の名を口に出した。ピータアは、

「イベツツ！」

と繰返して見たが、それは餘り類の無い名で、而かも何だか聞いた事のある名のように思はれた。ゼニーは、

「私達の從兄いとこなのです。」

と云つた。ピータアは頭腦の中で盲さがしに索しながら、

「私は其人に會つた事があるだらうか？」

と聞いた。

「イ、エ、此の家に來た事はありません。」

ピータアは尙ほ心中の模索を續けつゝ、今一度、

「イベツツ？」

と繰返して見た。そして突然、彼は思ひ出した。

「さうだ、ジャツク・イベツツと云ふんでせう？」

ゼニ―は答へなかつた。彼は彼女を見た。二人の眼と眼は會つた。彼女の顔色は變つてゐた。彼女はやつと。

「ピータア！、私は此の事を話さない筈でした！。誰にも云はない筈でした！。」

と囁いた。ピータアは心中に「占めたツ」と叫んだ。然し彼は其の感激を隠くす爲に、彼女の柔かな　白い咽喉に顔を埋めて「愛スケート人！ハート」と囁いだ。

「ピータア！、あなたは知つて？——知らなくて？」

「無論さ！」とピータアはニッコリして「だが、私は決して誰にも云やしないから



心配するには及びません。」

彼は斯うして遂にグーバー事件の第一の神秘を解き得た。ガツフェー等が手古摺り切つてゐた監獄内の密偵は、トッド姉妹の従兄の看守に化けてゐる、ジャツク・イベツツであつた！。

(十七)

ピータアは一刻もジツとしてゐられない程に喜んだ。幸ひに其日はマクギヴネーと密會する當日であつた。彼は姉妹の前をうまく云ひ拵へて、前の晩の様に裏からコツツリと抜け出した。彼の心は其の途中で忙がしく働いた。彼は今こそ幸運の梯子にほんとは手が届いた、どんな事をしても取外づさぬ様にせねばならぬと思つた。マクギヴネーはピータアの顔色で直ぐに、何かあつたなと見て取つた。

「どうした？」と彼は聞いた。

「とう／＼聞き出して來ました！」ピータアは得意さうに答へた。

「何を？」

「監獄内の密偵の名前を！」

「オイ、ほんとにか。」

「嘘は云ひません！」

「ぢや、誰だい？ 何と云ふんだら。」

ピータアは双拳を堅く握り締めた、此處ぞとばかり豫ねての決心を呼び起した。  
「それよりも先きに此處で伺つて置かねばならぬ事があります。それはガツフェーさんは私に報酬を下さると仰しやつた。併し何時下さるとも、幾許下さるとも仰しやらなかつた。」

「チエツ、馬鹿だなア。お前がその密偵の名前を握つて來た以上、お前は報酬の事なんかチツとも心配するには及ばないんだよ。」

「それはそうでせう。ですけれども、私は幾許貰へるか、いつ何處でどうして貰へるかを知つて置きたいのです。」

「幾許欲しいのだ？」

鼠のような顔をした男は斯う尋ねて、ジーツと鋭い黒い眼でその敵手を注視しながら、「幾許だ？」と繰り返へした。

ピータアは最上の高値で賣り付けようと思つたが、何分にも幾許と云ふ見當が付かない。けれども、兎に角、彼等が大なる資力を有する事は判つてゐたので、

「二百弗の値打は充分にあると思ひます。」

と切り出して見た。處がマクギヅネーは、

「そうだ、それ位の値打はある。俺がち前に拂つてやる事にしよう。」

と案外平氣であつた。ピータアはそれで一度にがっかりした。彼は何と云ふ馬鹿だらう、何故モツと勇氣を出して五百弗と切り出さなかつたのだらう？ 或は千弗を要求しても聽かれたかも知れない。そして彼は生涯獨立の生活を爲し得たであらうに！。

「シテ、その密偵と云ふのは誰だ？」

彼はモ一度苦しい努力をして勇氣を恢復し、

「で、其の金は何時貰へるのですか。」

「何だつてソナに危険けんのおんがるんだ。お前が其の秘密を俺達に教へてくれば、お前の金は自然にお前の手にはいるのだよ。」

「それはそれでせうけれども、ガツフェーさんが私に好意を少しでも持つてるとはどうしても思はれません。現に此の腕は未だ元通りにはなりませんよ。」

「そりやお前から手がかりを得ようとした爲で、あの人はお前を爆弾犯人の一人と思つてゐただからさ。今更そんな事を云つてないで、早く其の密偵の名を云つたらどうだそうすりや俺が其の金を拂ふよ。」

それでもピータアは未だ讓歩しなかつた。彼は内心マクギヴネーを恐れてゐた。そして彼の心臓の鼓動は高まつてゐたが、彼は尙ほ其の壘を下らなかつた。

「ぢや、其の金を此處に出して下さい。」

ピータアの餘り執拗なのにマクギヴネーも怒つた。従つてピータアも怒つた。二人はブルドッグが咬み合ふ様に押問答をしたが、マクギヴネーの方がとうとう根負



けして、一話りの紙幣をポケットから掴み出した。それは二十弗の紙幣であつた。彼はそれを拾枚だけ數へて引抜いたが、残りはまだ澤山あつた。それを見たと、ピータアは、彼がマクギヴネーの準備した丈けの金額を要求しなかつた事を知つて、詰らぬ事をしたものだと思つたが、後悔したが、人間の心は妙なもので、二百弗の紙幣には矢張り心が躍るのであつた。

マクギヴネーは其の紙幣をピータアの目の前に置いて、

「サア、金は此處にある。お前が密偵の名をおれに教へたら、直ぐに此の金は取つてもよい。だが、俺は呉々も忠告するが、決して其の金を無茶に費うなよ。それから、萬一お前の云ふ密偵が間違ひだつたとすると、ガツフェーさんは今度こそほんとお前の兩腕を振ぢ折つてしまふぞ！」

ピータアはそんな脅喝には平氣であつた。

「私は其の男が確かに密偵に相違ない事を知つてます。」

「では誰だ？　それは。」

「ジャツク・イベツツ。」

「何にツ！」

「夜勤看守のジャツク・イベツツです！」。

「どうしてそれが判つた？」。

「トツド姉妹の従弟ですもの。」

「トツド姉妹とは何んだ？」

「ゼニ・トツドは私が手に入れた娘です！」。

ピータアはそれから、ゼニをとら／＼自分の物とした次第から、彼女の口からイベツツの名を知らした事、辯護士のアンドリュースが彼等姉妹に決して他言せぬと云ふ誓をさせた事まで話して、彼等が彼を密偵として使用しつゝある事に、疑ひを挟むの餘地がないと斷言した。

最初はアノ謹直な男がと容易に信じなかつたマクギヴネーも、遂に不承無承にそれを承認するの外はなかつた。

グーバー事件の火の手は次第に廣がつた。絶えず新らしい人物がその渦中に捲き込まれ、後から後からと新しい問題が発生した。敵も味方も必死となつて勝敗を争つた。ピータアと鼠のような顔をした男とは、絶えず密會してこの事件のあらゆる方面に涉つて語り合つた。

アメリカ市の大資本家連は、グーバー一派を亡ぼし盡す爲に百萬弗の資金を醸出してゐると、マクギヴネーがピータアに語つたのは、誇張の言ではなかつた。彼等は此の事件が発生すると、即時に十七萬弗の賞金を犯人の告發に懸けたのであるから、告發者が續々と現はれて來たのは云ふ迄もない。一體、此種の懸賞金を目掛けて來る者は、どれもこれも無頼漢、前科者、淫賣婦の類で、陪審官の前に適法に證言の出来る者は一人もないのが通例である。そこで彼等の素性は隱蔽せられ、時としては裁判記録の改竄も行はれるのであるが。グーバー事件にも此種の證人が十二名も現はれて來た。彼等はそれ／＼大陪審官の喚問を受けたが、段々問ひ詰められ



ると、其等の陳述はしどろもどろで、無数の缺陷と、矛盾撞着が暴露された。そしてガッツフェーと其手先きとは、いよ／＼多忙となり、いよ／＼苦心を重ねる事となつた。

不幸にして、グーバー夫妻は、彼等の陰謀として告發せられた爆發の起つた其の時間に、數マイルを隔てた或る建物の屋上から其日の行列を見物してゐた。或る人は其の屋上から此の行列を寫眞に撮つた。其の寫眞にはジツと彼方を見詰めてゐるグーバー夫妻がハッキリと出て居り、尙ほそれには前方にある寶石商店の大時計の針が丁度其爆發の瞬間を指してゐた。最初に此の寫眞を手に入れた原告側では、それを有力な證據物件の一と信じてゐたが、其の寫眞は被告側で幾度か復寫を重ねて見ると、時計の表面は段々ボンヤリして來て、終に時間は全く判らない様になつてしまつた。で、今や被告側では此の奸策の實證を擧げるに熱中してゐるのであつた。

此外に、被告側に有利なる幾多の證據が段々に現はれて來た。第一には、爆裂彈がガッツゲンハイム・デバートメント・ストアの屋上から投下されたのを見てゐたと云



ふ十數名の人々が現はれて來た。これは衣類箱スイト・ケグの假説に全然相反するもので、其儘にして置けば公訴事實は根底から覆へされてしまふ。そこでどうしても其の證人等に手を着けねばならぬのだが、其の證人等は恐らく警察側の利用し得る何等かの弱點を持つてゐたに相違ない。

次に又、爆發の直ぐ其後で、ガツフェートの手の者共が大鐵槌を揮つて、歩道を打碎き、建物の壁を破壊した事もバレて來た。これは云ふ迄もなく、衣類箱スイト・ケグ説に合致させる爲で、彼等はその破壊の現状を幾枚かの寫眞に撮つたが、惡るい事は出來ないもので、此の附加への破壊が行はれる以前に、或者が早く既に其の場所を寫眞に撮つてゐて、その寫眞は今、被告側の手に入つて居た。そこで、此の寫眞を撮つた者が何處の誰であるか、又は如何にすれば其人を死地に陥いれ得るか、問題で、ピータアが斯かる問題の解決に役立つたならば、彼は無論グーバト事件の成金になり得るのであつた。

ピータアとゼニート、サデトとは、絶えず此の事件に就いて語り合つた。そして

ゼニとサデーとは、餘所で聞き込んだ事を残らずピータアに話した。又他の者——例へば若きマクコミック、ミリアム・ヤンコウイツチ、ミス・ネビンス（アンドリユースの秘書）なども訪ねて来て、銘々の聞き出した事、怪しいと睨んだ事、被告側で現在最も苦心してゐる事柄などを語り合つた。彼等は現に屋上の撮影者の従兄弟の一人を手に入れて、其人を通じて撮影者に眞實を語らせようと説得に努めてゐる事も話した。其の翌日には又、ドナルド・ゴルドンが、失望で打ちのめされた様になつてはいつて来て、被告側の最も重要な證人の一人であつた食料品屋が、腐つたチーズを賣つた廉で告發された話をした。斯かる次第で、ピータアは每晚眠る前に定まつてノートを書き付けて、上衣の内裏に縫ひ込んだ。そして一週一回マクギヴネーと密會しては、その都度、彼のニュース（報告種）ほうこくたねの價格を論じ合つて、取引をしたのであつた。

## (十九)

グーバー事件の攻防戦がいよいよ狂熱的となり、互に智術の限りを盡して、一進

一選攻め戦ふに及んで、ピータアの興味はいやが上に唆そられたが、若きゼニールと終日一家内に閉ぢ籠められてゐる事には次第に倦怠を感じて來た。密月ホネームーンは數週間で充分で、如何なる男子も永久にそれに堪へ得るものではない。ピータアの忍耐の限度は終に到達した。彼はゼニールを可哀相だと思はぬではなかつたが、彼にはどうする事も出来なかつた。終日家内に閉ぢ籠つてゐる彼は、鎖に繋がれた犬の様に、イライラとして怒りぼくなつた。若し彼が再び世間に出て行く事が出来なかつたならば恐らくヤケになつて自殺したかも知れない。併し彼は、彼の健康は籠居の生活に堪へぬと醫者が警告したと云ふ口實で、終にトツド姉妹の家から脱出することが出來た。そして彼は急に解放された氣分に浸ひたる事が出來た。彼は金も少しは費へるようになった。料理屋レストランの一隅に陣取つて、久し振りにピフテキだの、其他いろ／＼の食ひたいものを喰ふ事が出來た。ピータアは孤兒院で育つて、監獄の飯も食ひ靴屋のスマサースの家庭にも寄食したが、何處でもトツド姉妹の家庭ほどの粗食をした事はなかつた。此姉妹は缺乏を耐へ忍んで、彼等の有するあらゆる物をグーパー辯護

費と社會黨の機關紙「クラリオン」の維持費とに寄附してゐたのであつた。

ピータアはアンドリュースの辯護士事務所を訪ねて仕事を求めた。そして彼は、此事件の爲に何等かの活動をさせて貰へれば誠に仕合せであると云つた。其の結果彼はグーバー擁護委員の事務所に通く事となつてた。其處では毎日人々が事件に就いて語り合つてゐるので、彼は貴重なる秘密の消息を無限に拾ひ上ぐる事が出来た。彼は努めて何人とも調子を合せて、幾人かの友人を作つた。彼は僅かの間にグーバー辯護の主要な證人の一人と親しい間柄となつて、其男は曾つて離婚裁判に姦夫として指名された者である事を發見した。そしてピータアは其の當時の相手の女の名前までも探り出した。其處で、ガッフエーは直ぐに其女をアメリカ市に連れて來る筋書を書いたのだが、それが又、極めて巧妙に仕組まれてあつたので、誘ひ出された女は自分が利用せられるのだとは全く知らなかつた。焼木杭ヤクボウのたとへの通り、斯うして一度消えた戀は此の二人の間に再び急に燃え上がった。ガッフエーは時機を見計つて、其の陥穴おとしあなを落す手配りをするにに抜目はなかつた。斯うしてグーバー側



の最も有力の證人は物の見事に葬り去られた！。マクギヅネーはピータアの齎らした此の情報に對して、非常に喜んで五千弗の金を支拂つた。

ピータアは恐らく歡喜の絶頂にあつたであらう。が、恐るべき不幸は此の瞬間彼の頭上に落ちて來た。ゼニーはこれまで屢々正式の結婚を彼に迫つてゐたが、彼女は終に結婚のノツピキならぬ事情を彼に打明けて早急の實行を迫つた。ピータアは愕然として度を失つた。何時もの様に彼女を抱擁して慰撫するでもなく、たゞぼんやりとしてゐる間に、彼女は早くも彼の眞情を看取つた。ゼニーは突然激しい發作を起した。ヒステリーの症狀に全く無智識であつたピータアは、いよ／＼思慮を失つて、慌てゝ起ち上ると其まゝ手荒く入口の扉をうしろに閉め付けて、一散に戸外に逃げ出してしまつた。

ピータアは一時遁れに逃げ出しては見たものの、歩きながら考へれば考へるほど非常の窮地に陥つてゐる事がいよ／＼明白で、不安で不安で堪らない。とう／＼ガツフェーの事務所に電話をかけて、マイギヅネーに継り付かすにはゐられなくなつ

た。が、其處に電話をかけると云ふ事は極めて危険な仕事であつた。何故かと云ふに、告發者側では電流の一部を誘導して電話の盗み聞きをしてゐたから、彼等は被告側でもそれと同様の事をしてゐるものと恐れてゐたのであつた。併しピータアは其の危険を冒して、マクギヴネーを例の密會所に呼び出した。其處で二人で問題を談じ合つて見たが、マクギヴネーの意見では、ピータアは決してゼニーと結婚してはならなかつた。若し佯つて結婚するならば、面倒は後から〜と續いて起つて來る。そして結局密偵として破滅に終らねばならぬ。其處で、此の際、彼の取るべき處置は、彼がいくらかの金を其の娘にやつて、何處かで人知れず始末させる外はないと云ふのであつた。そして、マクギヴネーは場合によつては、さう云ふ事を職業としてゐる醫者を探し出してやらうとも云つた。

次に、如何なる口實によつて結婚を拒むかと云ふ相談に移つた。マクギヴネーは「何とか旨く拵へるのだね」と云つて、チヨツと考へて、

「さうだ、前から妻君があつた事にすればいいぢやないか。」

と云つて、ピータアの非常にうろたへた顔を見ながら、

「何も驚く事はない。確かにそう云ふ事にすればいい。若し本當に其の相手の女が必要であるなら、俺がチャンと拵へてやる。併し話の様子ぢやそれだけの手数をかけるにも及ぶまい。君は唯だ、不幸な成行きを其の娘に話して聞かせれば宜いよ。實は私には妻があつて、私は其の女から別れられると思つてゐたが、實際はどうしてもそう行かなかつた。其の女は私に他の女の出來た事を傳へ聞いて、眞赤になつて怖りだして、裁判沙汰にすると騒ぎ立てゝゐると、斯う云ふのだ。そうして最も肝要な事は、其の娘がグロバ事件への差し障りを恐れて、どうする事も出來ない様に旨く話を持ちかけて行くんだ。すれば、其娘がほんとに此事件に忠實であるなら、君の立場の無くなる様な事は決してしない。又姉に打明ける事もあるまい。」

ピータアはそんな事をしたくなかつた。彼の眼はヒステリーの發作を起して長椅子の上に打倒れてゐる若きゼニーをまぎ／＼と見た。彼はそんな事を云ひ出すのが畏ろしかつたが、どう考へてもそうせねばならぬ様に思はれた。外にチツとでも善

い方法は考へ出されなかつたのみならず、二時間以内には姉のサデーが歸つて來るそれと同時に萬事休するのだから、此うえ考へてゐる餘裕もなかつた。

## (二十)

ピータアは大急ぎでトッドの家にとつて返した。蒼白な顔をしたゼニは寢床に横たはつて、まだ泣き續けてゐた。ピータアがおづ／＼と、其の屈辱的な自白を始めるると、ゼニは氣味の悪い叫び聲をあげて、寢床から跳ね起きた。そして癡狂院から脱け出して來た幽霊の様な顔をして、ジツと彼を見据えた。ピータアは、それが決して彼の過失でなかつた事、彼は眞に自由の身となり得るものと信じて居た事を説明しようとしたが、ゼニはそれを耳にも入れずに、兩手で頭を抱へて「私は欺だまされた！ 欺だまされた！」と身を震はして泣き叫んだ。

彼はゼニの手を取つて、彼女を説得しようとしたが、彼女は其の手を拂ひ退けて反對の壁側に跳び退き、其處に突立て、恐ろしいものゝ様に彼を見詰めた。彼女は近所の人が出て來はせぬかと、彼をハラ／＼させた程、罵り狂つた。彼は堪ら



なくなつて、若し此の事件が世間に知れば、自分は證人として永久に破滅せねばならぬ。彼女は又、間接にジム・グーバーを絞首臺に送つた事になるかも知れぬと説き聞かした。すると、ゼニは急に沈黙した。それを機會に、彼は彼に對する告發人側の惡辣なる陰謀を彼女に語つた。告發人側は或る人を通じて、彼が若しグーバー擁護會から身を退くならば一萬圓やらうと申込んで來た。彼は勿論それを拒絶した。處が、今度は彼の妻を煽動して彼を脅喝にかゝつて來た。彼等は彼の戀愛關係を感じて、それを種に彼の一身を破滅させようしとしてると云ふのであつた。

ゼニはピータアに手も觸れさせなかつたが、椅子に腰かけて反對派の詭計に對應する手段を考へて見る事には同意した。そして彼女は云つた。如何なる事が起つても、グーバー事件に損害を與へてはならぬ。ピータアは事實を隱蔽して彼女を重大なる過誤に陥らしめたが、其の責罰は——假令どんな責罰であらうとも——彼女一身に引受けよう。決して彼に迷惑はかけない。

ピータアは彼の考へを話した。そしてそれは彼女の恐れる様に、そう突き詰めた

問題ではないと云つた。彼は舊主人のペリクリウス・ブリアムの住所を知つてゐる。ペリクリウスは今は可なりの金持であるから、二百弗くらゐならキット貸して呉れる。それでゼニは暫らく田舎に身を隠くして、もと／＼通りの身體になるようにしたら宜からうと説いたが、ゼニは頑としてそれに耳を貸さなかつた。ピータアは困り果て、

「これは不幸な出来事に相違ないが、何と云つても最早や出来て了つた事であるから、今となつては最上の善後策を講ずるの外はない。遠からず自分は自由の身體になつて吃度お前と結婚するから、どうかそう餘り生帳面に考へる事だけは止めて呉れ。」

と歎願する様に云つたが、ゼニは絹を裂く様な聲で、

「止して下さい！ それだけのお話ならもう私は御免を蒙ります。そんな事を云つてあなたは、まだ私を欺ますのですか。」

ピータアは又ヒステリーの發作が起るのだらうと思つて、驚いて慰撫しようとし

たが、彼女はツと跳び退いて叫んだ。

「お歸りなさい！。歸つて下さい。私は一人で私の踏むべき道を考へて、どうしてもします。私はどうなつても、あなたに迷惑はかけませんから、放つておいて下さい。サ、早く出て行つて下さい！」

(二十一)

ピータアはゼニーから追ひ出されて戸外に出たものゝ、不安心で堪らなかつた。自分から仕出かした大失錯に苦しみながら、どうすれば善いかを知らずに街から街へと歩き廻つた。夕飯時が來た。甘さうな物を腹のふくれるまで喰つて見たが、それすら何等の慰安も彼に與へなかつた。彼は勤先きから歸つて來るサデーを心に描いて、ゼニーはもう話をしてゐるだらうか、どうだらうかと、そればかりを思ひ迷つた。

其の晩、グーバー事件に關する民衆大會が開かれた。ピータアも無論それに出席したが、會場内には開會前から殺氣が充ち満ちて、身がすくむ様に思はれた。彼は

秘密が暴露されて怒罵惡罵の焦點となつた光景を心中に描いた。そしてそれを如何に打消さうとしても、事實に起り得ざるものであるとの確信は付かなかつた。而かも其の集會は鐵の如き双腕を有する數千の勞働者と、火の如き危險思想を懷抱する急進論者と、赤い手巾を打振つて絶叫する、ギリシヤ神話の妖女の様な婦人との一大集會であつた。

彼等が若し彼の爲しつゝある處を既に發見してゐたならば、——そして今何人か起ち上がつてそれを此の殺氣立つた會衆の面前に暴露したならば、——彼等は忽ち彼の上に殺到して、擲ぐり、蹴り、踏み蹂つて、終に八ツ裂きにするでもあらう。恐らくゼニイはもうサデーに話してゐるだらう。すればサデーはアンドリユースに話すに相違ない。アンドリユースも怪しいと思つて、吃度ピータアに密偵を附けるだらう！。イヤもう密偵を附けてゐるかも知れない。マクギヴネーとの密會を探知してゐるかも知れない！。

斯かる恐怖に襲はれながら、ピータアはドナルド・ゴールドンの、ジョン・ドーラ



ンドの、ソーレンセンの激越なる長演説を聞いてゐた。彼はガツフエーの奸策が次ぎ次ぎに暴れ立てられるのを聞いた。彼は又、地方裁判所の検事は偽證の教唆者として其の手先は脅喝者及び捏造者として、口を極めて罵倒せられるのも聞いた。彼は何故に斯かる言説が放任せらるゝか、何故に斯かる演説者が直ちに拘引せられな  
いかを解し得なかつた。けれども、彼は尙ほ其の席に列つて傾聽せねばならなかつた。而かも拍手までして賛意を表せねばならなかつた。それと同様に、多數の運輸  
トラストの他の密偵も、地方検事局の密偵も、皆な傾聽して賛成顔をしてゐたので  
あつた！。

ピータアは會場でミリヤム・ヤンコウイチに出逢つて、其の隣りに著席してゐた  
が、彼女は突然「御覽なさい、彼處に「犬」が二匹ゐますよ。あの白々しい顔はど  
うです」とピータアに云つた。

「どれ、何處に？」それ、彼處にゐる拳闘家の様な奴と、其の隣りの鼠の様な顔を  
してゐる奴。」成る程、其處にマクギヴネーがゐた。マクギヴネーもピータアを見た

が、何等の合圖もしなかつた。

集會は十二時近くまで續いた。そしてグーバー擁護資金に對して數千弗の寄附金が會衆から醸出せられ、最後に激烈なる決議が可決せられた。ピータアはとうとう一身の不安と疑懼ぎぐとに堪へかねて、散會前に其處から逃げ出したが、會場の出口でI・W・Wの指導者の一人マクコルミックに出會した。此の青年の嚴肅な顔には何時になく昂奮の色が現はれてゐた。それはこの集會の爲の昂奮だとピータアは考へてゐたが、そうではなかつた。マクコルミックは其處にゐた人々を突き退ける様にしてピータアのそばにやつて來て、耳の側でさゝやいた。

「君はニュースを聞いたか。」

「どんなニュースを？」

「ゼニーが自殺したよ！」

ピータアはよろ／＼と後ろによろめいて、喘ちせぐ様に、

「オー、神よ！」と叫んだ。

「ミス・アダ・ルースからタツタ今聞いたんだが、ミス・サデーが今日家に歸つて見ると、一通の置き手紙があつた。それはミス・ゼニーの遺書で身投げして死ぬと書いてあつたさうだ。」

ピータアは恐る／＼、

「ど、どうしてだらう？」と聞いて見た。

「健康はあの通りだし、絶えず苦悶した結果だらうが、醜い死骸を人目に懸けたくないから、決して捜して呉れるな、大騒ぎをして世間に耻を曝して呉れるなど書いてあつたさうだ。」

ピータアは恐怖と驚愕とで意識を失ひさうになつてゐたが、彼の内部の或るものは此の時ホツと安心の太息を吐いた。ゼニーは彼女の約束を守つた！、ピータアは終に安全であつた！

(二十二)

ピータアはやつと一安心したものの、それは内心の極秘事で、彼は尙ほ幾度かツ

ライ場面に立たねばならなかつた。彼は嫌疑を避ける爲に、さも愕いた様にトッドの家に駆け込んで、狂人の様になつてサデーに殊勝らしく吊詞てふしを述べた。一座の人々と同じ様に思ひ掛けない椿事を語り合つて涙をこぼした。

然るに彼をひどく狼狽させたのは、サデーがゼニーの不幸の原因を多少看破してゐるらしい事であつた。彼女は彼を物かげに連れて行つて、手厳しく彼を詰責した。ピータアは必死となつて彼の無罪を抗辨したが、其の最中にフツと妙案が彼の頭の中に浮んで來た。彼は急に聲を落して、「ゼニーさんから堅く口止めされたんだが、實はゼニーさんには毎日の様に定まつて逢ひに來た若い男があつたんです」とやつて見た。

彼は此處でチョットためらつたが、直ぐに彼の秀逸を附加へた。「ゼニーさんは私に、自分は自由戀愛主義者であると云つてました。そしてその自由戀愛論を詳しく私に説いて聞かせた事もありました。私はそれを信ぜぬと云つたが、あなたの知つてる通り、ゼニーさんはどんな事でも一度信じたとなると、飽くまでそれを固執して、



それを實行する人なんですからねえ。」

茲に至つてサデーの忿怒ふんどは殆んど絶頂に達し。彼女はピータアをグット睨にらみて、

「讒誘者！ 悪魔！ 其の男と云ふのは何處の誰です、嘘うそでなきやハツキリ云つて御覽なさい！」と悽まじい勢いきほひひで詰め寄せた。

「ゼニーさんは何時でも其の人をネツドと呼んでゐました。私は只それを記憶してゐるだけです。深く立入つて其の男の事を詮議立てするのは、私のすべき事ぢやありませんからねえ。」

「何にも知らない子供に氣を附けて下さるのは、あなたのすべき事ぢやないのでか。」

「イ、エ、ゼニーさんは何にも知らない子供ぢやありません。アノ人は自分のしてゐる事を精確せいさくに知つてると云つてました——。あらゆる社會主義者は皆それを實行してゐると云つてました。」

彼は更らに最後の一弾として、客人たる者が其の家庭内の人々の品行を探索する様な事は、決して禮儀とは考へられないと附加へた。けれども、サデーは尙ほ彼を疑つて、口汚く罵りつゞけた。其處で、彼は困難を解決する最も容易なる方法を執つた。——即ち極度の憤激を裝うて戸外に飛び出してしまつた。

ピータアは歩きながら、其後の事をいろ／＼と考へて見た。彼の感じでは、サデーは彼等姉妹の名譽と、グーバー事件に及ぼす損害とを考へ合はせて、努めて事件を秘密にし、ピータアの罪を寛假する様に思はれたが、尙ほ念の爲に電話にサデーを呼び出して、「先刻の話は單にあなたのお耳に入れた丈で、決して他言は致しませぬ。それで、あなたの口から漏れなければ他人に知れる事は絶対にありませぬから其の點は御安心なさい」と、それとなく駄目を押したのであつた。

それでも、サデーの話聞いたに相違ないと思はるゝ、五六の人々があつた。ミス・ネピンは、其後にピータアがアンドリュースを訪ねた時、氷の様に冷かであつた。ミリヤム・ヤンコウイツチも、以前の様に親切ではなくなつた。其他の婦人連

も態と他所々しくする様になつた。然るに唯一人、その事に就いて彼に話しかけた者があつた。それは大會の會場でゼニ―自殺のニュースを彼に傳へた、マクコルミックであつた。彼は最初から此の 아일랜드の青年を薄氣味悪るく感じてゐたが、彼の恐怖は正しく其の恐るべきを怖れたのであつた。『マック』は彼を人のゐない處に引張つて行つて、拳骨を鼻の先きに突き出して、彼の不正不義を責め立て、『野良犬』の様な奴だと罵つた。そしてグーバー事件さへなければ、決して彼を活かしては置かないと云つた。

ピーターはそれに對して、一言も口をきく事が出来なかつた。アイルランド青年の形相はほんとに殺人を敢てしかねないほど獰猛であつた。ピーターは其後絶えず此の狂熱的のアイルランド青年から生命を脅かされる事となつた。ピーターは衷心から此の青年を憎み且つ嫌つた。そして此の憎惡はゼニ―の哀むべきよりは寧ろ彼自身の哀れむべきを思はしめ、彼自身こそ眞の犠牲者であると考へさせる事に役立つた。

眞夜中に目覺めたピータアの目の前には、ゼニの温順な、小さな顔が浮び出て何うしても消え失せない。彼は良心に責められた。彼は既往の目まぐるしい出来事を振り返つて見た。が、彼には此の悲劇はどうしても避け難きものであつたとか考へられなかつた。彼が如何とも爲し得ざる種々なる事情の中に、自然に嘔はぐまれて育つて來たものとか考へられなかつた。アメリカ市に於ける勞資の白熱戰は、勿論彼の過失ではなかつた。又、彼が其の渦中に引摺り込まれた事も、最初に不本意なる證人として、次には秘密探偵として、動く事を強要せられたのも、彼の過失とは考へられなかつた。ピータアは毎朝、アメリカ市の『タイムス』を讀んで、グロバの主張が無政府と叛亂とであり、地方検事局及びガツフェアの秘密任務の主張が、法律と秩序との主張である事を知つてゐた。ピータアは此の大主張の爲に最善を盡す者であつた。彼は唯だ上役の命令を遵奉する者であつた。それが偶々貧困にして痼弱なる一少女を轍わだにかけて轢しき倒させたとしても、何故に彼がその爲に非難せらねばならぬだらうか。と彼は斯ういふ風に考へた。



ピーターは、ゼニーの死が決して彼の過失でない事々信じてゐた。けれども、尙ほ哀愁と恐怖とは深く彼の心中に喰ひ入つて、彼を苦しめ悩ました。彼は日となく夜となく亡きゼニーを想うた。耳に彼女の優しき聲を想ひ、空しき兩腕に彼女の肉體を想うた。彼女は彼の初戀であつた。而かも彼女は永久に去つて了つた。失はれたる物に多くの價値を發見するのは、人間の弱點であつた。

ピーターは戦争氣分に鼓吹されて強き人たらんと欲した。彼は此の些々たる不幸に心を引かれて、何時までも愚圖々々してゐてはならぬと思つた。が、ゼニーの顔は彼の目の前から去らなかつた。——或時は最後の會合で見た様に恐ろしい顔であり、或時は柔和の中に非難を含んだ其の顔であつた。彼は彼女が如何に善良で、如何に濃まやかなる愛情を持つてゐたかを美しく記憶してゐた。彼には又と一人、あの様な女が他にありさうには思はれなかつた。

その外に尙ほ彼の心を悩ました不可解の一事は、此の意思の弱い、誘惑に陥り易い一少女が、其主義の爲に深く慮かつて、敢然其一身を擲つた事であつた。グーバ

「辯護の證人として彼を救はんが爲に、彼女が自ら甘んじて死んだ事であつた。勿論ピータアは、彼女が不治の病に罹つてゐた事。そして彼女自身もそれに諦めを付けてゐたし、他人もそれをどうしやうもなかつた事を知つてゐたが、それにしても人が其の主義主張の爲に生命その者をも一擲して顧みぬのは、實に恐るべき狂熱と云はねばならぬ。斯うしてピータアは新らしい觀察點から是等の主義者の思想觀念を見る事となつた。これより以前には、彼は主義者等を馬鹿者の集團と見てゐたが今は彼等が如何にも深刻なる怪物の様に思はれた。それとも彼等は悪魔であるか、或は精神錯亂者であるかと思はれた。

## (二十三)

ピータアは何喰はぬ顔で、其後もグーバー擁護會の事務所に通つてゐた。裁判の日が到達すると同時に、二大巨人の鬭争即ち勞働と資本との鬭争は其の頂點グライマツクスに達した。此の事件を擔當した檢事は、これを功績として次期の州知事を贏かち獲んとする野心家であり、其の背後には市内に明敏の聞え高さ六人の法律家が顧問として控

へて居り、費用はいくらかゝつても、總て大實業家連から支拂はるゝ事となつてゐた。探偵の小軍隊は八方に駈け廻つて活動してゐた。審問開始後の公判廷には常に無数の密偵と間牒とが入り込んでゐた。陪審官たるべく豫想された數百名の人々に就いては、一人々々詳細な身元調書が編成せられて、銘々のあらゆる弱點と偏見とがそれに記入された。嘗に其人の心理状態が研究されたのみならず、其人の財産状態も友人及び親戚のそれ等も調査された。ピータアはマクギヴネー以外に五六人の探偵とも會見して、あれこれと聞かると、儘に尙ほ委しい事を教へたが、是等の人々の話の様様では、事件は枝を生じて何處まで廣がつてゐるか限りが知れなかつた。彼には全アメリカ市がジム・グーバーを絞首臺に送る爲に總動員されてゐる様に思はれた。

ピータアは今や一週五十弗の給料と、運動費の實費拂と、貴重なるニュースに對する特別賞與とを得つゝあつた。彼は殆んど毎日の様に何等かの重要なる消息に接し得た。そして毎晩それをマクギヴネーに報告したのであつた。告發者側は秘密の



事務所を持つてゐて、其處には一人の電話係が詰め切つてゐるが、其處と検事局、其處とガツフエー事務所との間は、特に急使によつて連絡を取る事となつてゐた。これは皆、電話を盗まるゝ事を防ぐ爲であつた。それでピーターが通信する場合に、グーバー擁護會の本部を出て、或るホテルの電話室に入り、先づ秘密の番號を呼んで、次に彼自身の番號——それは六四二であつた——を告げるのであつた。こんな風で、關係者は皆な敵味方の重なる人々を番號で呼んでゐたから、グーバーの名が電話で話される事は絶對になかつた。

審判が始まつてからは、誰も彼も法廷に出掛けて行つて、擁護會の事務所では仕事をしてゐる者は殆んどなかつた。そして或る者は折々僅かに數分間法廷の緊張したセンセーショナルな經過を知らせに歸つて來た。

法廷では、先づ告發者から、爆發後に警官が現場で發見したものと云つて、いろいろな證據物件を提出した、其一つは爆彈の一部と想像された彈機スプリングであつたが、よく検査して見ると、それは電話機の一部であつた！。彼等は又、時計の或る部分



をも提出したが、それも二個の時計の或部分と一緒にしたものである事が看破された！。こんな事が毎日續いて、怒るやら、笑ふやら、法廷内はナカ／＼賑かな事であつた。

告發者が一通り犯罪事實の陳述を終つた日であつた。ピータアは證人としての豫習を受ける爲に、アンドリュースの事務所に呼ばれた。そして彼は兩三日中に出廷する事となるだらうと云ひ聞かされた。

ピータアは最早や證人として出廷する考へは毛頭なかつた。彼は今日までグーバの擁護者を全然欺瞞してゐたのであつた。唯だ最後まで彼等と好意的關係を續ける爲に、うまく調子を合せて證人顔をしてゐるに過ぎなかつた。其處で彼は、今それを拒絶する適當の理由を考へ出さねばならなかつた。彼は晝食をしてゐる間に、或る計畫がフト其の頭に浮んだ。彼は其の爲にパイの一片を呑み込み損つたほど喜んだ。彼は跳び上る様にして其處を走り出た。それは彼の天才の最初の閃きであつた。今日迄は、マクギヅネーがいつもそつといふ事柄を考へ出したのであつたが、ピ

「ターアは茲に初めて獨立のスパイとなるべく一步を踏み出したのであつた。彼自から斯かる頭腦を有する以上、彼は何故に他人の命令を受けねばならぬのであらうか。彼は其の計畫を持つてマクギヴネーの許に走つた。マクギヴネーをそれを妙案だと云つた。ピーターは大得意で給料の増額を求めた。そして其の承諾を得た。

此の計畫には二重の利益があつた。それは單に主義者の間に於けるピーターの名聲を救ふばかりでなく、マクコルミック——擁護派中に於ける最大の活動家でありアメリカ市内の主義者中の最大危険人物の一人であり、且つ又ピーター個人の恐るべき仇敵でもあるマクコルミックを、一舉に葬り去らうとするのであつた。マクギヴネーは秘密の系を操つて。翌日のアメリカ市の『タイムス』には、グーバー事件の記事中に、一個の風説として、擁護派では、グーバーに對して虚偽の證言を爲すべく監獄内に於て拷問に附せられたと稱する或男を證人として法廷に立たせる事にした、といふ記事が掲げられた。そして、先發者側で其の男の身元を取調べて見た處、其の男は最近に一少女を誘惑したもので、其の少女は彼が結婚を拒絶した爲に

自殺した事を発見したと云ふのであつた。

ピーターアは其の新聞を掴んでアンドリュースの事務所へ飛んで行つた。彼は此の一項をアンドリュースに指示して、これがグーバー事件の證人としての彼の終末であると言言した。彼は又『これは卑法なる、唾棄すべき虚偽である！。此の風説の責に任すべき者はバット・マクコルミツクである』と斷言した。

グーバー事件の審問に悪戦苦闘しつつある辯護士の双肩に、豫期せざる重荷が更らに落ちて來たわけであつた。哀れむべきアントリュースは、何とかしてこれを無事に納めようと、彼のベストを盡した。彼は懇々とピーターアに説いた。此の風説が若し虚偽であるならば、ピーターアは喜んでその誹謗者に答ふる機會を捉ふべきである。君に其の決心が付けば擁護會はその風説を否認する。證人を法廷に立たせる。サデー・ドットを起してそれを否認させてもよいと云つた。ピーターアは、

『併し、サデーさんは私を疑ふと私に斷言しました！。』

『それはさうだ。併しあの人は最近になつて、あれはどうも確かではなかつたと私に



話したよ。』

『今頃そんな事を云つても、もう追付きません。あの人もあの人だが、私に悪名を付けたのは誰でもない、マクコルミックです。あの男は證人席に着いて私をさんざん非難攻撃した事を否認出来ますか。』

ピータアの舌端からは續いて、マクコルミックに對する忿怒の激語が迸ばしり出た。彼マクコルミックは主義の爲に眞に献身的に働いてゐる様だが、其の實、同志に對して極めて残忍な誹謗を繰返へす以外に、少しも深い考へのない、過激派中の好一箇の代表的人物であると嘲つた。彼は又、自分は今日まで約六ヶ月間、殆んど食ふ物も喰はずに心身を捧げて此の事件の爲に働いて來た。そして今法廷に立たんとする間際に、こんな虚構の風説を新聞紙上に傳へらるゝ事となつた。そうして告發者側の偽證者によりて、無耻の卑劣漢たる事を證據立てらるゝ事となつたのだ、と憤慨した。そうして彼は最後に『私は最早役に立たなくなりました。あなたはマクコルミックを證人に立たして、グーバーの生命をお救ひなさい。あなたはもう私



を用ゐる事は出来ません、私は駄目になりました！ と云ひ放つた儘、アンドリュースの懇請には耳をかさずに、其の事務所を飛び出してしまつた。彼は更らに其足でグーバー擁護會事務所に飛んで行つて、其處でも同じ芝居を繰り返へした。

(二十四)

斯うしてピーターアはグーバー事件から用濟みとなつた。彼は非常にそれを喜んだ。彼は緊張に疲れてゐた。彼は休息と多少の享樂を必要とした。彼は眞新しい紙幣を詰め込んだ紙入と、可なり多くの録行預金とを持つてゐた。困難と寂莫の生活を續けて來た彼は、茲に初めて好きな事の出來る身の上となつたのであつた。

機會は眼前にあつた。彼はマクギヴネーの忠言を受け入れて、又一人の情婦を拵へた。そしてこれには非常に面白いロロマンスがあつた。

元來アメリカ市の司法制度では、女子をも男子と同じく陪審官に選任し得る事となつてゐる。それは多忙な實業家などが陪審席に時間を空費することを欲せず、又その使用人の時間を空費する事をも望まない爲であるが、其後何時からとなく、陪審官

を職業とする男女の一階級が其處に生じて來た。彼等は常に裁判所に出頭してゐて一日六弗の日當で陪審席に着くのであつたが、彼等が若し利巧者であるならば、其處に旨い金儲けの機會はいくらでもあつた。

グーバー事件の陪審官に就いて、此の職業的陪審官の仲間に激烈な競争があつた。何しろ此の事件は一世の耳目を聳動した大事件で、原告側も被告側も一生懸命に戦つてゐるのだから、審理は必然永引かねばならぬ、それで陪審官たる者の名聲が高まるのは無論の事、旨くやれば一生遊んで喰へるだけの金もつかめるのであつた。激しい競争が起るのも無理でない。

一日ピータアが傍聽に出かけると、法廷では其の時、補缺陪審官が問題になつてゐた。證人席には、小作りの色の淺黒い、併し非常に魅惑的な婦人が着飾つて立つてゐた。彼女は原告側をも被告側をも満足させようと努めてゐた。彼女は此の事件に就いて全く何にも知つてゐなかつた、それに關する何物をも讀んでゐなかつた。彼女は又、一般の社會問題に就いても全く無知識で無頓着であつた。それが原告側

に喜ばれた點で、原告側には異議なく承認されたが、被告側は取調べの結果、彼女が會つて或人に對して、勞働運動の指導者等は悉く銃殺せらるべきものであると、放言した事を發見して、手厳しく彼女に挑戦した。それで如何にも残念さうに證人席を引退がつた彼女は、傍聽席のピータアの隣りに腰をよろした。彼女の目には涙があつた。彼は彼女の失望を察して同情の言葉をかけた。それが柳もの始まりで、彼等は一見舊知の如く一緒に晝飯を食ひに出掛けた。

彼女の名はゼームス夫人であつた。彼女は寡婦であつたが、夫は行衛不明になつてゐるのだと云つてゐた。彼女は敏捷な、快活な女で、美しい白い齒と血色の好い頬とを持つてゐた。此の類の血色は云ふまでもなく小さな瓶の中から出て來たのだが、それはピータアの全く思ひ付かぬ所であつた。ピータアも今ではリュウとした新調の着物を着込んでゐた。そして可なり贅澤な晝食をするほど大膽にもなつてゐた。彼もゼームス夫人もグーバー事件と手切れになつて居り、二人とも心身の疲勞を感じて生活の一轉機を望んでゐた。ピータアがびく／＼もので、何處か海岸にて



も遊びに行つて見ませんかと誘ひかけて見ると、ゼームス夫人はそれを待つてゐるたかの様に即座に同意して、二人の海岸行はスラ／＼と極まつた。

ピーターアは最早や探偵の仕事を呑み込んでゐるから、安全に爲し得る事と爲すべからざる事とを明かに知つてゐた。彼は此の寡婦と一緒に旅行しなかつた。汽車の切符も買つて渡さなかつた。それ以外にも疑ひを招く様な事は一切しなかつた。一人でぶらりと海岸に出掛けて行つて、居心地のよさ相な室を約束して了つた。そして其の翌日、ゼームス夫人と落ち合つたのであつた。

斯うして數ヶ月間、ピーターアとゼームス夫人とは共同生活を續けたが、ゼームス夫人は一個の『貴婦人』であつて、彼女の夫の逃亡以前に非常に贅澤な生活をしてゐた事を彼に知らせようと努めたのだから、する事爲す事が、ピーターアに取つてはまことに驚くべき經驗であつた。彼女は、孤兒院内に育つた者や、路傍の薬賣りとして成長した者の知らない、世間並の行儀作法を彼に教へた。彼女は頗る巧妙に、彼の感情を害せぬ様にして、彼にナイフやフォークの持ち方を教へ、ネクタイの撰び



方を教へた。同時に彼女は、彼をして人間中の一番の果報者と考へさせる様に巧みにプロバガンダを行つた。彼は夫人の巧妙なる手管にかゝつて有頂天になつてゐた。勿論それは少々の金で買はれたものではなかつた。彼は單に非合法的の新婚旅行の費用を支拂つたばかりでなく、夫人の巧妙なる暗示によつて、多くの高價なる贈物をも買はされたのであつた。彼女はピーターアが贈物を與へた時には、何時でも上機嫌で蜜の様な甘い愛を彼に注いだ。ピーターアは夢中で其日其日を過した。彼の金は知らぬ間に彼の懐ろから流れ出て行く様に思はれた。

此の間に外部の局面は刻々進轉して、後から後からと重大事件を捲き起しつゝあつた。併し彼等二人は新聞を讀まなかつたから、少しもそれを知らなかつた。第一にジム・グーバーは有罪と確定して死刑を宣告せられ、共犯者のビツドルは無期徒刑を宣告せられた。次に、アメリカは歐州戦争に参加して、愛國的熱情は全國に澎湃として大濤を揚げてゐた。こればかりはピーターアも聞かずに居られなかつた。彼の注意は、議會が將に通過せんとしてゐる徵兵令に引き付けられた。彼はまだ服役

年限の内にあつた、彼が軍隊に編入せられる事は殆んど疑ひがなかつた。

彼の生涯に、これほど恐ろしく思つた事は未だなかつた。彼はゼニーから想像の中に注ぎ込まれてゐた、戦闘、殺戮、機關銃、手擲彈、水雷、毒瓦斯等の、戦慄すべき光景を忘れようとするけれども、今ま軍隊に取られようとする身には忘れるところではなく、却つてそれ等の想像がいよゝ／＼鮮明になつて來るのであつた。此の時以後、彼の蜜月旅行は全く打ちこわされてしまつた。彼等は恰も一望涯りなき大平野にあつて、突然天の一方に捲き起る眞黒な夕立雲を見た遊山客の如くであつた。

ピータアの銀行預金も残り少なくなつて來た。併し彼は見切り時を知らなかつた。彼は當惑し、煩悶しながらも、ゼームス夫人の前にそれを云ひ出し得なかつた。そして最後に、洗濯屋に渡した少額の小切手に相當する預金の有無すら疑はしくなつた時に、初めてそれをゼームス夫人に打明けた。

ピータアは、この「金持育ち」の後家さんがそれを聞いてチツトも驚かないのに却つて驚かされた。ゼームス夫人は今度初めて此の海岸に來たのではなかつた。彼

女はいつもの通り快活に、ニコ／＼しながらモ一度陪審廷に立つばかりだと云つた。彼女は又、彼に名刺を與へて、金が出来たら是非モ一度訪ねて来て下さいとも云つた。そして自分の衣類箱スートケースと新しいトランクとに、ピータアの贈物をギッシリ詰め込んで、何時に變らぬ美しい、しとやかな貴婦人として、サツサと出立してしまつた。

(二十五)

斯うしてピータアは又もとのピータアに歸つた。併し運命は彼に親切であつた。彼は其あとに、「二四三」の暗號を署名したマクギヴネーの手紙を受取つた。「二四三」はピータアの爲に或る重要な仕事を持つてゐる、直ぐ來いと云ふのであつた。ピータアは最後まで残してゐた寶石類を質入れして、やつとアメリカ市までの汽車賃を作り、例の密會所でマクギヴネーと會合した。

會見の目的は直ちに説明された。アメリカは今や戦争中であつた。「赤」の口を永久に緘黙せしむべき時は來た。平時には逆も許されない事柄も、戦時には平氣で許

される。其處で此の機會に、財産制度に對する破壊運動を根絶せんとするのが今度の仕事である。官憲は既にあらゆる過激團體と其の加盟者とを調査して、完全なる名簿の作成中であつて、一方には逮捕の準備行爲として頻りに證據を蒐集しつゝある。ガツフェーは矢張り此の仕事の責任者であつて、市の實業界の巨頭はグーバー事件に於けると同じく、政府が未だ眼をこすつてゐる間に、既に前進を開始してゐた。マクギヴネーは斯う説明して、モ一度アメリカ市内の「赤」に對する密偵の役目を務める氣はないかとピータアに聞いた。ピータアは、

「そりや出来ません！ 私がグーバー事件で證言しなかつたので、奴等は非常に怨んでますからね。」

「そんな怨みを取除くのは譯はない。君は少々迷惑だらうが、モ一遍チツトの間監獄に行つて來るまでの事だ。」

「監獄に！」

ピータアはうるたへて叫んだ。



「さうだ。君がモ一度捕縛されて犠牲者になるのだ。そうすりや、奴等は皆な君の正義を信じて、君を中間に加へ、大に君を歓迎するよ。」

ピータアは監獄行を好まなかつた。アメリカ市監獄に於ける彼の記憶は特に苦痛なるものであつた。併しマクギヅネーは、今の時は何人も各自の感情を顧慮し得ざる時である事を説いた。國家は將に危機に頻して居る。公安は擁護せられねばならぬ。各人は何等かの愛國的奉仕を爲すべき秋である。富者は其富を舉げて自由國債に應募しつゝあり、貧者は其生命を擲つて軍國の急に赴きつゝある。此時に方つて、ピータア・ガツヂは抑も何物を國家に獻げんとする者であるかと説き聞かせた。

ピータアは、

「多分、徴兵に取られるでせう。」と、心細げに答へた。

「イ、ヤ、君は取られぬ。——君が此の仕事を承諾すれば、決して徴兵には取られぬ。俺達が行かなくても濟む様にしてやる。君の様な特殊の才能を有する者は兵隊には勿體ない。」

ピータアは此に至つて終に承諾の決心をしたが、彼には塹壕内の數年よりも佛蘭西の地下に眠る永劫の眠りよりも、監獄内の數日の方が遙かに恐ろしく感ぜられたのであつた。

其の後の相談は急速に決定した。ピータアは贅澤な着物を勞働者らしい古着物に着換へた。そして非戰主義の宗教たるクエーカー派の青年、ドナルド・ゴルドンが何時も晝飯を食ひに行く飯屋に出かけて行つた。ピータアはドナルドを確かに徴兵反對運動の指導者の一人だと推測したが、果して其の通りであつた。

ドナルドはピータアを遇するに極めて冷やかであつた。此の若きクエーカーは一語をも發する事なくして、ピータアがグーバト事件を破却した變節漢であり、卑怯者であるといふ事を、ピータアに思ひ知らせた。が、ピータアは忍耐と術策とを持つてゐた。彼は自己の辯明もしなければ、ドナルドの近狀も尋ねなかつた。彼は只、其後軍國主義を研究しつゝあつたが、最近漸く確然たる結論に達したと云つて次の様に語つた。彼は今日では社會主義者であり、國際運動主義者である。彼はア

アメリカの參戰を一個の罪惡と考へる。彼は參戰に反對する運動に參加せんと欲する。彼の立場は良心的非戰論者のそれである。軍國主義者は、彼等が若しそれを欲するならば、彼を監獄に打ち込む事も出來よう。更に一步を進めて彼を銃殺する事も出來よう、併し、どんな事があつても彼に軍服を着けさせる事は出來ない。

斯の如く、口に、目に、其の確信を現はしつゝ、卒直に、公明に語る者に對して默殺的態度を執る事はドナルド・ゴルドンには迎も出來なかつた。其の晩、ピータアは社會黨アメリカ市支部の集會に出席して、總べての同志と舊交を温めた。彼は演説もせず、別に目立つた行動もしなかつたが、彼の卒直は直ちに會衆の精神を捉らへ得た。其の翌日、彼は會衆の二三者と再び會合したが、彼は何時、何處で問はれても、良心的非戰論者としてこの確信を卒直に言明した。斯うして僅か一週間経たない中に、ピータアは、自分が最も寛恕せられて、誰ひとり自分を裏切者として非難する者もなく、又、自分を室外に蹴り出さうとする者もない事を發見した。

アメリカ市支部の翌週の集會では、ピータアも冒險的に簡單な發言を試みた。そ

れは赤熱的集會で、討論の主題は戦争と徴兵とであつた。支部中には獨逸人があり、愛蘭人があり、印度人も一二名が加はつてゐたが、彼等は總べて自然的に熱心なる平和論者であつた。之に相對抗して、其處には「左翼<sup>レットワイング</sup>」と呼ばれた運動者の一團があつた。そして黨の態度を餘りに保守的と考へた此の一團は、常に囂々として一層急進的なる宣言と、直接行動と、總同盟罷工と、無産階級の自立とを呼號しつゝあつた。丁度その際にロシア革命は爆發して、電氣をかけた様に全世界の人心を感動させた。それで「左翼」の同志等は皆な忽にして希望の翼に搔きのせられた様に感じたのであつた。

ピーターは此の席上で、兵士に對する路傍演説者の一人として、極めて激越な意見を述べた。彼は云つた、黨員以外の者は一人も居らない此の會場内で、徴兵反對論を繰り返へしたとて何の役に立つ。今は彼等に要求せらるゝものは、街頭に於て彼等の聲を高めることである。時機の去らざるに先だつて人民を覺醒させる事である！。此に集會せる諸君の中、何人が果して、街頭に非戰大會を開くの勇氣ある人



々であるか。

勿論、其處には此の挑戦に應ぜずにはゐられない人々があつた。ピータアは數分間に六名の狂熱的青年の言質を得た。ドナルド・ゴルドンも其一人であつた。其の夜の中に一臺の貨物自働車を雇入れて、翌晩大通りに初陣を試みる手筈が定められた。老人連は、彼等は只だ警官から頭を打割らるゝに止まるだらうと云つて、彼等の輕擧を戒めたが、彼等の答は無論、「獨逸の砲兵に頭を碎かれるよりは、寧ろ巡査に打割られる方がました」と云ふにあつた。

(二十六)

ピータアはこの計畫をマクギヴネーに報告し、マクギヴネーはそれに對する警官の手配を約束した。ピータアは又、警官が迂濶な事をせぬ様に、餘り手荒な事をせぬ様にと彼に希望した。マクギヴネーはにや／＼笑ひながら、其の邊の事も氣を附けようと答へた。

それでもピータアは尙ほ内心多少の危懼を禁じ得なかつたが、事は極めて簡單に

短時間に片付いてしまつた。彼等の貨物自動車は大通りに到着した。一青年辯士は直ちに起ち上つて、通行人に向つて演説を始めた。彼は先づ、此際は當さに勞働者が徴兵に對する彼等の眞の感情を表明すべき時機であると云つた。自由なるアメリカ人は彼等自からが軍隊内に群集せしめられ、海上を輸送せられ、終に國際資本家の利益の爲に殺戮せらるゝ事を斷じて許容せぬであらうと云つた。此の時、一巡查が現はれ出て、青年の演説を制止したが、青年は肯かなかつた。それから巡查が其の持つてゐる棒で舗石をコツ／＼と叩くと、十人ばかりの巡查が忽ちバラ／＼と駆け出して來て、いきなり辯士を取圍んで拘引すると言渡した。次に他の辯士が進み出て大聲疾呼すると、これも忽ち引ずり降ろされた。斯うして一人又一人、ピータアを含む六人が六人とも巡查の手につかまつてしまつた。群集には何が何やらチツとも判らなかつた。六人の辯士は其處に待たせてあつた囚人護送車に詰め込まれて警察署に送られた。そして其翌日には、禁錮十五日を宣告された。彼等は六ヶ月を豫期してゐたので、刑の意外に軽いのに驚喜した。

彼等は又、監獄での取扱ひが意外に寛大なのに驚喜した。「赤」に對しては出來得る限りの苦痛と屈辱とを與へるのが、警察の慣例であつた。普通ならば、彼等は此の六人の非軍國主義者を、巨大なる鋼鐵製の回轉タンクに打込んだであらう。そのタンクの内部は數多の監房に區切られてゐて、曲柄クランクで回轉してゐる。それで其中の或る監房にはいるには、其の全體が一回轉して其の監房が入口の處に來るのを待たねばならなかつた。だから一度此處に入れられたが最後、絶えずガタ／＼ゴロ／＼と鳴り軋る機械の騒音に付き纏はれて、迎もおち／＼眠る事は出來なかつた。モ一つ惡い事には、タンク内は眞暗で、書籍や新聞雜誌を持つてゐたとしても、迎も讀む事は出來なかつた。それで、煙草を吹かすか、同檻者の淫猥な話を聞いてゐるか、又は出獄後の社會に對する復讐を考へるかの外は、何もする事がなかつた。

然るに此の監獄の新監には、清潔で、明かるくて、通風もよい數箇の監房があつた。そしてこれには通例、情人の咽喉を突いた婦人とか、行金を費消した銀行家と

か、社會上の地位の比較的高かつた犯人が入れられるのであつた。處が今この非軍國主義者の六人は其の新監の一房に入れられて、而かも書籍と食物の差入まで許された。六人の五人までが非常に驚喜したのは云ふ迄もあるまい。斯うなると入獄も犠牲どころか、一種の休暇を貰つた様なもので、彼等は殆んど苦痛と云ふものを感じなかつたが、この寛大の源泉がピーター・ガツヂであらうとは、彼等のまるきり思ひ付かぬ事であつた。

ピーターはこの十五日間、夜も晝も社會主義者の議論を聞かされた。この世界が如何に改造せらるべきか、如何にして改造せらるべきかに關する彼等の考へは、一人一人異つてゐた。人生は、有する者と有せざる者との無限の鬭争で、有せざる者が如何にして有する者を覆滅せしむべきかの問題は戰略タクチックと呼べるものであるが、彼等がこの戰略上の議論を闘はず時になると、長たらしい術語が引切りなしに出て來て、何を論じ合つてゐるのやら、學問の無い普通人には全く判り兼ねる。併しピーターはあらゆる談論を熱心に傾聽して、それを悉く頭腦の中に詰め込んで置いた。



から、監獄を出て來た彼は、一廉の社會運動通で、アメリカ市内に於ける各種の急進團體と、その諸團體の戰爭に對するそれらの態度に就いて、稍や完全な説明をマクギヴネーに與ふる事が出來た。

(二十七)

マクギヴネーの計略は見事に成功した。ピーターは今や同志の崇拜と信頼とを贏ち得た一個の殉難者であり、勇士であつた。左翼の一闘士としての彼の地位は確立せられた。最早、彼に對して一言の非難を加へる者もなかつた。ピーターの一敵たるバット・マクコルミツクは、この時、石油労働者の間に遊説しつゝあつた。

社會黨支部内には戰爭に對する黨の態度如何に就いて激烈なる論争が行はれつゝあつた。比較的少數の一派は、聯合國を援けてカイゼルを打倒するのが社會主義の大きな利益であると考へた。多數で而かも強硬なる一派は、戰爭は聯合國の資本主義が自己の勢力を世界の上に確立せんとする陰謀である、従つて我々社會主義者は黨の存立を賭してもアメリカの參戰に抗争せねばならぬと主張した。そしてこの兩派

は、結果の重大なると問題の複雑なるとに眩惑されて、一身の去就に迷ふ多数の平黨員の味方を得ようと、熱心に相争うた。ピータアの黨與は無論、極端なる非軍國主義者と行動を共にせんとする者であつた。この連中は彼が其の信任を贏ち得んと望んだ人々で、彼等は又黨内の騷擾派であつた。マクギヴネーの訓令は出來得る限り騷動を引起せと云ふのであつた。

I・W・Wの本部でも、戦争に對する彼等の態度が盛んに論争せられた。彼等の或者は同盟罷業によつて全國の主要産業を麻痺せしむべしと論じ、或者は之に反對して、徐かに彼等の組織運動を進めて最後の勝利を期すべしと主張した。是等の論争者の或者は亦た社會黨員でもあつて、同時に双方の集會で活躍しつゝあつた。其中の二名、即ちヘンダーソンとガス・リンドストームとは、ピータアと一緒に監獄に行つて、其後極めて親しくしてゐる者であつた。

ピータアは又平和論者とも會合した。彼等の多くは宗教的人々で、其中には二三の牧師、シェーカーのドナルド・ゴルドン、いろいろな種類の婦人——皆へば流血の

慘事を想ふにすら耐へざる感傷的な少女、愛子の征戰を欲せざる涙脆き母親などが加はつてゐた。ピーターは是等の母親達が「良心的反對者」でない事を明かに看取した。どの母親も自分の息子以外の何物をも考へてゐなかつた。ピーターはひどくそれを憤慨して、是等の母親の息子達が其の義務を盡してゐるか否かを調べるのを仕事にしたのだ。

ピーターは或る學校教師の宅で開かれた平和論者の集會に出席した。幾人かの悲痛極まる演説があつた。最後に女詩人の、若きアダ・ルースは起ち上つて斯う質問した。此の會合は單に言論に終始するものであるか、又は團體を組織して、徴兵に反對する何等かの行動を取らんとするものであるか、少くとも街頭に出づるを欲せざるか、抗議の大旗を翻す示威行列を舉行するを欲せざるか、同志ピーター・ガツヂの尊貴なる先蹤を踏んで入獄するを欲せざるか。

同志ピーターは最初から黙り込んでゐた爲に、特に其の意見を問はれた。ピーターはそれに答へて、自分は決して演説家を以て任ずるものではない。要するに、行



動は言語よりも更らに高聲に語るものである。故に自分は自から信ずる處を行動に示したものであると云つた。一座の者は之に恥ぢて、直ちに勇敢なる態度を執る事が決定された。アダ・ルースは非徴兵同盟の會長に、ドナルド・ゴルドンは幹事長に推された。——そして其の創立委員名簿は其の夜の中にマクギヴネーの手に渡つてゐた。

## (二十八)

アメリカは宣戦した。巨大なる軍事機關は運轉を開始した。愛國的感情の暴風雨は襲來しつゝあつた。國會は巨額の公債を可決した。全國的の宣傳機關は組織されつゝあつた。ピーターは毎朝アメリカ市の「タイムス」を讀んだ。それには愛國の熱情で燃えてゐる政治家の演説があり、僧侶の説教があり、諷刺畫があり、社説があつた。ピーターはそれ等をそつくり其まゝ取り入れた。彼の精神は此に至つて全く一變した。今日まで彼はたゞ彼自身の爲に活きつゝあつたが、彼にも彼自身が専心奉仕せらるべきほど重要なものでない事を自覺する時が來た。彼は良心の悶えに苦



しみ、彼自身の正義を疑うた。ピーターアは地上に生活した一切の人間と同じく、其の心中に或る宗教、或る理想を要求してゐた。

「主義者」は一種の宗教を持つてゐた。けれどもこの宗教はピーターアの心を惹くことが出来なかつた。第一にそれは野卑であつた。その歸依者の生活には美がなく、名聲がなく、權力の保證から來る生活の安易がなかつた。彼等は熱狂的で騒々しい。名聲は又人生の悲痛なる事實を繰返してくどくどと語る。こんな次第でピーターアの心はそれに反撥したのであつた。

ピーターアはアメリカ市の「タイムス」紙上に彼の要求しつゝある宗教を發見した。雪白の法衣を纏うて金色燦然たる祭壇より説教する僧侶、背後に名聲の後光を輝かして、到る處に民衆の歡呼を浴びつゝあつた政治家、唯だ其人の名前だけで事業の興亡盛衰を決し得る所の魔力を有する産業界の巨人、機智と教養とを有するアメリカ市「タイムス」の記者及び諷刺畫家、これ等の者は總べてピーターアの爲に、出來合ひの解り易い宗教と理想とを建設して、手渡しする事に協力しつゝあつた。ピータ

アは今後も尙ほ今日まで爲し來つた通りの事を爲すだらうが、彼は最早ピータア。ガツヂの名に於て、それを爲すのではない。彼は過去の至上至貴の歴史と、未來の無限の希望を有する一億一千萬の大國民の名に於て、それを爲すであらう。彼は愛國心の神聖なる名に於て、デモクラシーのヨリ神聖なる名に於て、それを爲すであらう。そして非常に便宜な事は、ガツフェーを首長とする秘密任務の一局を設立して莫大の費用を惜しまざる、アメリカ市の大實業家連が、彼が此の神聖なる事業に奉仕しつゝある間に、一週五十弗の俸給をピータアに支拂ひつゝある事であつた！。

この當時の流行は、言論に、文章に、競つて極端なる愛國心を鼓吹することであつた。ピータアは斯かる章句を讀んで、それを心中に嘔はぐみ育てた。それは終に彼の身體の一部の如く思はれ、彼自身の發明の如く考へられた。彼はこの精神的食物を貪り求めた。彼は愛國者中の愛國者となつた。超愛國者となつた。彼は赤い血を持つたアメリカ人であつた。彼は既レ臆病者ではなかつた。彼は百パーセントのアメリカ人であつた。若し百一パーセントのアメリカ人なる者があり得るならば、彼は

無論それであつたらう。ピータアは外國人を見た丈けでも、直ぐに怒り付けなくなるほどであつた。それで、彼は「赤」に關しても、どうしてやつたら、ほんとに自分の心が満足するだらうかと、可なり長いあいだ考へあぐんだ後に、漸く彼の感情を最もよく言ひ現した一公式を發見し得た。それは有名なる一僧侶の口から出たもので、「彼が若し其の方法を有するならば、彼はあらゆる「赤」を捕へて、彼の帆を持つた石の船に乗せ、地獄を行先きとして彼等を送り出すであらう」と云ふのであつた。

ピータアは何時まで經つても「赤」に對する鎮壓が開始せられぬので、日一日といふら立つた。一體、運輸トラストの秘密任務部にどれだけの證據を必要とするのだからかと怪しんだ。ピータアは此の疑問を幾度もマクギヴネーに質した。マクギヴネーは、「君は君だけの事をしてゐれば好い。君は毎週君の俸給を貰つてゐる。そんな事はどうでも宜いぢやないか」と答へた。然しピータアは更らに、

「處が、どうでも宜くないのです。私はモウ奴等の暴言に我慢が出来ないのです。」

私は奴等の口がきけない様にしてやりたいのです」と訴へた。

事實、ピーターは彼が其の利益を擁護しつゝある現制度に對する彼等の非難を以て、彼に對する個人的侮辱と考へた。勿論、彼等は總べてピーターを一個の同志と考へ、彼に對して深切なる友情を披瀝した。けれどもピーターは、彼等が眞實を發見する時に、彼を何と罵るかを善く知つてゐた。この想像上の罵言讒謗が、彼の胸を煮へくり返へらせた。實際また、密偵とか間牒とかいふ事が話題に上る時には、彼等は罵言讒謗にあらん限りの語を吐き出した。ピーターは無論、それを悉く自分の身に引宛てゝ、心中に燃える様な激怖を感じた。彼は復讐を望まざるを得なかつた。彼は是等の「赤」の口を引裂いて、彼自身と彼の味方とが何物であつたかを實證し得る日を待つてゐた。

(二十九)

一日、マクギヴネーは「君の爲にこゝに非常に面白い仕事がある。それは君に暫く今迄の貧乏人相手を止めて、上流社會に入り込んで貰はうと云ふのだ」と云つて、



地方の一都市に數百萬の大金持と評判される一青年が住まつてゐて、それが戦争反對の著述をした事、それが平和論者と騷擾の金主であつた事を話して聞せ、更らに「赤い印刷物の資金の供給者は皆なこんな連中で、このラックマンと云ふ男も矢張り金を出してると聞いてゐるが、此の男が明日この町にやつて來ると云ふので、其の用向を探る爲に君を煩はすことゝなつたのだ」と云つた。

斯うしてピータアは一人の若き百萬長者と會見する事となつた！ 彼は未だ曾つてさういふ多幸なる人間の一人をも目の前に見た事はなかつたが、彼は字を讀む事を學んでから以後、新聞紙上に現はるゝ寫眞入りの彼等に關する物語を好んで搜し求めた。そして子供が伽嘶に讀み耽ける様には是等の記事を耽讀した。彼等は苦痛と不便を超越し、現實を超越した別世界に屬する、彼の夢想の人物であつた。

ピータアは此の百萬長者の宮殿を爆破せんと欲する「赤」と交はつてゐる今日でも其の當時よりは尙ほ一層彼等富豪を崇拜し、渴仰してゐる。百萬長者に對する其の熱情は、彼等の非難攻撃せらるゝを聞く毎に高まつた。彼はどうかして彼等の何人

かに會見したいと思つて居た。そして熱誠に、恭謙に、彼の忠順を表明したいと思つてゐた。處が、今や彼は其の職業の一部として此の百萬長者の一人と會見する事となつた！

但しこの百萬長者ミリオネアは、普通人の想像の及ばざる或る理由の爲に、刺客や暗殺者に同情を與ふる拗ね者の一人であつた。鼠の様な顔をした男は熱心に、詳細に、この百萬長者の常規を外れた思想に就いて説明したが、それでも尙ほ彼は其人を景慕した。若きラックマンは小學校を經營してゐたが、この學校では學童の一人が悪事をした時には、教師は其の學童を罰する代りに教師自身を罰するのであつた。それでピーターは此の教育方法に深い興味を持つ者として訪ねて行かねばならぬ。少くともラックマンの著書の名だけは知つて居らねばならぬと、マクギネーはピーターに語つた。

「處で、私が行つて會へるでせうか。」

「そりやキット會へる。處で、會つた上の話だが、此方の付け目は、君が牢にまで

はいつて、平和論者として實際に多少の働きをしてゐる點にあるんだ。其處で、それを種に、君の非徴兵同盟に關係を付けさせるのが、君の仕事なんだが、それにはこの同盟を全國的の組織にして、言論以外に大々的に活動したいと、話を持ちかけて行くのだ。」

ラックマンの宿はホテル・ド・ソツトと聞いて、ピータアの胸はドキンと浪を打つた。彼は壯嚴と華麗とを兼ね備へたホテルの外觀を心に描いて、自分の様な者がはいつて行けるだらうかと疑つた。それをマクギヴネーに聞くと、彼はハツハと笑つて、「何も恐がる事はない、自分の家の氣になつてズツトはいつて行くサ。頭を眞直にして、生れ落ちるとから其處に住まつてた様な顔をして」と答へた。

マクギヴネーに云はすれば、まことに雜作のない事であつたが、ピータアが考へた所では、決してそう無雜作ではなかつた。が、ピータアは既にゼームス夫人から幾度となく同じ様な事を吹き込まれてゐたので、マクギヴネーの云ふ事の方がほんとうだらうと考へた。彼女は彼に教へて、他人のする事をよく見て置いて、それを

自分で練習する、そしていよく出来るようになったら、それ以外の歌は全く知らぬ様な顔をしてそれをするのですと云ひ、人生は總べて法螺です、誰も彼も皆な虚勢を張つてゐるのだから、安心して大膽に虚勢を張りなさいと激励したのであつた。

ピーターは晩の七時に、ホテル・ド・ソットの磨き立てた眞鍮の扉に歩へ寄つた。それにチョットと觸れると、果して青い制服を着けた立關番が何とも云はずに中からそれを引き開けた。ピーターはズットはいつて大跨に帳場に行つて、ラクマン氏はあるかと尋ねたが、金ポタンの給仕どもは見向きもしなかつた。

ラクマン氏は今不在であるが、八時には歸ると云ひ置いて行つたと云ふ事であつた。ピーターは其あいだ街路でも歩いて來ようと思つて引返へしかけたが、彼以外の人間は皆な虚勢を張つてると云ふ事をフット思ひ出した。彼は待合の室にはいつて行つて、大きな皮の肘掛椅子にドツかりと腰を下ろした。彼はジツと腰かけ續けてゐたが、誰も何とも云ふ者はなかつた。



ピーターは其處から帳場を監視して、ラックマン氏を捉へようとしたが、其處に出入する紳士達はどれもこれも皆な百萬長者と見せかけてゐる者ばかりで、どれがほんとの百萬長者ミリアホアだかさつぱり判らなかつた。

ピーターは二度ほど起つて行つて、ラックマン氏はもう歸つたかと尋ねたが、まだ歸つてゐなかつた。彼は次第に大膽になつて、待合室の中をぶらつきながら、其處にゐる紳士達を見廻はした。彼は待合室の中をぶらつきながらこの待合室の上が四方に突き出た大きな露臺になつてゐるを發見した。彼は其處に行つて見たくなくて、雲白な大理石の階段を登つた。其處には暗灰色の天鵝絨の椅子と寢椅子とが多くの座をなしてゐた。併し其處は一見して婦人の休憩所と察せられたので、彼は成るべく靜肅に腰かけて、ジットあたりを見渡した。

彼の正面に、一人の貴婦人が、眞白な、むき出しの片腕を突出して天鵝絨寢椅子に倚りかゝつてゐた。其の腕は大きな、肉付のいゝ腕であつた。其の持主も同様で

あつた。頭髮は薄い黄金色で、燦々と輝く多くの寶石を身に着けてゐた。彼女はそれからそれへと倦さうに目を移してゐたが、その目はチョツとピータアの上に止まつて、直ぐに次に動いた。彼はそれを自分の卑賤なるが爲と解した。

それにも拘はらず、彼は屢々彼女を偷み見た。やがて彼女は膝の上にあつた金の刺繡をした袋を開いた。先づあつた小さな白粉刷毛を取り出して、鼻と頬とを手際よくそつと叩いた。次に一種の赤い筆を取り出して唇をこすつた。其の次に金色の筆で眉毛を軽くゑどつた。最後に小さな毛拔を取り出したのであらう、顚のあたりから何やら引抜いた様であつた。それが彼女の巧妙な、念入りの化粧の終りであつた。

ピータアはズツと見渡すと、其處にも此處にも同じ様にお化粧が始まつた。ピータアは起ちあがつて、ぶら／＼歩きながら、大小、老若、肥瘠、美醜の貴婦人達に氣を付けて見たが、年取つた者ほど、醜い者ほど、念入りに化粧をする様であつた。

大きな寢椅子の一つに、水際立つて美しい一人の若い女が腰掛けてゐた。ピータ

アはそれを一目見て呼吸が止まる様に思つた。次いで小臈は競馬場を外れた馬の様にドッドと打ち出した。彼は彼の目を疑つた。併し彼の目は、この目が知つてゐると主張した。彼女はジム・ジャムポアの宮殿の侍女のネルであつた！。

彼女はピータアの方を見てゐなかつた。彼は引返して圓柱の影に隠れた。そして彼女の横顔にジツと見入つて、自分と自分の目との争ひを續けた。

彼女である筈がない。けれども彼女であつた。ネルは安らかに椅子に凭れかゝつて、ブルドッグの様な顔をした若い男と愉快さうに談笑しつゝあつた！。

ピータアはジツと見詰めて待つてゐた。其の間に彼は氣が狂ひさうになつた。彼はこの恐ろしい數分間に、眞の戀愛の如何に恐るべきものであるかを悟つた。若きゼニーも忘れ、ゼームス夫人も忘れたが、彼がどうしても忘れ得ぬ唯一人の女は、ジム・ジャムポアの侍女、アイルランド人のネルであつた。

間もなく二人は起ちあがつて、エレヴェーターの方に歩いて行つた。ピータアは其あとを追うた。併し彼は一緒にエレヴェーターの内には入らなかつた。それは彼

がプロレタリアの非軍國主義者としての服裝に、急に心付いたからであつた。それに  
ネルも、其の護衛兵も、帽子も被らず外套も着てゐないから、この建物外に出て行  
くものでない事も判つてゐた。で、彼は後から降りて行つて、待合室を捜し、食堂  
を捜し、地下室から漏れて來る音樂を聞いて、更らに其處に降りて行つた。それは  
神秘的な東洋風に裝飾された大廣間で、卓上には悉く模造花の房に隠された電燈が  
ついてゐた。そして其の一部は舞踏室に充てられてあつた。

ピータアは其の入口に立つて、ネルがブルドッグの様な顔をした男の腕に抱かれ  
て、ターキー・トロットや、フォックス・トロットを踏つてゐるのを、ジツト打守つ  
てゐた。やがて、ネルと若い男とは食卓の一ツに着いて食事を始めた。ピータアは  
尙ほそれを注視しながら、どうしたものだらうかと頻りに考へた。彼は現在の服裝  
で彼女に言葉をかけてはならぬ事を知つてゐた。彼は今は單に一ト役を演じつゝあ  
るに止まるといふ事を、彼女に領會せしむるは不可能だと考へた。こゝ死んだ人間  
の様に見える彼が、實は重大任務の立役者であり、無産階級の「一平和論者に扮した、



百バーセントの赤い血を持つた愛國者である事を領會させる事は、到底不可能であつた。彼は待たねばならなかつた。彼女に話しかける前に、彼の最上の着物を着て來ねばならなかつた。けれども、そんな事をしてゐる間に彼女は出て行つてしまふかも知れないのであつた。そうして彼はこの廣い大都市の中に、再び彼女を發見し得ぬかも知れないのであつた。

ピーターは一時間の後か、或は二時間の後かに、ヤツと手紙を書く事に考へが付いた。彼は階上に駆け上つて行つて、特にその爲に設けてある一室に飛び込んで、直ぐに筆を走らせた。

「ネルさん、私は昔馴染のピーター・ガツデです。私は幸ひに富を得ましたが、お目にかゝつて是非お話しねばならぬ事があります。どうか御都合をお知らせ下さ

ス。」

彼はこれに其の住所を書き添へて、封筒に封じ込めて、其の上に「ミス・ネル・ド  
ーリン」と書いた。そして待合室に出て行つて、金ボタンの給仕の中の者を捉へて

片隅へ連れて行つて、一弗紙幣を其手に握らせて、此の手紙は非常に大事な用で、此の貴女レデーは階下に待つてゐるのだから、直ぐに持つて行つて呉れと頼んだ。給仕は早速承知して階下に降りて行つた。彼も其あとを追うて入口から内部の様子を見てゐた。給仕はミス・ネル・ドリンと呼んで歩いて、彼女の直ぐ前でも其名を呼んだが、彼女は全く知らぬ顔をしてゐた。ピータアはもうどうすれば宜いかを知らなかつた。併し其の手紙はどうあつても彼女に渡さずには置かれなかつた。彼は給仕の歸つて来るのを待受けて、彼女を指ざし教へた。給仕は引返へして手紙を彼女の前に差出した。ピータアは彼女がそれを受取つたのを見ると、逃げる様に階上に駆け上つた。

彼は急に此處に来てゐた肝腎の用向を思ひ出して、帳場に飛んで行つてラックマン氏の在否を尋ねた。其時には、ラックマン氏はもう歸つて来て、支拂を済して、何處に行くとも云はずに出立した後であつた！。

彼はそれを聞いて愕然として色を失つた。

ピーターはマクギヴネー、夜半に會見する約束であつた。彼は出かけて行つて此の大失敗を告白せねばならなかつた。彼は彼の最善ベストを悉くしたと云つた。彼は幾度も帳場を尋ねて、待つて待つて待ち續けたが、ホテルの雇人共はラツクマンの歸つて來たのを知らせて呉れなかつたと云つた。これは嘘もおまけもない眞實であつたが、マクギヴネーの激怒を鎮靜させるに足らなかつた。彼は頭から怒鳴り付けた。

「こんな大きな魚は又と俺達の釣にかゝりやあしないのに、ザマを見る、二三千圓損をしやがつて！」

ピーターは惜しい事をしたものだと思つて、

「もう來ないでせうか。」と聞いた。

「來るものかい。外の者が彼奴ちいづの町で捉つかまへらあ。」

「それぢやいけないんですか。」

「馬鹿ッ！俺達は此處で彼奴を取ツつかまへて、ウンと絞つてやりたかつたんだ。」

鼠の様な顔をした大男は、こんな事までピータアに話す積りはなかつたんだが、腹立ちまぎれにツイ口を迂らしてしまつた。實を云ふと、彼は二三人の仲間と一緒になつて、この若い百萬長者ミリガネアの何かの尻尾を押へて、脅喝してウンと纏つた金を捲き上げようと企らんでゐたのであつた。で、旨く行けばピータアもその裾分けにあつたのだが、彼は自分の網に引懸つた鳥を逃がすほどの馬鹿者であつた。

ピータアも、そう聞いて見るといよく殘念で堪らない。彼は此の若い百萬長者ミリガネアをその町まで追ひかけて行つて、何とかしてマクギヅネーの手の中に呼び返へさうと献策した。マクギヅネーは尙ほさんぐに怒鳴り散らした後で、それも宜からう、だが愈々の事は一度仲間の者と相談した上で、ピータアに知らせようと答へた。處が何事だ、ピータアが翌日の夕刊を取り上げて見ると、その第一面に、特大の大標題の下に其日の朝の出來事として、青年富豪ラツクマン氏が自分の町で汽車を降りる處を取押へられ、學校は家宅搜索を受け、六名の教師は拘引せられ、小山ほどの社會主義文書は押收せられ、國家の安寧を脅かす恐るべき陰謀の巢窟が暴露された



といふ事が見て来た様に書き立てゝあつた！。

ピータアはこの新聞を讀んで、又親分に怒鳴られねばならぬと思つた。が 彼は別にそれを苦にもしななければ、どうしやうとも考へなかつた。彼にはその數分前にそれよりも更らに重大なる或る出來事が起つてゐた。それはなにからの態使ひが一通の手紙を持つて來た事であつた。彼は胸を轟かしながらそれを引き裂いて讀んだ。

「承知しました。本日午後二時にガツゲンハイムのデバートメント・ストアの待合室でお目にかゝります。但し神かけてネル・ドリリンをお忘れ下さい。あなたのエデイス・ユーステリスより」

ピータアは最上の晴れ衣に着換へて、指定の時刻よりは一時間も前に密會所を指して出かけた。ネルも眩しい様に着飾つてやつて來た。彼女は話しをしてゐる間に、折々自分の肩越しに後ろを振り返つて見た。そしてテット・クローザースは（それはブルドッグの様な顔をしてゐた、あの男の名であつたが）殘虐な暴君で、終日用事

のない人であるから、斯うして出て来るのは並大抵の事ではなかつたと云つた。

デパートメントの待合室は、勿論ピータアの熱烈な戀愛を披瀝するに適當な場所ではなかつたが、彼は此の機會を最も好く利用せねばならぬと考へた。それで彼は彼女を深く愛してゐた事、彼女以外のどんな女をも愛し得ない事、彼が多くの金を蓄積してゐる事、成功の階段を高く上つてゐる事を彼女に語つた。ネルは最早ジム・ジャムホーの殿堂で吹き出した様に、彼に對して吹き出さなかつた。それは、ピータア・ガツチが最早や皿洗ひではなくて、不思議に魅力を持つた一人前の男であつたからである。ネルは短刀直入に、今何をしてゐるかと尋ねた。ピータアは、それを云ふ事は出来ない、それは絶對緊要の秘密で、彼はその爲に宣誓をしてゐるのだと答へた。その當時は、獨探と爆彈陰謀との時代であり、又キングとカイゼルと、エムペロルとツアールとが、あらゆる戯曲的の目的を持つて、アメリカに莫大な金を注ぎ込んでゐる時代でもあつた。又その頃は、政府の請負と秘密取引の時代であり、ホテル・ド・ソットの如き大ホテルの控室や應接室で、時々刻々大きな財産が作られた

り、失はれたりした時代でもあつた。で、ネルは其處に眞實秘密のある事を信じた。そして婦人の常として、その秘密を推察するに彼女の全才能を働かせた。

彼女は最早ピータアに語る事を求めなかつた。併し彼女は巧みに會話を導いて、彼をして語らしめた。彼女は僅かの間に、ピータアが「赤」の最過激分子の大多數と親しくしてゐる事を知つた。彼がグーバー事件の内情に精通してゐる事を知つた。尙ほ又、アメリカ市の巨頭連がグーバー絞殺の目的を以て一百万弗を醸出した事、その金が有罪の宣告を確實にする爲に種々なる方面に撒きちらされた事、いろ／＼な方面に糸を引張られた事などを、可なり詳しく知つてゐる事をも知つた。ネルは二と二を合せて容易に四を算出した。彼女は突如、この合計を提げてピータアに攻め寄せた。ピータアは愕然として色を失うたが、一言もなく恐れ入つて一切を白狀してしまつた。——彼の計略と勳功と冒険とは悉くネルに話して聞かせたが、ゼニールとゼームス夫人に關する事柄は云ふ迄もなく省略された。

ピータアは今迄に儲けた金額と、これから儲けようとする金額とを語つた。尙ほ

ラツタマンの事をも語つて、若い百萬長者ミリガネアとその學校の寫眞の載つてゐる新聞をネルに示した。ネルはそれを見て、

「なんと云ふ好い玉だらう！ 残念だわ！」と少し昂奮して云つた。

ピータアはチョツと其の意味を解し兼ねて、

「どうして？ ネルさんはこんな主義者に同情が出来るのか」と聞いた。

「私は、この人があなたに取つては外の者を皆んな一緒にしたよりも一層値打ちがあつたのにと云つたのですよ」と彼女は答へた。

ネルは女であつた。彼女の心は直ちに事物の實際的方面に走つた。彼女は云つた。

「ピータアさん、それぢや、あなたは他人の手先きに使はれてたのぢやないの。そして其の人達が皆な甘い汗を吸つて、そのこぼれをあなたに呉れたのぢやないの。矢張りあなたには誰か氣を付けてあげる人が付いてなきや駄目ね。」

ピータアの心は躍つた。彼は叫んだ。



「あなたが付いて呉れませんか。」

「私にはテッドがあります。あの人が若し、私が此處に來た事を知らうものなら、それこそ大變で、あの人は私の首を切りますよ。あなたのも切りますよ。で、私は先づ第一には自分の身體を自由にしなさいやなりません。それは多分出來ると思ひますが、今も約束は出來ません。それは兎にかくピーターさん、私は及ばずながら、あなたの力になつて、マクギヴネーやガツフェーや其他の彼等が、今後あなたを鶉の鳥の様に使ふ事は出來なくしてあげますよ。」

斯う云つて彼女は更らに、それをどう云ふ風にするかを考へるには、相當時間もかゝる事だし、又、出資者の連中には知つてゐる人もあるので、聞き合はせても見たいし、明日も一度、何處かモット人目の少い場所で會はうと云つて、市の公園内の一地點を指定した。

(三十二)

ピーターはネルの甘口に乗せられて、すつかり好い氣になつて、も一度此ラツク

マン事件に就いて怒られる爲に、マクギヴネーの許に歸つて行く事をしなかつた。彼はマクギヴネーの嘲罵と叱責とに倦き倦きしてゐた。彼は曾てマクギヴネーに對して、彼の仕事が氣に入らないなら、自分で暫らく主義者に交はり、主義者となつて見るが好いと云つた事もある。ピータアはネルを想ふて、彼女の不確定の約束に嬉しさを込みあがらせつゝ、夜になつてまでも市中を歩き廻はつた。

彼等は翌日公園内で出會つた。彼等に尾行する者は一人もなかつた。彼等は隠れ場所を發見した。ネルは幾度か彼に接吻を許した。そして其の間に戰慄すべき計畫を彼に説き聞かせた。彼は今まで自分の多智多策に自惚れてゐたが、其の自惚はネル・ドリーソン（別名エデイス・ユーステース）の腦中に僅々二十四時間内に成熟した、雄大な構想、深刻な計畫の前に、忽然として消え失せてしまつた。

ピータアは骨の折れる仕事をして、時々はした金を貰ふに過ぎなかつたが、彼を手先きに使つた親分株は、彼の探り得た情報によつて大金を掴みつゝあつた。早い話が、このラックマンの場合でも、マクギヴネーは猫を袋から取逃したのだ。それ

と同様に、一切の他の場合でも、彼等は確かに金を、而かも大金を擱んだのである。其處で、ピータアはどうすれば善いかと考へるに、それは彼自身で仕事をするに限る。そして彼自身の手にはほんとの金を握るが善い。彼自身がこれ等の親分株の一人となるが善い。ピータアは事實を擱んで居り、人間も知つてゐる。而かもどう云ふ風に虚構が行はれるかを、グーバー事件を通じて知り過ぎるほど知つてゐる。で、今度は彼自身の爲に事件——ほんとに金になる事件を作り出さねばならぬ。あの「赤」組から國家を救ふのは國民の義務に相違ないが、彼が其の爲に取れる金を取つてはならぬと云ふ理由はない筈である。と云ふのがネルの推論であつた。

ネルは斯う推論して、金にするのに最も適當した人物を撰び出すに一夜を費した。そして大銀行家ニールス・アクカーマンに白羽の矢を立てた。アクカーマンは嘘の様な巨額の富を擁して、アメリカ市の金融王と呼ばれる人であつた。彼は老人であつた。ネルは又、彼が極めて臆病者である事を知つてゐた。彼は丁度その頃に病氣で床に就いてゐた。人は病氣に罹つた時には尙一層臆病になるものである。ピータア

が打たねばならぬ大芝居は、この老富豪ニールス・アカカーマンに對する爆彈陰謀を發見する事であつた。ピーターアには、親近な主義者の或者の間に恐ろしい考へを吹き込む事も、又、或る文書が彼等の間に發見せらるゝ様に仕組む事も、彼等の室に多少のダイナマイトを隠匿する事も出来る筈である。陰謀が發見されれば、無論全市を震撼させる。金融王の耳にもそれははいる。その發見者としてのピーターアの手柄も耳に入る。すれば、金融王は屹度ピーターアに莫大の謝禮を呉れるに相違ない。恐らく、ピーターアは旨く持ちかけて、金融王を主義者から防衛するお抱への秘密探偵となり得るであらう。斯うしてピーターアはほんとの金の蔓に手を繋ぐ事が出来る又、今まで彼を追ひ使つた代りに、今度はガツフエー！やマクギツネーを追ひ使ふ事も出来るだらう。と云ふのが、ネルの大膽なる謀略であつた。

ピーターアが若し一人立ちであつたならば、斯うまで危険な道を歩み得たかどうかは疑問であるが、彼は今ネルを持つてゐた。彼はネルの前に不敵の豪膽者を装はざるを得なかつた。彼は一議なくネルの計畫に同意して、彼が役を振り當て得るいろ



いゝな人物に就いて、更にネルと熟議した。

それについて最も格好な人物はバット・マクコルミックであつた。獰猛な、びくともせぬ面構へを持つて、何時も黙りこくつて、容易に人に腹を見せぬ「マク」は、ピータアが心中に描いた爆弾主義者その儘であつた。又、「マク」はピータアの個人的仇敵であつた。「マク」は今や石油地方の遊説から歸つて來て、ピータアを非難し、彼に關する噂を種々なる急進團體の間に傳播しつゝあつた。「マク」は主義者中の最危険なる主義者であつた！ 彼は確かに爆弾主義者の一人であらねはならぬ！。

次にジョー・エンゼルも亦た爆弾主義者に似つかはしい一人であつた。ピータアが此の男を知つたのは、アダ・ルースの「非徴兵同盟」の最近の集會であつた。彼は晴渡つた空の碧色その儘の眼と、艶の好い金髪とを持つて居り、兩頬には鬚の痕すら残つてゐるので、其の時、人々は名銓自稱のエンゼル(天使)だと戯談を云つたものだが、やがて口を開いた彼は、天使は天使でも、下界からの天使であつた。彼はピータアが今までも出會つた主義者中で、最も剛膽なる、最も挑戰的なる者であつ

た。

彼はアダ・ルースと、彼女の徴兵問題に對する感傷的の態度、文學的の態度を嘲笑して斯う云つた。今日に必要なものは、詩を作る事や決議を出す事ではない。軍服を着る事を拒絶する人間でもない。彼等に與へられたる銃を執り、彼等を訓練し、適當なる時機に反對の方向に面して銃を使用する人間である。遊説する事も、團結さす事も、それを必要とする場合には正當であつた。けれども、政府が勞働者に挑戦を敢てし、彼等を軍隊に強制する今日此際、急進運動に最も必要なるものは只だ行動の人である。

## (三十三)

斯うしてピータアとネルとは、ジョー・エンゼルとバット・マクコルミックとを中心人物として、虚構爆彈事件の詳細な筋書を作り上げる事に決定した。そしてピータアは彼等の一群を集合せしめて、爆彈と天誅とに彼等の談論を導き、彼等の熱中して來るを待つて、其中の最過激分子のポケットに、眞の陰謀會議に參集する事を

促す一札をソツと差し込む事になつた。その一札は、何人もそれをピーターに結付ける事の出来ない様に、ネルが書く事になつた。ネルは彼女の手提げから鉛筆と小さな剝取り紙を取出して、書き出した。

「君が若し直に勞働者の權利の爲に果斷なる一撃を欲するならば、來りて予に會せよ。」

彼女は筆を止めて「何處にしよう？」ピーターは「畫室スチユディオに於て」と教へた。ネルは其の通りに書いて、「これだけで好いの？」ピーターは更らに「十七號室」と附加へた。これは自から無政府主義者と稱する露國畫家ニキチンの室であつた。ネルは又その通りに書いた。彼等は尙ほ論議を續けて、彼女は更らに「明朝八時、一切の問答なしに、實行！」と書き添へた。此の時刻が挿入されたのは、丁度その晩、或る集會があつて、ピーターは其の席上で確かに爆彈陰謀を論議せしめ得ると信じたからであつた。

其の晩の集會は、獨り手にピーターの思ふ壺にはまつて行つた。碧眼の熱血漢エ

ンセルは第一に、労働者は羊の如く屠殺場に驅らるべきであるか、我等は一個の行動をも爲さざるべきであるかと絶叫して、直接行動論の火蓋を切つた。そして彼は彼の所論に反對する者があればあるほど、猛烈に直接行動を主張して、假りに民衆の一般的蜂起が不成功に終るとせよ、而して彼等が暗殺と恐怖手段とを執るの外なきに至るとせよ、彼等は尙ほ少くとも擄取階級に一個の教訓を與へ、彼等の生活より歡樂の一部を剝奪し得るではないかとまで云つた。ピーターは此の時、態と保守的態度を執つて、「君は眞に資本家が恐怖の爲に降服すると信ずるか」と質問した。エンセルは「さうだ、俺は信ずる！」と答へて、若し此の國の參戰に投票した總べての國會議員が直ちに戦線に送らるゝものであつたならば、我國は尙ほ平和の裡にあつたであらうと附け加へた。ピーターは抜からず、

「併し、開戦を決した者は國會議員ではない。それは彼等以上の資本家だ。」  
瑞典生れの水夫のガスも口を入れた。

「さうだ、全くさうだ！ その國には一ダスの大資本家がゐる。その大頭連をやつ



付けさへすれば直ぐに平和だよ。」

ピーターは、斯う來ればもう占めたもので、「それは誰々だ」と聞き返へした。其名は口々に叫ばれたが、ニールス・アクカーマンの名も直ぐに其の中に加へられた。このアクカーマンはグロバール反對資金に十萬弗を投げ出したと云ふので、特に主義者から敵視されてゐたのであつた。ジョー・エンセルは其の時、ピーターの目的を後援する爲に來てゐるかの様に、

「此の際、俺達に最も必要なものは、戰場で資本家の爲に戦ふと同じ様に、直ちに自分達の爲に勇敢に闘ふ少數の人間だ。」

ヘンダソンはそれに同意して、ムツツリ口調で斯う云つた。

「そうだとも。俺達は全く善人だつた……………と云はれるまで、ジツトして待つてゐたのだ。」

これが論議の終りであつたが、ピーターに取つては、これだけで充分であつた。彼は隙を狙つて小さな紙片をジョー・エンセル、ゼリー・ラッド、ヘンダソン及びガ



た。彼はネルがこんな事までしようとも、又自分の手で實際にダイナマイトを取扱はうとも考へてゐなかつた。彼はネルが何處で、どうしてそれを手に入れたかを訝しんだ。

そして自分がそれに携はらなくて済む事を神に祈つた。けれども、もうそれは遅かつた。ネルは云つた。

「あなたはこのストケースを本部へ持込むで、誰にも見つからない様に、ソツと置いて來るのです。早くしなげりや、もう直きに閉るんでせう。さうぢやなくて？」

「エ、もう皆な歸る時に閉めて來た。」

「ぢや、鍵は誰が持つてるの？」

「書記のグレッツデイが。」

「何とか云つて借りて來る譯には行かないの？」

「そんな事をしなくても部屋にははかれる。火事の時に使ふ非常梯子もあれば、窓だつて直きに関けられる。」

「そりや好い。ちやもう少し待ちませう。誰か跡戻りして來るといけなから。」

彼等はぶら／＼歩き出したが、ネルはピータアの精神状態を不安に思つたのであらう、其ストトケースは尙ほ自分の手で提げてゐた。彼女は其の間に自分の計畫を説明した。

「私は其の室内に置いて來る書類を二通り準備して來ました。その一つは引裂いて紙屑籠の中に投げ込んで來るのですが、これは何か大きな計畫の草稿の一部と見せかけたもので、それを又マクコルミツクのものと思はせる爲に、「マク」の署名もして置きました。も一ツは圖面で、それには何とも書いてはないが、警察には直さに判るアクカーマン家の平面圖です。そしてそれにはアクカーマンの寢室を示す爲に×の符號を附けて置きました。處で、これを何とかしてマクコルミツクに結び付けねばならぬのですが、其の室に此の男の物は何か置いてないでせうか。」

ピータアは暫らく考へた後に、書棚にマクコルミツクの寄贈した、彼の署名のある數冊の書籍のあつた事を思ひ出した。そして彼等は其の中のサボタージュに關す



る一冊の間に、この圖面を挟み込んで置く事にした。

ピータアの膝はガタ／＼慄へだした。併し彼は絶えず心中に、彼が百パーセントのアメリカ人である事、あらゆる愛國者が銘々にその役割を勤めつゝある事、彼の役割が是等の主義者から國家を救ふにある事を想ひ續けた、決してこれしきの事にひるんではならぬと考へた。彼等はI. W. W.の本部に到着した。ピータアは扉に攀ぢ登つて非常梯子に取付いた、ネルは大事に大事を取つてストークリスを彼の手に渡した。ピータアは壊れた窓を開けて室内に潜り込んだ。

彼は戸棚の隅に手早くストークリスを隠匿した。次に右のポケットからタイプライターで切つてある紙を取出して、それを小さく引裂いて反古籠に突き込んだ。其の次には左のポケットからアクカーマン家の圖面を取出して、書棚に近づいた。震へる手先でマツチを摺つて、「サボタージュ」と題した小さな赤表紙の一冊を拔出し、それに圖面を挿入れて又元の處に突き込んだ。そうして彼は非常梯子を攀ぢ下つて地上に飛びおり、扉を飛び越えて路次を走り出ると、其處にネルが待つてゐた。ピ

「タアはホツとして「國家の爲だ！」と腹の中に囁いた。

(三十五)

仕事は一段落を告げた。後に残つてゐるのは、翌朝マクコルミツクを密會所に引張り出す事だけであつた。ネルはマクコルミツクの住所に宛て、速達便を出した。それは多分、翌朝七時に配達される筈であつたが、それにはタイプライターで次の如く書かれてあつた。

「マクよ、今朝八時に晝室<sup>スナユデイ</sup>十七號室に來れ。一大事なり。計畫はスツかり出來上つた。俺はもう自分の役目だけの事はして了つた。ジョウ。」

ネルの胸算用では、マクコルミツクはそれをエンゼルからの通牒だと思つて、何が何やら判らぬながら吃度出掛けて來る。其處で、皆の顔の揃つた瞬間を狙つて探偵に手入れをさせねばならぬ。彼等が銘々に受取つた召集狀を比べて見れば、直ぐに怪しいと云ふ事になつて解散するに定つてゐる。で、ソレと云へば直ぐに踏み込んで引くゝるだけの手配をして置かねばならぬ。それには相當の時間を見込んで、

マクギヴネーの耳に入れて置かねばならぬ。と云ふのであつた。

處で、これには重大なる基礎があつた。若しマクギヴネーに時間を與へれば、彼がピーターアとの會談を要求するに極まつてゐる。ネルは因よりピーターアがマクギヴネーの詰問に對抗し得ようとは思はなかつた。ピーターア自身も、云ふ迄もなく、彼女と同意見であつた。で、ネルはピーターアが非常に弱い男である事を前提として、彼に出來さうな計畫を立てた。それは電話を利用するのであつた。ピーターアはネルの指導の下に、彼の語るべき一語一語を暗誦し、尙ほあらゆる點にネルの抜目のない注意を受けて、I・W・W本部の曲り角にある終夜營業の賣藥店に飛び込んで行つた。そして其の電話室から、マクギヴネーの自宅を呼び出した。マクギヴネーは確かに寢て居たのであらう、ピーターアが、彼の聲を聞くまでに、可なり手間が取れた。が、ピーターアは忽ち彼の寢呆け眼を覺まさせた。

「マクギヴネーさん、ダイナマイト事件です！」

「何ッ？」

「I・W・Wがストトケースに爆弾を仕込んでます。彼奴等は今夜誰かをやりつけに出掛けました。」

「何？ どうしたと云ふのだ。一體、誰を？」

「それは分りません。私は唯だその一部分を聞いただけです。奴等は出掛けました。私は後をつけねばなりません。私は奴等を見失ふ虞があります。もう遅いかも知れません。私の云ふ事をお聞きなさい、私は奴等を追跡せねばならんです。」

「聞いているよ。で、俺にどうしろと云ふんだね。」

「私が隙を得次第に一度電話をかけますから、あなたは人手を準備しておいて下さい。十二人ほど！ 自動車も用意して、直ぐに駆けつけられる様にね。判りましたか。」

「よろしい。だが——」

「私はこれで御免を蒙ります。私は奴等を見失ひます。私はもう一秒も猶豫してはゐられません！。あなたは電話にかゝつて待つて下さい。人間の用意をして、——」



何も彼も用意をして。判りましたか。」

「判つたよ。だがマア聞け。間違ぢやないだらうね、吃度。」

「ハイ、決して間違ぢやありません！。奴等はダイナマイトを持つてゐます。何んでもニールスと云ふ人です。」

「何？、ニールスがどうした？」

「それが、奴等が殺さうとしてゐる人なんです。私はもう行かなさやなりません。どうぞ至急に準備を願ひます。左様なら！」

ピータアは受話器を掛けた。彼は自分の芝居に自分で感激して、ほんとに爆弾を持つてゐるI・W・Wの陰謀者を捕縛しようとしてゐるかの様に、躍り上つて賣薬屋の店を走り出た。

外にはネルが待つてゐた。二人は再び街路を歩いた。彼等は小公園に入つてベンチの一ツに腰をおろした。ピータアの兩脚は最早や彼の上體を支へ得なかつた。ネルは再び起つて行つて、そこらのベンチに人のゐないのを確めた。そしてピータア

を促して直ぐに次の場面の本讀みに取りかゝつた。それはピータアが獨りで舞臺に立たねばならぬ時期が眼の前にぶら下つてゐたからであつた。ピータアはそれを恐れてゐた。彼はもう投げ出してしまひたかつた。此上の深入りは出来ぬと云つてしまひたかつた。彼は引返へしてマクギヅネーに一切を白狀してしまひたかつた。ネルは彼が今どんな考へをしてゐるか悉く見透して、そのヘコタレから彼を救はねばならぬと考へた。彼女は彼の傍近く寄り添うて、話を進めながら自分の手を彼の手の上に置いた。ピータアはそれと同時に、何とも云はれない微妙な衝動を感じた。彼は自分の腕をネルの首にかけた。ネルは彼に抱擁を許したばかりでなく、ぐつと彼を抱き締めた。ピータアは忽然として一個の勇士となつた。彼は大膽不敵の冒險を敢行する者であつた。其の時、ネルは叫んだ。「我國は戦争を始めてるのです！。それにこの悪魔どもは戦争を止めようとしてるのです！」

斯うしてピータアは遂に、千萬人と雖も我往かんの概を示した。彼は其の双腕に彼女を抱き締めて、夜明前の數時間をベンチの上に過ごした。

やがて、東の方は紅くなつて來た。鳥は歌ひ出した。旭日はピータアの疲れ切つた青い顔を照らした。ネルの美しい頬の色は見るかげもなく褪めてゐた。そして活動の時が來た。ピータアは、速達郵便が正當に配達されたかどうかを監視する爲にマルコルミクの住居の附近に出かけて行つた。

それは到着した。ピータアはマクコルミツクが家を出て、スチニヂオ畫室の方向に歩いて行くのを見た。併し集會には時間が餘り早や過ぎるので、多分途中で朝飯を食ふのだらうと推測した。果して其の通りで、「マク」は小さなミルクホールにはいつて行つた。ピータアは近くの電話に駆けつけて、マクギヴネーを呼び出した。

「モシ、私は昨夜あれから彼奴等を見失つてしまつて、今やツと見付け出した處なんです。奴等は今朝會合する事になつてます。奴等を一網にやツ付けるのは其時ですよ。」

「何處に集るのだ？」

「スチユヂオの十七號室にです。ですが、其の本人共が皆な集つた事を私が確かめる迄は、あなたの方の人は一人でも其處に近づかぬ様に願ひますよ。」

「オイ、マア俺の云ふ事を聞け、ガツチ！。それは確かに間違のない事實か。」

「神に誓つて！。奴等はダイナマイトを可なり澤山手に入れてるのです。」

「奴等はそれをどうしてゐるんだ？」

「奴等はその中のいくらかを本部に置いてるのですが、その残りはどうしたか知りません。奴等は昨夜それを持ち出したのですが、私はそれを見失つてしまつたのです。處が、今朝になつて、私はポケットに紙片のはいつてるのに氣が付きました。見ると、私にも來いとそれに書いてあるのです。」

「天佑だ！」と、マクギヅネーは叫んだ。

「今お話した通りで、事件の正體は判つたのですが、あなたの方の人々の支度は？」

「もう出來てる。」

「ぢや、其の人達は第七街とワシントン街の交叉點に寄越して、あなたは第八街とワ



シントン街の交又點に來て下さい。成るべくお早くね。」

「承知した。」

ピーターは受話器を懸けると直ぐに飛び出して、マクギヴネーとの密會所に急行した。彼は立つてゐられなくて其の建物の入口の階段に腰をおろした。時刻はズンズン過ぎて行くが、マクギヴネーは中々顔を見せない。ピーターはもう氣が氣でない。マクギヴネーには電話がほんとに判らなかつたんだらうか！、自動車が壞れたのだらうか！、手遅れになりはしまいか。彼等が陥穽に感附いて逃げ出しはしまいかと氣を揉んでゐる中に、十分過ぎた。十五分過ぎた。二十分過ぎた。やつと一臺の自動車が突進して來た。マクギヴネーは歩み出た。自動車は走り去つた。ピーターはマクギヴネーに目くばせして、扉ドアの影に隠れた。マクギヴネーも續いてはいつて行つた。

「もう來てるか。」

「ど、どうだか判りません。奴等は八時に來ると云つてました！」

「その書いたものを見せろ！」

マクギヴネーは命令した。ピータアは自分用として持つてゐた、ネルの手になつた例の紙片を取出した。マクギヴネーはズーツとそれに目を通して、

「これがお前のポケットにはいつてゐたのか。」

「そ、そうです。」

「誰が入れたか心當りはないのか。」

「エ、、ですが、私の考へでは、多分、（マクギヴネー）エンゼルが——」

マクギヴネーはチョツと時計を見て、まだ二十分ある。」

「人は揃ひましたか。」

「ウム、十二人出来た。處で、これからお前の考へは？」

ピータアは吃りながら彼の思ふ處を述べた。それは、ピータアは直ぐ向ひの食料品屋にはいつて、何か食ふ振をして目越しに此の入口を監視する。そして當の人物が中にはいつて行くのを見た瞬間に、彼は走り出して、町の角にある薬屋にゐるマ

クギヅネーに信號をしよう。マクギヅネーはガツフエーの手先の一人として、主義者の間に善く知られてゐるから、彼は妻を隠くしてゐなければならぬと云ふのであつた。

マクギヅネーに異議はなかつた。ピータアは街路を横切つて、誰の目にもかゝらずに食料品屋にはいつた。彼はクラツカーとチースとを買つて、實際の箱の上に腰かけて、それを食つてる様に見せかけた。併し彼の手は恐怖に慄へて、食物は一つも口には入らなかつた。

彼の眼は古ばけた晝室ビルディングの入口にへばりついた様に止まつてゐた。間もなく——占めたツ！——彼はマクコルミツクの歩いて来るのを見た！。彼の姿はビルディングの建物内に消えた。二分ばかり後にガスが來た。それから五分と經たぬ内にジヨード・エンゼルとヘンダーソンとが來た。彼等は話に夢中になつて足早やに歩いてゐた。テツキリ、彼等は不思議な通知書に就いて語り合つてゐるものと想像した。

ピーターは最早や胴震ひが止まらなくなつた。人に怪しまれてはならぬと思つて、必死の努力でクラッカーとチーズとを食はうとするが、それは皆な粉々になつて自分の膝と床の上とにこぼれ落ちるのであつた。彼はゼリー・ラッドの來るのを待つべきであらうか、それとも彼はもう既に來てゐるものと考へるべきであらうか。彼は起ち上つて入口からそつと覗いて見ると、彼の最後の犠牲がのそり／＼と向ふからやつて來た。ピーターはもう彼が中にはいつて行くのを待つてゐられなくて、折よく通り合はせた自働車の影に隠れて走り出た。彼が藥屋までの半分途を走つた頃は、マクギヴネーはもう彼を見附けて、次の四ツ角に向つて駆け出してゐた。

二臺の自働車は屈強な探偵を載せて驀進して來た。彼は急いで濱町に駆け込んで、後をも見ずに二二町駆け抜けた。すると彼はもう全く力が抜けてしまつて、一足も動けなくなつた。彼は倒れる様に笠石の上に腰をさろして、聲を立て、泣き出した。



ピータアは今や全くおぢけきつてゐた。彼は勿論、マクギヅネーの前に顔出しすべきである事を知つてゐた。けれども彼には逆もそんな事は出来なかつた。彼の欲するものは唯だネルだけであつた。ネルは勿論そうあるべき事を知つてゐたので、八時半にモ一度公園で會ふ事にして、その以前に他人に會ふ事を堅く差止めてゐたのであつた。彼女は其間に着換に歸つて、コヒーと煙草とで精力を恢復した。そして此の時には早く夏の朝の公園の花と同じく清新に、嫣然として其處に彼を待受けてゐた。

彼女はモ一度彼を勇士に作り上げねばならなかつた。彼女は此の白日の下にありながら、彼の双腕を自分の體にまつはらしめた。彼女は彼の耳に口を寄せて男らしい男になつて、彼女の愛に相當する男になれと囁いた。

ネルは云つた。彼は一體何を恐るるのであるか。彼等は彼に關する何事をも知つてゐない、又知り得る善もない。彼は實際、始めから終まで、この陰謀には少しも

關與してゐないのである。で彼は如何なる事が起つて來ようとも、決して避易するには及ばない。唯だ彼女と一緒に本讀みをした筋書を變へずに何處までも突張つて行くだけである。

ネルはモ一度ピータアに其の筋書のおさらへをさせた。斯うしてピータアの査問に對する準備は漸く完了した。彼はアメリカン・ハウスの四百二十七號室に歸つて行つた。彼は寢床の上に疲れ切つた身體を投げ出した。そしてウツラ／＼と夢現の境を續けてゐると、やがてガチリと扉の開く音がした。跳ね起きると、其處に探偵の一人がはいつて來た。それはハムメットと云ふ男であつた。

「お早よう、ガッチ君、大將は君を捕縛して來いといふのです。」

「捕縛！」

斯う絶叫したピータアの眼前には、一味の主義者と同じ監房に打ち込まれた彼の姿がスツト現はれた。

「そうだよ。僕達は主義者を殘らさずフン縛つたんだから、君を見遁して置くと、奴

等は君に嫌疑をかけるに定つてゐる。だから、何處かで、公然捕まる事にしようぢやないか。」

ピータアはそれもそうだと思つて、チョツと考へた後に、場所をミリヤム・ヤンコウイチの家と定めた。彼女は眞の主義者で彼には好感を持つてゐなかつたけれども、彼が彼女の家で捕縛されたならば、彼女の彼に對する態度は一變するであらう。「左翼」の一人としての彼の地歩も確立されるであらう。彼はアドレスをハムメツトに與へて、「出来るだけ早く來て呉れ玉へ。あの女は僕を疑つて追ひ出すかも知れないから」と附加へた。ハムメツトは笑ひながら、「よろしい。僕等は直ぐに行くから、君は巡査が追跡してゐるから、暫らく匿くして呉れと云つて行き玉へ。」

ピータアは市内の猶太人町に急行して、或る貸長屋の最上階に駆け上つて、其一室の扉を叩いた。扉を開けたのは袖口を捲り上げて、腕を石鹼の泡だらけにした、太つた女であつた。「ハイ、ミリヤムは家にゐます。あれは社會主義を口にした爲に解雇されて、目下失業してゐるのです」と云つた。それはミリヤムの母親ヤンコウイ

ツチ夫人であつた。それからミリヤムは其の室に出て來たが、「ゼニ・トッド」と口で云ふほど明白に目に云はせた、冷たい一瞥をこの思ひがけない訪問者に投げかけたばかりで、一語をも發しなかつた。

併し、ピータアが、先ほどI・W・W本部に出かけて行くと、巡査が嚴重に警戒してゐた。人の噂では陰謀が發覺して警察の手入れ中だと云ふ事であつた。自分は幸に群集の外に出されたので、逃げ出して來たと話し終ると、彼女は急に態度を一變して、彼を内側の一室に連れ込んで、彼が答へ得ざる無數の質問を連發した。彼は唯だ昨夜そこに集會があつた事以外には何事も知らない。今、本を借りに行つたら其の騒ぎで直ぐに逃げ出して來たと云ふだけであつた。

それから半時間後に扉が激しく叩かれた。ピータアは寢臺の下に潜り込んだ。扉は押破られた。彼は命令する怒聲と、ミリヤム母子の猛烈なる抗議とを聞いた。音から判断すると、はいつて來た者共は、家財道具をそちこちに投出してゐる様だつたが、突然手が寢臺の下にはいつて來て、ピータアは足首を引つ捉まへられた。そし



て四人の正服巡査に對抗すべく引出された。

これ等の巡査はピータアが密偵である事を知らなかつた。彼等はほんとの爆弾犯人を捕縛する積りであつた。で、ピータアにはまことに始末が悪るかつた。二人は彼の手首を一本づつしつかりと掴み、一人は拳銃を彼とミリヤムとに突き附けた。其の間に他の一人は、爆弾がありはせぬかと、彼のポケットを搜索した。併しそこからは何にも出て來なかつた。彼等はチヨット當惑した様に見えたが、やがて、彼を小突き廻はし、引ずり廻はした。彼等は明かに彼の頭を打碎く口實を得ようとしてゐたのであつた。ピータアは注意してそんな口實を彼等に與へなかつた。彼は驚き恐れて小さくなつて何にも知らぬと云ふだけで少しも手向ひはしなかつた。

彼等は終にピータアに手錠を籍めて置いて、拳銃を持つた一人を番人にして、三人で家宅搜索に取りかかつたが、其處には赤表紙の恐ろしい標題の本こそあれ、爆弾もなければ刀劍もなく、肉切庖丁とミリヤムの舌以上に危険なものは何一ツ出て來なかつた。ミリヤムはそれ見た事かと云はぬばかりに黒い眼を輝かして、彼女の

信ずる處を明かに警官に語つた。彼女は、I. W. W本部に何事が起つたかは知らぬけれども、それが何事であつたにせよ、それが確かに拵へ事である事を知つてゐると明言した。彼女は斯うして、自分の捕縛を彼等に挑んだ。其の亂暴な目的は殆んど達せられさうであつたが、警官達は洗濯物と共に洗濯桶を蹴返へすに満足して、洪水の真中に驚き騒ぐヤンコウイチ夫人を残して立ち去つた。

## (三十八)

彼等は群がり來る隣家の人々を押分けてピータアを外に連れ出し、自働車に乗せて警察本部に引揚げた。其處でも彼等は正式の手續によつて彼を監房内に監禁した。「何時まで此處に打ち込んで置かれるのだらう？」と彼は急に不安を感じたのであつたが、一時間ばかり経つと、一人の看守がやつて來て、或一室に連れ込んだ。見ると、其處にはマクギヴネーがある、ハムメットがある、市の警察部の長官がある、次席検事がある、そして最後に最も怖ろしいガツフェーもゐた。そしてピータアの訊問を始めたのは、この運輸トラストの探偵長であつた。

「オイ、ガツヂ。お前の今度の仕事は、こりや一體どういふ事なのだ。」

ピータアは横面をビシヤリとやられた様にはツとした。彼の心は沈んだ。彼の顎は垂れた。彼は白痴の様にジツと目を据へてゐたが、それでも尙ほ「頑張りなさい！頑張りなさい！最後まで頑張りなさい！」と云つたネルの最後の嚴肅な數語を記憶してゐた。

「何とおつしやるのですか、ガネフエーさん。」

「まあ、其の椅子に掛ける。そしてお前がこの事件に就いて知つてる事を残らず話して呉れ。先づ抑もの初まりから、一切残らず——一言も漏らさず此處でモ一度話して呉れ。」

其處で、ピータアは、彼が前夜I・W・W本部の集會に出席した事から始めた。其の席上では、この團體が一向活動しないと云ふ事と、徴兵反對運動に如何なる手段方法を探るべきかと云ふ事が、長時間に互つて討議されたのであつた。で、彼はそれ等の團體組織に關する議論や、暴力、ダイナマイト、及び暗殺に關する討論から、片

附けてしまはるべきものとして、ニールス・アリカーマン其他の資本家の名が列擧せられた事を詳細に陳べ立てたが、それは甚だしく修飾せられ、誇張せられたものであつた。

次に彼は、集會が解散した後、フト數人の者が囁き合つてゐるのに氣附いた事を語つた。それは斯うであつた。彼は書棚から得物を取出す振りをしてジョー・エンゼルとゼリー・ラッドとに接近した。そして彼は「ダイナマイト」とか「戸棚の中のスト・ケース」とか、「ニールス」とか云ふ切れ／＼の言葉を聞いた。それから皆で戸外に出た度に氣を附けて見ると、エンゼルのポケットがふくらんでゐた。其處でこれはてつきり爆彈を持つて仕事に出かけるのだと鑑定して、彼は藥屋の店に駆けつけてマクギヴネーに電話をかけた。處がこの電話が案外手間取つた爲に、再び戸外に飛び出した時には、彼はもう何處に行つたか、影も形も見えなかつた。ピータアは非常に失望したが、マクギヴネーに合はせる顔もなかつたので、彼等を盲探しに探しながら幾時間も街路を歩き廻はつた。足は疲れて棒の様になつた。けれ



ども彼等の行衛は皆目知れないので、公園内で休みながら夜を明してしまつた。すると朝になつて、ポケットに紙片のはいつてるのを見付け出した。そしてそれはこの陰謀に彼を引き入れる積りで、誰かゝそつと入れたものである事が判つた。それで彼は早速マクギヴネーに通告した。これが彼の知つてゐる全部であつた。

今度はマクギヴネーが反問を始めた。「お前はジョー・エンゼルがゼリー・ラッドに話をしてゐるのを聞いたか。」「お前は又彼が外に誰かと話をしてゐるのを聞いたか。」「お前は誰か外の者の話をしてゐるのを聞いたか。お前はジョー・エンゼルの云つた事を聞いたのか。」「ピーターはこれに對して一々繰り返して答へねばならなかつたが、彼はその時、ネルに教へられた通りに、この外にもう一句だけ思ひ出して、それを繰り返した。即ち「あれはマックがサボ・キャットの中に仕舞つた。」といふ暗號めいた言葉を聞いたと云ふのであつた。そして彼は其の時、外の連中がチラと顔を見合はしたのを見たと言ふのであつた。そして尙ほ「其の意味は何の事だか私には判りませんが。」と附加へた。

褐色の髭を持つた肥大漢の警察の長官は、其の「サボ・キャット！」といふ言葉に首を傾けて、「それはサボタージユの事を云ふのだらう、そうぢやないかね。」と傍らの人々に聞いた。と鼠の様な顔をした男は「そうです」と答へた。

「お前は何かサボタージユに關したものが事務所にあるのを知らないか。」と、ガツフエーはピーターアに尋問した。

ピーターアはジーツと考へる眞似をした。

「イ、エ、私は何も知りません。」

彼等は一二分間、語り合つた。長官はマクコルミツクの所持品は全部彼の室から押收したから、其内からこの不可解を解く何等かの手掛りが得られるかも知れないと云つた。ガツフエーは電話口へ出掛けて行つて、ピーターアのよく知つてゐるI・W・W本部の番號を呼んだ。

「ア、お前か。今こちらでね、サボタージユに關係のあるものが何か其處の室にあるかどうかを知る必要があるんだが、何かないかね。道具でも、繪でも、書いたもの

でも、何でもよいのだが。」

その答は否定的であつたらしい。ガツフエーは更らに斯う云つた。

「モツとよく搜して呉れ。そして若し何か見付かつたら、俺は長官室に居るから直ぐに呼んで呉れ。」

ガツフエーは受話器を懸けて、ピータアに向き直つた。

「オイ、ガツヂ、お前の話はそれだけなのか。もう外に話す事はないのか。」

「ハイ、外には何もお話しする事はありません。」

「よしッ それぢやもう好い加減に兜を脱いたらどうだ。俺達はこれをお前の拵へ事だと睨んでゐるのだ。そして決して取り上げない積りなんだ。」

ピータアは一言もなく、ジーツとガツフエーを見詰めた。ガツフエーは拳を固めて二三步前に出た。ピータアは又た、以前の爆弾騒ぎの當時の様な、ひどい目に逢ふのであらうか。

探偵長は尙ほ語を續けた。

「ガツヂ、それでは今……でその證據を見せてやらうが、エンゼルはお前の云ふ事實を——ゼリー・ラッドと話をした事も、ポケットが爆弾で脹れてゐた事も、其他の事も、悉く絶對に否認してゐるよ！」

「だつて、私は嘘は云ひません！ ガツフエーさん。けども、彼は無論否認するでせうよ！」

ピータアは咽喉が塞つた様で、やつと斯う云つたゞけであつたが、彼にはガツフエーが爆弾犯人の否認を斯うまで本氣に取上げてゐるのが不思議でならなかつた。「ぢや心得の爲にほんとの事を教へてやるが、ガツヂ、あのエンゼルは此方の人間なんだよ。去年からあの仲間に入れてあるんだ。」

ピータアの世界は地の底が抜けた、彼は全身ふるくと慄へながら、恐怖と絶望の地獄にズン／＼と落ちて行つた。ジョー・エンゼルが彼自身と同じく密偵であつた！。何時の集會にも爆弾と暗殺を語り、無遠慮な豪語によつて最も大膽なる革命家と畏怖された碧眼兒エンゼルが、密偵エンゼルであつた！。ピータアは愚かにも



彼の上に虚構を構成せんとしたのであつた。

(三十九)

ピーターは萬事休した。彼は又もとの穴に打ち込まれるであらう！。彼はもう又と日の光りを仰ぎ得ないかも知れない！。彼の耳には千萬人の亡者の叫喚が聞え、最後の審判の來を告げ渡る千萬の喇叭の音が聞えた。けれども、彼はこの喧囂と混亂の中に、どうした事か、「頑張りなさいよ、ピーターさん。何處までも頑張りなさいよ！」と繰り返し繰返し囁くネルの聲を聞いた。

彼は拳を握り固めて、彼の求刑者をキツと睨み返した。

「ガッツフェーさん、神が私の證人です。私はこの事件に就いては今申上げた以外には何事も存じませぬ。それは正に存在した事實なのです。で、若しジョー・エンゼルがそれと違つた事を話したとすれば、それは彼が嘘を云つてるのです。」

「併し彼は何故嘘を云はねばならないのだ？」

「私は何故だか知りません。私はそんな事は少しも知りません！」

彼は子供の時から今に至るまで人をだます事に馴されてゐた利益を、此の時に於いて一度に刈り取つた。この恐怖と絶望の眞最中に於ても、彼の僅かに残つてゐる心は、尙ほ計略を考へつゝあつた。

「恐らく、エンゼルはあなたに對して何か虚構を企らんでゐたんでせう！。恐らく彼は彼自身に或る計畫を立てゝゐたのでせう。其處へ私が出て行つて、それを打壊した——私が餘り早くそれを暴露したと云ふのでせう。それは兎に角、私は私に與へられた眞直な事實をあなたに申上げてゐるのです。」

ピータアの苦腦と努力とは、彼の言葉にガツフェーの確認を牽くだけの威力を與へた。彼は又、そういふ計略の斷言をしてゐる中に、ガツフェーの腹の中は口で云ふほど確に定まつてゐるのではない事を、彼の眼の中に讀み得たのであつた。ガツフェーは又尋問を始めた。

「お前はそのスートケースを見たか」

「イ、エ、私はどんなスートケースも見つた事はありません。私は彼處にスートケー

スがあつたかどうか知りません。私はたゞジョー・エンゼルが「ストークス」と云つたのを聞いた事と、彼が「ダトナマイト」と云つたのを聞いた事を知つて居ます。」

「お前は誰か、其處で何か書いてゐるのを見なかつたか。」

「イ、エ、私は書いてるのは見ませんでした。けれども、私はヘンダソンがテーブルに向つて、ポケットから書類を取出して何かしてゐるのを見ました。私は又、彼がそれを引裂いて反古籠に投げ込んだのを見ました。」

ピーターは此時又、外の役人等が互ひに顔を見合はせたのを見た。彼は今がモ一步踏み込んで行くべき時である事を悟つた。

一瞬間の後、役人等に心機の轉換が生じて、その爲にピーターは救はるゝ事となつた。電話のベルが鳴つた。長官はそれに應じたが、ガツフェーに顎で知らせた。ガツフェーは直ぐにそれに代つて受話器を取つた。彼は調子づいて「ウン！本が？」と叫んだ。そして又「ウン 圖面？ 何の圖面だ？……よし、誰か一人自動車に乗

つて、其の本と圖面とを直ぐに長官の役所に持つて來い。大急ぎだぞ。萬事がそれで決定するのだから。」

ガツフェーは他の役人等に向つて云つた

「書棚の中でサポタージユに關する本を一冊見つけ出したそうぞ。そして其の本の間には何處かの家の圖面が一枚挟んであつて、本にはマクコルミツクの署名があると云ふ事だ。」

彼等の中に暫らく感歎の語が交はされた。ピータアは彼等が再び彼に向ふ前に考へる時間を持つた。今度は長官が代つて彼に訊問した。次に次席検事が訊問した。

彼は彼の筋書を固執した。彼は叫んだ「あなたは私がこんな事を虚構するほど氣が狂つてるとお考へになるのですか。何處から私がその材料を得たでせう。何處で私が其ダイナマイトを得たのでせう。」——こゝで彼は失敗したと思つた。未だ一人もストケースの内にダイナマイトがあつた事を彼に語つた者はなかつた！。彼は必死になつてそれを言ひ抜ける途を考へてゐたが、不思議にも五人が五人ながらそれ



を聞き流してしまつた。彼等は皆なスートケースの内にダイナマイトのあつた事を知つてゐた。そしてそれを確定的事實と一圖に思ひ込んでゐたので、ピータアがそれを知つてゐるか否かは未定であると云ふ事實を、全然看過したのであつた。

ピータアは大急ぎでこの危険地帯から脱れ出ようとした。

「ジョー・エンゼルは、彼がゼリー・ラットとコソ／＼話をしてゐた事も否認したのですか。」

ガッフエーはそれに答へて、

「それは記憶せぬと云つてる。或は何か話したかも知れぬが、それも特別な話ではなく、陰謀など、云ふ事は形もない事だと云つてるよ。」

「彼はダイナマイトの行使を説いた事も否認するのですか。」

「一般的議論としてそれを説いた事はあるだらう。けれども、秘密に話をした事は決してないと云つてゐる。」

機敏に働く頓才で活路を發見したピータアは叫んだ。

「併し私は聞きました！。私は確かに聞いた事を記憶してゐます。それは解散する直ぐ前でした。誰かゞボツ／＼電燈を消し始めた時です。彼は私を後ろにして立つてました。私は彼の眞後ろにある書棚の前まで行きました。」

その時、次席検事が口を出した。彼は年の若い、外の役人よりは幾分だまし易い男であつた。「それがジョー・エンゼルであつた事に疑ひはないのか。」と彼は尋ねた。

「無論、彼でありました！。私が間違へる筈がありません。」ピータアは斯う云つたが、其の言葉尻は消えて聲の調子は幾らかまごついてる様にも聞き取られた。

「お前は彼がコン／＼話をしてゐたと云ふのか。」

「ハイ、彼はコン／＼話をして居りました。」

「それが彼以外の者であつたと云ふ事は有り得ないのか。」

「何故ですか、私にはそんな判断は出来ません。私は確かにそれはジョー・エンゼ  
ルであつたと考へます。併し私は振り向いて、書記のグラッチャーと話をして、それ

からグルリと向き直つて、書棚の前に行きました。」

「其の時に幾人その室にゐたか。」

「二十人ばかりと思ひます。」

「電燈はち前がグルリと向き直つた前に消えてゐたのか、又は後にか。」

「それは記憶して居りません。多分後でありましたらう。」

今まで途方に呉れてゐたピーターは、此とき突然大聲を揚げて云つた。

「私は何と云ふ馬鹿でせう。私はグルリと廻つて彼方に行く前に、あの男と一度口を利いて、それがジョー・エンゼルであつた事を確めて置かねばならぬ處でした。併し私は其時に確かに彼だと思ひました。そして今でもあれが外の誰かであらうとはどうしても考へられませんが。」

「それならば、彼と話をしてゐた男がゼリー・ラッドである事は確かなのか。」

「ハイ、それは私の方を向いて居ましたから、確にゼリー・ラッドでありました。」

「サボンキヤット云々に就いて答をしたのは、ラッドであつたか、又は他の者であ

つたか。」

此處で、ピーターは答にまごついた。それが爲に又た長たらしい反對訊問が行はれたが、其訊問の最中に、一人の探偵がマクコルミツクの署名のあるサポタージュに關する本と、其の間に挟まれた家の平面圖とを特つて來た。

彼等は其の圖面を見る爲に寄り集つた。其の中の幾人かは、一見して「これはニールス・アクカーマンの邸ぢやあるまいか」と考へた。長官は電話にかゝつて其の大銀行家の秘書を呼び出した。そしてどうか其處でチョツとアクカーマン家の間取をおつしやつて頂きたいと云つて、其の答に耳を澄した。それから、又「此の圖面には、家の北側で、中心から少し西に寄つた處に十字の記號があるのですが、何でせうこれは。」と聞いて「へー驚きましたなあ！」と答へ、更らに「では直ぐに御宅の建築圖面を持つて私の事務所まで御出でを願ひたいのです。それとこれと比べて見たいのですから」と云つた。電話を終つた長官は向き直つて、「この十字の記號はアクカーマン翁の寢所に充てられた二階の寢室を示すものである！」と他の人々に説



明した。

彼等はこの陰謀を微細な點まで跡づけて行けば行くほど判らない事が出て來て、恰かも八幡の藪知らずに入つた様に感じた。兎に角こんな巧妙な複雑な、計畫がピターアの様な者に考へ出せる筈がないと云ふので、彼は一先づ監房に退げられた。

(四十)

ピターアは監房に退げられた儘で二日間放つて置かれた。彼は彼の連呼に關して何人の助言も受けず、何等の暗示をも得なかつた。役人は彼に新聞を許さなかつたが、彼の持つてる金は取上げなかつた。で、彼は次の日に看守の一人に贈賄する事に成功して、アメリカ市「タイムス」を一枚手に入れた。

過去三十年間、「タイムス」は赤化運動と革命とに反對する、法律と秩序の擁護者として立つてゐるものであつた。「タイムス」は又過去三十年、勞働運動者も、社會主義者も、無政府主義者も、實は總て同一物で、彼等は悉く皆な唯一の武器、即ちダイナマイトに絶對の信頼を置くものであると主張してゐた。其處に今度の事件で

ある。彼等は彼等の多年の主張を實證するものとして、全力を盡してサモ大事件の様  
様に書き立てた。そして其の間には、重なる陰謀者（ピータアをもその一人に加へ  
て）の寫眞を初めとして I・W・W 本部や、スートケース、ダイナマイト、導火  
線、時計仕掛の寫眞、主謀者が、捕縛された藝術ビルディングの寫眞、その  
巢窟の所有者たる露國の無政府主義者ニキチンの寫眞まで挿入してあつた。又、こ  
の事件に關する評論欄には僧侶、銀行家、實業家等、謂ゆる名士の意見や訪問記が  
數段に涉つて載せられてあり、社説欄には、グーバー事件、ラックマン事件、及び  
數日前の平和主義の三僧侶逮捕事件まで引用して、彼等が三十年來主張し來つた處  
を再説してゐた。

ピータアは、これが皆な眇たる密偵ピータア・ガツヂの力に負ふものである事を  
想ひ起して、會心の笑を禁じ得なかつた。彼は實に得意であつた。けれども翻つて  
考へて見れば隨分危ない事をしたものであつた。彼には尙ほ穴の中に打込まれて、  
ガツフェーから拷問される恐怖を持つてゐたが、同時に又、この陰謀事件が官憲に

對する大なる誘惑である事を信じてゐた。もう此處まで來れば彼等が何と思つても事件は獨りでに發展する。彼等はそれに引摺られて行く。彼等はピータアに味方するの外はないと信じた。

果してその通りで、二日目の夕方、一人の看守がやつて來て、お前は釋放されたと云つて、監獄の門外まで送り出して呉れた。

ピータアは其の足で直ぐにアメリカン・ハウスの四百二十七號室に行つた。其處にはマクギヅネーが彼を待つてゐた。マクギヅネーはピータアに對する嫌疑に就いては何事も云はなかつた。ピータアもそれに就いては何事も云はなかつた。マクギヅネーは只、過ぎ去つた事は過ぎ去つた事だと解釋した。官憲は牡丹餅で頬ぺたを叩かれた様な、この運命の贈物を黙つて取上げようとするのであつた。數年間、彼はこれ等の「赤」を捕へようと焦つてゐた。然るに今ま魔術のように、不思議にも彼等を捉へ得たのであつた！。

マクギヅネーは先づ口を開いた。

「ねえ、ガツヂ、お前は斯う云ふ事になつたのだ。お前は嫌疑によつて捕縛されて、  
厳しい訊問を受けて、拷問までされたが、お前は何事も知つてゐないと云ふ點で警  
察を満足させる事が出来た。で、警察はお前を釋放したと云ふ事になつたんだ。そ  
れから俺達は外の二人も同時に釋放した。これはお前の上にかゝる疑ひを防ぐ爲な  
んだ。そこで、お前は又「赤」の仲間に歸つて行つて、奴等が何をしてゐるか、何を  
計畫してゐるか、お前が探ぐり得る總べてを探ぐるのだ。無論、奴等は今度の事件  
を總て虚構だとわめきちらしてゐるだらうが、お前は奴等がどの程度までそれを知  
てるかを探り出さねばならぬ。併しお前は、云ふ迄もない事だが、何をするにも餘  
程用心してかゝらねば駄目だぞ。どうせ當分は目を附けられるに定つてるからね。  
それで、俺達は成るべくお前をほんものと思はせる爲に、お前の室も家宅搜索をし  
て、引搔き廻はして置いたんだがね。」

ピータアは直ぐに外に飛び出した。併し彼は主義者、誰にも逢ひに行かなかつた。  
彼は尾行の有無を確める爲に、一時間ばかり市内を歩き廻つた。そしてネルを電話



に呼び出た。二人はそれから一時間後に公園内で會合した。ネルは飛び付く様に彼の双腕に抱かれて、狂喜した彼に接吻した。彼は勿論、一切の事を彼女に語つた。彼女はジョー・エンゼルが密偵であつたと聞いた時に、ハッと驚いてジツと彼を見つめたが、やがて大聲を出して笑つた。彼は斯うして、彼が如何にこの窮地に處し如何にしてそれを脱出したかを語り終つた時に、始めて眞に彼女の愛を贏ち得たと信じた。

ネルは云つた。「ピータアさん、私達は彼等が安心して靜止してゐるこの隙を狙つて、活動せねばなりませんよ。新聞はあんなに書き立てゝゐます。ニールス・アクカーマン老人はびく／＼ものでゐるに相違ありません。私は今夜此の手紙を郵便に出す積りにしてゐるのですが、御覽なさい、タイプが前のはまるで異つてゐるでせう。私はタイプライターの販賣店に行つて、新しい器械を一つ借りて來て、それでこれを打つたのですよ。斯うして置きや、この手紙を私が書いた事は判りつこはないのですからねえ。」

その手紙は自宅に於けるニールス・アクカーマンに宛てたもので、「必親展」と特に書き添へてあつた。ピーターアはそれを抜いて讀んだ。

貴下の友人として茲に一言御注意いたします。「赤」は御宅に間牒を入れてゐます。彼等は御宅の圖面を持つてゐました。然るに警察は未だ其の真相を捉らへる事が出来ず、その無能をあなたの前にさらけ出す事を欲しませぬから、是等の事實をあなたには隠してゐます。幸ひに此處に、この陰謀を逸早く發見した一人があります。あなたは彼にお會ひなさい。警察は成るべくあなたのお目にかゝらぬ事を望んでゐますから、あなたの方からそれを要求なさるがよろしい。併しこの手紙の事は仰しやらぬ様に願ひます。若し又それでもあなたがその本人にお會ひになれぬ様でしたら、私は更らにあなたに手紙を差し上げます。あなたがこの秘密を嚴守なさるならば、私は最後まであなたに助力を惜しまぬものであります。併しあなたが誰かにそれを話しなされば、私は最早や御助力いたしかねる事と御承知下さい。

ネルは、彼がこの手紙を受取つてからが、いよいよ大事の瀬戸際である、ピーターア

は其の際に於て如何に爲すべきかを今から充分に習得して置かねばならぬと云つて、金融王との會見に對するピータアの訓練を開始した。ピータアは今や彼女の判決を何よりも恐れてゐるのであるからジツと忍耐して、其の教訓を學ぶより外はなかつた。而かも彼は最後に一言一行、彼女の教へた通りにして、それ以外の事は決してせぬと、眞顔になつて彼女に約束したのであつた。斯うして彼は接吻の褒賞を得て、グツスリ一眠りする爲に其の住居に歸て行つた。

翌朝、彼はマクギヴネーに叱言の種を與へぬ爲に、多少の仕事をして置く積りで外に出た。彼は先づミリヤム・ヤンコウイツチに會ひに行つた。ミリヤムは前の日は打つて變つて直ぐに彼の兩手を捉らへて堅く握り締めた。彼はゼニーに對する彼の罪が既に償はれた事を知つた。彼はモ一度犠牲者になりおぼせた。彼がどんな風に拷問にかけられたかを語ると、彼女は又、あの時洗濯桶の水が床板から漏つて、其下に住まつてゐる貧乏な労働者の一家の食事を大なしにした事など話して聞かせた。

彼女は又、「赤」の一人として見た、この虚構に關するあらゆる事を彼に話した。即ち辯護士のアンドリュースは入監者に面會を申請したが許可されなかつた事、保釋が許されない事、ミリヤムは前の晩にアンドリュースの家で開かれた集會に出席した事、其の席上でこの事件が論議された事、I・W・Wの者は口を揃へてこれを極悪の虚構だと論じ立ててゐる事、紙片に書かれた召集狀が明かに偽物である事、ダイナマイトは疑ひもなく警察側から持込んだものである事、警察が之をI・W・W本部の閉鎖と、急進分子捕縛の口實にした事などをそれからそれと話して、彼等の最大罪惡は云ふ迄もなく宣傳である、新聞紙に滿載せられつゝある恐るべき虚構捏造である、殊に今朝の「タイムス」の如きは、主義者に對する私刑の、立派な、間違のない煽動であると憤慨した。

## (四十二)

ミリヤムの家を出たピーターは四百二十七號室に歸つて行つた。ニールス・アクカーマンが翌朝手紙を見たならば、一分間も猶豫せぬだらうと云ふのが、ネルの意



見であつたが、果してその通りで、ピーターは鏡臺の上に「急にお前に會はねばならぬ事が出来た、俺の行くまで待つてゝ呉れ。」といふ口上書が載つてゐるのを發見した。

ピーターは待つてゐた。可なり時間が経つてからマクギヴェネーがはいつて来て、彼に向つて腰かけた。そして如何にも勿體振つた調子で語り出した。

「扱、ピーター・ガツヂ、お前は知つてゐるね、俺がお前の友人である事を。」

「ハイ、無論知つてゐます。」

「お前は俺のお蔭で助かつたのだよ。俺が若し口を利かなかつたら、大將はお前を直ぐに穴の中に打ち込んで、お前にあのダイナマイトを持ち込んだ事を白状させずにや置かなかつたんだよ。俺はお前にそれを知つて貰はねばならぬ。そればかりぢやない、俺は今後もお前の味方をするから、お前も俺の味方になつて、正直に付合つて貰ひたいのだよ。」

「承知しました。何故ですか今更そんな事を仰しやるのは」

其處で、マクギヴネーはその説明に入つた。——ニールス・アクカーマンは警察が何事か彼に隠してゐると疑つてゐて、彼に對する今度の陰謀を發見した男に會はねばならぬと云つて、どうしても承知しない。勿論マクギヴネーはそれを好まなかつた。けれどもニールス・アクカーマンの命令は即ち法律であり、又彼は實際上、ピータアの雇主であるのだから、ガツフェーであらうと、市の官憲の誰であらうと、彼を欺く事を敢てし得ないのであつた。

「彼は今度の事件についてお前に尋問して、彼の知り得る一切の事を知らうとしてゐるのだ。其處でも前は俺達が爲し得る限りの一切の事をしてゐて、決して怠慢でなかつた事を彼に諒解させねばならぬのだ。」

ピータアは眞面目くさつて、必ずそうする事を約束したが、マクギヴネーは尙ほ満足しなかつた。彼は繰返へし繰返へし、團結一致と、同僚に對する忠實の重要な事とを力説して、それを深くピータアの胸中に印象させようとした。ピータアは再び彼の忠實を誓つた。併し彼はこれを機會として、陰謀發見の報酬問題を切り出

した。彼は他の事には臆病であるが、金の事となるとなか／＼頑強で、ブルドックの様に食ひ付いたら放さない。散々押問答の末とう／＼金一千弗をせしめてしまつた。一千弗は彼に取つては大金であつた。彼は喜び勇んでニールス・アクカーマン邸へと出掛けた。そして彼は途中で、この臨時の一千弗はネルに内證にして置くのが得策であると考へた。女と云ふ者は金を見せたが最後、それを取り上げるか、使はせてしまふかせねば承知せぬものである！。

(四十二)

ニールス・アクカーマンの邸宅は、市から遠く離れた郊外の、森に圍まれた一小丘の上にあつた。ピータアは電車の終點から二マイルの道を、日に照らされて歩いたので、身體が熱くなつて、額からは汗が滲み出た。廣い邸の周圍には高さ十尺もある黄銅製の柵がズツと建て列ねられ、正面には同じく黄銅製の大きな門扉が堅く閉ざれてゐた。それには「犬に御用心」と書いた木札が下がつてゐた。又、門内には銃を肩にした三人の番兵が歩いてゐた。これは最近のダイナマイト陰謀の結果であ

つたが、ピーターアは何時も斯うだと感違ひして、偉いものだと感心してしまつた。

ピーターアは門の片側にあるベルを押した。門番が出て來た。彼は教へられた通り「アーサー・ジーン・マクギリカツデー」の變名を用ひた。門番は内に入つて電話をかけた。再び出て來て、やつとピーターアがはいる丈けに門を開いた。ピーターアは門内で番兵の身體検査を受けたが、幾度か巡查に捕まつた経験のある彼は、それを怒るところではなく、いよ／＼ニールス・アクカーマンの偉らい人である事を感じたのである。それが濟むと、番人の一人は彼を案内して森の中の長い砂利道を通つて、丘上の宮殿の大理石の階段まで行つて、そこで支那人の下部頭しもべがしらに彼を引渡した。

アクカーマン家の内部は宛然一個の美術館であつた。普通ならば、彼はこの大富豪の金に飽かした裝飾の美に眩惑されて、何を見るときもなく過ぎたであらうが、彼の精神は此とき悉く彼の危険なる仕事に集中されてゐた。彼はネルがよく見ておけると云つたものを注意して見た。天鵝絨のカーペットを敷いた階段を登りながら、彼は或るカーテンの後ろには人の隠れる餘地があり、それと相對した壁には西班牙騎



士の晝があるのに目を付けた。彼は此の二つの見覚えを利用し得る場合があるだらう。

彼等はホテル・ド・ソトの回廊の様な廣間に出た。其の突當りで下部頭は極めて徐かに扉を叩いた。ピータアは薄暗い廣い部屋に送り込まれた。下部頭は音もなく扉を閉めて引き退つた。ピータアは居場所に迷つてモヂ／＼してゐた。室の奥の方から、病人らしい弱い咳が續いて三度聞えた。其處には四本柱の、其上に覆布の懸つた寢臺があつて、枕に倚りかゝつた一人の人がゐた。續いて又咳が聞えた。次いで「此方へと云ふ」細い聲が聞えた。ピータアは進んで寢臺から十尺ばかり離れた處で止まつた。彼の手は尙ほ其の帽子を擱んでゐた。

「あゝお前——（ゴホン、ゴホン）——お前の名は何と云ふのかね。」

「ガツヂと申します」

「お前が——（ゴホン、ゴホン）——その「赤」の事を精しく知つてると云ふ人なんだね。」

「ハイ、閣下。」

寢臺の上の人は二三分置きに咳をした。そして其の度毎に、音を立てる事を恥ぢる様に手を静かに口の處に持つて行くのが見えた。漸次にピータアの目は暗いのに馴れて來た。ニールス・アクカーマンは、膨れた筋肉の弛んだ頬と顎とを持つた老人で眼の下に大きな黒いたるみがあつた。彼の頭はまる禿で、其の上に刺繡をした黒い絹の帽子が載つてゐた。又寢臺の側には、コップに藥瓶、丸藥入、電話機などを載せたテーブルが置いてあつた。そして電話が數分置きにかゝつて來るので、ピータアは其の度毎に、つゝましやかにそれを待たねばならなかつた。

老人はその暗い眼を訪問者の上に注いで、「あの手紙は誰が書いたのかね」と、しやがれ聲で囁いた。ピータアは固よりそれを豫期してゐた。

「どんな手紙ですか、閣下。」

「私に、お前に會へと云つてよこした手紙だよ。」

「閣下、私はそんな事は少しも存知ませぬ。」

「お前は私に——（ゴホン、ゴホン）——匿名の手紙を出しはしないと云ふのかね」  
「イ、エ、決してそんな事は致しません。」

「それではお前の友人が書いたに相違ない。」

「どうで御座いますか、事によると、何か警察の敵になる者かも知れません。」

「ぢや「赤」が私の宅に間牒を入れてゐると云ふのは、一體どうした事かね。」

「手紙にそんな事が書いてありましたのですか。」

「そうだ」

「それはチト大袈裟に申し上げたので御座いませう。私も確かな事は申し兼ねますが、それに就いては多少思ひ當る事があります。併しそれにはチヨツと詳しいお話  
をせねばなりません。」

「よろしい。ぢや其處の椅子にお掛け。」

寢臺の直ぐ側に一個の椅子があつたが、餘り接近するのは失禮だらうと考へてピ  
「タアはそれをズツと手前に引寄せて腰をおろしたが、まだ其の手には帽子を持つ

てゐて、頻りにそれを捻くつてゐた。老人はいら／＼して、「その帽子は下に置きなさい」と云つた。ピータアは恐れ入つて、帽子を椅子の下に差し込んだ。

## (四十三)

老富豪は衰弱して居り、又病氣でもあつたが、精神は中々確かであつた。殊に其の眼はピータアを射通すかと思はれた。ピータアは一言一句にも注意せねばならぬ。チヨツと一口迂らしても、此處では直ちにそれが致命傷となるであらうと考へた。

老人はピータアがどうして主義者の中にはいつて行つたかと云ふ事から始めて、今度の陰謀事件に關する一部始終を話して聞かせて呉れと望んだ。ピータアは主義者の危険なる事と、國家の秩序と進歩とに文化とを支持する階級に對する彼の忠誠とに特に重きを措いて、彼が過激運動に注意する事となつた次第を述べた。「斯かる運動は當然禁止せらるべきものであります。」と叫んだ。老銀行家は首肯いた。

ピータアは更に言葉を續けた。

「其處で私は自分に云ひました。俺は進んで彼等の爲す處を發見せねばならぬ」と。



そして私は彼等の演説を聞きに行きました。段々に私は彼等の主義を信ずる振りをしてしました。然るに警察はどうです。實際我々の警察は眠つてゐるのです。警察はこれ等の煽動者が何をしてゐるか、何を説いてゐるかを知らないのです。彼等が不平不満なる暴民の間にどんなに強固な支持者を得てゐるかを知らないのです。

ピーターは更らに進んで、社會革命の宣傳がどんな方法でなされて居り、法律と秩序に對する陰謀、財産と富者の生命に對する陰謀がどんな風に企てられてゐるかを詳しく説いた。ピーターは其の間にも、この老富豪の様子に目を附けてゐたが、水を飲まうとしたその手が著るしく慄へてゐるのを見た。突然、電話のベルが鳴つた。老人の聲は強くなつて、急ぎ込んで來た。「あゝ成程、彼等は保釋を願つてゐるのだな。オイ、アングス、それは無茶だよ。そんな事を許して堪るものか！。お前は直ぐに判事に會つて、彼奴等が確かに監獄内にゐる事を確かめて來なさい。」

老銀行家は又も激しく咳き入つた。それが治まると、

「所でガツヂ、その話は私も多少知つてゐる。私の聞きたいのは、私に對する今度の

陰謀に就いてぢや。お前は どうしてこれを發見したか、それを話して呉れ。」

ピーターは委しくそれを語つたが、アクカーマンに關する點には甚だしく修飾を加へた。即ち、彼等は何時もアクカーマンの事を語り合つて居る事、特に彼に對して敵意を懷いてゐる事を告げた。老銀行家は叫んだ。

「そりや、何故だ？ どう云ふ譯だ？」

「彼等は、あなたが彼等と闘つてゐらつしやると考へてゐるのです。」

「併し私はそんな事をしてはゐない。それは 違だよ。」

「彼等はあなたがグーバーを縊る爲に金をお出しになつたと云つてます。彼等はあなたの事を——お怒りになつては困ります。」

「いゝともいゝとも。何と云つてるかね。」

「彼等はあなたの事を「黄金の悪魔」と云つてます。又、アメリカ市の金融王とも云つてます。」

「ナニ王！」と老銀行家は叫んで、「何を馬鹿な事を云ふのだ！。ガツヂ、それは間

抜けた新聞の云ひ草だよ。今ぢや私も貧乏人で私よりか金もあり、権力もある者がこの市内だけでも二ダースもゐるよ。見たまへ——」と云ひかけて、老人はひどく又咳き上げて枕の上に突つ伏してしまつた。ピーターアは謹んで老人の起き上るのを待つてゐた。彼は勿論、この老人が貧乏だと云ふ事をほんとはしなかつた。老人はやがて氣力を恢復して。

「併し、ガッツ、私は殺されたくないよ。お前に云つて置くが、私はまだ死にたくないよ。」

「ハイ、それはもう仰しやるまでも御座いませぬ。」

殺されたくない、死にたくないと云ふアクカーマンの心持は、ピーターアにも能く解るのであつた。然しアクカーマンはその心持をよく彼に呑み込ませて置かねばならぬと考へたのであらう、話を續けてゐる間に度々それを繰り返へして、而かも其の都度それが新しく考へ付いた珍らしい意見でもあるかの様に眞面目腐つて斷言するのであつた。

「私は殺されたくないよ、ガツヂ、私はどんな事があつても、彼奴等には私の身體に手を付けさせたくないよ。我々は彼奴等を出し抜いてやらねばならぬ。我々は警戒策——あらゆる警戒策——真にあらゆる警戒策——を講せねばならぬ、」

「ピーターも一段眞面目になつて、

「私が今日伺ひましたのも全くその爲で御座います。私はあらゆる事を致しませう。私共はあらゆる事を致しませう。私は確かにいたします。」

「これに就いて警察では何をしてる？　ガツノエーの事務局では何をしてる？　彼等は無能だと云ふのか。」

「では、お話いたしますが、私に取つては少々困る事なんで御座います。御承知の通り彼等は私を使つて——。」

老銀行家は叫んだ。

「馬鹿を云ひなさい！　私がお前を使つてゐるのだよ。私がこの仕事に金を出してゐるのだ。そして私は唯だ事實を——あらゆる事實を——聞かうと云ふのだ。」



「處が、彼等は私に對して誠に善くして呉れますので——」

「オイ、何でも構はんから、あらゆる事實を語せと云ふに！」

老人は斯う叱り付けた。彼は非常にせつかちな老人で、自分の問うた事を直ぐに聞かねば承知が出来ないのであつた。「彼等は一體何をしてるのだ？」

ピーターアは極めて鄭寧に答へた。

「私は御參考になる事柄をいくらでもお話しますが、これは是非ともあなたと私だけの間の事にして頂かなければなりません。」

「よろしい？。シテその話と云ふのは？」

「若しあなたが誰かにそれをほのめかしてもなされば、私は直ぐに銃殺されてしまひます。」

「お前は決して殺されない様に、私がしてやる。若し必要があれば、私が直接お前を雇つても宜い。」

「アア、あなたはまだお判りにならない。これは一つの大きな機械です。如何にあな

たでも、これの運轉に逆らふ事は出来ません。あなたはそれを能く御理解になつて正當にそれを運用なさらねばいけません。そう致しますれば、私は何處までもあなたのお力になります。私は、私があなたのお力になり得る事を善く存じて居りますが、其以前に先づ私の説明を聞いて頂いて、或事について十分の御諒會を願はねばなりません。」

「よろしい。早く話さない、一體それはどう云ふ事なんだ」

「ハイ、それは斯うで御座います。警察も、ガツフェーさん達も、一生懸命にやつては居りますが、何分にもあの人達にはまだ充分に呑み込めて居ない所があります。それと云ふのが、この仕事は非常に複雑でありまして、あの人達にはまだ充分な経験がないからであります。あの人達は普通の犯罪人は扱ひ馴れてゐますが。「赤」は別です。御存じの通りの難物です。普通の犯罪人は團結して居りませぬ。少くとも彼等の間には相互に助け合ふといふ事がありませぬ。けれども「赤」にはそれがありません。若しあなたが彼等を征伐なされば、彼等は防戦します。彼等は又「宣傳」と云

ふ事をやります。この宣傳が極めて危険なもので、——若しあなたが下手な事をなされば、彼等はその爲に愈々益々強くなりませす」

「そうだ、それは私も知つてる、それで？」

「次に警察は、彼等がどんなに危険であるかを知つてゐません。それを幾ら話してもほんとにしません。併し私は、赤の中に全國の富豪と大政治家とを悉く暗殺しようとしてゐる一團體のある事を、ズツと以前から知つてゐました。其奴等は暗殺の準備として富豪に密偵を附けて居りました。その連中は、あなた方には到底、どうしてそれが知れてたか説明の出來ない事を、可なり多く知つてゐます。それで、私は、奴等がお宅に對しても必ず何かしてゐると考へた であります」

「ぢや私の家に對して何をしてると云ふのだ。モツと判然と云ひなさい」

「私は何時も氣を付けて、奴等の話をチヨイ／＼拾ひ聞きしてゐるのですが、マツクといふ者が——」

「マツク？」

「それは今ま監獄にはいつてゐるマクコルミックと申す者であります。これはI・W・Wの指導者で、危険人物中の最危険人物であります。私はこの男が他の男とゴツゴツ話合つてゐるのを聞いて、ゾツとしました。それは或る富豪を殺すと云ふのでした。此奴はその富豪を附け狙つて、其の自宅で射殺してやるのだと云つてゐました!。私はその富豪の名は聞漏しました。——何故かと申しますれば、私が聞いてる事を奴等に感づかれぬ爲に、一度その場を外したからであります。奴等は非常に疑ひぶかくて、話をしながらも始終肩越しに背後を見廻して居ります。で、私は一度そこを離れてモ一度歸つて來ると。マクコルミックは何事かをハツハと笑つてゐました。そして私は奴が斯う云つてゐるのを聞きました。俺はカーテンの後ろに隠れてゐた其處には壁にスペインの騎士が畫いてあつて、俺が覗いて見る度に、その野郎が俺を覗んでゐて、俺は其奴に見現はされるのぢやないかと本當に氣味が惡るかつた。と斯う云つて居りました」

ピーターはこゝでチョツと話を切つた、老銀行家は目を見開いて「オ、神よ!」



と囁いた。

「私の聞きましたのはこれだけの事で、其の時には何の事だかサツパリ判りませんでした。其後、私はマツクが引いたお邸の圖面の事を聞きました時に、私はハツと思ひ當りました。奴が射殺さうと狙つたのは、正にアクカーマン氏であつた！」

老銀行家は繰り返して神を呼んだ。彼の慄へる手は寢床の上敷の刺繡を引むしつた。電話が鳴つた。彼は受話器を取上げた。今は非常に忙がしいからと云つて電話を斷つた。彼は又も激しく咳き續けた。ピータアは、彼も矢張り人である事を知つた。彼もピータア自身と同じく、苦痛を恐れ死を畏れるものである事を知つた。ピータアは又彼に少しも飾り氣がなく、空元氣を示さないのに驚いた。彼は彼自身をピータアの憐愍の下に置いて、ピータアの思ふまゝ搾取するに任せた。ピータアは此の機會を遁さなかつた。

「處で、アクカーマンさん、斯う云ふ事を警察にお話しになつても、何の役にも立たない事は、最早あなたにもお判りて御座いませう。警察は斯ういふ事態をどうい

ふ風に取扱ふべきかを知つてゐません。正直の處、警察はこの恐るべき赤をそれほど畏るべきものと思つてゐないので、警察は又、盲探しに探すのですから、普通の物取り強盜を捕へるよりは十倍も多く金を費ひます。」

老銀行家は叫んだ。「併しどうして奴等は私の邸に入り込む事が出来るのだ。」

「奴等はあなたが夢にも想ひ及ばない方法で入り込むのです。奴等には奴等に同意する人間があります。何故、あなたはち氣が付かないのです。赤は神の道を説く者の中にもあります。大學教授の中にも。あなたと同じ富豪の中にもあります。」

「それは知つてる。それは知つてる。けれども確かに此の邸内には——」  
「あなたはどうしてそうと斷言が出来ます。あなたはあなたの御家族の中に叛逆者をお持ちになつてるかも知れませぬ。」

ピーターは更らに言葉を續けて、この死を畏る老富豪の赤に對する恐怖をいやが上に煽つた。老富豪は又も、どうしても殺されたくないと云つた。否殺されてはならぬと云つた。そして其の殺されてはならぬ理由を詳細に説明した。それはピー

タアが全く想像し得なかつた事で、驚くべき多数の生命が彼の上に懸つてゐると云ふのであつた。アメリカ市に於ける十萬の人と其の家族とは、アクカーマンの經營する事業によつて、其の生活を得てゐる。而かもその事業はアクカーマン以外の何人も經營し得ざるものである。又、寡婦と孤兒とは其の財産の保護を彼に求めた。蜘蛛の網の如く廣がつた彼の責任は、彼の日々の、刻々の裁決を必要としてゐる。彼は其の責任上、容易に死なれないと云ふのであつた。彼は終に斯う言ひ切つた。「斯う云ふ次第だ。判つたか！ ガツヂ。だから、私は斷言する、どうしても私の此の生命を彼等に渡してはならない！」

(四十四)

彼等は終に、アクカーマンの一身を保護する實際的計畫の討議に入つた。それは勿論、ピータアの意見が主になつて進んで行つた。第一にアクカーマン氏は、警察官憲又はガツフェーのいづれに對しても、決して不平不満は漏らさぬと云ふ事に定まつた。次に彼とピータアとの關係は、必要に應じて何時でも會見出来るだけにし



て置いて、彼とピーターとは、極秘の裡に、社會の爲に彼の一身を保護する臨機の處置を執らうと云ふ事になつた。其處で、彼等は、先づアクカーマン家の内に果して叛逆者が潜んでゐるか否かを確かめねばならぬ事となつたが、それには第一流の探偵的手腕のある密偵の必要があつた。然るに困つた事には、ほんとに信用の出来る探偵は非常に少なかつた。彼等は殆んど全部が全部油斷のならぬ惡徳漢であつたさもなければ、それだけの智慧のない、五分間も話をすれば、どんな「赤」にも直ぐに見透かされる馬鹿者であつた。ピーターは暫らく首をかしげてゐたが、急に元氣づいて、

「素敵なものを考へつきました。それは私の妻でありますが、私の考へではエヂセをほんの四五日此方に置いて頂けば、お邸にゐる人の事は——御親族でも召使ひでも——何も彼もスツカリ見抜く事が出来ると思ふので御座います。」

「お前の細君はそれが職業なのかね。」

「イエ、そうでは御座いません。彼女は女優で御座いまして、名はエヂセ・エース



チースと申します。或は舞臺で御承知かも知れませんが。」

「知らないね。私は芝居に行く暇がないからな」

「左様で御座いませうとも。處で、彼女が何と申しますか、實は彼女は私が、赤の中に交つてゐるのをひどく忌がりました、スツバリと關係を絶つてしまへと、度度矢釜しく申ますので、私もではモウそうしようと約束した様な次第で、只今確かにと申上げ兼ねますが、然し私から篤と、あなたの御難儀の次第を得心の行く様に申聞かせましたら、彼女も決して否とは申しますまい。」

が、此處に一つの問題は、彼女をどう云ふ名儀で邸内の人々に紹介したら、誰にも變な感じを興へずに済むかと云ふ事である。——と云つて、ピータアは、彼の妻が下女と云ふには、餘り人間が立派すぎることを説明した。アクカーマン氏はそれに答へて彼はこれまでとても下女の雇入れには全く關係しないのが例で、今日突然、何等かの指圖をすれば、いよ／＼變に思はれるに定まつてゐると云つたが、結局、彼に一人の姪があつて時々訪ねて來る事を話して、その姪を直ぐに呼び寄せること

にして、それにエデモ・ユーステースを侍女として連れて來させたらどうだと云つた。ピータアの方でも、それならば彼の妻の適役として度々舞臺の上に立つた経験があるので、誠に結構であると云ふので、早速アクカーマン氏からその姪に通知して、其日の午後にホテル・ド・ソトでエデセに會見させる事に話が定まつた。

此處で、老銀行家はピータアに對して、この事は彼の姪以外には、絶対秘密として何人にも口外せぬは勿論、暗示をも與へぬ事を、極めて嚴肅に誓言したが、ピータアは更らに熱心に、警察にも、家内の何人にも、アクカーマン氏の私人としての秘書にも、決して知らせてはならぬと力説した。アクカーマン氏は又、それに對して自身最大重要と考へる觀念をピータアの腦中に更らに深く刻み付けて置かうとした。彼は更に斯う云つた。「私は殺されてはならないのだ。私は斷じて殺されてはならないのだ！」。ピータアは又それに對して、彼は今日以後、アクカーマン氏に關する赤の談話に耳を澄して、一語も漏らさず聞き取る事を彼の任務とすると言つた。

ピーターアが起ち上つて別辭を告げようとする、アクカーマン氏は震へる手をポケットに突込んで、一枚のぐる／＼捲きにしたピカ／＼した、銀行紙幣を取出した。ピーターアはそれが、アクカーマンの頭取であるアメリカ市の第一国立銀行から新に發行された五百弗紙幣であるのを見た。アクカーマンはそれを「ほんの少しばかりだが」と云つてピーターアに與へて、「お前が若しこの悪者共から私を保護して呉れるなら、私は充分にお前を見てやる積りだからその氣で充分に働らいて貰ひたい。それからモーの私の頼みは、今からお前は直接私の雇人になつて貰ひたいのだが、どうだらうね。」

「ハイ、閣下。それはもう異存の御座いませぬ處で、これは誠に有難う存じます。」ピーターアは紙幣をポケットに突込んで、入口の方に退りながら一足一足に頭を下げた。老銀行家は「帽子を忘れてゐるよ」と親切らしく聲を掛けた。ピーターアは、「ハッ」と云つてドギマギしたが、再び引返して椅子の下から自分の帽子を取り上げた。そしてモ一度頭を下げた時に、老人は又云つた。

「忘れなよ、ガツヂ。私は殺されてはならないのだ！。どんな事があつても、私の身體を奴等に渡してはならないのだ。」

## (四十五)

ピーターアが市に歸つて來て、第一に心附いた事は、アクカーマン氏の銀行に行つて、五百弗紙幣をもつと小さい紙幣に換へる事であつた。現金係は彼の顔を穴のあくほど見て、その紙幣を念入りに捻つて見たが、黙つて五枚の百弗紙幣をピーターアに渡した。ピーターアはその内から三枚引抜いて安全な隠し場所に差し込み、残りの二枚をポケットに突込んだそしてネルとの約束を果すべく出掛けた。

彼は一切の事を彼女に語つた。ネルは直ぐに「いくら呉れました？」と尋ねた。ピーターアが黙つて二枚の紙幣を見せると、彼女は「畜生！ シミツタレ爺めが！」と罵つた。

「まだ追々呉れると云つてたよ」

「當り前さ彼奴にはこれつばかり何でもありやしない。私達はウンと脅かしてアン



だくつてやらなくちや。」

ネルは斯う憎々しさうに云つた後で、「このお金は私が預つておいて上げませうねえ、ピーター」と附加へた。

「それは好いが、私だつて自分の小遣ひに多少持つてなけりや困るよ。」

「あなたは給料を貰つてるでせう。そうぢやなくて？」

「そりや貰つてるさ。併し」

「私が持つてりや大丈夫ですよ。そしてあなたには何時か屹度それを喜ぶ時があるのですよ。あなたは今迄だつてチツとでも貯めた事はないのですもの。これが女の役目ですよ。」

ピーターは彼女と押問答をしようとしたが、それはマクギヴネーを對手にする様には行かなかつた。ネルが溶ける様な目で彼を見た時に、ピーターは頭はふらふらとして、彼の手は自動的に二枚の紙幣を彼女の手握らせてしまつた。其の時、彼女はニッコリと笑つたが、それが何とも云へぬ優しい感じを與へたので、ピーター

も何時になく大膽になつて、

「ねえ、ネル。お前は今から私の妻だよ。」

「そうですとも。そうですとも、勿論そうですけれども、私達は何とかしてテッド・クローザースの手を遁がねばなりません。私は始終あの男が目を放さないのので言譯に苦勞の絶間がないのですよ。」

ピータアはもう此うへ我慢が出来ないと主つた様に。

「それで、お前はどんな風にして彼の男と手を切らうと云ふのかね。」

他に仕方がありませんから、今ま一仕事旨くやりおほせたらそれを機會に二人で逃げ出させようよ。

ピータアは狼狽して「未だやるのかね」と急ぎ込んだ、ネルは笑つて、

「あなたはジツと見てらつしやい！。今度は私がニールス・アクカーマンから纏つた金を引出して見せます！。これが旨く行つたら、私達は姿を隠して、何處かで生涯氣に暮しませうね。ですが私は今この仕事をどう云ふ風にしようかと、それば

かり考へてゐて、逆も外の事なんぞ考へられないんですから、色戀の話はもう止めて、大人しく待つて下さいね、ガツチ、好いでせう。」

斯うして彼等は別れた。そしてピータアはアメリカン、ハウスへマクギヴネーを訪ねて行つた。ネルは、マクギヴネーが何と云はうと、決して一步も譲るな！と云つたが、ピータアに取つては、それが容易な事ではなかつた。マクギヴネーは縦からも横からも、右からも、左からも、根掘り、葉掘り彼とニールス・アクカーマンとの間に起つた有らゆる事を聞き質さうとした。ピータアは繰り返して、彼は唯だ唯だ事實を公平に語つただけであると主張した。即ち彼は、マクギヴネー及びガツフェーに語つた事實以外の何事をも、ニールス・アクカーマンに語らなかつたと固執した。彼は又、警察は充分に其の職責を盡して居り、ガツフェーの探偵局は常に眞直ぐに「赤」の尾を踏んで歩いてゐると告げただけだと言ひ張つた。鼠の様な顔をしてゐる男は問うた。

「それで、彼はお前にどんな事をしろと云つたか。」

「それは唯だ、アカターマンさんが重要な事件に就いて一切の報告を受けてると云ふ安心の出来る様にしたいと云ふだけの希望でありまして、今後彼に對する陰謀に關して私が蒐集した情報は悉く報告しろと云ふ要求でありました。で、私は無論そう致しますと約束して來たのです。」

「では又會ひに行く約束になつてるのか。」

「別にそんな約束はありません。」

「では、お前の住所を知らせて來たのか。」

「イ、エ。ですから、私の考へぢや、私に用があれば、又あなたの處に通知して來るのだらうと思つてゐます。」

「それなら好い。處で、老人はお前にいくら呉れた？」

「ハイ、二百弗呉れました。そして金はいくらでもあるから、シツカリ働いて呉れと云ひましたが、何しろ。私は殺されてはならない。」と繰り返し繰り返し、大凡二十三十遍も云つた様な次第で、病氣の爲もありませうが、ひどく怯ぢけ切つてる様で



した。」

こんな事でマクギヴネーもやつと安心して、改めてピーターの忠實に感謝し、更らに二三の命令を彼に與へた。

「赤」は猛然蹶起して怒號しつゝあつた。辯護士アンドリュースは終に裁判所の許可を得て入監中の被告に面會した。勿論被告等は口を揃へてこの事件は全然虚構である」と主張した。それで「赤」は今急に全國の同主義者にチラシを配布して、輿論に訴へると同時に、この「虚構」に對する軍資金の寄附を募る準備中であつた。

併し彼等はそれを悉く極秘に附してゐた。で、マクギヴネーは先づ彼等が何處からこれ等の費用を得たかを知らうと欲した。次に印刷中のチラシを一枚手に入れる事を望んだ、尙又、そのチラシが何處に向つて何時郵送せられるかを知らうと欲した。ガツフェーは既に郵便の當局者と會見して、そのチラシを沒收して秘密に燒棄する手筈を整へてゐたのであつた。

ピーターは手を拍つて喜んだ。そうならなければほんとの仕事でない」と云つた。

それが、ピータアが今日まで熱心に主張しつゝあつた、これ等の犯罪人に對する正當の手段であると云つた！ マクギヴネーはそれに對して、こんな事は何でもないお前はお前の仕事を續けて、デツと見てゐろ、俺達は今にお前が膽を潰す様な大仕事をして見せるからと答へた。

## (四十六)

ピータアはミリヤム・ヤンコウイチを訪ねる積りで電車に乗つた彼。は其の途中でアメリカ市「タイムス」の夕刊を買つて讀んだ。それには獄中のマクコルミツクの寫真が載つてゐた。それが又髭は伸びてるし、不機嫌な顔はしてるし寫真に撮られるのを好まなかつた爲でもあらう。如何にも兇惡な人相に寫つてゐるので、ピータアはいよゝゝ、マツクは危険人物中の最危険人物であつたと云ふ信念を固くした。

それから又、「タイムス」の欄と云ふ欄は悉くこの陰謀事件の記事で埋められてゐて、これが米國の歴史上のあらゆる爆彈事件、暗殺事件、獨探の陰謀事件と何等かの連絡がある様に巧みに結び付けられてゐた。尙ほ、其の新聞の記す處によると、

これ等の暗殺は全國に亘る組織的運動で、彼等は數百萬の讀者を有する數種の新聞を發行して居り、その資本は皆な獨逸から出てゐると云ふのであつた。そして又、社説では二段抜きの大標題を附けて、共和政治を救ひ、「赤」の脅威を根本的に一掃すべく市民の奮起を呼號してゐるのであつた。ピータアはこれを読んで、總べての善良なるアメリカ市民と同じく、その一語一語を信じた。彼の胸中は「赤」に對する憎悪で煮えくり返へる様になつた。

ミリヤム・マンコウイチは家にゐなかつた。彼女の母は甚だしく亢奮してゐた。が、ミリヤムは警察が入監者を拷問してゐると聞いて、至急同志と會合して、即時に何等かの行動を開始せねばならぬと云つて、ピープルス・カウンシル（人民委員會）に出掛けたと語つた。ピータアは大急ぎで其の後を追うた。其處には既に二十四五人ばかりの社會主義者と平和主義者が集つてゐて、總べてが同じ様に激昂してゐた。ミリヤムは一人で手を組んで見たり、解いて見たりしながら、室の中を歩き廻はつてゐた。其の眼は終日泣き暮したものゝ様に眞紅になつてゐた。ピータアはマツクと

ミリヤムとは愛人同志だらうと曾て推察した事を思ひ出した。彼は彼女に問うた。彼女はマツクは、穴に入れられ、ヘンダソンは拷問の結果、病室に移されたと言つた。彼女は夏らに詳しい話を聞かせた。ピータアの頭腦の中には今尙ほ拷問の記憶が活きてゐた。彼の身體は慄へてゐた。併し彼はその慄へを止めようとはしなかつた。彼はミリヤムと同じく彼方此方と歩き廻つた。そして手を振上げられ指を逆に曲げられると、どんなに痛いか、どんなに苦しいか、穴の中がどんなに陰慘でどんなに恐ろしいかを彼等に語つた。斯うして彼は、彼等をして、亢奮の極、何等か犯罪行爲を敢てするに至らしめようと望んだ。彼は、何故外から監獄を襲撃して監禁者を救ひ出さぬかとさへ云つた。此の種の行爲はマクギヴネーの望む處であつた。

アダ・ルースは直ぐにそこに反對して云つた。それは無謀である無茶である。併し我々は、何等犯罪の確證なき人々に與へられたる斯の如き苛責に對して抗議し得ざる筈はない。我々が旗を翻し行列を作つて監獄の門前を練り歩くに何等不都合はな



筈である。警察は勿論これを禁遏するであらう。群集はこれに暴行を加へるであらう。恐らくこれを潰亂せしむるのであらう。けれども、我々は何事かを爲さねばならぬ。ドナルド・コルドンはそれに答へて云つた。それは單に我々の今後の運動を無力ならしむる事に歸着するのであらう。我々の獲得せねばならぬものは労働者のストライキである。我々は電報を同主義の新聞に送らねばならぬ。資金を募集せねばならぬ、今日より三日間連日大會を開かねばならぬ。我々は又全労働組合に訴へねばならぬ、そして總同盟罷業決行の機運を作興し得るか否かを試みねばならぬ。

ピーターは多少の失望を感じながら、歸つて行つて、この寧ろ穩和なる結果をマクギヴネーに報告した。併しマクギヴネーはそれで結構だと云つて、彼はそれに結びつける或者を持つてゐると云つて、驚くべき牒報の一部を示したが、それは獨探に關するものであつた。ピーターは「赤」の總べてが何時も貧乏生活である事をよく知つてゐるので、獨探が夥たしい金をこの運動に注ぎ込んでると云ふ新聞記事を信じなかつた。マクギヴネーは、このアメリカ市にカイセルの手先のゐる事は、最早

や一點の疑ひなき事實であると明言した。政府は其の巢窟を突留めて最早や取押へるばかりになつてゐるが、マクギヴネーがその逮捕に先たつて、必要とした事は、此の獨探をして多少の金を過激運動に寄附させる事であつた。

その理由は、説明を聞く迄もなく、ピータアには明かであつた。官憲が若しマクコルミック其他の爲にする運動が獨逸の金によつて支持せられた證據を示し得るならば、それを絶滅せしむる爲に如何なる手段を執らうとも、公衆から非難される虞は更らにないのであつた。斯かる次第で、ピータアはマクギヴネーの爲に、獨逸生れの社會主義者の中から、カイゼルのこの手先に結び付いて、アメリカ市の總同盟罷業を目的として、相當の金を寄附させ得る者を撰び出さねばならぬ事となつた。

ピータアは、極端なる社會主義者の一人で、多數の在米獨逸人と同じく一時的平和主義者である、アツペルを指名した。マクギヴネーは、それでは誰かを直ぐにアツペルの處に遣つて、此人は今度の擁護運動に資金を寄附して呉れるからと云つ

て、カイゼルの手先の名を教へる事にしよう、アツペルは無論、それが獨逸の手先とは知らないから、早速出かけて行つて、金の話を持ち出すに相違ない、すればもう占めたもので、後は此方で好い様にする」と云つた。ピータアは、それは妙案だと手を拍つて、自分でアツペルの處に行かうと云つたが、マクギヴネーはそれを差止めて、ピータアは大事な役者であるから、アツペルの猜疑を受ける様な冒険をしてはならぬと云つた。

#### (四十七)

ピータアはネルから、「萬事首尾よく行つた、數日中に結果が得られるだらう」と云ふ、短い走り書きの手紙を受取つた。彼はもうスツカリ安心して、愉快に他の任務に飛び廻はつてゐたが、過激主義の反抗運動は官憲のあらゆる努力に拘はらず、着々成功しつゝあつた。それは全く驚嘆と驚怖とに値するものであつた。チラシの束は魔術の様に、彼等の集會毎に忽然として現はれて、官憲が手を下す前に、手に手に運び去られて、廣く分配せられるのであつた。勞働者の集合した勞働會館では、

毎夜、煽動者等が入れ代り、手を振り首を振つて、マクコルミック事件に就いて怒號しつゝあつた。而かも尙ほ此上に事態をいよゝゝ悪化せしむるものは、煽動者相手の一仙夕刊新聞が、この事件が「虚構」であつた事を立證する確實な證據を發表すると頑張つた事であつた。「赤」は終に彼等の郵便物が不當の干渉を受けつゝある事を發見して、彼等はそれに就いても、言論の自由を主張して、戰慄すべき激語を放つてゐた。

民衆大會は其の晩に開かれる豫定であつた。ピータアはアメリカ市「タイムス」の極度に憤慨した社説を讀んだ。それには、「赤旗を倒せ」と云ふ標題が附けてあつた。ピータアには、それが愛國心に燃えてゐるアメリカ人に平氣で讀まれようとは思へなかつた。又、それを讀んで何事をもせずゐられようとは思へなかつた。

ピータアはそれをマクギヴネーに話した。すると、その鼠の様な顔をした男は、「俺達はいよゝゝ或る事をやつ付ける手筈になつてゐるから、まア待つてゝ見ろ」と答へた。果然、夕刊新聞はアメリカ市の市長が公會堂の所有者に通牒を發して、こ



の民衆大會に於いて叛亂を煽動教唆する言論のあつた場合には、會場主も亦た法律上、其の責に任すべきものであると警告した事、及び、その結果として公會堂の所有者等は會場貸渡しの約束を取消した事を報じた。尙ほ又、市長は一切の屋外の集會を禁止する事。警察官はこれが取締の任に當り、法律と秩序とを防衛すべき事を宣言したとも報道した、ピーターは過激團體の本部のあるビープルス・カウンシルに駆けつけた。主義者は何處か他に會場を見付け出さうとして駆けずり廻はつてゐた。ピーターは時にマクギヴネーに電話をかけて、彼等が手に入れようとする會館を通報した。マクギヴネーが又それをガツフェーに通知すると、ガツフェーは商業會議所又は銀行を通して其の會館の所有者に壓迫を加へた。

こんな次第で、其の夜も、其の後の數夜も「赤」の民衆大會は、アメリカ市内の何處にも開かれなかつた。然るに一方のガツフェーの事務所では、其の夜の中に既に獨探物語を拵へ上げてゐた翌朝アメリカ市「タイムス」の第一頁を埋めたのは即ちその獨探物語で、獨逸政府の手先で副宰相の姪と評判された。カール・フォン・ストロ

「メ」の逮捕された事から、その結果として暴露された彼に纏はる一大秘密が、見て来た様に書いてあつた。その中でも、特に驚くべき事實として、彼が捕縛の當日に最左翼派に屬する獨逸社會主義者エルンスト・アツペルの手を経て、自由擁護同盟に金百弗を寄附した事、この、「自由擁護同盟」、は最近全市を震撼せしめた、ニールス・アクカーマン氏に對する爆彈陰謀事件で逮捕されたI・W・Wの黨員の釋放運動を目的として「赤」の組織したものである事、及びこのアツペルは其の金を受取つてそれを同じ獨逸人の「赤」に分配し、其の分配を受けた者は、或は擁護資金に寄附し、或は總同盟罷業を促すチラシの印刷費に充てた事を、特に大活字を以つて書き立ててあつた。

ピーターは胸を躍らせながら、それを讀み了つた。彼の胸は朝食を終つた後も、街を散歩してゐる時も、尙ほ動悸が止まらなかつた。街路は夥たしい人出で、しかも刻々その數を増加した。米國々旗は窓毎に翻つてゐた。丁度この前の武裝行列の時と同じ光景であつた。ピーターは戰慄した、足下から爆然たる轟音が起りさうに思

はれた。併し彼、忽ち群集の熱情に感染してしまつた。間もなく軍樂隊を先頭として、カーキ服の兵士が一隊、又一隊重き背囊を背にし、輝く軍銃を肩にして歩武堂々として進んで來た。

それは二百二十三師團の三個聯隊で、今將にリンカーン兵營を發して征途に上らうとしてゐるのであつた。そして彼等は兵營から直ぐに列車で出發させた方が、無論便宜ではあつたが、市民の熱心なる懇望によつて、わざわざ此處に來たのであつた。彼等の軍樂と、軍旗、凜然たる勇氣とは、群集を感激せしめた。兩側に見渡す限り立ち列んだ市民は、愛國の熱情に夢中になつて、帽子を振り、ハンケチを振つて、聲を限りに歡呼を浴びせかけるのであつた。ピータアは一絲紊れざる其の行列を見た。時計の如く規則正しく動く脚と、雷の如く地を搖がす足を見た。彼は又、勇氣に満ちた若々しい、引締つた、誇らしい其の顔を見た。これが生れ故郷の見納めと知りながらも、傍目も振らず一直線に前方を見詰めてゐる其の眼を見た。ピータアは、彼を保護し、彼の國を保護する、これ等の青年に對する感謝で、呼吸が塞



る様に感じた。胸を刺される様に感じた。彼は此の時、何としても悪むべき男女徴兵反對論者、徴兵忌避者、平和論者及び叛亂煽動者等を懲罰せねばならぬと決心して、拳を握りしめ、齒を喰ひしばつてゐた。

## (四十八)

ピータアはアメリカン・ハウスに行つて、マクギヴネーにあつた。鼠の様な顔の男は行動時機が來たと云つた。I・W・W支部の執行委員等は本部に援助を求むる申請書の起草中であつた。彼等はそれに就いて其の晚會合する事となつてゐた。ピータアの仕事は、書記のグラツデーに近づいて、其の會合の場所を探り出す事と、全黨員と其他の「赤」をも其の會合に出席させる事を説き勸める事であつた。マクギヴネーの云ふ處によると、市内の實業家達は今夜一大痛撃を彼等に加へる筈になつてゐるので、「赤」の總てを何處か一個所に寄せ集めて呉れと要求してゐるのであつた。

ピータアは早速飛び出して行つて、I・W・W支部の書記シヨウン・グラツデーに會つた。ピータアは彼に、マツクの「穴」の中に於ける苛責と、ガスガ・ヘンダソンの



後を追うて病室に移されたと云ふ情報とを傳へて、極度の憤慨を見せた。クラツヂ  
ーは其の晩の會合の目的と場所とを彼に語つた。ピーターは又、今日の必要は彼等  
の重立つた同志を召集して、彼等の抗議文を迅速に全國に配布する方法を案出する  
ことである、執行委員の決議が何になる、今日直に必要なものは、全黨員による直  
接行動であると云つた。グラツヂーは直ちにそれに同意して、至急に重なる黨員と  
同情者とに通知する事とした。そしてピーターは電話をかけるやら、出掛けて歩る  
くやらして十二名の人々にそれを傳へたのであつた。

斯うして晩の六時になつて、ピーターは其の結果をマクギヴネーに報告した。彼  
はやれ／＼と思つた處に、可なり激しい衝動を受けた。鼠の様な顔の男は、「お前は  
その會に出なくちやならぬ。ちつとでも奴等の疑ひを受ける様な事をしてはいけな  
い」と云ふのであつた。ピーターは、

「そりや餘り可哀相です！」と叫べんで。「一體、今夜は何事が起るんですか。」

「お前は心配せんでもいい、俺が附いてやるよ。」

其の夜の會場は女詩人アダ・ルースの家と定まつてゐた。マクギヴネーはピーターから詳しく其の家の間取その他を聞取つた上で、斯う云つた。ピーターは第一の合圖で、直ぐにその居室の隣りの廣間の隅にある納戸の中に逃げ込まねばならぬ。そうすればマクギヴネーが先立て其處に飛び込んで行く。彼等は彼を取圍んで混棒で殴り付ける。併し實は殴ぐる眞似をするので、他の者と同じ運命に陥らぬ様に保護するのである。併しピーターの膝頭はガタ／＼慄へ出した。彼は非常に怒つて、マクギヴネーの其の考へに反對した。若しマクギヴネーの身の上にか或はその自動車にか、何事か起つて時間が遅れたら、彼は一體どうなるのであるかと云つた。マクギヴネーはそれに答へて、ピーターは決して心配に及ばぬ。彼は彼等に取つて餘りに貴重な人物なのだから、滅多に間違ひを起させる氣遣ひはない。そしてマクギヴネーは尙ほ俺は、——必ずしに其處にゐるから、ピーターは唯だ悲鳴を揚げてあばれて、人事不省になつて打倒れれば好い、そうすれば、俺とハムメットとカムミンダスの三人で戶外に抱へ出して、彼等の自動車で運び去ると云つて聞かせ

た。

ピータアの胸中は恐怖で一杯になつてゐる、夕飯も食ふ氣になれなかつた、彼は街路を歩き廻つて、勇氣を搾り出さうと努めた、彼は立止まつて、今尙ほ窓際に翻つてゐる米國々旗を注視した。彼は又、も一度愛國の熱情を喚起する爲に、アメリカ市タイムスの夕刊の社説を讀んだ。斯うして彼は終にアタ・ルースの家に向つたが、其の時には最早や彼の恐怖は全く征服し悉されて、恰かも戰場に向つて進みつゝある兵士の如く感じてゐたのであつた。

其處にはアダ・ルースの外に、彼女の母と、従妹がゐた。ミリヤム・ヤンコウイチ、サデー・トッド、ドナルド・ゴルドンも來てゐた。トム・ダツガンはピータアと途中で逢つて一緒に來た。其の後に續いてグラッチェーが來た。グラッチェーは丈の高い、黒い眼を持つた、熱情的なアイルランド青年で、ハッキリした社會主義者ではないが、何でも構はない、社會運動の骨の折れる割に引立たぬ方面の仕事を、少しも怠がらずにやつてゐるのであつた。彼は又、何事が起つて來ても、常に進んでその新しい

責任の一部を自分の肩に擔はうとしてゐる男であつた。彼は謂ゆる「ジンミー・ヒギンス」であつた。「ジンミー・ヒギンス」とは、最も忠實な、そして少しの野心もない甘んじて埋草となり、棄石となり、椽の下の力持をする同志を指す言葉であつた。

グラツデーは書類をポケットから引出して、其の夜の議事に就いてドナルド・ゴルドンと相談を始めた。彼は既にI・W・W本部から、援助を約束して來た電報を受取つてゐて、それを報告した時には、平生から瘦せた、何時も物欲しさうな彼の顔も、跨りに輝いてゐる様に見えた。次の夜はマクコルミックと共に石油地方に遊説してゐた、「バッド」コンナーが今夜の會合の出席する事と、同地方の勞働者は今や將に大ストライキを實行するばかりになつてゐると云ふ、最近の情報とを報告した。其處にゼンニングスの妻が來た。これは癌で死にかけてゐる上に、I・W・Wに寄附金をした爲に亭主から離婚の訴訟を起されてゐる、極貧乏な、氣の毒な婦人であつた。これを援けて一緒に連れて來たのは「アンデイ」アダムスと云ふ機械職工で、餘り「直接行動」を説くので、家主から立退きを食はされた男であつた。



斯うして三十人ばかりの同志が集つた時に、正式の協議會が開かれた。グラツヂは先づ起つて斯う云つた。

諸君、官憲が I・W・W 團體を破壊し終る口實を得んが爲に、故意にダイナマイト陰謀を虚構した事は、誠に明白で、少しも疑びのない事實であります。彼等は我々の事務所を閉鎖し、我々のあらゆる所有物、即ちタイプライターも、家具も、書籍も、悉く皆な没収しました。彼等は又、我々の團體の郵便物を妨害し、I・W・W をして通運便によるの外、文書を發送し得ざるに至らしめました。我々は今や我々の存立の爲に戦ひつゝあるのであります。我々は人民に事の真相を傳ふる爲に何等かの方法を發送せねばなりません。諸君の中に、何人かど何等かの考案を有せらるゝならば、此の際、速かにそれを指示せられんことを、茲に私から切に御願ひする次第であります。

これに應じて幾つかの提案があつた。これを聞いてゐる間のピータアは、謂ゆる針

の席に坐する心地で、彼等は何故來ないだらう？、——商業會議所と商工協會の若手連は何を愚圖々々してゐるのだらう？ と彼等の合圖を待ちに待つた。そして終には、彼等は俺を、こゝで慄へながら、飯も食はずに夜どほし居らせる積りだらうかと、愚知な考へまで起してゐた。

突然ピーターは跳ね飛んだ。戸外には遠くワツと云ふ叫び聲が聞えた。演説をしてゐたドナルドゴルドンは突然口を緘んだ。列席者は互ひに顔を見合はせた。或者は起ち上つた。又もワーツ、ワーツといふ叫び聲が聞えた。終にそれが呐喊と變じた。列席者の或者は入口の扉に走り、或者は裏口に、他の者は窓と二階の階段とに走つた。ピーターは一刻の猶豫もなく、居室の背後にある廣間の納戸に飛び込んだ。そして其の奥の隅に蹲まつて頭の上から手當り次第に着物を引被つた。然るに、猶ほ一層彼を安全にする爲に、そこに又幾人か逃げ込んで來て、彼の上に積み重さなつた。

斯うして彼は避難所の中から外部の騷擾と亂闘とに耳を澄した。婦人連の絶叫は

癡狂院そのまゝであつた。格闘する者の怒罵と、家具の碎くる音と、棍棒で滅茶々に撲ぐりつける音と、鐵棒で頭を打割る音とが、入り交つて聞えた。商業會議所と商工協會の猛者より成る襲撃隊は、容易に其の目的を達し得るほど優勢であつた。彼等は溢れる程の多數で室内に亂入した。出口々々を堅めた。どの窓にも數人の番兵が立つた。遊撃隊は屋根から飛び降りる者と、庭の樹陰に隠れるものとを監視した。

ピータアは縮みあがつてゐた。突然、彼の頭上に叫喚が起つた。引すり出されて殴り付けられた。其の途端に、彼の體にも上から手が觸つて引きずりだされた。彼はへたばつてしまつて、恐怖の悲鳴を揚げた。が、彼には何事もない。そつと顔を上げて覗いて見ると、黒い覆面を付けた男が一人立つてゐた。それはマクギヴネーであつた。彼の生涯中、この鼠の覆面を見た時ほど、嬉しい人の顔を見た事はなかつた！。マクギヴネーは、ピータアの周圍に積まれた着物を目がけて、續けさまに激しく棍棒を打ちおろした。ハムメットとカムミングスの二人は、少しも他人に見えぬ様に、

マクギヅネーの傍らに立ち塞つて、同じ様に注意を加へて棍棒を打ちおろすのであつた。

家の内外の亂闘は大概見る間に片付いてしまつた。ガツフェーの配下は、打ち倒れてゐる者の中から、特に彼等が必要とする「赤」を拾ひ出して、それに手錠を箝めて廻はつた。其一人はピーターアを目がけて進んで來た。ピーターアは其の瞬間に人事不省となつて打ち倒れた。彼は眼をつぶつた。それを見たハムメットは直ぐに彼の腋の下に手をかけ、カムミングスは彼の足を持ち上げ、マクギヅネーは護衛兵となつて、「此奴は、俺達に入用がある」と云つて、三人で戸外に運び出した。

ピーターアは闇の中に微かに目を開いて、街路に自動車行列をなしてゐるのを見た。「赤」がそれ等の自動車に積み込まれてゐるのを見た。ピーターアの友人等は、彼を一臺の自動車に擔ぎ込んで、何處にか走り去らうとした。するとピーターアは忽ち正氣を恢復したので、大笑ひとなつた。

彼等は旨く行つたと云ふので、非常なはしやぎ方で、三人の者は代る／＼自分の見



た通りを語り合つた。ハムメットは、見たか、グラッチェーが目の上をやられて血だらけになつたのを。奴は「赤」になりたいんだから、外まで赤にしてやつたんだ！」

「マクギヴネーは知つてるか、バックエリス（探偵の一人）が、あの放浪詩人の鼻柱を。打折つてやつたのを。」オグデン（商業會議所會頭の息子）は心得た者で、ヤンコウイツチの引摺りめが彼の顔を打つと、直ぐに飛び付いて行つて乳房を引摺んだものだ。そしてそれを裂けるとばかりにグツと捻ぢ上げると、ヤンコウイツチの奴めキヤーツと云つてぶつ倒れてしまひやがつたよ。」

彼等はこの風にして、スツカリ「赤」をやつツけた。併しそれが彼等の仕事の全部ではなかつた。彼等はこれ等の平和論者に戦争の味を教へようとしてるのである。彼等はアメリカ市に於ける「赤禍」を滅絶せんとしてゐるのであつた！。彼等はピータアが若し一緒に行つて、好い見物をしたいと思ふならば連れて行つてやる。場所は田舎だから暗いのは無論で、覆面をして居れば、人に見知られる虞は全く無いと云ふのであつた。ピータアは是非見物に行きたいと云つた。彼の血は沸き立つ

た。彼は獲物を追ふ獵人と同じ心持で、何んで構はず其處にも飛び込んで行かうとするのであつた。

## (五十一)

自動車はアメリカ市の郊外を、羽翼が生えて飛ぶ様に疾足した。前にも十幾臺の自動車が走り、後にも十幾臺かの自動車が續いて、田舎道は白熱の光りの小河と變じた。やがて彼等は轟々とそり立つ大きな松林に達した。こゝは人に知られた野遊び場で、徑二三尺の大樹はアーチの様に空中に聳え、地上には柔かな褐色の松葉が、カーベットを敷き詰めた様に落ち積んでゐた。一切の自動車は豫定に従つて此處に集合した。總べての事は百パーセントのアメリカ人の誇りとする、エフィシエンシー能率増進法で、豫定せられてあつた。森の中央に立つた覆面の一人が、メガホンで指揮をすると、そこに疾走して來た自動車は悉くそれに従つて、巧みに圓陣を作り既した。彼等は總て商業會議所や商工協會に屬する青年等であつた。

斯うして終に最後の自動車が其處に到着すると、やがて「第一號」と命令が高く

叫ばれた。それに應じて一團の人々は、自動車の一つから手錠を箝めた捕虜の一人を引摺つて前に進み出た。それはピーターと共に獄中に十五日を送つた、若い猶太人の裁縫師ミケエル・ダツピンであつた。ミケエルは研究者で且つ空想家で、暴力の行使に携はるものではなかつたが、彼はその情緒を無遠慮に言明する人種に屬した爲に、百パーセントのアメリカ人の怒りを買つたのであつた。彼は絶叫し痛罵した、けれども、覆面の壯漢は彼の手錠をはづし、上衣をが脱せ、シャツの背中を引裂いた、彼等は彼を圓周の中央にある一本の樹の根元に引きずつて行つた。其の樹を、彼の両手に抱きかゝへさせて、其上に手錠を箝める程度に頃合の太さであつた。彼は其處に慟哭しつゝ、三四十臺の自動車の眩らしい閃光を浴びて立つた。覆面の壯漢の一人はその上衣を脱ぎ棄て、行動の準備に取りかゝつた。彼は長い牛皮の鞭を執つて身構へをした。其の時、メガホールを持つた男は「打て！ツ！」と叫んだ。鞭は唸りをなしてミケエルの背をピシリと打つた。肉が裂けて血が四邊に飛び散つた。其處に漸末魔の悲叫と苦悶があつた。鞭は再び唸りを生じて飛んだ。彼の肉は



再び裂けて、赤い血の線がバツと飛んだ

今夜、鞭を執つてこゝに立つ者は、いづれも野球で腕に覺えのこる者ばかりであるから、一打又一打、呼吸つぎをやる迄もなく、打つて打つて、ミケエルの背が一面に剥け上つて、血だらけの肉の塊りとなるまで、打ち續けた。ミケエルの悲叫は絶えた。死の苦悶も止んだ。彼の頭はグタリと垂れて、彼の身體はズルズルと地に這り落ちた。

指揮者は終に停止を命じた。鞭を執つた壯漢はシャツの袖で額の汗を拭うた。他の壯漢はミケエルの身體を解き放して、一方に引摺つて行つて、松葉の中に俯向けに放り出した。

「第二號！」と指揮者はよく透る聲で呼ばつた。他の自動車から他の一組が現はれた。その犠牲はI・W・Wの執行委員の一人で、二週間前のストライキで前齒を二本打ち折られたベルト・グリツカスであつた。彼は上衣を脱がせられてゐる間に、一方の手を振り放して、「コン畜生！」と云ふが早い、其處に見てゐる見物人の一人を



殴り付けた。併し、彼等は忽ち前の様に彼を縛り附けて、前とは別の男が鞭を握つて進み出た。グリツカスは一打ち打たれる毎に變つた悪口を敵に投げかけた。初めは英語で、後には譚語の様に外國語で、様々な悪口を放つたが、それも遂に口から出なくなつた。彼も矢張り正氣を失うてズル／＼と地に仆れると、漸く木から解き放されて、引ずつて行かれて、最初の一人の傍に投げ出された。指揮者は「第三號」と呼んだ。

(五十二)

ピータアはマクギヅネーの呉れた黒いマクスを附けて、彼等の自動車の後方の坐席にあつた。彼は勿論、是等の「赤」を憎んで、彼等の責罰せらるゝを願つた。けれども流血の慘狀を見たのはこれが初めてであつた。斯の如く、ピシリ、ピシリと人間の肉を續け打ちにする慘劇は、彼の長く視るに堪へざるものであつた。彼は此處に來た事を悔むた。彼はこれが「赤」の脅威から國家を救ふ仕事であるとしても、自からの役割以外のものであると思つた。彼は危険なる者を指摘するだけで、最早

や自分としての役目は了つたのであつた。彼は頭腦の人で、暴力の人ではないと考へた。ピータアは次の犠牲が、鼻柱を打ち砕かれたトム・ダツガンであるの見て、我知らず跳び上つた。彼は變り物ではあつたが、實は善人で、ブツ／＼不平を云ふ事と、それを詩に綴る事以外には、何事をも爲なかつた。彼等が彼を鞭のは過誤であつた。ピータアは餘程そう云つて助けてやらうかと思つたが、思ひ直して差控へた。

詩人は少しも聲を立てなかつた。ピータアは白熱の閃光の中に彼の顔を一目見て、それが打碎かれて血塗れになつてゐるに拘はらず、其中にトム・ダツガンの決心を讀んだ。——彼は恐らく苦悶の一語を發する前に死ぬるのであらう。一打ち一打ちに彼の全身は慄へたが、彼は決して一聲も立てなかつた。彼は痙攣的に樹にしがみついて立つた。彼等は、鞭が彼等に血をはねかけるまで、血が土に流れるまで、彼を鞭ち續けた。彼等は醫者をも連れて來てゐたので、此の時、その醫者が進み出で、指揮者に耳打ちをすると、ダツガンは樹から解き放されて、グリツカスの傍に投げ

棄てられた。

次にドナルド スルドンに順番が廻はつた。ドナルドは社會主義者であると同時にクエーカーであつて、彼は常にイエスの名に於て彼の非戰論を叫びつゝあつた。そして彼はそれが爲にいよゝゝ憎しみを受けたのであつたが、彼は此時にも猶ほ芝居氣を棄てずに、手錠をはめられた兩手を高く差し上げて、聲を張り上げて叫んだ。

「父よ、彼等を宥せ、彼等は彼等の所爲の何たるかを知らざるが故に！」

群集の中に起つた囁きは「冒瀆！」「不信！」彼の汚れたる口を塞げ！」の怒號となつた。日頃神の名によつて戰爭を呪咀し戰爭によりて利する商工業者を呪咀した。ドナルドに對する彼等の憎惡は、遂に一時に爆發したのであつた。それで滑稽な面を被つた一人が跳り出て、血の滴る鞭を取ると、群集は大喜びで、「打てッ！　ビリッ、」しつかり打て！と口々に聲援した。併しドナルドは張合のないほど脆かつた。彼は要するに口だけの男で、四つか五つ鞭をあてられると氣絶して了つた。二十遍打つた處で醫者が差止めた。

次にI・W・Wの書記グラヂーの番が來た。そして見るに堪へない慘劇が其處に演出された。グラッチーは自動車の一つからジつとこの場の光景を見てゐる内に、死物狂の覺悟を定めてゐた。彼等が彼の上衣を脱がせる爲に手錠をはづした瞬間に、突如その腕を振りもぎつて、電光石火の如く一人又一人と撲り倒した。彼は材木の産地で育つたもので、彼の力は眞に驚嘆すべきものであつた。群集がそれと氣が付いた時には、彼はもう自動車と自動車の間に飛び込んでゐた。十二人の壯漢は十二の方向から彼に飛びかゝつた。彼は亂戰混闘の裡に倒れた。彼の顔は滅茶滅茶に打ち碎かれてゐた。群集の間からは深夜に荒びる野獸の咆哮が起つた「首を絞めろ！」

「首を絞めろ！」或者は又、「吊るしてやれ！」と叫びながら、綱を持つて飛んで來た。

指揮者はメガホンによつてそれを制止しようとしたが、メガホンは彼の手から叩き落されて、彼は一方に押しやられた。その時、既に一人は松樹に攀ち登つて、その大枝から一本の綱を吊り下げつゝあつた。クラッチーの周圍には眞黒に人だか



りがしてゐたが、突然その群集の間から歡呼が起つた。彼はスル／＼と空中高く吊し上げられたが、彼の首には綱がかゝつて居り、彼の足は死物狂ひで空を蹴つてゐた。下には群集が狂喜して踊り廻り、手を拍ち帽を振つてワイ／＼とわめき立てた。其中の一人は不意に飛び上がつて、空を蹴つてゐるグラツデーの足を一本を捉らへてそれにぶら下がつた。

其の時、喧囂の裡に「其奴をもつと下げる！、俺に其奴をチョツと貸して呉れ」と云ふ聲がメガホーンを通して聞えた。グラツデーの身體は猶ほ空を蹴りながらスル／＼と下がつて來た。すると、一人の男はナイフを取り出して、グラツデーの身體から着物を斬り裂き、そして猶ほ或る一物を斬り棄てた。群集は又もワツとどよめき渡つた。自動車に乗つてゐる連中は彼等の膝を叩いて。満足の叫びを揚げ。○ピータアの友人等は、その男が商業會議所會頭の息子のオグデンである事を囁いだ。其の後、幾日幾週間に亘つて、全市の人々は、このオグデンの仕置を囁ぎあつた。そして百バーセントのアメリカ人等は、此の方法によつて「赤」禍が永劫に鎮壓せら

れ、資本對勞働の關係が確實に解決されたと信じてゐた。

所が、不思議な事にはI・W・Wの一人で、彼等と意見を同じうする者があつた。

即ち其の夜の犠牲者の一人が其の教訓を學んだのであつた！。トム、ダツガンはそれから六週間後に、漸く再び起き上がるまでに恢復した時、此の經驗に就いて一論文を書いた。その論文はI・W・Wの機關紙とパンフレットとによつて數十萬の勞働者に讀まれたが、此の詩人はその中で斯う云つてゐる。

I・W・Wの創立越意書は、雇主階級と勞働階級とは共通の何物を有せずといふ聲明を以て始まつてゐる。併し此の機會に於て、予はこの趣意書の誤つてゐる事を學んだ。予はこの機會に於て、雇主階級と勞働階級との間に、共通の一物の存するを見た。即ち、その一物は牛皮の鞭であつた。鞭の根元は雇主階級の手にあり、鞭の先端は勞働階級の背にあつた。斯くして二階級間の關係の真相が永劫に亘つた象徴されてあつた！。

慘劇は二時間以上に亘つた。ピータアには復讐の藥が餘りに強過ぎた。翌朝になつても彼の良心は彼を苛責した。彼等の顔は代る／＼彼の眼前に現はれた。併しそれよりも尙一層彼を苦惱せしめたものは。秘密の露見に對する彼の恐怖であつた。今や兩階級の感情は最高潮に達しつゝあつた。彼等の反目敵視が甚だしくなればなる程、ピータアの秘密の露見する機會はいよ／＼多くなり、露見した曉の彼の運命はいよ／＼恐ろしいものであつた。マクギヴネーが、この秘密を知る者はガツフェーの配下でも僅かに四人だけで、この四人は死んでも口外する者ではないと保證したのは好いが「赤」の方では既にスパイの入り込んでゐるのを感じいてゐる。現にシヨウン・グラツヂーは、早晚同志の内偵をせねばならぬと云つて、ピータアに一日食慾を夫はせた事もあつた。金のある「赤」の一人はガツフェー事務所の一人を買収せぬであらうか「赤」の若い婦人連の一人はピータアの故智を學ばぬであらうか、ガツフェーの部下の一人を誘惑せぬであらうか、——それは決して困難な事業ではなかつた！。斯うしてマックは遂に彼を陥穽した者を知るだらうが、彼が保釋

で出て來た時、ピーターアに對して果して何をするだらうか。彼はこんな事なら寧ろ戦争に行つた方がましであつたと考へた。畢竟これも戦争ではないか、階級戦争ではないか。戦時の間牒に對する刑罰は死ではないか！

ピーターアは又、ネルの事も頻りに氣にかゝつた。彼女が新らしい地位に就いてから最早や一週間に成るが、彼女は其後一言の音信もしない、彼女は此方から手紙を出すことを嚴禁したエヂセ・ユーステイスは如何に自から處すべきかを知ると云つた。それは正に間違のない處で、ピーターアもその點では安心してゐたが、彼は彼女の新たなる「虚構」と、彼女の想像力の餘りに豊かなる事とを恐れた。何を仕出來すか判らないのが恐ろしかつた。ガツフェーの發見は、マツクの發見と同様に恐ろしかつた。

ピーターアは朝刊「タイムス」を取上げて、「赤」の答刑が、勇敢に遂行された愛國者の任務として報道されてゐるのを見た。彼の氣分はそれで幾分か引立つた。彼は更らに社説を読み、名士の會見談を讀んで、自分の氣の弱いのが恥かしくなつた。



最早や彼には良心の苛責はなかつた。

マクギヴネーはピータアに、前夜の犠牲者の一人として扮装せねばならぬと云つた。それは彼の滑稽趣味に觸れた。彼は先づ一部の頭髮を剪り取つて、其處に綿を當て、其上を額からかけて縋帶でグル／＼捲きにした。次に頬ぺたには十文字に膏藥を貼り附けた。手は骨を挫かれた様に縋帶をして、首に吊りをかけた。マクギヴネーは腹を抱へて笑つた後に、新しい命令をピータアに與へた。それは或る百万長者の夫人を訪問せよと云ふので、ピータアはそれで一度に平常の元氣を恢復した。

鼠の様な顔の男は尙ほ詳しく説明した。それによると、或る大富豪の夫人は公然社會主義者と名乗る、最も悪性の平和論者であつた。そして彼女はラックマンの捕縛された後はそれに代つて「ピーブルスカウレン人民委員會」アンチコンスクリンジョン「非徴兵同盟」其他あらゆる非戰運動に資金を供給してゐるのであつた。彼女の良人はニールス・アタカーマン系の二三の銀行の重役であつて、其他にも有力なる關係を持つてゐた。彼は勿論、猛烈な非

社會主義者であつた。従つて彼は常に其の妻と論争してゐたが、それでも彼女を監獄に入れる事を欲しなかつた。これが警察と検事局とを手古摺らせ、アメリカ市の金融王の親近者を苦しむる事を好まなかつた中央政府の官憲をも當惑させた點であつた。併しその敵國を利益する宣傳は絶滅せられねばならなかつた。其處でピーターは、このゴツド夫人を何等かの犯罪行爲に誘ひ出す役目を承たまはつたのであつた。

## (五十三)

ピーターはラックマンに對する高價な失敗を決して寛恕しなかつた。彼は非常な意氣込みで、茲にそれを恢復しようとするのであつた。彼は郊外に電車を降りてから、丘上の宮殿まで二マイルばかり歩いた。そしてマクギブネーの命令通り、壯麗な本館の玄關に進んでベルを鳴した。

ピーターは汗と埃に塗れてゐた。平常らか風采の揚らない彼は、いよ／＼男振りを下げて、どう見てもポツと出の田舎者以上には見えなかつた。けれども、取次に

出たフランス人の女中は異様な訪問者に慣れてゐた。彼女はピータアに臺所に廻れとも云はなければ、犬もけしかけなかつた。彼女は淑やかにピータアを導き入れて「どうぞお掛け下さい。只今奥様に申上げますから」と云つただけであつた。

やがてゴツド夫人がシヅ／＼と現はれた。大柄な肉附きの豊かな、おのづと威嚴の備つた貴婦人であつた。そのパツチリとした碧色の眼には慈愛の光りが溢れて、ピータアは自然と頭が下つた。彼女はその優しいパツチリとした碧色の眼を彼に注いで「入らつしやいまし」と低い力の籠つた聲で言葉をかけた。ピータアはおどおどして、やつとのこと「ハ、はじめてお目に掛ります」と吃りながら云つただけであつた。

ピータアは惑亂して殆んど云ふ處を知らなかつた。この立派な女神の様な人が「赤」であらうとは思はれなかつた。彼があらゆる急進論者を嫌忌した理由の一つは彼等の騒々しい事であつた。彼等の攻撃的なことであつた。然るに此處には温雅なる容貌と態度があつた。優しく沈着いた聲があつた。此處には又美があつた。

中年にも拘はらず、瑞々として皺の無い皮膚と。何から何まで清らかな美しさがあつた。ネルの美は化粧の美であつたが、ゴツド夫人の美は神々しい自然の美であつた。

アダ・ルースはゴツド夫人を、「世界の母」と呼んでゐたが、彼女は今や忽然としてピータア・ガツヂの母となつた。彼女は既に朝の新聞を讀んで居り、戦慄もし激怒もした主義者からの電話をも聞いてゐたので、ピータアの繃帯と膏藥が何故であるかを説明するに多くの言葉を要しなかつた。彼女は美しい、冷めたい手を彼に向つて差し伸べたが、何の前振れもなく、大きな碧色の眼から涙がほろ／＼とこぼれ落ちた。彼女は彼を柔かな寢椅子に導いて、絹製の枕を幾つも列べて其上に彼を横たはらせた。ピータアが多年あこがれた富豪の生活は實現された。ピータアは、若しゴツド夫人が斯うして何時までも母の役目を續けて呉れるならば、生命の危険と精神の緊張を伴ふ密偵の役目などは喜んで棄るんだがと思つた。

彼女はガツヂの傍らに腰かけて、優しい穏かな聲で彼と語つた。慈愛に満ちたそ



の眼は彼を打ちまもつてゐた。ピータアは彼の生涯に於て未だ曾つて味はつたことのない温い情緒に接したのであつた。此の前、ミリヤム・ヤンコキツチを尋ねて行つた時に、ヤンコキツチ老夫人は丁度此の通りに親切であつた。同情の涙は丁度この通りに彼女の眼から流れ出た。けれども、其の時のヤンコキツチ夫人は、借家住居の洗濯最中の、太つた猶太人の婆さんと云ふに過ぎなかつた。その手は暖かで、ニチャ／＼してゐた。それでピータアは彼女の親切を少しも有り難く感じなかつたが、今この天國の様な清淨な境地にあつて、この驚嘆すべきゴツド夫人から、母親の慈愛と信任とを以て語られて見ると、これは全く別物であつた！

(五十四)

ピータアは彼女にワナをかける事を欲しなかつた。彼は彼女から少しの秘密でも引き出す事を欲しなかつた。處が、事實に於ては、そんな必要は少しもなかつた。彼女は自から進んであらゆる事を彼に語つた丁度I・W・Wの連中が本部で語り合ふ様に、どんな事でも平氣で語つたのであつた。ピータアはそれを聞きながら、世の

中には自己の覺つた。即ち失ふべき何物をも待たぬ者と、世間がそれを失はせ得ざるほど失ふべき多くの物を持つてゐる者との二種類あることを覺つた。

ゴッド夫人は、昨夜爲された處のものは一箇の罪惡であると云つた。罪惡が何時の時に罰せらるべきものならば、それも當然罰せらるべきものであると云つた。

彼女は探偵を雇入れて、これ等の犯罪者に對する證據を擧げたいと思ふとも云つた。彼女は又、「赤」の中の最も赤い「赤」に同情する、若し赤以上に赤い赤があるならば、彼女はそれであるだらうとも云つた。彼女は斯くの如き事をも、其の優しい隠かな聲で語つた。涙は時あり彼女の眼に浮んだが、それはまことに行儀正しい涙で何時の間にか獨りずに消え失せた。その爲にゴッド夫人の容貌を損するでもなければ、其の沈着を亂すでもなかつた。

彼女は又、現在社會の不正不義に就いて考へた者は、誰でも社會主義者になる外はないと云つた。彼女は數日前、檢事正を訪うて、主義者を釋放せしめようと試みたのであつた！。次に彼女は急進論者と稱して或る者が彼女を訪問した事、彼女は

彼が急進論の何物たるかを知らぬ事を看破して、彼は確かに政府の廻はし者と信ずると告げた事。すると、彼が終にそれを承認した事、次いで彼女が彼を改宗せしめようとした事、彼女は彼と一、二時間論じ合つた事、最後に彼女は彼を芝居見に誘つた事を語つた。そして不機嫌な調子で。

處が、これは云ふ迄もな事ですが、彼は斷つたのですよ！。彼等は改宗させられる事を欲しないのです。彼等は道理に聞く事を欲しないのです。彼は實際、私に感化される事を欲しないのです。彼は實際、私に感化される事を恐れてゐたのです。

「それは全くそうでせう。」ピーターは同情する様に口を挟んだ。何故なれば、彼も實は少々それを恐れてゐたのであつた。彼女は更らに話を續けた。私は彼に斯う云ひました。「私は此處にこの宮殿に住まつてゐますが、市の工業地區には數千の男女が終日——戦争中の今日では終日終夜——私の爲に機械の奴隷となつてゐます。私は是等の人々の勤勞から利益を得ますが。私はそれを獲る爲に何事をしましたか？。絶対に何事もして居りません！。私は私の生涯に有用な仕事と云へば、まだハンマ



アの一打もした事がありません！　すると彼は私に斯う云ふのです。「あなたの配當が止まつたと假定して御覽なさい、あなたはその時どうなさるのです？　私はそれに答へました」それは知りません。私は貧乏が大嫌ひで迎も貧乏に堪へられません。唯だ考へるだけでも恐ろしいのですから、その時私は實に悲惨なるものでありませう。私には労働階級がどうしてそれに堪へてゐるか解らないのです。これが即ち私が「赤」になつた理由です。私は貧乏が何人の爲にも悪であつて、それには一言の辯解もない事を知つてゐます。それ故、私は資本家制度の顛覆が假りに私自身に洗濯する事を意味しようとも、私は尙ほその顛覆を助けねばならないのです！」

熱心にゴツド夫人の話に聞き入つてゐたピータアは、此の時ふと、ヤンコキツチ夫人の事を思ひ浮べて、一日でも若しあなたがほんとに洗濯をなさつたら、そうは仰しやらないでせう。」と口に出かゝつたが、自分の役目に氣が付いて。「實に政府の廻はし者　らは恐ろしい奴です奴等の二人が昨夜私の頭を此の通り殴つたのです」と云つた。その様子も如何にも弱々しく可哀相に見えた。ゴツド夫人は再び同情的





將軍連に面して立つてゐるかの様に、沈着な、無邪氣な、確信に満ちた顔をして、ジツと前の方を見つめてゐた。

## (五十五)

彼女は更らに進んで、一二週間前に彼女が傍聴した平和論者の三僧侶の審理がどんな風であつたかを語つた。彼女はキリスト教國に於て、キリスト教徒が、キリストの言葉を繰返した爲に、牢獄に送らるゝとは何たる兇暴殘忍であるか！ と叫んだ。ゴツド夫人は更らに斯う公言した。

「私は腹が立つて堪りませんから、判事に宛てゝ手紙を書きました。すると私の良人は、それでは公然法廷を侮辱する事になると云ひますから、私はそれに答へて私の法廷に對する侮蔑は手紙では逆も書き切れないほどだと云ひました。

ゴツド夫人はそれから、「ちよつと待つて下さい」と沈着いた態度で立つて行つてその手紙の寫を持つて來た。そして、「これを讀んでお聞せしませう」とそれを讀み始めた。ピーターは此の宮殿過激派の宣言書にジツと耳を傾けた。

判事閣下

私は神聖なる法廷に入つて、先づ塗硝子の圓天井をジツと見上げました。其處には平和、公正、眞理、法律の、四つの語が大きく書かれてありました。そして私は頼母しく感じました。私の前には寸毫も國憲を蹂躪せざる人々——極微の犯罪的傾向をも有せざる人々——一切の暴虐に反對する人々が居りました。

審理は始まりました。私は再び美しい塗硝子の圓天井を見上げて、それ等の莊嚴なる響を發する國語を平和……公正……眞理……法律と繰り返して、私自身に囁きました。私は檢事の論告に耳を澄まして聞きました。彼等の手中にある法律は。頑強に、嚴酷に、其の犠牲の甲冑の中に弱點を探り求むる。尖銳にして殘忍なる刀劍でありました。私は彼等の眞理に傾聴しました。それは虚偽でありました。彼等の平和は殘酷なる流血の戦争でありました。彼等の公正は如何なる價值が檢事局の榮譽を除くあらゆる物の價に於て。犠牲を捕獲せんとする綱でありました。

私の胸の痛みは強くなりました。私は唯だ古い、古い疑問を繰返して、我々人は何を爲し得るか。私自身に問ふの外はありませんでした。如何にして我々は平和公正と、眞理、及び法律をこの世界に將來し得るでせうか……あなたはこれ等の人々を有罪とお認めになるでせう。鐵扉の内に閉ち込めらるべきものと宣告なさるでせう。併しこの鐵扉は、人間を野獸たらしむる事を欲せざる限り、彼等の罪が何であらうとも、人間に對して用ひらるべきものではありません。閣下、あなたの目的物はこの鐵扉にあるのですか？ 私にはどうもそう見えます。この故に、我々は、……

平和、公正、眞理、及び法律の爲めに

メリー・アンジエリカ・ゴッド

ピータアは度膽を抜かれたのであつた、當の判事や、検事局や、運輸トラストの秘密探偵部や、ゴッド夫人の良人の當惑が察された。彼はゴッド夫人が既に斯くの



如く文書で法廷を誹謗して居り。彼女は既にあらゆる情報を政府の探偵に與へてゐる時に、彼は何の必要があつて、それ以上の情報を得る爲に此處に來たのであらうかと怪しんだ、彼女はこの政府の探偵に對し、彼女が、人民委員會。に數千弗を寄附した事、及び、尙それ以上寄附する積りである事を語つたのであつた。彼女は社會主義者と平和論者の一群の爲に保釋金を提供したのであつた、彼女は又、腐敗した資本家の法廷がマクコルミック以下の者に保釋を許すの外なきに至つた場合には、彼等の爲にも保釋金を提供する考へであつた、彼女は、私はマクコルミックをよく知つてますが、彼は全く愛すべき青年です、彼がダイナマイトの爆彈を行使すると云ふ事は、私自身がそれを行使すると同様に信ぜられない事です、と云つた。

此に至つてピータアは、ゴッド夫人の富の魔術から覺めた。面覺し時計のけた、ましい音に夢を破られた人の様に、彼の任務を呼び返へされた、ゴッド夫人は「マツク」の友人であつた！ゴッド夫人はマツクを保釋で出獄させようとしてるのであつた！危険人物中の危険人物たるマツクを、ピータアはこの婦人の上に即時

に或物を得ねばならぬと考へた！

(五十六)

ピータアは急に絹製の椅子蒲團の上に起き上つて、「非徴兵同盟」に關する新計畫に就いてゴツド夫人に語つたそれに良心によつて戦争に反對する青年に勸告文を與へようと云ふのであつた。そしてその勸告の主旨は、法律上及び憲法上に於ける人民の權利と自由とを主張するものだと、ピータアは理解した。然しマクギヅネーの考案では、ピータアをしてその勸告文の中に、兵役の拒否を勸告する文句——それが印刷されて配布されれば、非徴兵同盟の全會員は十年以上二十年以下の禁錮に處せらるべき文句をコツリ挿入させようと云ふのであつた。そしてマクギヅネーは、これに就いては充分嚴重に警戒して掛らねばならぬと。ピータアに注意したのであつたが、ピータアは此處でも何ら警戒の必要を認めなかつた。即ち。ゴツド夫人は平氣で兵役の拒絶を青年に勸告する事を望んでゐたのであつた。現に彼女は既に、多くの青年に對して及び自分の子供達に對して、それを勸告したと云ふのであつた。

丁度晝飯時になつた。ゴッド夫人はピクターにも一緒に食卓に着けと勧めた。彼の好奇心は警戒を忘れさせた。其處には幸ひに彼女の良人も、息子達も出て來なかつた。夫人の外に唯一人の中老の婦人が出たばかりであつた。彼はゼームス夫人の規則に従つて、一切萬事ゴッド夫人のする通りを真似る外はなかつた。食卓の後で彼等は見晴らしの好い廣い露臺に出た。夫人は遙かに煤煙の黒く之を覆うてゐる邊を指して、

「彼處が私の賃銀奴隸が私の配當を稼いで呉れて居る處です。彼等はあそこにあゝして居る事が其の身分だと定められ、私は又、こうして居る事が身分だとなつてゐます。そして若し彼等が地位を換へる事を要求すれば、それは直ちに革命と呼ばれ暴力と非難されます。併し私には、彼等が殆んど全く暴力を用ゐず、又それを用ゐようとも思はぬのが不思議でならないのです。考へて御覽なさい、監獄で苦しめられて居る人達を！。彼等が暴力を行使したとて、彼等が脱獄したとて、誰が彼等を非難し得るでせうか。」



それはピータアに或る考へを起させた。彼はゴッド夫人を破獄補助に誘ひ得ると思つたのであつた！。そこで彼は、

「彼等を援けて脱監させる事も出来るでせう」と水を向けた。

ゴッド夫人は此の時、初めてその沈着を失つて、

「あなたは左様も考へなされるのですか。」と聞いた。

「それは出来ると思ひます。御承知の通り、看守だつて、賄賂を取らぬ事はありません。私は入監中、彼等の殆んど全部に逢つて知つてますが、私はその内の一二人は確かに取ると睨んでゐます。何なら一ツ當つて見ませうか」

「サア、ねえ。」夫人はさすがに躊躇したが、「あなたはほんとに左様にお考へなされるのですか。」

「御承知の通り、彼等のもと／＼監獄内にあるべき者ではないのです。」

「それは確かに眞實です！。そして。若し彼等が何人も害せず脱け出せると云ふ事であれば、若し彼等は看守と戦はなくても善いと云ふ事であれば、それはほんと



に少しも害のない事ですが、——」

ピータアは即席の陰謀を漸く此處まで漕ぎ着けた時に、突然背後に聲があつた。「コラッ、何をしてる貴様は？」それは忿怒に震へた、恐ろしい男の聲であつた。ピータアは弾かれた様に跳び上つて、子供の時から撲られつけてる男だけに、直ぐに一方の腕で頭を庇ひながら周囲を見廻はした。

ピータアに打ち掛つた男は非常な大男と云ふ部類ではなかつたが、ピータアの眼にはさう映つた。顔は激怒で眞赤になつて居り、握り固めた拳には重大な意義が籠つてゐた。

「この薄汚い空巢狙ひ奴！」と彼は拳を振上げてピータアに飛びかゝつた。ピータアは階段の一ツに向つて走つた。其の人は直ぐ彼の背後にあつた、彼は階段の第一段に達した時に其の人の蹴り付けた足は可なり強くピータアの尻を打つた。彼は十段が十二段かの階段を一飛びに飛び降りて階下に達した。それでも尙ほゴッド氏のフウ／＼云ふ鼻息が直ぐ後ろに聞えてゐるので、彼は後を振り返つて見る餘裕もな

い。一生懸命玄關先の長い車道を走つた。ゴツド氏は後を追うて走りながら時々足を揚げて蹴りつけようとしたが、次第に二人の間隔は遠くなつて、追跡者は終にそれを斷念した。ピータアは一散にゴツド邸の門を走り出て本道に到達した。

ピータアは其の時、初めて肩越から振り返つて、ゴツド氏の遙かに後方にあるを見届けて立留つた。そして向き直つて、拳骨を突き出して、犬の遠吠えの様に「畜生！罰當り！」と罵り還した。彼の頭の中には抑へ難き忿怒の旋風が捲き起つてゐた、彼は更らに多くの悪口と脅し文句とを叫んだ。法律と秩序の友であるピータアとしては信じ難い事であるが、「俺は赤だぞ！。何時までも赤だぞ！。今に見ろ、この仇討をしてやるから。——マツクと俺とで貴様の下に爆弾を置いてやるぞ！」と彼は叫んだ。

ゴツド氏はもう相手にならず、態と悠々と構へて引返して行つた。ピータアも相手のない喧嘩は出来ないので、痛い尻を擦りながら泣き／＼引返したが、彼のゴツド氏に對する反感と敵意とは、正に赤の富豪に對するそれであつた。彼は突然前

夜の出来事を新たなる一隅から見た。彼は商業會議所と商工協會の若手連を捉へてゴツド氏と共に一括にして、即時に地獄に追ひ遣つてやりたいと思つた。

(五十七)

ピータアは其の晩、マクギヴネーに會ふ約束があつた。それでアメリカン・ハウスに歸つて行つて、四百二十七號室に入つたが、前夜の強烈な刺激に疲れてゐた、彼は、寢臺の上に横になると直ぐに、グツスリ寢込んでしまつた。彼は一度目を開けたが、又とろ／＼としてゐると、誰か來て彼を搖り動した。暴々しい聲で、「起きろ！」と呼んだ。彼はハツとして眼を開けると、それはマクギヴネーであつた。マクギヴネーが呼び起すに不思議はないが、これは又何事だらう。マクギヴネーの聲は怒氣を含み、マクギヴネーの顔は險はしかつた。而かも最も不可解な事には、マクギヴネーは片手に拳銃を握つて、ピータアの顔に突き付けてゐた。

「マ、マ、マクギヴネーさん！、ど、ど、どうしたのです。」

「起きろ！」

と怒鳴りつけた鼠の様な顔の男は、ピータアの胸ぐらを取つてグツと引起した。ピータアの顔には尙ほピストルの銃口が向けられてゐた。ピータアは唯だ慌て戀うた。マクギヅネーは彼がゴツド氏を罵言したのを聞いて、「赤」として捕縛するのだから。赤の誰かどピータアに對して何事かを虚構したのだからか。マクギヅネーは氣が狂つたのだらうか。

「コラ、此の間の千弗は何處にある！」とマクギヅネーは訊問した。

「つ、つ、費つてしまひました。」

ピータアは即時に防禦線を張つた。彼は死んでも金だけは手離さぬ氣であるのである。

「嘘を吐け！」

「う、嘘ではありません

「嘘だ！、あの金は何處にある！」

マクギヅネーは何處までも金の在處を白狀させうとするのであつた。彼の顔は忿



怒の爲にいよ／＼癡惡となり、彼のピストルを持つた手はブル／＼慄へて來た。けれども、ピータアはまだ屈しなかつた。マクギヴネーは後ろを振り返つて、「ハムミット、一ツ此奴に泥を吐かせて呉れ」と云つた。ピータアの眼はピストルに押へられて、今まで其處に他の人のゐるのに氣附かなかつたのであつた。

ハムメットは大きな男であつた。彼はスタ／＼とピータアに歩み寄つて、其の手を引摺むが早いか、グツと背後に振り上げて兩方の肩の間まで持つて行つた。ピータアが叫聲を揚げようとした時に、ハムメットは其の手をピータアの口に當てた。ピータアはもう駄目だと觀念した。マクギヴネーが「サア何處にあるか白狀するか」と聞いた時、ピータアは首肯した。そして鼻でそれに答へようとした。ハムメットは彼の口に當てた手を離した。

そして「何處にある？」と聞くと、ピータアは「私の右の靴の中に」と答へた。ハムメットが紐を解いて、靴を脱がせて、底皮を引出すと、其の下に小さな平べつたい紙包があつた。其の紙包の中には、マクギヴネーがピータアに與へた千弗と、

ニールス。アクカーマンから貰つた金の中から残して置いた三百弗と、給料の中から貯めた二百弗とがあつた。マクギヴネーはそれを自分のポケットに突込んで、ピータアに靴を穿けと命令した。ピータアは震へる手で靴の紐を結びながら、其の目をピストルと鼠の顔とに等分に注いだ。

「ど、ど、どう云ふ譯で、こゝんな事をなさるのです?。」

それは今に判る。お前は黙つて俺達に付いて來れば好いのだ。併し、よく覺えてゐろよ。俺達はお前に此のピストルを向けてゐて、指一本でも動かしたら、直ぐに八ツの銃彈が飛んで行くのだから。

斯うしてピータアは、二人から戸外に連れ出されて、自動車で何處かに運び去られた。ピータアにはどう考へても、其の理由が判らなかつた。ピータアは遂に絶望して、それを考へる事を断念したが、實は早く切つた方が善かつた。それはピータアにも、他の如何なる人にも、到底想像力の及ばない事からであつた。

ピーターはこれまで行くことを嚴禁されてゐた運輸トラストの秘密探偵部に連れて行かれたのであつた。ピーターはガツフェーの前に突き出された。ガツフェーは行きなり拳を振つて、頭からがなり付けた。

ピーターの膝はガク／＼と震へた。彼の齒はガチ／＼と打ち合つた。彼はガツフェーの一舉一動に目を配つた。彼はもうこれ迄經驗した最も恐ろしい拷問を受けるものと覺悟してゐた。然るに、ガツフェーは何時までもあちらこちらと歩きながら裏店流の悪口雜言を浴びせかけるばかりで、彼を拷問にかけようとはしなかつた。ガツフェーはピーターと口を利くのも忌であつた。彼はピーターの聲を聞くのも忌であつた。彼が望んだのは、腹の中のむしやくしやを残らずさらけ出す事であつた。ピーターがほんとに恐れ入つてそれを聞いてゐる事であつた。ピーターは下手に口を出すと却つてガツフェーの怒りを新にする事を知つてゐたので、ガツフェーのあらゆる侮辱と罵倒とをヂツと堪へてゐたが、彼の機智は此の間にも何等かの暗示を掴まうと絶えず素早く働いてゐた。暗示は遂にガツフェーの怒罵の中に現はれた。

「貴様はそれで獨立の仕事をしてる積りで居やがるんだな！」

斯う怒鳴りつけて、ガツフェーはピータアの鼻の下に拳骨をやつて、首の骨が折れたかと思ふほど、グツと強く小突き上げた。「あゝ！、ニールス、アクカーマンが俺を見放したんだな！」とピータアは腹の中で考へた。

貴様は一ト財産拵へて、その収入で一生遊んで暮らさうと考へて居やがつたんだな！

ピータアは又考へた。確かにさうだ！。併しニールス・アクカーマンはどうしてそう何もかも喋べつちやつたんだらう。」

「貴様は、恐らく、自分の密偵を雇つて、自分の探偵局を拵へて、俺を追ひ出さうと考へて居やがつたんだらう！」

「畜生！、誰がそんな事を喋べりやがつたんだらう」とピータアは考へた

カツフェーは突然、彼の前に足を止めて、「コラ貴様は本當にどう考へてゐたのか」と聞いた。ガツフェーはその質問を繰返した。それは眞に答を要求してるものと思



はれたので、ピータアは吃りながら「イ、イ、イエ」と答へた。然るにこの答へは明かにガツフェーの氣に入らなかつた。彼はピータアの鼻を掴んで、強く引き扱つた。ピータアの眼からは涙がこぼれ出た。

「この次はどうして呉れよう？」と云つた探偵長の顔には卑しい冷笑が浮んだが、直ぐに毒々しい輕蔑笑ひをして、おれの推量では、貴様は彼女がほんとに貴様に惚れてると思つてるんだらうと思ふが、どうだ。それに違ひあるまい」と詰め寄つた。そしてマクギヅネーと、ハムメットと、ガツフェーの三人が、ハツハと笑つた。これでピータアの夢想の城廓はガラ／＼と一度に崩れ落ちた。ガツフェーはネルを見付け出したのだ！。

ピータアは此處に來る途中で、飽くまで頑張れと云つた、ネルの命令を思ひ出して、何處までも突張る氣でゐたが、此に至つて彼はもう駄目だと見て取つた。彼は斯う考へた。彼等が既にネルを發見した以上、ネル自身が屈服した以上、彼が頑張つたとして何にならう。

ガツフエーはピータアの顔に油かに書かれた此の考へを見て取つた。彼の冷笑は皮肉に變じた。

どうだ、もう残らず白狀する氣になつたか。それもよからう。併し生憎だが 貴様に白狀して貰ふ事はチツとも残つてないんだよ！」

ガツフエーは再び室内を彼方此方と歩き廻つた。彼の頭腦の中のむしゃくしやは容易に鎮まらなかつた。やがて破は自分の机の前の椅子にドツカリと腰をおろして、抽出しから一枚の紙を取出して云つた。貴様は又、何か俺に聞かせる新らしい嘘を考へ出してゐるんだらう。ピータアは忿怒を再燃させる事を恐れて、進んでそれを否認しようとはしなかつた。ガツフエーは、「よしツぢやこれを讀んで聞かせてやらう。そしたら貴様の馬鹿がほんとに判るだらう」と、一通の手紙を讀み初めた。ピータアはその一章の終らぬ中に、それがネルの手紙であることを覺つた。彼の夢想の城廓は跡形もなく消え失せた事を覺つた。その手紙は次の如く讀まれた。

「親愛なるガツフエーさん、私はあなたを投げ倒す事を悲しみます。併し五萬弗は

大金です。私共は仕事に疲れ切つて休息が必要であります。それ故にテッド・クロ  
ーザースは只今ニールスアクカーマンの自宅の金庫を破つて、私共は其の中から、  
五萬弗に相當すると計算した公債證書と寶石類（御存知の通りテットは寶石類の立  
派な鑑定家です）とを取り出しました。

勿論、あなたは私がアクカーマン氏の邸宅に働いてゐた事を發見なさるでせう。  
そして躍氣となつて私を搜索なさるでせう。それで私は、この事を私の方から申上  
げると同時に、私を捕へる事は少しもあなたの利益にならぬ事を申上げるのであり  
ます。何故なれば、私共はグーバーに對する虚構の一切の内部の仕掛けと、其の外  
にもあなたの探偵局が最近數年間アメリカ市で糸を引いてゐた一切の事柄を知つて  
ゐるからです。あなたはピーター・ガツチにお尋ねなさい。彼はあなたにお話する  
であります。ダイナマイト陰謀を拵へ上げたのは私とピーターとであります。併  
しあなたはピーターを答めるのはお止しなさい。彼は唯だ私の云ふ通りの事をした  
だけであります。彼はほんとに悪黨になる程の度胸も智慧もありません。で、若し

あなたが彼を可愛がつておやりになつて、婦人に近づかせぬ様になさつたならば、彼は全くあなたの善い代理人でありませう。そしてそれはあなたに取つて少しも六ケしい事ではありません。唯だ彼に金を持たせぬ様にするだけの事です。何故かと云ふに、彼は勿論女に好かれる男ではありません。あなたが餘り多くお拂ひにならなければ女は決して彼を煩はす事はありません。

「扱、ピータアは、私共がどんな風にこのダイナマイト事件を拵へ上げたかを、あなたにお話しするでせう。あなたがそれを赤に知らせたくないのは勿論ですが、テッドと私とが危急の場合に臨むならば、私共は固よりそれに關する、全部を赤に知らせる方法を執ります。併しあなたがジツとしておいでになれば、私共は請合つて一言も口外いたしませんから、あなたは立派に出來上つたダイナマイト陰謀をお持になるのです。あなたはそれに五萬弗の値打をお付けなさい。値段としてはお安い方です。あなたがこの手紙を讀んで非常に御立腹なさるのが、私には目に見える様ですが、よく／＼前後を考へて、御自重なさる事を望みます。私はニールス・アク



カーマンが警察に通告するに先だつて、あなたが彼を捕へる事の出来る様に、急使に持たせて、この手紙をあなたに差上げます。それは何故かと云ふに、若し赤ん坊のような警察官達がこれを発見して御覽なさい。それは直ぐに赤にも知れれば、新聞にも傳はつてあなたの虚構に大打撃を與へるからです。あなたは赤共が一所に寄せ集められた後に、シヨウン・グラツデーが私刑に處せられた事を御承知です。従つてあなたは、あのダイナマイトがあなたの部下によつて持ち込まれた事を暴露する風説の立つ事は、無論御望みなさるまい。テッドと私とは遠方に身を隠しませう。又當分の間は寶石類も賣りますまい。そうすれば萬事が無事に納まるであります。う。

(五十九)

エ  
ヂ  
セ

ピータアは最早や一言もなかつた。彼は彼自身の身體を支へ得なくなつて、手近の椅子に倒れる様におろした。そして面目なげにガツフエーからマクギヴネー

からハムメットへ、ハムメットから又ガツフエーへと目を移した。

ガツフエーは怒り切つてゐたけれども、尙ほその職務を忘れぬ實際的人物であつた。ピータアがそのダイナマイト陰謀に關する一切を語る事を望んだ。ピータアも亦た實際的な男で、今更ら何事を隠したとて何の役にも立たぬ事を承知してゐた。彼は恥を忍んでネルと彼との關係から陰謀の始終を残らず喋べつて了つた。そのダイナマイトは恐らくテッド・クロザーズが何處からか手に入れたものであらう。このブルドッグの様な顔をした男は、米國に於ける最も巧妙なる金庫破りの一人と云ふ話であつた。無論この男が陰謀の首腦で、彼はそれをネルに授けたのであつた。ピータアはふとネルが公園で彼に與へた接吻を思ひ出して急に顔を赤くした。又、マクギヴネーの話によると、ネルはジム・ジャンボの宮殿にゐた當時から、ガツフエーの手先であつて、其の後、ガツフエーに依つてアメリカ市の有力なる勞働運動の首領の一人を誘惑するに用ゐられた。そして彼女は彼をホテルの一室内で捕へさせて、同市の歴史に知られた最大ストライキの背景を破壊したのであつた。

ピーターは好い防禦物を得たと考へた。勿論この様な女は彼には餘りに過ぎたるものであつたと考へた。又これほどの女を雇うて置いて、手放したのはガツフェー自身の過失であつたと考へた。彼はそれを立場として辯解に努めた。彼は又、自分の愚を認めて今後は決して女も望まない。出世も望まないからと云つて頻りに陳謝もしたが、ガツフェーはフンと鼻であしらつて、ナカ／＼聞き入れるどころではない。ピーターはいよ／＼辭を卑うして口説き立てた。彼は眞に赤の事に精通して居る赤は皆な彼に信任してゐる。彼は眞に犠牲者であつた。この頭の膏藥を見て呉れと云つた。彼は又、その前額に新たなる赤の月桂冠を得てゐた。——彼はゴツド夫人を訪問して、ゴツド氏から赤の尻を蹴飛ばされたから、これを種にゴツト氏に對する陰謀を企て、幾人かの彼を捕縛させる事も出来るだらうと云つた處が、これが又、ガツフェーの機嫌を損じた。ガツフェーは再び起ち上つて室内を彼方此方と歩き出した。あらゆる獸類の名は彼の口をついて出た。そして最後にガツフェーは、彼がピーターを死ぬまで「穴」<sup>ホール</sup>の中に閉ぢ込めない事を有難く思へと云

ふのであつた。ピータアは最早ガツフェーの事務所を出て、彼の發見し得る最近の道を取つて地獄に落ちて行く外はなかつた。ガツフェーは「行け！　行け！　出て行け！」と怒鳴り付けた。

ピータアは立ち上つてのろ／＼と扉ドアの方に進んだが、彼は又考へた。俺は此處で彼等を脅迫したものだらうか。赤の仲間入りをして何も彼も喋べると云つたものだらうかイヤ、そんな事はしない方が宜しい。チツとでもそんな氣振りを見せれば、ガツフェーは俺を穴ホールに打込むかも知れない！。それはさうだが、併し彼を放り出して喋べらせる機會を與へる事が、ガツフェーとして出来る筈がない。今、ガツフェーは屹度それを考へてゐるに相違ない。ガツフェーは確かにそんな危険な事はしない！斯う考へたピータアは、いよ／＼のろ／＼と扉ドアに向つて歩いて行つた。彼は已むを得ず扉を開けたが力の抜けた身體を支へる様にそれに掴まつて立つた。そしてまだかまだかと待つてゐた。

果然、ガツフェーは呼び還へした。ピータアはおづ／＼と探偵長の前に立つた。



東洋流ならば、地に膝を突いて三遍お辭儀をするのであるが、彼は只、恭順の態度で兩手を前に突きして、哀願出した。「お助けです。ガツフェーさん！。どうぞ。どうぞ。モ一度私を使つて下さい！」

ガツフェーは捻ねくつた。「俺がモ一度お前に仕事を當てがつたら、お前は俺の云ふ通りにすると云ふのか、自分勝手な事はせぬと云ふのか。」

「ハイ、全く左様で御座います。」

「お前は俺の虚構以外に虚構をせぬと云ふのか。」

「ハイ、もう決して致しませぬ。」

「よし、それではモ一度使つてやらうが、俺はお前が女に色目を使つたと聞いたが最後、誓つてお前の絲切り齒を引抜いてやるからそう思つてゐるよ。」

ピータアの胸は安心して躍つた。

「有り難う存じます。ガツフェーさん有り難う存じます。」

「俺は一週二十弗をお前に拂はう。お前はそれ以上の値打はあるが、金を持たせる

と信用が出来ないから、それ以上は一銭も出せない。諸君はお前の勝手だ。」

「えい、えい、それで結構で御座いますとも。有りがたう御座います。」

(六十)

斯うしてピーター・ガツヂの紳士生活は終りを告げた。彼は三度の食事も簡易食堂にする、眞のプロレタリアとなつた。彼は日々運動者の間を駆けずり廻はつて彼等の間に廣く知己を求むると同時に、彼等の行動を監視し、彼等の配布する文書の見本を探り求め、彼等の信書及び名簿を盗んだ。そして彼はそれを残らずアメリカン・ハウスの第四百二十七號室に持込んだのであつた。

時は正に、これ等の密偵の活動すべき多事多端の秋であつた。鞭笞と私刑と投獄とに拘はらず、——否、恐らくはこれ等の迫害の爲に——過激運動は今將に沸騰點に達しつゝあつた。I「W」は秘密に復興されて、入監者の爲に擁護資金を掻き集めつゝあつた。又、赤から桃色までのあらゆる色合ひの社會主義者もそれ／＼活動してゐた。労働運動者は其の後もグーバー事件に對する彼等の煽動を止めなかつたが

丁度この時、グーバー夫人は死刑になるかならぬかの審理中であつたので彼等は必死の活動を再開したのであつた。

ロシヤでは極端なる赤の主義主張が勝利を得て、其の秋の末に彼等は政府を顛覆して、獨逸と平和條約を締結する事となつた。斯くして聯合國は恐るべき窮地に陥り、「ポリシエキキ」といふ恐るべき新語が通俗の語彙の中に加へられた。そして急進的な意見を述べる者は直ぐに「ポリシエキキ」の名を以て呼ばれたが。少しく急進主義者はこの新名辭の亂用を怒つて、反抗的に公然それを名乗り、それを旗印に採用する事となつた。アメリカ市の社會黨支部は、「ポリシエセキキ」支部と改稱する決議を、歡呼の裡に可決した。斯うして暫く「左翼派」の全盛時代が續いたが、此の派の指導者は黨の機關紙「クラリオン」の主筆ハーバート・アシユトンであつた。

アシユトンは歐洲戰爭を英國の古くからの商業主義と、獨逸の新興の、一層侵略的な商業主義との衝突の結果であると見る者で、デモクラシーの爲の戰爭と云ふの

は眞赤な大嘘であると説いた。アシエトンは云つた。巴里の銀行家は最近二十年間、民主政治の安全なる世界を作り出す爲に、十萬の追放者をシベリヤに送つたロシヤのツアールに御用金を貸附けつゝあつた！。英吉利帝國は又、民主政治の爲に、先づアイルランドに、次に印度に、次にエジプトに戦争を惹起したのであつた！。労働者は決して斯かるペテンに胡魔化されてはならぬ。我が米國はどうであるか。ウオール街株式町は聯合國の銀行家に既に數億弗を貸附けてゐる。アメリカの參戰は全く之が爲で、我がアメリカ人は今や、この貸附金の爲に安全なる世界を作るべく鮮血を流すことを要求されてゐるのである！。

ピータアはマクギヴネーに對して、豫ねてから斯かる煽動を看過する事の不可能なるを主張しつゝあつたが、鼠の様な顔の男は、終に行動の時代が來つた事を彼に語つた。此の日ボリシエキ革命を祝賀する爲に大規模の民衆大會が開かれる豫定であつた。マクギヴネーはピータアに對して身上の警戒を與へた。ピータアは赤の徽章を取り去つて、外來者席の群集の中に姿を隠した。彼は顔馴染の壯漢の大多數



が聴衆の中に混入してゐるのを見た。彼は、警察部の長官及び市の探偵部長をも見た。ハーバード・アシントンの熱烈な長演説が漸くその半ばに達した時に、警察部の長官は演壇に進んでアシントンの拘引を宣告した。聴衆は警察の横暴を怒號して其處に殺到した。が二十餘名の巡査はそれを堰き止めた。

彼等は、大格闘の後に七人を拘引して引揚げたが、翌朝の新聞紙によつて其の行動が案外に好評である事を知つたので、直ちに一步を進めて第二段の行動を取る事となつた。十數名のガツフェーの配下と、十數名の検事局員とは、アシントンのクラリオン新聞社を襲うて、亂暴にも編輯記者を階下に蹴り飛ばし、投げ飛ばし、タイプライターを碎き、印刷機械を破壊した上に、讀者名簿は奪ひ去り、印刷物は裏庭で焼き棄て、しまつた。彼等は又「ポリシエキ支部」の事務所を襲撃して、七名の執行委員を逮捕した。そして判事はこれ等の被告人の保釋金を一名に就き二萬五千弗と決定した。其の後一二週間、アメリカ市「タイムス」は毎日ガツフェーの事務所の人に遣り、ガツフェーはそれに對し、ピータアの準備した材料を供給したの

であつたが、それはいづれも社會主義のプログラムが恐怖主義及び暗殺主義のそれであつた事を示すものであつた。

ピータアは今や殆んど毎日の様に、國家の爲に斯くの如き役目を勤めた。彼はI・W・Wがチラシやリーフレットを印刷してゐた秘密の印刷所を發見した。その印刷所は直ぐに手入をされて、印刷機械は沒收され、又々、六名の運動者は監獄に打ち込まれた。彼等は獄中に於て「饑餓同盟」を宣告した。彼等の受けたる毆打に對する抗議として、自から餓死しようとしたのであつた。それを聞いたヒステリーの婦人連は、アダルースの家に會合して、抗議のチラシを起草した。ピータアは又、それが郵便に出されたのを突き留めて報告したので、このチラシは全部郵便局内で沒收された。彼等は今や郵便局内にも配置をして、秘密に運動者の手紙を開封しつゝあつた、恐らく或者に對しては郵便物の配達を禁止したでもあらう。

郵便局は又、「クラリヨン」の三種郵便物認可を取消したが、其の後郵便物の中からも全然この新聞を除外した。其處で自動車を持つてゐる同志の幾人かは、附近の都

會に對する新聞の發送を始めたが、それもピータアに嗅き出されて、ガツフェーの手の者が夜間竊かに車庫に忍び込んで、機械の一部を傷つけた爲に、それを運轉した者は車の操縦が思ふ様にならなくて、危く首の骨を突き折るほどの大怪我をした。斯うして此の計畫も亦打ち壞されて了つた。

(六十一)

急進主義者の間斷なき抗議は遂に功を奏して、判事はマクコルミック其他の陰謀者を一人五萬弗の保釋金で出獄させる事になつた。ピータアはそれを聞いて非常に憤慨した。それは何故かと云ふに、赤を監獄に入れると云ふ事は、其の他の赤に對しては彼を犠牲者にする事であり、一般社會に對しては彼を有名にする事であつて彼が再び監獄から出て來た時には、彼の演説、彼の煽動の効果は、入獄前に十倍するからであつた。彼の意見に従へば、煽動者は社會の安寧の爲に獄中に監禁すべきものであつた。然らざれば、全然投獄すべからざるものであつた。併し裁判官はそうは考へなかつた。彼等は法律の規定あるを知るのみであつた。彼等はアンドリュ



イス其他の他の辯護士の要求に聞かざるを得なかつた。ハーバート・アシントン其他の社會主義者の一群も、亦た保釋を許されて出獄した。「クラリオン」は再び發行されて公然店頭で賣られた。同時にそれは最早や戰爭に反對しなかつたが、英國政府の代名詞たる「巨大なる商事會社」と、「佛蘭西銀行家」と、「伊太利帝國主義者」とに關する露骨なる非難を掲載した。それはアイルランドの爲に、エジプト、インドの爲に、民主政治を囂々し、ポリシエキキを辯護した。

斯うして、ピータアは更らに「クラリオン」の編輯者に對して、I・W・Wの會員に對して、更に多くの證據を蒐集せねばならぬ事となつた。處が、此に彼の爲に吉報が傳はつた。それは、米國政府は全國に涉つて二百名のI・W・Wの指導者を捕縛し尙ほ米國社會黨の領袖をも逮捕して、總べて是等を内亂罪として審問しつゝあると云ふのであつた。次いでマクコルミック、ヘンダソン、ガス、其他の裁判が開始された。或る朝、ピータアは「タイムス」を取上げて、その第一ページに呼吸の塞る様な記事を讀んだ。ダイナマイト陰謀事件の張本人の一人ジョー・エンゼルは、政府側



の證人となつたのであつた！。彼は檢事に對して、ニールス・アクカーマンの本宅を爆破する計畫に就いて、彼自身の關係した部分を自白したのみならず、他の者の所爲をも残らず白狀した。即ち、ダイナマイトを何處から手に入れて、どう云ふ風に爆彈を製造したかと云ふ事から、ニールス・アクカーマンと運命を共にする筈であつた富豪連の姓名まで白狀したと云ふのであつた。ピータアは呼吸を殺して幾度か讀み返したが、やがて、その記事が呑み込めると、モ一度寢臺の上に引くり返つて、ハツハと笑つた。ピータアはガツフェーの手先に對して「虚構」を拵へ上げたが、勿論ガツフェーは自分の手先を監獄にやりたくないのので、彼はそれを政府側の證人に早變りさせたのであつた。他人の分を密告した報酬として、彼に自由を得させようとするのであつた！。

裁判所の開廷日割はこの種事件で一杯になつてゐた。キリストの山上の垂訓を説かうとした平和主義の僧侶の事件があり、ストライキを召集しようとした勞働運動者の事件があり、非徵兵同盟の會員及び徵兵忌避者、徵兵反對者に關する事件があ

り、其の外に尙ほ無政府主義者及び共產黨員に關する事件、クエーカーに關する事件、I・W・W組合員に關する事件、社會主義者及びラッセル派に關する事件があつた。それで裁判所では何時でも數個の事件の審問が同時に行はれてゐたが、ピーターが手指を染めない事件は殆んど無いのであるから、彼はあの事件に斯う云ふ證據を持つて來いとか、この事件の陪審官の素行を探つて來いとか、どの被告側のどの證人にこんな事をしるとか、絶えず後から後からと云ひ付けられて、目の廻る程の忙がしさであつた。彼は斯うして、あらゆる事件に全く夢中になつて働いたが、判決は皆な彼の勝利であつた。彼は何時の間にかネル・ドーリンとテッド・クロザーズの事などは忘れて、天晴れ愛國者氣取りで、鼻を高くし始めた。處に持つて來て、マクコルミック以下のダイナマイト事件の各被告人に對して、禁錮二十年の判決が下つたので、彼はもう立派に自分の罪の帳消しが出來た様に感じた。彼は恐るゝではあつたが、物價騰貴に依る生活費の増加と、彼が婦人に關する約束を既に六ヶ月間嚴守した事とを云ひ前にして、婉曲にマクギヴネーに増給を求めた。そして

ネーから一週三十弗に引上げて貰ふ約束を得ていたのであつた。

(六十二)

ピータアのマクギヴネーに對する陳述は勿論文字通りに眞實ではなかつた。彼は此の間にも幾人かの女に目の合圖したのだが、それが爲に面倒が起らなかつたと云ふに過ぎなかつた。彼は第一にミリヤム・ヤンコキツチに接近して行つたが、ミリヤムの心は切かに獄中のマクコルミツクに傾注せられてゐた。其の上に、彼女はオグデンに酷い目に逢はされて入院したので、これはそれ切りになつた。次に彼は赤の他の娘達に目を付けたが、彼等は單に彼を善き同志として待遇するだけで、誰も彼に對して、マクギヴネーが説く様な自由戀愛を實行しようとする者はなかつた。こんな次第で、彼は赤以外に女を求めようと決心した。

土曜日の午後であつた。ピータアは或る社會主義者の衣服店に行つて、新らしい帽子と洋服とを月賦拂で買取つた。そして街路をぶら／＼歩るいてゐる間に、小ザツバリとした若い娘が繪畫陳列會にはいつて行くのを見た。彼は彼女の後を追うた

彼等は直ぐに知り合となつて一緒に晩飯を食ひに行つた。彼女は美顔術を職業としてゐる女であつた。二人は妙に話が合ふので、ピータアはその晩持つてた金を皆な費つたが、それでも惜しいとは思はないで、却つてモット金を儲ける事を考へ、來週何事か赤の方にあつたら、マクギヅネーに一週四十弗を要求してやらうと決心したのであつた。

翌日は復活祭の日曜日であつた。ピータアは約束通り美顔術師に出會つて、二人でぶら／＼とパーク・アベニューに向つて歩いて行つた。パーク・アベニューはアメリカ市の最も貴族的な街路で、今日の復活祭の行列の通路であつた。さすがに軍國の復活祭で、國旗は多くの家に翻つて居り、男子の多くは軍服を着てゐた。ピータアとフリスビー嬢とは復活祭の行列を見た。フリスビー嬢は着飾つた貴婦人達の身拵への品評を、折々ピータアに囁いた。

彼等は飾り立てた教會の一ツにはいつた。それは教壇の雄辯家として、熱心なる愛國的説教家として有名な牧師ストツターブリヂの教會であつた。牧師ストツター



ブリツヂは舊約聖書の一節を引用して、主のあらゆる敵を殲滅せねばならぬ事を説いた。米國軍の勝利と米國の軍需品の壓倒的優勢とを讚美した。彼は又ポリシエキキと、あらゆる謀叛人との罪を鳴らして、彼等は即時に鎮壓されねばならぬと云つた。彼はI・W・Wを鞭うち、社會主義者の印刷機械とタイプライターを粉碎した群集の一人であつたとは云はなかつたが、それが彼の要求するものであつた事を明かに言外に漏らした。ピ、タアの胸は愉快なる誇りで一杯になつた。彼は單に國家に奉仕するばかりでなく、同時に全能の神に奉仕する者である事を知つた。主と主の軍勢は彼の側にある事を知つた。彼の爲したる一切の事は全能の神の代理者の裁可を得た事を知つた。

彼等は教會に出て公園に向つた。處が、其處には惡戯好きいゝからずの運命の神が、特に念の入つた惡戯いたずらを仕組んでピ、タアを待ち受けてゐた。ピ、タアは公園の入口でアメリカ市の「ポリシエキキ支部」に屬する同志シユニツチエルマンを見た。彼は横を向いて急いで通り過ぎようとしたが、もう遅かつた。彼はツカ／＼遣つて來て、「ヤ

ア、コムレード・ガツヂ！」と呼んで、ニコ／＼しながら、その大きな手を差し出した。ピータアは極めて冷かにそれに答へて、尙ほ急いで行かうとしたが、コムレード・ニツチエルマンはピータアの手を堅く握つて、

「どうだい、アノ復活祭の行列は！。賃銀奴隷を皆な伴れて來て此の行列を見せてやると、皆を直ぐにポリシエキキにする事が出来るんだなあ！。そうぢやないか、

コムレード・ガツヂ。」

「ウム、全くだ。」ピータアはいよ／＼冷かに答へた。

「僕等は、金がどんな處に使はれてるかを皆に見せてやりたいんだがなア。コムレード・ガツヂ！」斯う云つて、コムレード・シユニツチエルマンはクスリと笑つた。ピータアは其の間に僅かに機會を捉へて「ぢや、これで失敬」と、彼の愛人を紹介もせず、彼女の腕を取つて急いで其處を立ち去つた。

併しもう取り返へしの付かぬ事になつてゐたのであつた！。彼等は一二分間黙つて歩いたが、其の時、美顔術師は急に立ち停つて、ピータアの顔を見詰めて、「ガツ

チさん、今のはありや何のお話ですか？」と詰問した。

ピータアには無論答へが出来なかつた。彼は彼女の眼を避けて、靴の先で地を蹴つてゐた。「私はあれが何のお話だか是非聞かして頂かなければなりません、あなたはアノ赤のお仲間ですか」と、彼女は彼を追究した。

憐れむべきピータアは云ふ處を知らなかつた。シユニツチエルの獨逸人らしい顔と、獨逸訛りとを、どう胡魔化し様もなかつた。

破女は抑へ難い怒りに足を踏み鳴らして、

「それではあなたはアノ赤の一人だつたのですか！。あなたは獨逸の利益を圖る謀叛入の一人だつたのですか！。あなたは詐欺師なのですか。間牒なのですか！。

ピータアは當惑して途方に暮れた。

「フリスピールさん。私にはこの譯を話す事が出来ないのです。」

「ナゼ、話す事が出来ないのです？。正直な人に何が話の出来ない事があります？

「ですが——ですが——私は決してあなたの考へてる様な人間ぢやありません。そ

これは誤解です！。私は——私は——」と云つた彼の舌の先きに、「私は愛國者です！私は是等の謀叛人に對して私の國を擁護しつゝある百パーセントのアメリカ人です！」が出かゝつてゐたが、彼の職業上の名譽は彼の舌を封じた。美顔術師は再び足を踏み鳴らした。彼女の眼は公憤に燃えてゐた。

「あなたはそれでゐて、よくも——私に親近を求めなさつた！。あなたはよくも——私を教會に伴れて行きなさつた！」

「私は此處に巡査がゐたら、あなたの事を云ひ付て、監獄に入れて上げるんだが！」と、頻りに附近を見廻はしたが、誰も知つてゐる通り、搜がす時には巡査はゐないものであつた。ミス・フリスピーは悔しさうにモ一度地だんだを踏んだが、最後にフンと一つ鼻を鳴して、「左様なら、コムレード・ガツヂ！」と特にコムレードに力を入れて冷かに云ひ放つた儘、スタ——と行つて了つた。ピータアはザクリ——と砂利道を踏む小さな靴の踵が悲しさうにジツと見送つてゐたが、いよ——見えなくなると、附近にベンチを見付けて、倒れる様に腰をおろして、両手で顔を覆うて泣い



た！。

(六十三)

街路には號外賣りが飛び廻はつて、新聞社の前には黒山の様に人だかりがする軍國時代となつた。人は皆な獨逸軍は遂に巴里に達するだらうか、彼等は遂に英佛海峡に達するだらうかと危懼を懷いてゐる時に、突然、米國はその最初の一撃を加へて、獨逸軍をシヤトオ・チエリーから撃退した。全米國は一齊、勝利の歡呼を揚げて起ち上がった。

斯うなつては最早や平和主義者の叫びに耳を傾ける者は殆んど無かつたのであるが、非徵兵同盟の會員は、そんな事には頓着なく、陸軍監獄及び兵營内に於ける、良心による戦争反對者の虐待の事實を詳記した小冊子を、丁度この際に發行した。然るにピータアは最初からこの團體内に活動してゐて、マクギヅネーの指金で、この小冊子の中に、屹度處罰されねばならぬ様な文句をそつと挿入して置いたのであつた。果然、その小冊子は聯邦政府から差押へられて、非徵兵同盟の會員は悉く拘

引されたが、その中にはサデー・トッド、アダ・ルース、ドナルド・ゴルドンも加はつてゐた。

ピータアも非徴兵同盟の會員の一人であつたから、暫く行衛を暗らます振りをして彼を隠匿して呉れた、アダ・ルースの従妹に當る一英國婦人と小喜劇を演じた。然るにドナルド・ゴルドンが保釋で出て來ると、彼はあの小冊子の原稿を印刷所に持つて行く爲に、ピータアに渡した以前には、決定的犯罪たらしめたアノ文句は無かつたと主張するのであつた。これはピータアもチョツと困つたがピータアはそれはドナルドの誤解であると堅く主張して、内實は兎にかく、表面上は他の者もピータアの言ひ分を認めた。それで、皆が保釋で出て來ると、彼も亦その隠家を出て、私宅で開かれた抗議の相談會にも一二度出席したのであつた。

此處で又ピータアの新たなる冒険が始まつた。それは他の或る婦人に關してゝあつて、發端は最も非妥協的な平和主義者の數人が、アダ・ルースの家に集つて、彼等の辯護費用の問題を相談した時に始まつた。この會合にはまだ青い顔をしたミリヤ

ム・ヤンコキツチも出席したが、ミリヤムは此の時、其の歩行を助ける爲に一人の友人を伴れて來た。そしてこの友人に對してピータアが新しい冒險を試みる事となつたのであつた。

彼女はローシー・スターンと云ふのであつた。彼女は丈夫さうな、小柄の猶太の勞働婦人で、バツチリした黒い眼と、房々した艶の好い黒い髪と、血色の好い頬と、溢れる様な愛嬌を持つてゐた。ミリヤムは彼女をピータアに紹介して、ローシーは赤でもなければ、赤を好んでもゐない、唯だ自分を助けて、平和主義者の集會がどんなものであるかを見に來たのだが、恐らくピータアは彼女の赤化を助けて呉れるだらうと云つた。彼はそれを非常に喜んだ。何故なれば、米國軍は今やマルヌから獨逸軍を撃退して、歴史の不朽のページに其の名を書してゐる際に、彼は最早や平和主義者の泣き言に惱まざるゝを欲しなかつたからであつた。

ローシーは彼に取つては新しい、豫期しない者であつた。彼は直ちに彼女に接近して行つた。彼女はそれを喜ぶ様な素振りを示した。ローシーは此の世の中を在る

が儘に受取つて、其の中に何等かの樂みを見出して行く人々の三人であつた。で、平和主義者の相談が進んでゐる間に、ピータアはローシーと共に室の一隅に腰掛け、彼が藥賣りと一緒に田舎廻りをした時の面白い話や、ジム・ジャムボアの宮殿の奇怪なる見聞談やを、ほそ／＼とローシーに話して聞かせた。ローシーは笑ひをやつと咬み殺してゐたが、その黒い眼は興味に輝いてゐた。彼等の手は幾度か觸れ合つた。相談會が終つて後に、ピータアは彼とミリヤムとを護送したが、云ふ迄もなく、彼等はミリヤムを最初に送り届けた。場末の町はもう人通りが殆んど絶えてゐたから、彼等は甘い抱擁の機會を見出した。ピータアは足の地に付くのを知らぬ程に宥頂天になつて宿に歸つた。

ローシーは紙國工場に働いてゐた。翌日の夕方、ピータアは晩飯に彼女を誘ひ出して、盛んにいちやついた。併しローシーには何處となく尻込みする様子があつた。ピータアがそれを問ひ詰めると、彼女はその理由を彼に語つた。彼女は赤に用がなかつた。彼女は赤の解り悪い話を聞いてゐれば頭が痛くなる。どんな事があつても



赤を愛し得ないと云ふのであつた。彼女は又、ミリヤニ・ヤンコキツチはどうであるか。アレ丈けの美貌があれば金持ちの良人が得られるのに、アンナ大怪我までしたではないかと云つた。サデー・トッドはどうであるか。アダール・ルスはどうであるかと云つた。ローシーはあらゆる赤の婦人連を嘲笑し、辯舌をふるつて彼等の詮議立てをした。ピーターは心中では無論彼女の云ふ處に同意したが、口ではそれに不同意を唱へねばならなかつた。彼の不同意は甚だしく彼女の機嫌を損じた。彼等は最早や歡樂どころではなくて、危なく喧嘩別れになりさうになつた。

斯かる事情の下にあつて、ピーターの様なき思の弱い者が、眞の感情を少しも外に現はぬと云ふ事は、まことに困難な事であつた。彼はローシーの爲に持つて、だけ金のと、可なり長い時間とを費した後に、彼はやつと彼女に多少の讓歩をする事に決心した。そして彼は彼女に對して、最早や彼女を赤化する企てを放棄すると云つた。するとローシーは、ピーターをチョツとにらめて、「ほんとにあなたは自分勝手な事ばかり云つて！。私がこれほど骨を折つてあなたを「白」にしようとしてゐる

のを、どう思つてゐなさるの」と、彼女の希望は只 金を作る事が上手で、女に親切な男にある事を告白した。ピータアは自分も今正に金を作りつゝあると答へた。ローシーは、然らば彼は如何にして金を作りつゝあるかと尋ねた。ピータアは、それは今話されぬが、兎にかく金を作つてゐるのは事實で、嘘と思ふなら、毎晩でも芝居見に伴れて行つてやらうと答へた。

斯うして毎晩々々小競り合ひが續いた。ピータアは日一日とこの黒い眼の美人に逆<sup>のほ</sup>せて行けば、ローシーは又、日一日といよ／＼魅惑的となつて、日一日とピータアの急進的傾向を寛恕しなくなつた。ローシーの父は赤ん坊の彼女をキシネフからこのアメリカに伴れて來たのであつたが、それでも彼女は矢張り愛國心の沸騰點に達したアメリカ人であると云つた。そして彼は何故に國民たるの義務を盡さぬかと責めた。彼は徴兵忌避者であるかと詰つた。彼女は徴兵忌避者と共に何事をも爲し得ないと云つた。彼女は自身の身上を明言し得ない男の伴侶となる事は出來ぬと云つた。彼女は又、血管に赤い血の流れてゐる者に、どうして平和主義者や謀叛人に同

情が出来るか、若しピータアが彼等に同情を有せぬならば、彼は何故に彼等と共に奔走し、彼等に道徳的な支持を求めたかと責めた。

數週間に涉つて彼等は攻防戦を續けたが、ローシは其の間に接吻をピータアに許したでもあらうか。ピータアの頭腦は希望によつて一變したのでもあらうか、彼は彼女を最上の女、ネル・ドリリン以上の女と思ひ定めてゐたので、最後に彼女から絶交を以て脅かされた時に、とう／＼屈服して、ピータアは全く赤に對する同情を失つた事、彼女が彼を改宗させた事をローシに告白した。すると、ローシは非常に喜んで、彼等は直ぐにミリヤム・ヤンコキツチを訪ねて行つて、ピータアはそれを彼女に語つて、彼女をも亦た改宗させようと云ふのであつた。ピータアは彼女が彼の改宗を秘密にすべき事を主張したが、ローシは赫となつて、秘密にされねばならぬ様な改宗ならば、それは改宗ではなくて、單なる賤しむべき虚偽である。ピータア・ガツデは卑怯者である、顔を見るのも忌であると言ひ放つた。憐むべきピータアは全く途方に暮れて、やる瀬ない思ひで、しほ／＼と立ち去つた。



ピーターがこの絶對絶命の窮地から遁れ出る途は唯一つあつた。それは彼が眞實をロシーに語る事であつた。彼は何故にこの途を取らぬであらうか。彼はロシーを熱烈に愛してゐた。そしてロシーがピーターを熱烈に愛してゐる事も知つてゐたが、唯だ一つ——その大秘密が彼等の完全なる悦樂を妨げてゐるのであつた。で、若し彼がその大秘密を彼女に語つたならば、彼は無論、勇士中の勇士として彼女の眼に映るであらう。彼は又、マルヌから獨逸車を撃退しつゝある、そして其の名を歴史の不朽のページに留めつゝある勇士達よりも、更らに更らに驚歎すべき勇士と信ぜられるであらう！。それでも尙ほ彼は秘密を語らぬのであらうか。

彼は一夜、彼女の室にあつた。彼の腕は彼女を抱いてゐた。が、彼女はまた全く屈服してはゐなかつた。彼女は「ねえ、ピーターさん。どうぞ、どうぞ、赤だけは止めて下さい！。私、ほんとにも願ひですから」と懇願した。ピーターは最早それに對抗し得なかつた。彼は終に彼が眞の赤でなくて、實は赤の跡を追うて、彼等の



活動を無効に歸せしむる爲に、アメリカ市の最大實業家連に雇はれてゐる密偵であると言つた。ローシーは愕然として彼の顔をジツと見詰めたが、やがて、それは嘘だと云つた。彼が眞顔になつて事實だと主張すると、彼女は初めは笑つてゐたが、後にはひどく怒つてしまつて、そんな好い加減の作り話で、彼女が釣られると思ふかと、ぶり／＼するのであつた。

ピーターは躍氣となつて、彼女に信せさせようと努めた。彼はガツフェーとその事務所の表看板のアメリカ市土地及投資會社に就いて語つた。彼はマクギヴネーに就いて語り、彼が如何にしてアメリカン・ハウス第四百二十七號室でマクギヴネーと密會するかを語つた。彼は又、彼の給料が一週三十弗である事と、それが間もなく三十弗に増加される事と、それを悉く彼女の爲に費す積りである事とを語つた。そして彼は最後に、彼女は彼に感化された様に装つて彼女も亦た赤の一人となる事も出来る、そしてマクギヴネーが確かだと認めれば、彼女にも給料を呉れるから、紙面工場で十時間半も働くよりは遙かに善いではないかと説いた。

ピータアは終にローシーを説伏した。彼女は驚き畏れた。彼女は斯かる事は全然豫期しなかつた事であるから、少し考へさせて呉れと云ふのであつた。ピータアはもう氣が氣でなかつた。彼は彼女にそんなに恐るゝには足らぬと云つた。彼は彼女に彼の仕事が如何に國家の爲に重要なものであるかを説き、又如何に市内のあらゆる方面に於ける第一流處の人々の賛同を得てゐるかを證明した。彼は單に大銀行家と大實業家とがそれを承認してゐるばかりでなく、市長も、公職員も、各新聞の主筆も、諸大學の總長も、牧師ストツタープリツヂの如き大宗敎家も、悉く皆それを承認してゐる事を語つた。

けれども、彼は終にローシーの心を安んずることが出来なかつた。ローシーは、勿論、それは間違のない事であらうが、少し氣を落着けて考へて見たいからと云つて、とう／＼ピータアを追ひ出してしまつた。ピータアはいよ／＼懊惱して宿に歸つた。

それから一時間ばかり後であつた。ピータアの室の扉を荒々しく叩く者があつた。

彼が立つて行つて見ると、其處に辯護士のダビッド・アンドリュースとドナルド・ゴルトンと海員組合の會長である大男のジョン・ダーランドとが突立つてゐるのであつた。彼等は一言の挨拶すらせずに、ツカ／＼と室内にはいつて來た。ダーランドはバタリと締めた扉を後ろにして、其處に立ち、その大きな腕を組合はせてグツとピータアを睨み付けた。ピータアはこれだけでもう何事が起つたかを覺つた。國民の救濟者としての彼の行爲が終りに達した事を覺つた。そして、それは全く一婦人の爲で——彼がガツフェーの與へた忠告を無視した結果であつた！。

此の時、一切の思考を驅逐してピータアの心中を占領したものは、唯一つの感情即ち恐怖であつた。彼の齒はガチ／＼と鳴り、彼の膝は彼を支へる事を拒んだ。彼は寢臺の縁にペタリと尻をおろした。終にアンドリュースは口を開いた。

「オイ、ガツヂ。それぢやあ貴様は我々が今まで探してゐた密偵だつたのか！」  
ピータアはネルの命令を記憶してゐた。

「あ、あなたは、な、何を云ふのです？ アンドリュースさん。」

「止せ、ガツヂ。我々は今ロシーからスツカリ聞いて來たんだ。ロシーは我々の密偵だよ。」

「彼女は嘘を云つてゐるんです！」と、ピータアは叫んだ。けれども、アンドリュースは冷然として云つた。

「ツマらぬ事を云ふな！。我々に抜かりはない！。ミニヤム・ヤンコキツチは扉の後に隠れてゐたのだ。そして貴様の話す事を皆な聞いてしまつたのだ。」

それでもうピータアは、事件が全然絶望で、此の上は唯だ運命の糾弾する儘に任せる外はない事を覺つた。彼等は唯だ彼を嘲罵し、彼の良心に訴へる爲に來たのであらうか。或は又、彼を拉致して、彼の首を絞め、彼の死の苦痛を與へる爲に來たのであらうか。後者は彼が此の仕事を始めた當時から彼を苦惱させた恐怖であつたが、だんく見てゐると、この三人に暴力を行使する意圖のない事が判つて來た。彼等の望む處は單に、彼が如何に多く彼の雇主に語つたかを自認せしむるにあつた事が判つた。其處でピータアは腹の中で笑つたが、急に面目なさ相に突伏して、熱



い悔恨の涙を流して泣いた。そして彼は云つた。斯う云ふ事になつたのは全くマク  
コルミツクが、破とゼニ・トッドとに關して残酷なる虚説を云ひ觸らしたからであ  
つた。彼は一年間、誘惑に對抗したのであつたが、その當時グーパー擁護會では仕  
事をさせて呉れず、外に職業はなし、實際餓死しかゝつてゐたので、とう／＼マク  
ギヴネーの勧めに従つて、過激なる赤の内亂に涉る活動を通報する事を承認したの  
であつた。併し實際に法律を破つたものゝ外は何人の事も密吉した覚えはなく、又  
事實の以外に何事をもマクギヴネーに語つた覚えはない。

其處で、アンドリュピスは訊問を始めたが、ピーターは彼がグーパー事件に關し  
て報吉した事を否認した。次に彼は、彼がマクコルミツクに關する虚構に關係した  
事を最も頑強に否認した。それでも彼等が尙ほこの事件に就いて彼を八方から問ひ  
落さうとすると、彼は獨逸の間牒とポリシエキキの謀叛人から國家と神とを救ひつ  
ゝあつた、百バーセントの、赤い血を持つアメリカの愛國者である、と威張り出し  
てアンドリュピスには彼を詰問する權利はないと啖呵を切つた。

ドナルド・ゴルドンは狂人の様になつた。

「貴様是我々のバンフレットに怪しからぬ文句を挿し込んで、そうして我々を告訴させたぢやないか」と、喰つてかゝつた。

「そりや嘘だ！ 私はそんな事をした覚えは斷じてありません！」とピーターは叫んだ。

「貴様は俺がバムフレットのあの文句に鉛筆で線を引いて置いたのを擦り削したのを忘れやしまふ。」

「そんな事は斷じてしない！」ピーターは繰り返し繰り返し叫んだ。

ジョン・ダーランドは急にその大きな拳を握り固めた。彼の顔には押へきれない忿怒が現はれた。

「この臆病者の小蛇め！。俺はその虚吐きの舌を引き抜いてやるぞ」と怒鳴りつけてほんとに引抜きさうに一步前に進み出た。

併しアンドリュースはそれを差止めた。彼は辯護士であつたから、彼が爲し得る

處と、ガツフェー等が爲し得る處との間の相違を知つてゐた。

「いけない、いけない、そんな事をしてはいけない。僕の考へぢや、もう此奴から聞くだけの事は聞いたんだから、後に彼自身の良心と彼の侵略主義の神に任せて置かうよ。」

斯う云つて、アンドロリュスは、一方の手に白面のクエーカー青年の手に取り、他の手で長大なる勞働界の巨人の手に取つて、其の室を出た。

(六十五)

ピータアは落著いて考へて見ると、どうしてこんな事になつたかと判然に解つた。彼は如何にも大馬鹿者であつた。彼はドナルド・ゴルドンから鉛筆の線を擦り消した嫌疑をかけられた時に、自から警戒すべきであつた。彼等はピータアの未知の若い婦人を撰び出して、ミリヤム・ヤンコピツチの友人に捧へ上げて、うま／＼彼に一杯喰はせたのであつた。彼女が彼女の勝利を友人達に語つて、一緒になつて腹を抱へて笑つてるのが眼に見える様であつた。

ピータアの重大問題はこの醜い失敗をマクギヴネーの前にどう取り繕はうかであつた。彼はその夜ほとんど一睡もせずそれを考へた。彼は勿論、ローシー・スターンの事をマクギヴネーに話さなかつた。彼は恐らく、彼が四百二十七號室に彼の跡をつけたと云ひ、ガツフェーの事務所に密偵を入込ませたとでも云つただらう。彼はこんな作り話を眞面目くさつて陳べ立て、た後で、又も彼の馬鹿であつた事を覺つた。運輸トラストの密偵としてのピーター・ガツヂの秘密が露見するまでの秘史は、二十四時間経たぬ中に、アメリカ市のあらゆる赤に知れ渡つてゐたのであつた。その週の「クラリオン」には二ページに亘つて、幾多の虚構事件に關する彼の罪狀を逐一詳記して、彼の寫眞まで載せてあつた。勿論、マクギヴネーも、ガツフェーも、其の他の者も、皆それを讀んでゐたのであつた。

マクギヴネーはピータアに對して、「これから鶴嘴とシャブルでも持つて働け」と云つた。ピータアはスゴ／＼として立ち去つた。彼はポケットに二三弗持つてゐたが、それもズン／＼出て行つて、終に最後の白銅一個になつた。彼は斯うして再び



饑餓の狼に巡り會つた時に、マクギヴネーは彼の救助船として新しい仕事を持つて彼の下宿を訪ねて來た。

その仕事と云ふのは、政府側の證人になる事であつた。ピータアはあらゆる赤の運動に携はつて、拘留中の平和主義者、社會主義者、サンチカリスト、I・W・W組合員は皆な知つてゐる。然るに或る事件に對する政府側の證據は極めて薄弱である。で、若しピータアが證人として立つことを望み、彼が命令された通りに證言する事を承諾するならば——尙ほ又、婦人陪審官の或者若くは被告側の婦人密偵の或者と戀に落ちる事なく、裁判所に入し得るならば、彼は再び給料に有り付き得ると云ふのであつた。ピータアはマクギヴネーの胸をえぐる様なあてこすりには何の感じもなかつたが、面と向つて「赤」の憎惡の眼光の矢面に立つ事は、堪へられぬほど恐ろしかつた。

マクギヴネーはピータアの躊躇するのを見て「勿論、それはお前の様な意氣地なしには、危険な事に考へられるだらう。併し今日迄に多くの人が平氣でそれをやつ

て來てゐて、まだ一人だつてそれが爲に死んだ者はない」と云つたが、彼自身としては、ピータアがそれを引受けようと、引受けまいと、別に痛痒は感じない様な振をして、彼は唯だガツフェーの命令で、それをピータアに傳へるだけである、但し報酬は一週四十弗であると云つた。

ピータアのポケットには一個の白銅と二枚の一錢銅貨が残つてゐるだけであつた。彼の室代は既に二週間滞つて居り、宿のお神さんは火の様に喧ましく責め立てゝゐた、併しピータアは、彼の經歷に瑕があつて、グーバー事件の證人になれなかつた事を言ひ立てゝ、マクギヅネーの申込みに反對した。處が、マクギヅネーの答は、それは承知の上である、彼は改心して浮浪人として證人に立たせられるのであるから、過去に罪科があればある程、陪審官をして彼が眞の浮浪人であつた事を信ぜしむるのであると云ふのであつた。

ピータアは次に何日ごろ出廷するのであるかと尋ねた。マクギヅネーは、それは次の週で、目下審理中の十七名のI・W・W組合員の陰謀事件の證人として出廷する

のだと答へた。そして尙ほ、ピータアは裁判所での陳述に就いては少しも心配するに及ばぬ、彼の云ふべき事は悉くマクギヴネーが口授してやる、のみならず、事の證人としての地位も確立してやる、彼は恐らく新聞紙上に一個のヒーローとして現はれるであらうと附加へた。

ピータアの心は大いに動いて來た。マクギヴネーは更らに彼の一身に少しも危険のない事を保證した。即ち、ガツフェーが大切な證人を赤に對して保護するのは無論の事で、ピータアを何處か安全な場所に移さして、出入共に護衛を附する、そして、彼が市内に出て來て、裁判所で證言する場合には、彼等は彼をホテル・ド・ソトに宿らせて置くと云ふのであつた。

其處で話は定つた。ポケットに一個の白銅貨と、二枚の一錢銅貨しか持たなかつたピータアは、宮殿の如きホテル・ド・ソトの客となる事となつた！。

(六十六)

マクギヴネーは直ぐにピータアを伴れてガツフェーの事務所に行つた。ガツフェ

「は前置なしに机の抽出しから、タイプライターで打つた長い文書を取出した。そして、それは検事局が十七名のI・W・W組合員に對して立證せんと欲する事項を詳記したものであつた。ピーターは第一にI・W・Wの事務所が無宿の労働者の集會所であり、亂暴者の寄合所であつて、折々眞の犯罪人も來る事があると云つて、彼が其處で聞いた最も過激な言葉と、捕縛された連中に就いて知つてる事とを殘らず語つた。ガツフェーはそれを一々書き取つて、それを基礎として彼の計畫を立てる事とした。そしてガツフェーは、ピーターに二人の探偵を附けて、自働車に乗せて、アルフ・グインネスと云ふ者が、小麦産地の百姓と喧嘩をして收納小屋を焼拂つた現場と其の附近の地理とを見せにやつた。ピーターは其處から歸つて來ると、ホテル・ド・ソトの十二階に居心地の好い一室を宛てがはれた。彼は其處でマクギヴネーが持つて來たタイプライターで打つた文書を、幾度か變返して暗誦して、彼が陳述すべき作り物語りをすつかり記憶した。其の室の外の廊下には、腰にピストルを隠したガツフェーの配下の一人が、絶えず行きつ戻りつしてゐた。ピーターは一日三度の



食事を運んで貰つた外に、一瓶のビールと一包の巻煙草をも給與された。ピータアは朝夕二回の新聞で、米國兵士の勇敢なる行動と、最近に發見された爆彈陰謀と、審理中の種々なる探偵一件とを讀んだ。

彼は又、一種の衝動を以て大新聞紙上に記された、彼に關する記事を讀むだ。これ迄は、彼は勞働新聞や、「クラリオン」の如き社會黨の新聞に載せられた丈けであつたが、今度は「タイムス」の紙上に於て、檢事局が、如何にしてI・W・Wの間に秘密の代理人を潜入せしめたかと云ふ事から、その男即ちピータア・ガツヂ二ケ年間、彼等の一人として如何に行動し、如何に苦心して、此に證人席に立つてI・W・Wの罪狀を暴露する事となつたかを、長々と書き立てたのであつた。

審理の二日前にピータアはマクギヴネーと外に二人の探偵に護衛せられて、地方檢事局に出頭して、其處で、檢事正のバーチャードと其の代理のスタンナード（この事件の擔當者）とに會つて、長時間に亘つて種々なる打合せをした。この二人はピータアの陳述を聞いて、少々それを變更して、モ一度陳述させて、よろしいと云

つた。ピーターは再びホテルに歸つて、恐ろしい出廷日を待つた。

ピーターの出廷する日が來て、彼がいよ／＼法廷に伴はれて行かれた時には、彼の膝は震へてゐたが、四人の護衛を附けられたので、つく／＼彼自身の重要なる事を感じたのであつた。彼は法廷外の大廊下にも、法廷内の傍聽席にも、多數の顔馴染の壯漢の交つてゐるのを見た。傍聽席は赤の同情者で一杯であつた。併し彼等は法廷の入口で嚴重なる身體検査の後に入廷を許されたもので、審理中も絶えず嚴重なる監視の下に置かれたのであつた。

ピーターが證人席に進んだ時の心持は、正しく、トム・ダッガンやドナルド・ゴルドンが數十臺の自動車のヘッドライトの白熱の閃光に照射された時の心持と同じであつた。ピーターは數百人の集中せられた赤熱の憎惡を感じた。彼等の抑へ難き忿怒は時々爆發した。抗議のざわめきがあつた。嘲笑のどよめきがあつた。法廷取締は木槌を以て卓を叩いた。裁判長は其の椅子から半ば起ち上つて、再び騷擾すれば傍聽者の退廷を命ずると宣言した。

ピーターアの前方には、わなにかゝつた鼠の様に見える十七名の被告人が、長いテ  
ーブルを前にして腰かけてゐた。そしてその三十四の鼠の眼は一ツ残らずピーター  
アの顔にジツと注がれて、少しもそれから動かなかつた。ピーターアは唯だ一度チラリ  
と彼等の方を見たのであつたが、彼等は彼に向つて鼠の齒を剝き出した。彼は驚い  
て急に他の方向に視線を轉じた。併し其處にも亦た彼を安んせしめぬ顔があつた。  
其處には純白無垢の通常服を着けた。ゴット夫人が、悲痛と輕侮に満ちた表情で、  
そのバツチリした黒い眼をジーツと彼の顔に注いでゐた。彼は又も慌てゝ顔を陪審  
官席に向け直した。其處には十二名の男女の陪審官が着席してゐて、一人の老夫人  
は優しい微笑を彼に與へ、一人の若き農業家はそつと目ぐばせをした。彼は此の方  
角に友人のある事を知つた。

ピーターアは彼の證言を陳述した。次いで反對訊問が始まつた。それは無論、優雅  
で、諧謔味があつて、而かも肺臍をえぐる様な鋭さを持つた。辯護士アントリユー  
スからであつた。常にアントリユースを畏れてゐたピーターアは縮み上つた。彼は何

人からも斯くの如き訊問に逢ふ事を語られてゐなかつた！。又、彼の證言した是等の犯罪のあらゆる事實に就いて、その當時交換されたあらゆる談話に就いて、猶ほ誰が其處にゐたか、外にどんな話があつたか、彼はどうして其處に居合せたか、其後彼はどうしたか、彼は其の朝食に何を食つたかに就いて、アンドリュースが彼に詰問する事を許さるゝとは、何人も彼に話して聞かせてなかつた。ピータアには全く其の心構へがなかつた。彼は辛うじて二ツのもので救はれた。その一つは、擔當檢事がアンドリュースの質問に對して矢次ぎ早に連發した反對で、他の一つは、同じく檢事が彼の前に準備して呉れた旋風避けの岩窟であつた。檢事は彼に云つた。「お前は記憶しなければ、しないで好い。何人も、或事を忘れたからと云つてお前を罰する事は出来ぬ。」それでピータアはアルフ・グインネス自身が收納小屋を焼き拂つたと云ふ談話を繰り返して詳しく答へたが、外に誰が其の話を聞いてゐたか、其の外にどんな話があつたか、又その話のあつたのは何日であつたかは記憶せぬと云ひ遁れた。



其處へ正午の休憩時間が来て、ピータアに準備の機會を與へた。彼は午後の法廷で先づ檢事の質問を受けた。併しそれは總べて彼の證言の間隙を塞ぐ爲の質問であつた。次にアンドリュースが代つて質問したが、彼は又、答辯の出来ない事は記憶しないと云つて、アンドリュースが彼の足下に置いたワナを巧みにはづした。やがて閉廷となると、彼は「旨く行つた」と褒められて、大成功でホテル・ド・ソトに送り返へされた。彼は其の後一週間、そこに宿泊してゐたが、其の間、被告側は彼の證言を打破しようとして、効果のない努力を續けたのであつた。

ピータアは新聞紙の上で、内部の敵に對して國家を防護する愛國者として彼を賞揚した、檢事の長論告を讀んだ。彼は又、彼を「鼠」と嘲り、「逃げ隠るゝ憎むべき叛逆者」と罵つたダギツド・アンドリュースの長演説の概略を讀んだ。勿論、彼は嘲笑が無力の標章であるとは考へ得なかつた。

ピータアは弱い人間であつた。陪審官の第一回の票決は被告の有罪に決したと聞いても、彼の心中の苦惱は去らなかつた。彼は審問中の緊張の爲、ひどく神經を傷

めた事をマクギヴネーに訴へた。彼等は田舎に秘密の隠れ家を求めて、射撃の名手であるハムメットと共に彼を其處に送つた。彼は新聞で、十七名の被告中、十六名までは法律の規定する最長期の刑罰、即ち禁錮十四年に處せられ、一人だけが十年の禁錮に處せられた判決を見た。彼は彼等の憎悪がいよ／＼彼の一身に集注せらるる事を想うた。

一日、マクギヴネーは自動車を送つて、ピータアをガツフエーの事務所に伴れ戻した。其處には他の新らしい計畫があつた。彼等はエルドラド市でI・W・Wの他の一群を捕縛したに就いて、ピータアに證言を繰り返させようと云ふのであつた。そしてピータアは被告の一人を知つてゐたので、それで充分だと云ふのであつたが、ピータアは容易にそれを引受ようとしなかつた。彼は、これは可なり困難で、危険な仕事である、毎日ホテルの一室に閉ぢ籠つて、煙草を吹かす以外に何事もせず、I・W・Wの連中が今にも爆弾を投げ込みはしないかとびくびくしてゐるのだから、大抵神経が變になつてしまふ。その上、こんな仕事に永く續くのではないから、餘

ほど割をよく拂つて貰はねばならぬと云ふのであつた。然るにガツフェーの答は、  
ピーターは、この職業が何時まで続くかを苦慮するを要せぬ、若し彼がこの證言を  
與へる事を欲するならば、彼はこの國の一端から他の一端まで、それを爲しつゝ愉  
快に旅行する事が出来る、そして到る處で贅澤な生活をして、新聞紙上では常に一  
個のヒーローであると云ふのであつた。

併し、ピーターは尙ほ澁つた。彼はアメリカ市「タイムス」によつて、彼が如何に  
貴重なる證人であつたかを熟知してゐた。彼は彼の畏怖せるガツフェーに對してす  
らも、彼の値打を要求しようとするのであつた。彼はガツフェーが顔をしかめたに  
も拘らず、それを固執した。ガツフェーは、終に一步譲つた。よろしい、それでは  
ピーターの旅行中は一週七十五弗と實費とを拂はうと云つた。彼は又、今後六ヶ月  
間、この仕事の繼續する事を保證すると云つた。

(六十四)

斯くしてピーターはエルドラドに行つて、官憲を援けて、三年から十四年の刑期



で十一名の被告を監獄に送つた。次に彼はフラグランドに行つて、三ツの事件に證言して更らに七個の頭顱を彼の戦利品に加へた。彼は斯くして、赤が彼に對して爲し得る處のものは、單に彼を睨み付ける事と、鼠落しにかゝつた鼠の齒を剝き出すに止まる事を覺つた。彼は次第に平氣で證人席に着く様になつた。彼は折々護衛なしに夜の歡樂を味ひに外に出た。彼は又、田舎に隠れてゐる時には、田舎道の長い散歩を試みた。

ピータアがフラグランドで證言してゐる當時であつた。ヨーロッパから平和來の魔語が電光の様に傳はつて、全市を通じてまるで狂氣の有様となつた。全市民は小兒から老人まで街路に飛び出して、國旗を振り、空き鐘を叩いて勝利の平和を歡呼した。それは新聞の虚報であつた事が判つて、それから三日經つと、又同じ光景が見られた。ピータアは最初は平和によりて彼の國家を救ふ職業が終滅する事を恐れて、可なりこの平和來の風説に心を腦ましたが、直ぐに少しも心配するに及ばぬ事を覺つた。戦争は止んでも、赤の撲滅事業は依然として繼續せらるゝのであつた。



彼等はピーターアがフラグランランドにゐた際に、社會主義者の手入を行つた。探偵共が氣晴らしに一緒に行つて見てはどうかと云ふので、ピーターアは槿の棒とピストルで武裝して、社會主義者の本據に突入する一人となつた。戦争は既に終りを告げてゐたが、彼は尙ほ戦争氣分で、机の後ろの隅に閉ぢ籠つた、支部の組織者の青年猶太人を發見すると、イキなりその頭に痛撃を喰はして、米國の青年がアルゴンヌの戦場で感じた様に、痛快に感じたり、タイプライターを蹴飛ばしたりして喜んだのであつた。

探偵の仲間には面白半分について來た學生連中も加はつてゐた。彼等は景氣づいて、此の際、社會主義運動を此の市内から一掃する事に相談を定めた。そして彼等は一布哇人の開いてゐる「國際書店」を襲撃したが、書店主は逸早く隣の支那料理屋の臺所に逃げ込んで、エプロンを引かけてゐた。併し、黒い髭のある支那人は誰もまだ見た事がないので、人はこの支那人を取圍んで、散々に擲り付けた。彼等は又、書店内の書籍をスツカリ裏庭に搬び出して火を付けて焼いた上に、探偵と學生とは

手を取り合つて、布哇の踊りの眞似をして其の火の周圍を踊り廻つた。

ピータアは斯うして數ヶ月間、愉快なる生活を續けて此處に留つた。それは一人の頑固な判事が彼の證言を適法のものとして承認する事を拒んだ爲に、公判が永引いた爲であつたが、多數の判事は實業界の巨頭連と協同して、國家を赤の脅威から救はうとしてゐたので、彼の契約期間が盡きる迄に、彼の獲た頭顱の總數は百を超へた。ガツフェーは最後の小切手を彼に送つて、彼を解職した。

ピータアはリツチポルト市に行つた。彼は内側のポケットに一千圓以上の金を持つて大盡氣取りになつてゐた。彼は市内の盛り場にブラリと出掛けた。活動寫眞館の前まで來ると、金娘の若い娘が彼を見てニッコリ笑つた。その頃はまだビール一杯二仙四分の三と云ふ時代であつた。ピータアは一杯飲まうと云つて彼女を酒屋サロインに伴れ込んだ。彼が眼を開いた時には最早や暗くなつてゐて、割れる様に頭が痛かつた。彼は周圍を手探りに探つて、彼が路次の暗い隅みに横たはつてゐる事を知つた。恐怖は彼を擱んだ彼は手を内側のポケットに當て、見たが、其處は全く空であつた。

うして又ピーターアの上に破滅が來たが、其の破滅は何時もの通り婦人の爲めであつた！。

ピーターアは警察署に訴へ出たが、警察ではその女を探し出さなかつた。若し又、探し出したとしても、金はその女と山分けにして、ピーターアには呉れぬと云ふのであつた。ピーターアは主任警部の慈悲に訴へて、彼が國家の保安機關の一部であつた事を信ぜしむるに成功した。その結果、ガツフェーに宛て、短かい電報を打つ事を許された。ガツフェーからは、商業會議所書記長から汽車の切符を受取れと云ふ返電が來た。

(六十八)

ピーターアは散々に叱責された後に、一週二十弗の以前の給料で、事務所の内勤員として使はれる事となつた。職務は、ガツフェーの多數の外勤員の相談相手となつて、赤の個人又は團體に就いて、彼の知つてゐる一切の事柄を彼等に語る事であつた。彼は赤の各個人の人物と學說と運動とに關する彼の深い智識によつて、或は證言の



虚構を援け或は餘りに熱烈なる煽動家にワナを置く事に助力を與へた。彼は最早や赤として彼等の間に立ち廻はる事は出来なかつた。が、それでも多少の探偵仕事を爲し得る場合が無いでもなかつた。例へば陪審官を決定する場合、又は全陪審官の各員を探查する場合の如きがそれであつた。

I・W・W はアメリカ市から全く一掃されたが、社會主義者は迫害と刑罰とに拘はらず、尙ほ活動を續けてゐた。のみならず、他に新らしい危険が首を擡げつゝあつた。兵士は凱旋しつゝあつた。そして彼等の一部は不満を感じて、軍隊内に於ける彼等の待遇に就いて、本國內に於ける職業の缺乏に就いて、及び大統領が巴里に於て協定しつゝある平和條約に就いてすらも、ボツ／＼不平を云ひ初めつゝあつた。彼等は云つた。彼等はデモクラシーの爲に安全なる世界を作るのを目的として戦つたが、今やそれは、營利業者の爲に安全なる世界と爲されたのであつた。これは平易なるポリシエキズムで、その最も危険なる形式であつた。何故なれば、これ等の徒は銃を操る事を教へられたもので、どんなにしても彼等が無抵抗の平和主義者と



なる事は期待されぬからである。

戦争中、労働者が非常に不足したのに乗じて、有力なる或る種の労働組合では、一般的物價騰貴を理由として賃金値上げを要求したものであつた。これが爲に商業會議所や、商工協會の會員連が非常に憤激したのは自然の成行で、彼等は此に歸還兵士を利用してストライキを粉碎し、労働者の團結を破壊するの機會を發見したのであつた。彼等はこの目的の爲に兵士を團結せしめようと圖つた。アメリカ市に於ても商業會議所は彼等の爲に俱樂部を設置する事として二萬五千弗を寄附した。そして従業員がストライキをやつた際には、電車は軍服を着けた歸還兵士によつて運轉されたのであつた。

然るにシドニーと呼ばれた一老兵があつて、この資本家連に眞正面から反對した。彼は獨力で發行してゐた、「老兵の友」と云ふ新聞をその反對運動の機關紙として、「罷業破り」スキヤップスとして働く彼の同僚に抗議する事とした。商工協會の書記長は彼を呼んで、その運動の中止を勸告したが、彼はそれを肯じないで、敢然として彼の戦線を

進めた。其處で彼を片付けてしまふ仕事ガツフエーの事務所に割り當てられたのであつた。ピーターは最早や公然と活動する事は出来なかつたけれど、背後からそれを指導する一人であつた。彼等は先づシドニーの事務所に數人の密偵を潜り込ませる事とした。シドニーは貧乏で、新聞の發行を續けるに充分な資金を持つてゐなかつたから、彼の事業を援けて呉れる特志家は誰でも歓迎した。そこで、ガツフエーはこの特志家を可なり多數に、彼の許に送つた。その一人はシドニーの帳簿を受け、他の一人は新聞の發送を受持ち、他の二人は資金募集の爲に、労働組合の間を駆け廻つた。その他の者は、毎日か又は隔日に事務所によつて來て、シドニーの助言者となつた。それにも拘はらず、シドニーは依然、商工協會の横暴專恣を攻撃し、政府に對しては歸還兵の爲に土地と職業とを準備せざりし無能と不誠意とを叱責しつゝあつた。

ガツフエーの「覆面の仕事師」——これはピーター・ガツヂや、ジョー・エンゼル等に對する術語であつた——この一人に、其の名をジョナスと呼ぶるゝ男があつた。

このジョナスは自から「哲學的無政府主義者」と稱して、アメリカ市に於ける最も赤い「赤」を裝うてゐる者で、彼の平常の仕事は、急進主義者の集會では必らず立ち上つて演説者に質問を試み、それを誘うて暴力、叛亂、及び群集行動を是認せしめようと試みる事であつた、そして演説者が彼の落し穴にかゝらぬ時には、ジョナスはそれを「腰抜け」と嘲り、「海老茶の社會主義者」と罵つた。そして聽衆中にそれを喝采する者があれば、ガツフエーの手先さは直ちにそれを、眞の赤の同情者と目するのであつた。

ピータアは以前からこのジョナスを疑つてゐたが、彼は今やアメリカン・ハウスの四百二十七號室でこのジョナスと會見する事を命せられた。彼等は其處でシドニーの陥穽を協議するのであつた。ジョナスは獨逸人の同志から來たものと見せかけた手紙を書いた。それは歐羅巴の二三の新聞の名を列擧して、其處に新聞の見本を送る事を編輯者に求めたものであつた。この手紙はシドニーに郵送された。翌朝ジョナスはシドニーの事務所にブラリとはいつて行つた。シドニーはこの手紙を彼に示



した。其處でジョナスは、これは勞働新聞で、その編輯者達は疑ひもなく戦後に於ける米國兵士の感情如何に大なる興味を持つてゐるのだと云つた。シドニーはそれに返事を書く事にした。ジョナスはその傍らに立つて、如何に書くべきかを助言した。「武器を執つた予の往時の敵人に對し、謹んで予の友愛の微意を表し。來るべき新なる協同の新社會に於ける兄弟として喜んで足下を迎へる」云々と書かれた。これは國際主義者の常用語で、總べての運動者が日々口癖の様に云つてゐる語であり、彼等のペンの尖から自動的に走り出る語であつた。シドニーはこの手紙と數部の新聞とを郵便に出した。ガツフェーの事務所は金を使つて郵便當局者にその手紙を差押へさせた。ガツフェーの手先の一人である、シドニーの帳簿係りは聯邦檢事局に出頭して、シドニーは戦時の敵人と共に陰謀を圖りつゝあると告發した。拘引狀は發せられた。新聞發行所は家宅搜索を受け、讀者名簿は沒收され、室内のあらゆる物は床の中央に投げ出された。

斯かる次第で、ピーターはこれに就いては仕事らしい仕事をしなかつた。ジョナ



スはこれを彼一人の手柄として、ピータアの信用を奪はうとしたので、彼は聯邦政府當局者が一應の取調をした後に、こんな詰らぬ事は取りあげぬと云つたと聞いて大に溜飲を下げたのであつた。併し此の事件が政府の検事局に廻ると、此處ではそんな撰り好みはしなかつた。更らに家宅搜索が行はれ、新聞發行所は破壊せられ、シドニーは監獄に打ち込まれた。豫審判事は一萬五千弗の保釋金で彼の出獄を許した。「タイムス」は例によつてこの陰謀事件を盛んに書き立てたが、事件は一年以上に亘つて結末が付かなかつた。併し、ガツフエーはシドニーのアメリカ市内に職業を得る事を妨害したので、彼の新聞は自然に潰れ、彼の家族は饑餓に陥つた。

(六十九)

ピータアは既に半年以上も忠實に働いた。彼はこの間ガツフエーに對する約束を宗教的に嚴守して、決して婦人に戯むれなかつた。併しそれは男子として不自由な生活であつた。ピータアは孤獨の淋しさを味はつた。彼は屢ばネル・ドリーンや、ロシー・スターンの顔を夢に見た。ゼニー・トッドの顔さへも見た。或日モ一人、他の

顔が彼の前に現はれた。それは彼が「赤」であるが故に彼を拒斥した美顔術師のフリスピの顔であつた。ピータアはふと気が付いた。彼は最早「赤」ではなかつた！。その反對に一個のヒーローであつた。彼の寫眞はアメリカ市「タイムス」に掲げられた。疑ひもなくミス・フリスピはそれを見た。彼女は善い女であつた。正直な娘であつた。最早や彼女に異議はない筈であつた！。

斯う考へたピータアは美顔術師の店に出掛けて見ると、果して其處に金髪の婦人がゐた。果して彼女は彼に關する新聞記事を読んで、何時か一度彼に逢へる事を望んでゐたのであつた。それでピータアは繪畫展覽會に彼女を誘ひ出した。そして歸途には早や彼等は非常に親しくなつてゐた。一週間經たぬ間に彼等は終生の友であつたかの様に親密になつた。ピータアが彼女に接吻を求めた時に、彼女は羞恥を含まずそれを承諾した。彼女は彼に數回の接吻を許した後に、彼女が孤獨の、頼るものゝない、自活婦人である事を語り尙ほ彼女は常に尊敬すべき婦人であつた事を、彼が彼女に接吻する以前に、もつと詳しく知つて貰ひたかつたと云つた。ピータア

はそれを熟考した上で彼女と結婚しようと思ひ切つた。彼はその頃ミス・フリズビーに逢つた時に、彼の決心を語つた。そして婚約が成立した。

ピーターはガツフェーに會ひに行つた。彼はガツフェーの机の直ぐ傍に行つて、帽子を捻くりながら、顔を赤くして、吃り／＼彼の自白を始めた。彼は無論嘲笑の旋風によつつかる事と豫期してゐたが、ガツフェーはピーターが眞に善良なる婦人を見出して、その婦人と結婚したいと云ふのであれば、それに賛成すると云つた。彼は尙ほこの世の中に善良なる婦人の感化に比すべきものは、何物もないのであるから、ガツフェーは彼の使用人が妻帯者であり、眞面目な、確實な生活者である事を望むものである、さういふ人々は信用が出来るばかりでなく、時として婦人の使用人を必要とする場合にも甚だ好都合であると云つた。彼は又、ピーターが若し早く結婚してゐたならば、今頃は銀行に可なり巨額の貯金を持つてゐるのだがとも云つた。

其處で、ピーターは大いに安心して、好い氣になつて、物價騰貴の今日に一週二

十弗では結婚生活は困難であると訴へた。ガツフェーは、それは全くその通りである。で、早速一週三十弗まで引上げてやらうが、その以前に一度ピータアの婚約者に逢つて、彼女が果して價值ある女であるか否かを判断せねばならぬと云つた。ピータアは非常に喜んだ。そこで、ミス・フリスビーはピータアの親分キスと、秘密の、極く打解けた會見をしたのであつたが、ピータアは其の後あまり嬉しさをなかつた。それは何故かと云ふに、ガツフェーはピータアの未來の妻に、ピータアの弱點を殘らず話して聞かせて、ピータアの親分が彼女に何等を期待するかを語つた事を悟つたからであつた。斯うして彼等は結婚後一週間で、早くも第一回の小競り合をやつた。そしてピータアは茲に、何人が家庭の首唱者たらんとしてゐるかを發見したが、彼はその示されたる地位に着いて、小事は一切その妻ウイフに任せる事に決心した。

グラツヂス・フリスビー・ガツヂは優れた支配人であつた。彼女は女海狸の様に彼女の巢を作る爲に忙しく働いた。それでも彼女は尙ほ美顏術師の職業を棄てなかつた。それは何故かと云ふに、彼女は「赤」の運動は遠からず剿滅されねばならぬ、従つ



てピーターは失業せねばならぬと推測したからであつた。彼女は「流行」雜誌の熱心なる讀者で、些細な點にも流行に遅れぬ事を心掛けた。彼女は又、禮儀作法に關する書籍も讀んでゐて、それをピーターに教へるのであつた。そして彼女は常に斯う云ふのであつた。ピーターは何時までも此の儘で居らねばならぬ理由はない。教育ある人達の言葉を學び、立派な人達の行儀作法を心得て置かねばならぬ、結局、こんな事が給料を定める標準となるのである。

彼女は又、彼を日曜毎に貴族的な教會に伴れて行つて、牧師ストツターブリツチの愛國的説教を聞かせた。彼女は斯うして貴婦人達の服裝から學ぶと同時に、彼女が「上品」とか「高尚」とか呼ぶものゝ標本をピーターに教示するのであつた。彼等が晩に散歩に出た時にも、彼女は或は大商店の窓に立ち停つたり、或はホテルの接客室に彼を伴れ込んだりして、彼に上流社會に關する教育を與へるのであつた。

(七十)

グラツヂス・フリスビー・ガツヂは熱烈に富豪を崇拜したが、それと同様に熱烈に

貧乏人を嫌悪した勿論彼女と雖も、今日の社會は貧乏人が存在せねばならぬ事、多數の下層社會があつて、始めてそれで少數の上流社會が存立し得る事を承諾してゐたのである。で、貧乏人が其の地位に安ずる間は、彼等に敢て之に反感を懷かないが彼等が、其の地位を脱出しようとしたり、又は上流社會を批難するのが、憎いのであつた。彼女は、最初は赤の何人とも直接對面した事はなく、唯だピータアが一日の仕事を終つて歸つて來ての話で、それを知るばかりであつたが、彼が後からくと嗅ぎ出した新らしい團體が、彼女には惡魔の權化の集團の様に思はれた。彼女はとろ／＼と眠つてゐる貴婦人の指の爪を磨く間にも、彼女の心は是等の惡魔を絶滅する工夫に忙しく働いてゐるのであつた。

彼女の考案には往々驚歎すべきものがあつた。ピータアは先づそれ等の考案をマクギヴネーに持つて行き、次にガツフェーに持つて行つた。斯うして彼女はその才能が認められて、可なり割の好い給料を拂はるゝ事とあつた。

丁度その當時は赤の鎮壓掃蕩に多忙を極めた時期であつた。ロシヤのポリシエキ

キ革命後の二年間に、恰かも社會主義運動が漸次に分裂に向つて歩を進めつゝある時代で、運輸トラストの「覆面の使用人」も、地方検事局及び聯邦政府の密偵も、兩派の不和軋轢を激成していよいよ最後の決裂に至らしめようと懸命に努力しつゝあつた。社會主義者中の斬進派は尙ほ政治運動に信賴して、政黨組織の氣長な仕事に全力を傾注せんと主張し、急進論者は之に反して手取り早い總同盟罷業者若くは労働者の民衆的叛亂に依るの外、理想の實現は期し難いと主張したのであつた。而かもこの討論は最早や抽象的理論の境を出で、現實の問題に進んでゐた。兩派は互ひに他を論難し、排撃した。一方が他を「無政府主義者」と嘲ければ、他は一方を政府の傭兵と罵つた。「覆面の使用人」は其の間に交つて巧みに虚構の惡聲を放つた。果てはこんな事が支部内の問題になる様になつて、終に社會主義者の左翼は黨から分離して、彼等一派の大會を召集したが、この大會は又二派に別れて、一は「共產黨」を組織し、他は「共產労働黨」を組織した。斯うしてこの兩黨は改めて大會を開く事となつたが、その開期中にマクギヴネーはピータアの處に来て、共產黨の綱領起草委員

中に聯邦政府の手先の一人が交つてゐる事を告げた。それで實は、黨そのものが有罪となる様な文句を、その綱領中に挿入させて、それによつて黨籍にある者は一人残らず監獄に打ち込みたいのだが、その文句は正統共產黨の常用語でなければならぬから、ピータアの専門的智識に待たねばならぬと云ふのであつた。

ピータアは數種の文案を起草した。それから二日經つて彼はこの大會の記事を新聞で讀んだ。綱領起草委員の報告があつて、彼が兼ねてから怪しいと睨んでゐたガントンは、少數意見を報告し、一流の猛烈なる熱辯を揮つた結果、大會は終に少數の差で彼の少數意見を採用したのであつた。そしてこの少數意見はピータアが起草した文案をそつくり其まゝ採用してゐるのであつた。二ヶ月後に政府のそれに對する準備が全く整つた時に、共產黨員に對する一綱打盡的手入が行はれて、ガントンも逮捕されたが、數日後に彼は監獄の屋根を鋸で切り破つて首尾よく脱獄したのであつた！。



一旦影を潜めたI・W・Wは又表面に現はれて來た。彼等は又諸所に支部を開設した。ピーターは自からその場所には出て行かなかつたが、マクギヴネーが伴れて來た二人の若者を訓練して、彼等に「赤」の専門語と、如何にしてこの運動に潜り込むべきかを教へた。間もなく彼等の一人は支部の書記となつた。ピーターは背後から彼等の行動を指揮して、一週に二回、I・W・Wの連中が計畫し、實行しつゝある一切の事項に就いて、彼等の報告を受けた。ピーターとグラツヂースとは、これ等の危険人物に社會の注意を惹くべく、他の爆彈陰謀を腦裡に描きつゝあつた。彼は一日、朝刊新聞を取り上げて、仁慈なる神の攝理によつて、敵が彼の手に交附せられた事を發見した。

それはアメリカ市から北西に遠く離れた材木の産地のセルトレリヤの小都會の出來事であつた。I・W・Wは丁度アメリカ市に於ての如く、その支部を襲撃されて、破壊された。彼等は他に集會所を設けた。商業會議所と商工協會の會員は秘密の集會を開いて、いよく彼等を打ちのめす事に決心した。I・W・Wの組合員は官憲に

向つて保護を訴へ出たが、それは拒絶された。彼等は社會公衆に訴へる爲にリーフレットを印刷した。然るに實業家連は機先を制した。彼等は休戦紀念日に歸休兵士の行列を舉行して、それが丁度、I・W・Wの集會所の前に出る様に途中から通路を變更した。狂熱的な連中は彼等の爲さんと欲する事の象徴として綱を持つてゐた。

彼等は集會所の前で行列を停めた。そして鬨の聲を揚げてその建物に向つて突進した。彼等が入口の扉を打ち破つて、なだれ込んだ時に、I・W・Wの組合員は内部から銃火を開いて、侵入軍の數名を仆した。

勿論、モツブの忿怒は其の極に達した。彼等は廣間にゐた組合員を打つて打つて打ちのめして、その幾人かを氣絶させた。彼等はそれを監獄に投げ込んで、殴り付けて、そしてその一人を監獄の外に連れ出して、自動車で何處かへ搬んで、シヨウン・グラツヂスと同様に不具にして、更らに橋の上から吊したのであつた。彼等は勿論、セントレリヤの新聞紙に都合の好い事ばかり書かせた。翌朝になると、全米國人は、小銃を以て武装した浮浪人の一團がI・W・W支部の事務所に潜伏してゐ

て、武装せざる戦時の精兵の平和の行列に對し、如何に不法な銃彈を浴せたかを讀んだのであつた。

勿論、全國の人心は沸騰した。全米國の幾人かのガツフェーと、マクギヴェネーとガツヂとは、等しく彼等の機會が到來したのを看取したのであつた。ピーターはアメリカ市の I・W・W 支部の書記に命令を下して、其の晩、急に彼等に集會を開いて、セントレリヤから來た新聞記事の虚偽を宣言する決議を採用する手筈を取らせた。

同時にガツフェーの使用人の一人で、今も尙ほ軍服を着てゐる一退役將校は、在郷軍人團の集會を召集せしめて、その席上で猛烈なる煽動演説を試みた。彼等の三分の二は其の夜の九時を期して、彼等の自動車から取出した大きな鐵の捻廻しを武器として、I・W・W の支部を襲撃した。彼等はその捻廻しで頭から I・W・W、組合員を滅茶々に撲り付けた。翌朝この出來事は歡喜の叫びを以てアメリカ市「タイムス」によつて報道された。検事正のバーチャードは陳述書ステートメントを發して、これ等の在郷軍人の行動を稱揚して、彼等を檢擧するの意思なき事を表明し、尙ほ浮浪人に直



接行動を必要としてそれを得たのであるから、彼等はそれに満足してゐる筈だと揶揄した。

在郷軍人團員はこの稱揚に鼓舞せられ、ガツフエーの退役將校に教唆せられて、あらゆる急進主義者の集會所に侵入して、それを破壊した。彼等は、「クラリオン」の發行所を撃破し、社會主義者の本據襲撃して、數噸の社會主義文書を沒收した。彼等は又二三の書籍店にも大破壊を興へた。そして其の後は幾つかの小團體に分れて、市内のあらゆる新聞賣店に臨検して、「ネーション」又は「ニューレバブリック」の如き、赤の雜誌類を發見した場合には、それを一冊々々滅茶々に引裂いて、尙ほその上に店主を捕縛すると威赫した。彼等はラスキン俱樂部と呼ばれたを學的團體の集會所にも侵入して、温良なる老婦人を甚だしく驚愕せしめた。彼等は又從來は教育的團體として看過されてゐた「ロシヤ俱樂部」が、ポリシエキキ、又はポリシエキキになりかゝりの人々の集會所である事を發見した。ガツフエーは直ちに其處に手入れを行つた。其處には二百人からのロシヤ人がゐたが、悉く皆な撲り倒され



投げ飛ばされた。そして數學の教師は頭蓋骨を打割られ、音樂の先生は齒を打ち折られた。

數百萬の米國青年は徵兵に取られて、軍服を着、銃を擔いだばかりで、遂に實際の戰爭を見なかつたが、是等の連中は此處に彼等の機會を發見して、面白半分にくの「赤」征伐に加はつた。彼等は唯だ赤色を目の仇にしてゐたので、或る有名な運動家が赤のネクタイをしてゐた爲に、ポリシエキキと間違へられて半殺しに逢つたと云ふ、滑稽な悲惨な事もあつた。斯かる次第で、法律と秩序を保護する爲に餘り多く法律を破る事の不合理に氣の付いた人々から、次第に抗議の聲が高まつて來た。其處で地方検事局では是等の兵隊歸りの青年を執達吏に採用して、表面をつくらふ事とした。

(七十二)

ピータアガツチも屢々この赤征伐に加はつた。彼は不思議にも、戰爭に行き損つたこれ等の兵士と同じ感情を持つたのであつた。彼は五ヶ年間、戰爭の記事を讀ん

だばかりで、實際戦争した事はなかつた。そして今に至つて事は戦争が好きであつた事を發見したのであつた。過去に於て戦闘を厭はしめたものは傷害の危険であつたが、今日では最早や少しも危険でないので、彼はそれを享樂し得るのであつた。過去に於ては彼は臆病者と呼ばれて、自からもそう信じたけれども、今や彼はそれが眞實でなかつた事を覺つた、彼は群集中の何人とも同じ程に勇敢であつた。

其の後、政府自から共産黨及び共産勞働黨の破壊に手を染める事となつたが、此に至つてピータアの人望と威信とは尙ほ一層加はつた。従來は只だ襲撃し。破壊したのだが、今度は警官と探偵とが彼等を包圍し、逮捕し、拘引して、訊問を行ふ事となつたので、ピータアは常に之が爲に必要とせられたのであつた。彼の専門的知識は彼を必須の人物たらしめた。彼はこの仕事の事實上の指揮者であつた。ガントン其他の「覆面」の人を通じて、共産黨の集合と共産勞働黨の集會とが同じ夜に開かれる事となつた。これは全國を通じて何處も同様で、あらゆる是等集會は同時にせられて、數千人の「赤」が一時に逮捕せられたのであつた。アメリカ市に於ては、聯

邦政府はガツフエーの事務所の附近に十二個の室を賃借して、一時の拘留所に充て其の夜から翌朝にかけて、兩集會の出席者を球數繋ぎにして、其處に送つて來た。それが總數約四百と稱せられたのだから、どの室もヤツと膝を容れるだけで、一ト通りの混雜でない。而かも撲り付けられて大怪我をした者は、悲泣し苦悶し呻吟するので、其處に何とも云へない悽慘の光景を呈したのであつた。

囚人は數週間に亘つて此の室に監禁せられたが、その間にも絶えず新らしい犠牲が投げ込まれた。で、彼等の多數は、實際、病人にもなれば、病人を装ひもした。彼等の或者は死にもすれば、死にさうな振りもした。勿論、「室内の赤」や同情者は外部で大騒ぎをしたのであつたが、彼等は最早や一個の機關紙も持たなかつた、一回の集會をも開き得なかつた。彼等が僅かに印刷し得た公開狀も郵便局で押收された。それでも尙ほ彼等に何等かの方法で公衆に訴へようとしたが、ピータアの「覆面」の人は、何人が斯かる事を爲しつゝあるかを彼に報告し、彼は更らに手入を行つて、囚人の幾群かゞ又た持ち來たされるのであつた。此處のピータアは幾晩か眠



らなかつたり、食事も時には抜くほど忙がしかつた。彼には囚人訊問の専用室と、彼の命令によつて腕力を行使する六名の人とが與へられてゐて、彼の仕事はこれ等の囚人から、彼等が米國市民であつて監獄に送らるべきものであるか、又は外國人であつて追放さるべきものであるかを、白状させる事であつた。然るに彼等はナカ／＼一筋縄では行かぬものばかりで、ピータアが「お前は無政府主義者であるか、そうでないのか」と訊ぬれば、その答へは、「私はあなたが考へてる意味での無政府主義者ではありませんぬ」と云ひ、ピータアが「お前は暴力を信ずるかどうか」と問へば、彼等は「暴力を信ずる者はあなたで、あなたが打ち碎いたこの私の顔を御覽なさい！」と逆捻ぢを喰はせる。更らに又、ピータアが「お前はこの政府を好むかどうか」と問へば、「私はこんなに無法の取扱をされる迄は常にこの政府を好んでゐました」と答へる。こんな具合で、云ひ抜けられる丈けは云ひ抜けようとするのであるが、ピータアとしては、彼等の自白が無い限り、追放の手續きを爲し得ないので、彼が云はせようと思ふ事を答へる迄は腕を縛るに捻ぢ上げたり、指を逆に曲



げたりして、責め抜くのであつた。

斯うして「赤」はだん／＼に仕辭されて、確かに赤でないを認められた者は釋放されたが、其の他の者は「赤」の特別列車に載せられて、最近の港へ輸送された。彼等の或者は黙つてむづかしい顔をして居り、他の者は怒つて散々悪口を吐き、更らに他の者は見るも哀れに號泣した。それは何故かと云ふに、彼等の多くは家族持ちで彼等は政府が家族をも同様に本國に送還するか、然らざれば彼等に代りて家族を扶養する事を望んだからであつた。

ピータアは是等の襲撃と訊問とを通じて、無論舊知の赤の大多數に出會つた。彼は従來 彼等に出會す事を非常に怖れて、考へるだけでも慄然としたのであつたが今では却つてそれを多少愉快に思ふ様になつた。彼は赤が決して報復し得ざる哀むべき人間である事を學び知つた。彼は、彼等が何等の武器をも有せず、彼等の多くは筋肉すら有せざる事を知つた。彼等は談論以外の何物をも有せざる事を知つた彼の背後には組織せられたる社會の權力——警察、法廷、監獄があり、若し必要が

あれば軍隊までも彼の味方となる事を知つてゐた。彼は如何なる事を虚構しようとも新聞は彼の味方であり、公衆は何事によらず新聞紙で讀んだ儘を信ずる事を知つてゐた。彼は最早や少しも「赤」を怖れなかつた！。彼は、最も恐れてゐた赤に出會つた時に、彼の権力の如何に大なるかを彼等に示す事を愉快に感じた。彼等の彼に對する種々なる態度を面白く思つた。或者は舊知の情誼を云ひ立て、彼に歎願した。或者は彼に恐れ入つて泣いて見せた。或者は彼の良心に觸れる積りで議論を吹きかけた。併し彼等の大多數は、只だ傲然と構へて憎々しげに彼を睨み付けるか、又は輕侮の冷笑を明かにその顔に示してゐた。

## (七十三)

ピータアの手に掛つた最初の一群の中に、ミリヤム ヤンコキツチがあつた。ミリヤムは共產黨に屬して、而かもロシヤ生れであつた。従つて彼女はどうしても斯うならねばならぬ者であつた。ピータアは勿論、ローシー スタンナーを彼にくつ付けて、彼を没落させた者が、ミリヤムであつた事を知つてゐた。けれども、彼は尙ほ

彼女の容貌に動かされずにはゐられなかつた。彼女はやつれて、年を取つて見えた。其の上に絶えず咳もすれば、眼付きも狂人の様に怪しく落着かぬものであつた。ピータアは誇りかな、勝氣な女として彼女を記憶してゐたが、今はどうであらう、彼女の誇りは全く消え失せて、彼女は彼の足下に膝を屈して彼の上衣の裾を掴んで、ヒステリックに咽び泣いた。彼女には一人の母と五人の若い男女の兄弟とを養はねばならぬ身であつた。彼女は病院の費用に持つてゐた金をスツカリ無くしてしまつた後に、本國のロシアに送還されようとしてるのであつた。彼女の愛する者達は何となるのであらう？。

ピータアは如何ともし難き事を答へた。彼女は法律を蹂躪した。彼女は共産黨員であつた。そして彼女は外國生れである事を自から承認した。彼は彼女を追ひ遣らうとしたが、彼女は彼をシツカリと掴まへて放さない。彼女はすゝり上げて口説き立てた。彼女は少くとも母親にだけは一度逢つて、後をどうするか、何處に助けを求めるか、又、今後どうしてミリヤムと文通するかを話して置きたいのであつた。



官憲は彼女がその愛する者達と一語を交ゆる事も許さず、彼女の着換へを得る機會すらも與へずに、彼女を追放せんとしてるのであつた！。

ピータアは我々の知つてゐる通り、婦人に對しては常に優しい心を持つてゐた。で彼は今や全く當惑して始末に窮した。彼がこれらの畜生（彼等は常に斯う呼んだ）をどう取扱つても、それは長上の命令を遂行するのであつて、その或者に恩惠を與へる權力は彼にはなかつた。彼は繰り返し繰り返し、それをミリヤムに語つた。けれども、彼女は彼の云ふ事に耳を傾けなかつた。「どうぞ、どうぞ、どうぞ！、後生だから、ピータアさん！。あなたは一度は私を思つて下さつたではありませんか、ピータアさん。——あなたは私にそう云つた事があるではありませんか。——」

然り、それは全く事實であつたが、その當時の彼女の心は全くマツク——ピータアが危険人物中の最危険人物として怖れたマツク——に傾むいてゐたので、彼女は彼の云ふ事に耳も貸さなかつた。彼女は今は自分が蹴飛ばした戀を利用せんとしてゐるのであつた！。



彼女は彼の手をシツカリと掴んだ。彼は暴力 用ゐる事なくしてはそれを離し得なかつた。「あなたがあの頃の事を思ひ出して下さつたら、これ位の事の出来ぬ筈はありません。ピーターさん、どうぞ、昔馴染と思つて……。」

突然ピーターは飛び退いた。ミリヤムも飛び退いた。「ハハア、これがあなたの婦人の友人の一人ですか、そうですか」と云ふ聲が入口の方に聞えた。其處にはグラツヂースが恐ろしい顔で睨んでゐた。「ハハア、これがあなたの赤の愛人スイトハートの一人ですか、あなたの國有婦人の一人ですか」と、グラツヂースは床板を踏み鳴らした。

「起て、お轉婆女！。起て、自墮落女！」と怒鳴りつけられだが、ミリヤムは呆氣に取られて膝を突いたまゝでゐた。グラツヂースは彼女に飛びかゝつて、その房々として黒い髪毛を掴んで、ミリヤムを床の上に引し倒した。彼女は「自由戀愛主義者の見せしめだ、「他人の享主を取らうとする者の懲らしめだ」と云つて、ミリヤムを蹴る引搔く、髪毛を掴んで引摺り廻はす、亂暴狼藉を極めた。斯うしてミリヤムは半死半生の目に逢つたが、終にピーターの壯漢どもが仲に入つて、やつと生命だけは救

はれたのであつた。

事實は斯うであつた。グラツチースは、彼女の結婚前にピータアの恥づべき過去を語られてゐた。ガツフエーはそれを彼女に語り、彼女はガツフエーの語つた事をピータアに語つて、幾度となくガツフ彼を戒めたのであつたが、これ等の「國有婦人」の一人を眼前に見た彼女は、赫として一時的亂心に陥つたのであつた。そして其の後一週間憐むべきピータアは家庭にあつても、事務所にあつても、感情の暴風と雨に惱まされたのであつた。彼等は當時、赤の第一回の輸送準備に忙殺せられてたが、彼の知る外國生れの赤は悉く皆な此處に集つて、彼を取り圍んで彼の靈魂と良心とを征服せんとしてゐるかの様であつた。サデールトツドの從兄弟は英國生れでこの第一回の列車で積出された。其の他にはピータアがI.W.Wで知つてゐるフィンランド生れの伐木労働者があり、ピータアが其の家で度々食事の馳走になつた事のあるポヘミヤ人の煙草職工があり、最後に彼と共に十五日間を監獄に送つたユデヤ人の青年、ミカエルダビシがあつた。

ミカエルには若き妻と三人の小兒があつたので、彼の號泣にははてしがなかつた。彼は「壯漢」が彼の家を襲うた時に、二三百弗の貯蓄金を悉く盗み去つたから追放を止めて呉れと云つた。ピーターは勿論、ダビンが赤であり、外國人であつて見れば、ピーターはそれを如何とも爲し得な事を主張した。次いで、彼等がこれ等の追放者を列車に載せる時には、ダビンの妻を始めとして五六十人の婦人が絶叫して、護衛を押し退けて彼の愛人の側に近づかうとした。巡査等はこれを後に追ひ戻さうとして、棍棒の先きで婦人連の腹部をこづき廻はした。が、それにも拘はらず、ダビンの妻は護衛の間をくゞり援けて、列車の車輪の下に身を投げた。彼女は危い處を引出されて、助かるには助かつたが、斯かる光景は勿論、一般公衆の上に悪い影響を與へるので、ガツフェーは各新聞の主筆を招集して、斯かる出來事はどの新聞でも詳報せぬと云ふ紳士的協約を得た。

(七十四)

全米國を通じて「赤」の輸送列車が東に向つて走りつゝあつた。それには I・W・W

組合員、共產主義者、平和主義者、無政府主義者及びポリシエキキの一切の種類が積載された。彼等は總べて一隻の船に積み込まれて、ロシヤに向けて送り出されたそれは「赤の舟方」と呼ばれて、赤の同情者は囂々として非難の聲を揚げた。そして赤の一僧侶はこの「赤の舟方」を「メーフラワー」に譬へたのであつた！。尙ほ又、ワシントンに於いては、赤の官吏が騒ぎ立て、追放命令の幾分を取消させたのもあつた。その取消されたものの中にはピータア自身で取扱つたものもあつたので、これはピータア夫婦に取つて甚だ面白からぬ事であつたが、其處へ持つて來て尙ほ一層屈辱的な椿事が起つた。

これ等の追放に對して抗議する爲に、アメリカ市に桃色の民衆大會が開かれた。ガツフェーは確かにこの大會に襲撃が行はれるだらうから、ピータアは「壯漢」にどれが赤であるかを揭示する爲に、出かけて行かねばならぬと云つた。元來、斯かる集會の臨監は、探偵のガリーチーの擔任であつたが、この人間はまだ不馴れであつた爲に、何時もピータアに助言を求めるのであつた。今度もガリーチーから一緒に



臨監を頼んで來たので、ピータアも出かけた。其處には聴衆が一杯であつた。數ヶ月間、押へ付けられてゐた赤の忿怒は、此に感激の旋風を得て猛烈に噴出しつゝあつた。其處には數名の辯士が出たが、いづれも、服装と云ひ風采と云ひ、誰の目にも、この國の生れながらの支配階級と少しも見別けが付かぬ立派な人柄であつた。けれども、彼等が演壇に立つて云ふ處は、明かに大逆罪を構成するものであつた。彼等は米國政府を攻撃し、聯合國のロシア封鎖を攻撃し、ロシアのポリシエキキ政府を稱賛した彼等はソヴェエットの舟方によつて彼岸に達した者は幸福である、これ等のものは専制暴虐の國土を去つて自由の國土に到つた者であると斷言した。聴衆はもう大喜びで、辯士の一句一句に歡呼と拍手が起つて、會場は則れる様な騒ぎであつた。

無智なるカトリック教徒の探偵は斯の如き言説を、どうすべきであるか分らなかつた。此の時、一人の辯士は左の如く斷言しつゝあつた。「何時如何なる時でも、政府がいづれの形式に於て、其の真正の目的に背反するものとなる時には、それを

變更し、それを廢止し、斯かる原則を基礎として新政府を樹立し、人民の安寧と幸福とに最も有効と考へらるゝ形式に、その權力を組織するは人民の權利である。」

善人であるガリチーは、斯かる事を言はせて善いか惡るいかの判断が付かない彼はピータアに向つて今の一節をどう考へるか聞いた。

ピータアはそれが限度であつたと考へた。ピータアに全米國を通じて數千の人がこれ程の事も云はないで監獄に打ち込まれた事を知つてゐた。ピータアは合衆國の檢事總長の訓令を讀んで、斯かる事は如何なる事情の下に於ても、言ふ事も、書く事も、考へる事すらも許されぬものである事を知つてゐた。で、彼はカーガリチーに「あれだけ云へばもう充分だ、早く彼奴を引張つた方がいい」と云つた。ガリチーは巡査に耳打をした。彼等は演壇に駈け登つてその辯士の演説を差止め、その辯士と同席の辯士とを悉く拘引すると宣言した。そして聽衆に解散を命じた。

其處にはカーリチーの命令を待ち受けてゐた數百人の巡査と探偵とがゐた。彼等は棍棒の線を作つて群集を追ひ退けて、辯士達を囚人自動車に積み載せた。斯うし

てピータアはガツフェエの事務所に歸つて、その次第を復命した。處がガツフェエは前にネル・ドーンの手紙を持つて彼に向つて來た時と同じ程にひどく怒つてゐるのであつた。彼は頭から怒鳴り付けた。「お前は誰を監禁したと思つてゐるのだ？。彼は合衆國の上院議員の兄弟だぞ！。お前は彼が何を云つてたと思つてゐるのだ？。あれは獨立宣言の一節だぞ！」

ピータアは何故にガツフェエが怒つたかを解し得なかつた。人は單に上院議員の兄弟であるだけで、法律の外に立ち、法律を破り得るだらうか。それが叛亂の煽動であり、それが公言を許されぬものである以上、獨立宣言中に掲げられてると否とで、取扱ひを異にする理由はないのではあるまいか。彼は呆然自失したのであつた。それは兎に角、ガツフェエと市の警察官憲とは、ひどくこの出來事に狼狽した。

滑稽にもガツフェエはその一切の使用人を召集して、赤の取締に就いて訓示演説を試みて、赤の活動の限界が何處に置かれてあるか、彼等が手を下し得ざる人々は如何なる部類の人々であるか、彼等が發言を禁止し得ざるものは如何なる種類の言辭



であるかを説明したのであつた——聖書は即ちその一例で、或者がそれを引用した爲に直ちに逮捕する事は出来ないものであつた。

使用人の一人は突然質問を發した。

「では、私共は皆、聖書を暗記してゐなければならぬのですか。」

其處にどつと笑聲が起つた。ガツフェーは、「いや、そうではない。併し少くとも其處に注意しなければならぬのだ。或者の云ふ言葉が聖書から來たかの様に聞ゆる場合には、それを逮捕してはならぬと云ふのが、當局の趣意なのだ。」

以前説教者であつた他の一人は更らに口を出した。「それでは、我々は全く手も足も出せなくなりませす。聖書に何と説いてありますか、御聞きなさい！」と云つて、二三の例を擧げた。ピーターアの知る限りでは、まだポリシエキキの何人もこんな亂暴な言語を發した事はなかつた。併しガツフェーは如何なるものであらうとも、聖書から來た總べての語は無罪であると主張した。尙ほ彼の意見に従へば、「獨立の宣言」に就いてもそれと同様な事が云はれるので、それが如何に叛亂を煽動するもの



であらうとも、何人も公衆の前にそれを朗讀し得るのであつた。憲法に就いても亦同様で、ガツフエー事務所が不法の行爲として假借なく監獄に送つてゐる、一切のそれ等の行爲をアメリカに於ける各人が爲し得る事を宣言した「權利法典」と呼ばるる憲法の一部ですらも朗讀を許さるゝのであつた！。

これは明かに無茶な立言であつたが、ガツフエーは政治問題としてそれを説明した。若し當局が餘り極端に走れば、これ等の徒輩は當局から離反して人民の投票を奪ふ。そして彼等の手から政府を取上げてしまふかも知れぬ、扱、そうなつた曉に彼等が何處にあるだらうかと云ふのがガツフエーの説明であつた。ピータアは今日まで、政治に對して何等の注意をも拂はなかつた。が、ピータアとグラチースとはこの訓示演説に依つて、始めて彼等の觀察點を廣くせねばならぬ事を痛感した。赤を監獄に打ち込んだり、彼等の頭蓋骨を打割るだけでは充分でなかつた。自分等にしてゐる仕事に公衆の同情を惹かねばならなかつた。其の仕事の必要を一般公衆に理解させねばならなかつた。一般公衆をして、是等の畜生の慊忌すべき事と、彼等

の目的が今日の社會と相容れざるものである事とを、覺知せしむる爲に、「宣傳」と呼ばるるものを實行せねばならなかつた。

是等の必要を最も明白に看取した人は、米國の檢事總長であつた。ガツフェーは其演說中に彼の二重の活動を指摘した。檢事總長は單に共產黨と共產勞働黨とを破壊して、その黨員を監獄に打ち込むばかりではなかつた。彼はその保管する巨額の資金を使用して、全米國を常に赤の陰謀に對する恐怖の狀態に置かんが爲に不斷の宣傳を行つてゐるのであつた。現に彼は今、その部下をアメリカ市に派遣して、ガツフェーの蒐集した證據物件によつて、行動せしめてゐた。彼は斯うして毎週又は隔週に、新爆彈事件、政府を顛覆せんとする新陰謀事件に就いて、何處かで演說を試みるか、然らざれば新聞紙上に陳述書を發表するのであつた。そして彼の宣傳は如何にも巧妙であつた。彼は赤を數週間、監獄に打ち込んで置いて、髪は延びる、鬚は伸びるお負けに拷問でひどく憤慨して人相がまるで變つてゐる處を寫眞に取らせたりした。又如何にも癡猛兇惡に見える赤の寫眞を拵へて、その臺紙に「此の如き

人、諸君を支配せんとす」と題して、それを全國の一萬の新聞に送つたりもした。九新聞はそれを紙上に掲げた。そして九千九百萬のアメリカ人は「赤」を殺害したいと望んだ。この計畫は見事に歸に當つて、検事總長の名聲は頓に高まつた。彼はそれが爲に次期大統領に指名さるゝ事を期待し、彼の部下は悉くそれを目的として活動した程の大成功であつた。

(七十五)

ピータアはこの協議會によつて、始めて選舉人としての彼の責任と、他の選舉人の監理者としての責任とを感じて、全く眞面目な人となつた。ピータアはグラツヂースと共に、彼の見解が餘りに偏狹であつた事を認めた。密偵の任務に對する彼の解釋が戰爭前のもので、時代遅れであつた事を認めた。彼は今や時勢が全く變つてゐる事をつく／＼と感せねばならなかつた。彼は今日の、デモクラシーの行はれる世界に於ては、秘密の代理人が社會の眞の支配者であり、事態の眞の主人公であり、文明の管理人であつた事を痛感したのであつた。ピータアと其の妻とは、この新任



務に就いて、それに彼等自からを適應せしめねばならなかつた。彼等は勿論、利己的考慮に動かされてはならぬと考へたが、同時に彼等はこの重大なる任務が彼等に大なる利益を與ふる事も認めねばならなかつた。彼等はそれによつて上流社會に知己を開拓して遂に成功の域に達し得ると考へたのであつた。グラツヂースは娘時代の四五年間を通じて、指の爪を磨いて上流社會の柔かな、白い手を大事に弄り廻はした。その間、彼等の胸には、他日彼等は是等の上流社會の一員とならねばならぬ、彼女が彼等の手を握るばかりでなく、彼等にも彼女の手を握らせねばならぬと云ふ、堅い決心の火が絶えず燃えてゐたのであつた。

今や、機會は終に來た。彼女はガツフエーに短かい話をした。ガツフエーはそれは好い考へだと云つた。斯うしてピータアは、數年間最も危険なる煽動者であつたが、翻然として前非を悔ゐた前の「赤」で、最近の I W W 審問に政府に奉仕して前に罪科を贖うた、政府の「覆面」の使用人として、講壇に立つ事となつた。

ピータアの講演は最初から可なり成功であつたが、回を重ねるに従つて、如何な



る事が聴衆を笑はせ、如何なる事が聴衆を泣かせ、如何なる事が聴衆の愛國心にピツタリはまつて、喝采を博するかと云ふ、其の呼吸をスツカリ呑み込んでしまつた。彼の名聲はそれが爲に次第に高まつて、終に其の講演が麗々しくアメリカ市「タイムス」に掲載される程の流行兒となつた。彼は種々なる團體や俱樂部から講演を懇請されて、その上ではアメリカ市の最上流社會の人々とも手を握つて談笑する機會を持つた。ピータアのこの成功は、グラツヂースの注意深い教訓に負ふ處が非常に多かつたが、斯かる間に、彼等の胸にピータアの講演の好評が段々に廣まつて行つて、全米國のあらゆる都會の有志からは矢の催促で呼びに来る、彼が出掛けて行くと、其の地方の新聞は彼の寫真を載せる、彼と彼の妻とは其の地方の上流社會の指導者によつて歓迎される、彼等は社交界の花形となつて富者の家庭にも招待される。そして段々に彼等も亦た富者の仲間入りが出來ると云ふ様な空想が描れてゐたのであつた。

彼等には最早や失業の虞れは全く無くなつた。彼等には赤の脅威がそう容易に滑

絶されるものでない事が解つて來た。グラチースも其處に財富と繁榮の階級がある間は、其處に必らず社會的不満があり、其處に必らず煽動と攻撃と變化を求むる絶叫とに依つて生活資料を得る或者があると云ふ點だけでは「赤」に全然同意する事となつた。社會は恰かも花畑の如きものである。人が毎年草花の種子を蒔き付ける時には、其處に雜草も同様に發芽する。で、人は其處に足を入れてこれ等の雜草を掘き去らねばならぬ。グラチースの良人は老練なる園藝家であつた。彼は如何にして雜草を抜き去るべきかを知り、社會は彼の職務を解かざるべき事を知つてゐた。花畑が維持せられる間は、ピータアは必然、除草係長であり、又若き除草係の教師でもあるであらう。

斯くの如き男子と結婚した事は幸福であつた！。これは善良なる人が婦人の彼女を助けて、彼を善良なる良市民となし、愛國者となし、法律の秩序の支持者となした報償であつた。勿論、花畑を所有する人々は、彼等の除草係長が適當に待遇せらるゝ事と、その花園の生産する最上の物の分配にあづかる事とに意を用ゐるであら

う。グラツチースは姿見鏡の前に立つて、寢支度に彼女の頭髪を編みながら 彼等がこの花から何物を求め得るかをジツと考へてゐた 彼等は最も美しき花、最も香り好き花を要求するだらう。彼女は突然、それを見付け出した嬉しさに、躍り上つて、何物かを抱へる様に両手を擴げた。「私達は、成功しました。ピータアさん私達は成功しました！。私達には金も出来ませぬ欲しい物は何でも買ふ事が出来ます！。ピータアさん、あなたは自分で何を打ちあてたかを知つてますか。」

ピータアは歡喜に輝く彼女の顔を見たが、餘り突然の、業々しい名譽の割當てに少く驚きもすれば、不安も感じたのであつた。グラツチースの胸には愛憐の情がこみあげて來た。彼女は彼に両手をかけて「ピータアさん、あなたはほんとに氣の毒な方でした！。あなたはほんとに苦勞なやつたのねえ！。なぜ私はもつと早くあなたを助けてあげる事にならなかつたのでせう。」

斯う云つて、グラツチースは暫らくジツと考へ込んだが、又急に爆發して「ピータアさん、まあ考へて御觀なさい。アメリカ人である事がどんなに有り難い事です

かを。アメリカでは、義務を盡す者は何時でも出世が出来ます！。アメリカは自由の國です！。貧乏人の子から出たあなたの成功の實例は、馬鹿者の「赤」にも、——どんな青年でも一生懸命に働かさへすれば、出世が出来るといふ事を、——屹度確信させますよ！。何故かと云ふに、私はアメリカでは一番貧乏人の子が大統領に出世すると聞いてゐます！。あなたは大統領になりたくない？エ、ピータアさん。」

ピータアは躊躇した。彼はその重大なる任務に適するかを疑うた。けれども、そう云ふ彼をグラツチースが喜ばぬ事を知つてゐたので「彼は恐らく——何時か——」と呟いた。グラツチースは尙ほ語を續けて、「兎に角、ピータアさん。私はこの國の爲に盡さねばなりません！、私はアメリカ人です！」

今度はピータアも躊躇しなかつた。彼は「勿論！」と叫んで、更らに「百パーセントだもの！」と彼の常に好んで用ゐる形容詞を附加へたのであつた。



大正十二年一月十五日印刷  
大正十二年一月十九日發行

ス  
パイ  
定價金貳圓參拾錢



譯者 堺利彦

發行所 東京市麴町區飯田町二丁目二番地  
株式會社 天佑社

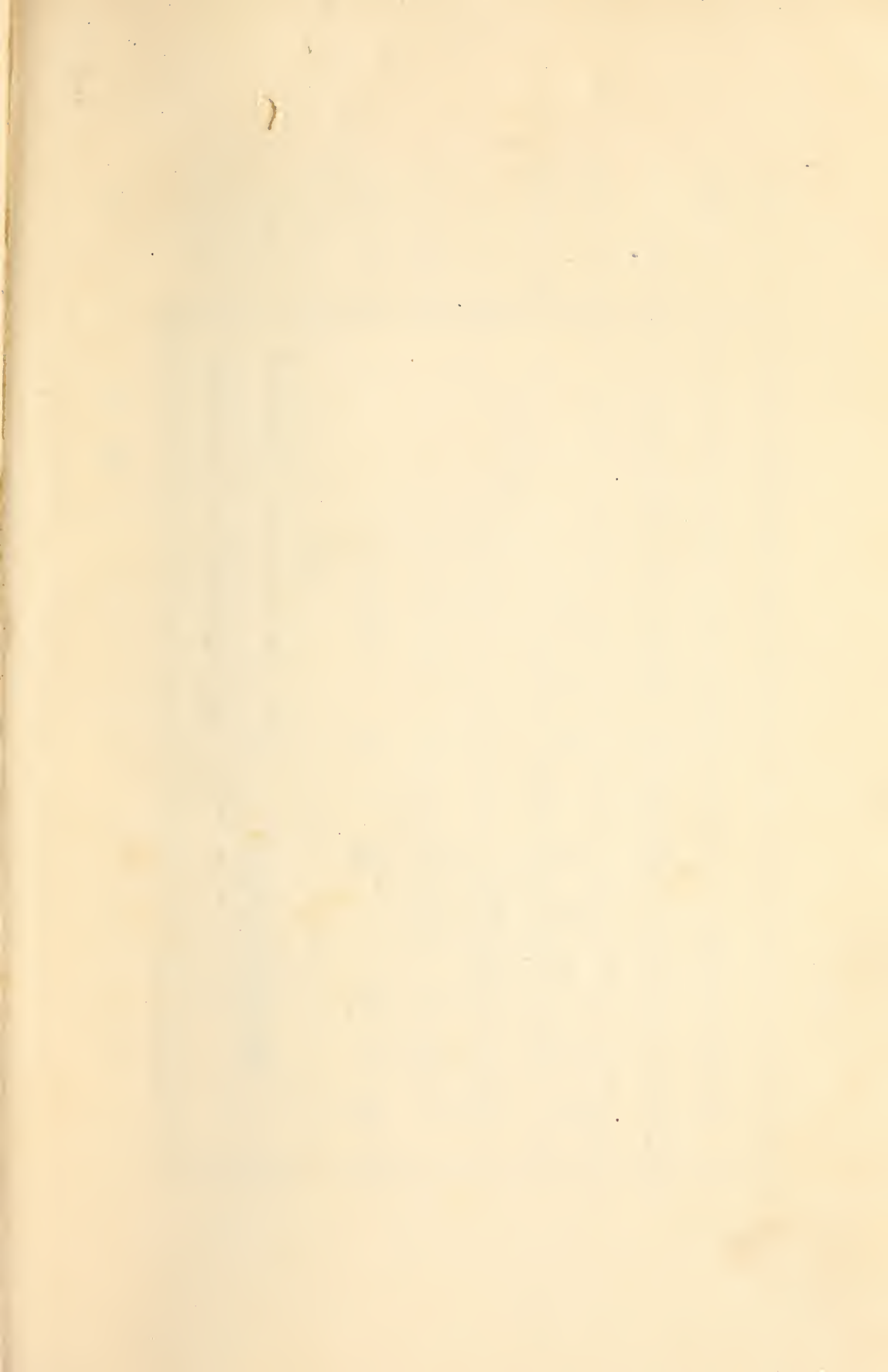
發行者 東京市小石川區諏訪町五番地  
日岐久次郎

東京市麴町區飯田町二丁目五十番地

印刷所 京華社

東京市麴町區飯田町二丁目五十番地

印刷者 猪木卓二







286790



正價

參五

DOCUM.

ENT No.

